

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第16集

前中西遺跡 VIII

－熊谷都市計画事業上之土地地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書IX－

2 0 1 3

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第16集

まえ なか にし い せき
前 中 西 遺 跡 VIII

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書IX—

2 0 1 3

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めており、市内上之で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性に鑑み、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成21年度に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものであります。前中西遺跡の調査報告は今回で8回目となり、徐々に遺跡の様相が明らかとなってまいりました。今回の報告地点は、前回の報告に続き、遺跡の主体となる弥生時代の竪穴住居跡が多数確認され、本遺跡における弥生時代集落の中心部であることが明らかとなってまいりました。また、これまでの調査によって確認された住居跡は、約60軒を数え、市内上川上に所在する北島遺跡に匹敵する大規模かつ拠点的な集落であった可能性が高くなってまいりました。

今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申し上げます。

平成25年 3 月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市上之2570番地1地先他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59-092）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第I章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成21年6月22日から平成21年10月16日までである。整理・報告書作成期間は、平成24年6月11日から平成25年3月19日までである。
- 5 発掘調査の担当及び本書の執筆・編集は、松田 哲が行った。
- 6 発掘調査における写真撮影及び遺物の写真撮影は、松田が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

青木克尚 石川日出志 市川 修 柿沼幹夫 金子正之 栗島義明 小出輝雄 小林 高
齋藤弘道 菅谷浩之 鈴木敏昭 鈴木正博 宅間清公 知久裕昭 松本 完 的野善行
宮本直樹 村松 篤 吉田 稔
埼玉県教育局生涯学習文化財課 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

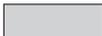
凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

調査区全測図…1 / 400 住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・方形周溝墓…1 / 60
土器棺墓…1 / 20

- 2 遺構挿図中のスクリーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

 = 地 山  = 焼 土

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・陶器…1 / 4 石器・石製品…1 / 4・1 / 2
土製品…1 / 2 玉類…1 / 2

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

縄文土器・弥生土器・土師器・陶器・石器・石製品・土製品・玉類断面：白抜き
須恵器断面：黒塗り 赤彩：

- 6 遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。() が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子
F…白色針状物質 G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石
L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	9
1 調査の方法	9
2 検出された遺構と遺物	9
IV 遺構と遺物	13
1 住居跡	13
2 竪穴状遺構	117
3 掘立柱建物跡	122
4 溝 跡	123
5 土 坑	131
6 方形周溝墓	139
7 土器棺墓	140
8 ピット	143
9 遺構外出土遺物	144
V 調査のまとめ	150

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第16図 第4号住居跡	34
第2図 周辺遺跡分布図	6	第17図 第4号住居跡出土遺物(1)	36
第3図 調査地点位置図	10	第18図 第4号住居跡出土遺物(2)	38
第4図 調査区全測図	11	第19図 第5～7号住居跡(1)	41
第5図 第1号住居跡	13	第20図 第5～7号住居跡(2)	42
第6図 第1号住居跡出土遺物	13	第21図 第5号住居跡出土遺物(1)	44
第7図 第2号住居跡	15	第22図 第5号住居跡出土遺物(2)	45
第8図 第2号住居跡出土遺物(1)	16	第23図 第6号住居跡出土遺物(1)	49
第9図 第2号住居跡出土遺物(2)	19	第24図 第6号住居跡出土遺物(2)	50
第10図 第2号住居跡出土遺物(3)	21	第25図 第7号住居跡出土遺物(1)	54
第11図 第2号住居跡出土遺物(4)	22	第26図 第7号住居跡出土遺物(2)	55
第12図 第3号住居跡	26	第27図 第8号住居跡(1)	58
第13図 第3号住居跡出土遺物(1)	27	第28図 第8号住居跡(2)	59
第14図 第3号住居跡出土遺物(2)	28	第29図 第8号住居跡出土遺物(1)	60
第15図 第3号住居跡出土遺物(3)	31	第30図 第8号住居跡出土遺物(2)	61

第31図	第8号住居跡出土遺物(3)……………63	第56図	第14号住居跡出土遺物……………114
第32図	第9号住居跡……………66	第57図	第15号住居跡……………116
第33図	第9号住居跡出土遺物(1)……………68	第58図	第15号住居跡出土遺物……………116
第34図	第9号住居跡出土遺物(2)……………69	第59図	第1・2号竪穴状遺構……………118
第35図	第9号住居跡出土遺物(3)……………71	第60図	第1号竪穴状遺構出土遺物……………119
第36図	第10号住居跡……………74	第61図	第2号竪穴状遺構出土遺物……………121
第37図	第10号住居跡出土遺物……………76	第62図	第1号掘立柱建物跡……………122
第38図	第11号住居跡(1)……………79	第63図	第1・2号溝跡……………124
第39図	第11号住居跡(2)……………80	第64図	第3～7号溝跡……………126
第40図	第11号住居跡出土遺物(1)……………81	第65図	溝跡出土遺物(1)……………128
第41図	第11号住居跡出土遺物(2)……………82	第66図	溝跡出土遺物(2)……………129
第42図	第11号住居跡出土遺物(3)……………85	第67図	第1～5号土坑……………132
第43図	第11号住居跡出土遺物(4)……………86	第68図	第6～10号土坑……………135
第44図	第11号住居跡出土遺物(5)……………88	第69図	土坑出土遺物(1)……………137
第45図	第12号住居跡(1)……………92	第70図	土坑出土遺物(2)……………138
第46図	第12号住居跡(2)……………93	第71図	第1号方形周溝墓……………139
第47図	第12号住居跡出土遺物(1)……………94	第72図	第1号方形周溝墓出土遺物……………140
第48図	第12号住居跡出土遺物(2)……………95	第73図	第1・2号土器棺墓……………141
第49図	第12号住居跡出土遺物(3)……………97	第74図	第1号土器棺墓出土遺物……………142
第50図	第12号住居跡出土遺物(4)……………100	第75図	第2号土器棺墓出土遺物……………142
第51図	第12号住居跡出土遺物(5)……………102	第76図	ピット出土遺物……………143
第52図	第13号住居跡……………106	第77図	遺構外出土遺物(1)……………145
第53図	第13号住居跡出土遺物(1)……………108	第78図	遺構外出土遺物(2)……………147
第54図	第13号住居跡出土遺物(2)……………109	第79図	弥生時代遺構分布図……………152
第55図	第14号住居跡……………112		

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表……………7	第9表	第8号住居跡出土遺物観察表……………64
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表……………14	第10表	第9号住居跡出土遺物観察表……………72
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表……………22	第11表	第10号住居跡出土遺物観察表……………77
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表……………32	第12表	第11号住居跡出土遺物観察表……………88
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表……………39	第13表	第12号住居跡出土遺物観察表……………103
第6表	第5号住居跡出土遺物観察表……………46	第14表	第13号住居跡出土遺物観察表……………111
第7表	第6号住居跡出土遺物観察表……………51	第15表	第14号住居跡出土遺物観察表……………115
第8表	第7号住居跡出土遺物観察表……………56	第16表	第15号住居跡出土遺物観察表……………117

第17表 第1号竖穴状遺構出土遺物観察表 …119
 第18表 第2号竖穴状遺構出土遺物観察表 …121
 第19表 溝跡出土遺物観察表 ……130
 第20表 土坑出土遺物観察表 ……138
 第21表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表 …140

第22表 第1号土器棺墓出土遺物観察表 ……143
 第23表 第2号土器棺墓出土遺物観察表 ……143
 第24表 ピット出土遺物観察表 ……144
 第25表 遺構外出土遺物観察表 ……148

図版目次

図版 1 調査区53～60-137・138G全景(東から)
 調査区53～60-137・138G全景(西から)
 図版 2 調査区60～72-137・138G全景(東から)
 調査区60～71-137・138G全景(西から)

遺 構

図版 3 第1号住居跡
 第2号住居跡
 第3号住居跡
 第3号住居跡土器出土状況(1)
 第3号住居跡土器出土状況(2)
 第4号住居跡
 第4号住居跡土器出土状況(1)
 第4号住居跡土器出土状況(2)
 図版 4 第4号住居跡土器出土状況(3)
 第4号住居跡石器出土状況
 第5～7号住居跡
 第6号住居跡土器出土状況(1)
 第6号住居跡土器出土状況(2)
 第8号住居跡
 第9号住居跡
 第10号住居跡
 図版 5 第11号住居跡
 第11号住居跡炉跡
 第11号住居跡土器出土状況
 第12号住居跡
 第12号住居跡遺物出土状況
 第12号住居跡炉跡
 第13号住居跡

第13号住居跡土器出土状況
 図版 6 第14・15号住居跡
 第14号住居跡土器出土状況(1)
 第14号住居跡土器出土状況(2)
 第1号竖穴状遺構
 第2号竖穴状遺構
 第2号竖穴状遺構土器出土状況
 第1号掘立柱建物跡
 図版 7 第1号溝跡
 第2号溝跡
 第2号溝跡土器出土状況(1)
 第2号溝跡土器出土状況(2)
 第2号溝跡土器出土状況(3)
 第5号溝跡
 図版 8 第7号溝跡
 第1号土坑
 第2号土坑
 第3号土坑
 第5号土坑
 第8号土坑
 第9号土坑
 図版 9 第10号土坑
 第1号方形周溝墓
 第1号土器棺墓(横から)
 第1号土器棺墓(上から)
 第2号土器棺墓
 小学生遺跡見学会風景
 親子発掘体験風景

中学生職場体験発掘風景

遺物

弥生土器

図版10	第2号住居跡	第8図1・2・4～8・16	第1号溝跡	第65図1-4
図版11	第2号住居跡	第9図26	第7号土坑	第69図7-1・7-2
	第3号住居跡	第13図1～3・5・7・8	図版25	第7号土坑 第69図7-3
図版12	第3号住居跡	第13図9		第1号方形周溝墓 第72図1・2
		第14図12・13		第1号土器棺墓 第74図1・2
	第4号住居跡	第17図1～3	図版26	第2号土器棺墓 第75図1・2
図版13	第4号住居跡	第17図4～8		遺構外 第77図1・11
		第18図13	図版29	第1号住居跡 第6図2～5
図版14	第4号住居跡	第18図14		第2号住居跡 第9図28～62
	第5号住居跡	第21図1・3～5	図版30	第2号住居跡 第9図63～68
	第6号住居跡	第23図1		第10図69～96
図版15	第6号住居跡	第23図2～5・10	図版31	第2号住居跡 第10図97～107
	第7号住居跡	第25図1		第11図108～129
図版16	第7号住居跡	第25図3・9・9底面	図版32	第3号住居跡 第14図23～53
	第8号住居跡	第29図2・6		第15図54～61
	第9号住居跡	第33図1・2	図版33	第3号住居跡 第15図62～93
図版17	第9号住居跡	第33図3～5・7・7文様・10	図版34	第4号住居跡 第18図15～42
		第34図13	図版35	第5号住居跡 第21図22～28
図版18	第9号住居跡	第34図14・23		第22図29～61
	第10号住居跡	第37図1・2・9・9底面	図版36	第6号住居跡 第23図11～19
	第11号住居跡	第40図1		第24図20～36
図版19	第11号住居跡	第40図2・5・7・9～11		第7号住居跡 第25図10～29
		第41図12	図版37	第7号住居跡 第25図30・31
図版20	第11号住居跡	第41図13・23・39・39底面・45		第26図32～46
	第12号住居跡	第47図1・5		第8号住居跡 第29図20～26
図版21	第12号住居跡	第47図8～10・12		第30図27～40
		第48図14～16	図版38	第8号住居跡 第30図41～80
図版22	第12号住居跡	第48図39・39底面・43・45	図版39	第8号住居跡 第31図81～101
	第13号住居跡	第53図1～4		第9号住居跡 第34図29～45
図版23	第13号住居跡	第53図16		第35図46～48
	第14号住居跡	第56図1～4	図版40	第9号住居跡 第35図49～68
	第2号竪穴状遺構	第61図1		第10号住居跡 第37図12～34
図版24	第2号竪穴状遺構	第61図2・3	図版41	第11号住居跡 第41図49～52
				第42図53～81
			図版42	第11号住居跡 第42図82～94
				第43図95～116

- 図版43 第11号住居跡 第43図117～134
 第12号住居跡 第49図46～66
- 図版44 第12号住居跡 第49図67～90
 第50図91～104
- 図版45 第12号住居跡 第50図105～121
 第51図122～144
- 図版46 第13号住居跡 第53図17～21
 第54図22～44
- 図版47 第14号住居跡 第56図6～16
 第15号住居跡 第58図2～9
 第1号竪穴状遺構 第60図2～20
- 図版48 第2号竪穴状遺構 第61図6～15
 第1号溝跡 第65図1-5～1-10
 第3号溝跡 第66図3-1・3-2
 第5号溝跡 第66図5-1～5-8
 第6号溝跡 第66図6-1
 第7号溝跡 第66図7-1～7-16
- 図版49 第2号土坑 第69図2-1
 第3号土坑 第69図3-5～3-12
 第4号土坑 第69図4-2
 第7号土坑 第69図7-5・7-6
 第8号土坑 第70図8-1～8-3
 第9号土坑 第70図9-2～9-4
 第10号土坑 第70図10-1～10-3
 第1号方形周溝墓 第72図3・4
 ピット出土遺物 第76図1・2
 遺構外 第77図12～21
- 図版50 遺構外 第77図22～42
 第78図43～61

土師器（古墳時代前期）

- 図版26 第6号住居跡 第24図39
 第2号溝跡 第65図2-1・2-2
- 図版27 第2号溝跡 第65図2-3～2-7・2-9
- 図版28 第2号溝跡 第65図2-10

須恵器・土師器（古墳時代後期以降）

- 図版28 第5号住居跡 第22図62
 第3号土坑 第69図3-1～3-3
 遺構外 第78図68

石器・石製品

- 図版51 第3号住居跡 第15図94
 第4号住居跡 第18図43
 第6号住居跡 第24図37
 第7号住居跡 第18図43
 第8号住居跡 第31図102・103
 第9号住居跡 第35図69・70
 第11号住居跡 第43図135～137
 第44図138～143
- 図版52 第11号住居跡 第43図144・145
 第12号住居跡 第51図144・145・147
 第13号住居跡 第54図46～49
 第14号住居跡 第56図17
 第15号住居跡 第58図11
 第1号方形周溝墓 第72図5
 遺構外 第78図62・63

土製品

- 図版52 第2号溝跡 第65図2-12
 遺構外 第78図71

玉類

- 図版52 第11号住居跡 第44図146
 第2号溝跡 第65図2-13

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和61年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成7年11月13日から平成8年1月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成8年2月9日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成21年4月10日付けで提出された。発掘調査は、平成21年6月から10月まで熊谷市教育委員会が実施した。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成21年6月5日付け熊教社発第1121号

平成21年5月25日付け教生文第5-144号

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成21年度に実施した。平成21年度の調査は、計三回行われており、今回の報告箇所は遺跡範囲北東部にあたる。遺跡範囲北東部の調査は、調査区が現況河川の衣川を挟んで東西二つに分かれており、今回の報告は西側調査区800.7㎡が対象となる。東側調査区554.1㎡については、平成21年度報告『前中西遺跡Ⅵ』（熊谷市教委2011）にて報告済みである。なお、平成21年度に実施した他の調査については、次年度以降に報告する予定である。

発掘調査は、6月中旬より開始した。調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、6月下旬から8月下旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。9月初旬からは遺構平面図を作成し、9月中旬に調査区の全景写真撮影を行い、東側調査区も含め10月中旬にすべての作業を終了した。

今回の調査では、発掘作業を行うとともに近隣の小学校6年生を対象とした遺跡見学会や中学生の職

場体験、また夏休みには小学生を対象とした親子発掘体験等も行い、生涯学習の場として活用することも併せて行った。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成24年6月から平成25年3月まで実施した。作業は6月から8月中旬まで遺物の洗浄、注記、接合、復元等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。8月下旬から11月下旬までは、遺物の実測・トレース、遺構のトレースを行い、12月上旬に遺構・遺物の版組を作成した。12月中旬から翌年1月中旬までは、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、3月中旬に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

平成21年度

教育長	野原 晃
教育次長	柴崎 久
社会教育課長	斉木 千春
社会教育課担当副参事	小林 英夫
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端
社会教育課副課長	出縄 康行
社会教育課主査	寺社下 博
主査	吉野 健
主査	鯨井 敬浩
主任	松田 哲
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹
発掘調査員	長谷川一郎
発掘調査員	原野 真祐

(2) 整理・報告書作成事業

平成24年度

教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 勝
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦

社会教育課副課長	出繩 康行
社会教育課副課長	木村 昇
社会教育課文化財保護係主幹	吉野 健
主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成17年に妻沼町及び大里町、平成19年に江南町との合併を経て、県北初の人口20万を超える都市となり、平成21年4月から「特例市」として発足し、現在に至っている。

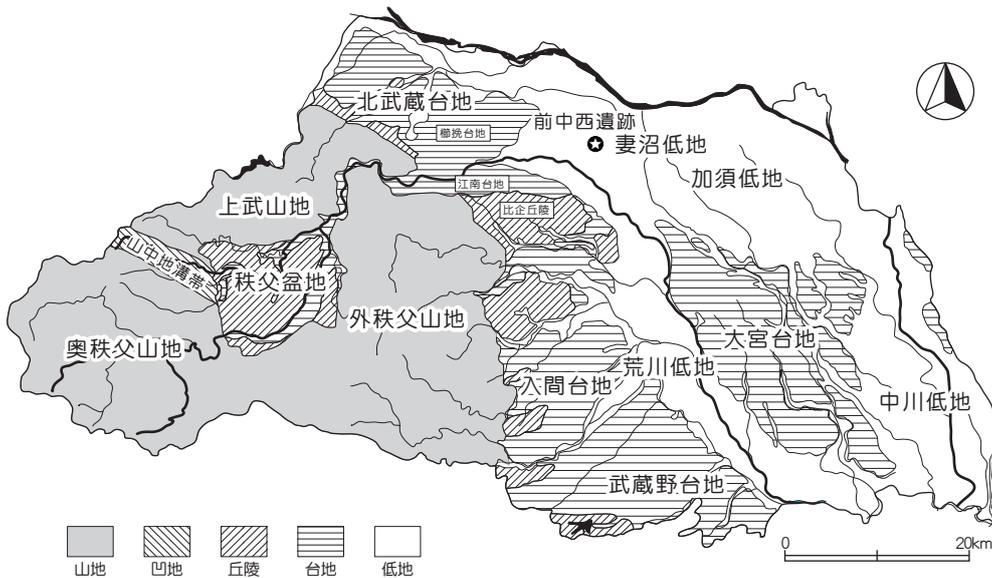
熊谷市は、北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には、市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。

櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約2kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向かって緩やかに下る。櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市(旧川本町)菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高24m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約1.2km、荒川からは北へ約2.0～2.5km、利根川からは南へ約7.0～9.0kmの距離にある。現地表面から遺構確認面までの深さは1m前後であった。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第2図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は、主に熊谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代は、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると、台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に後半段階の加曾利E式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引台地及



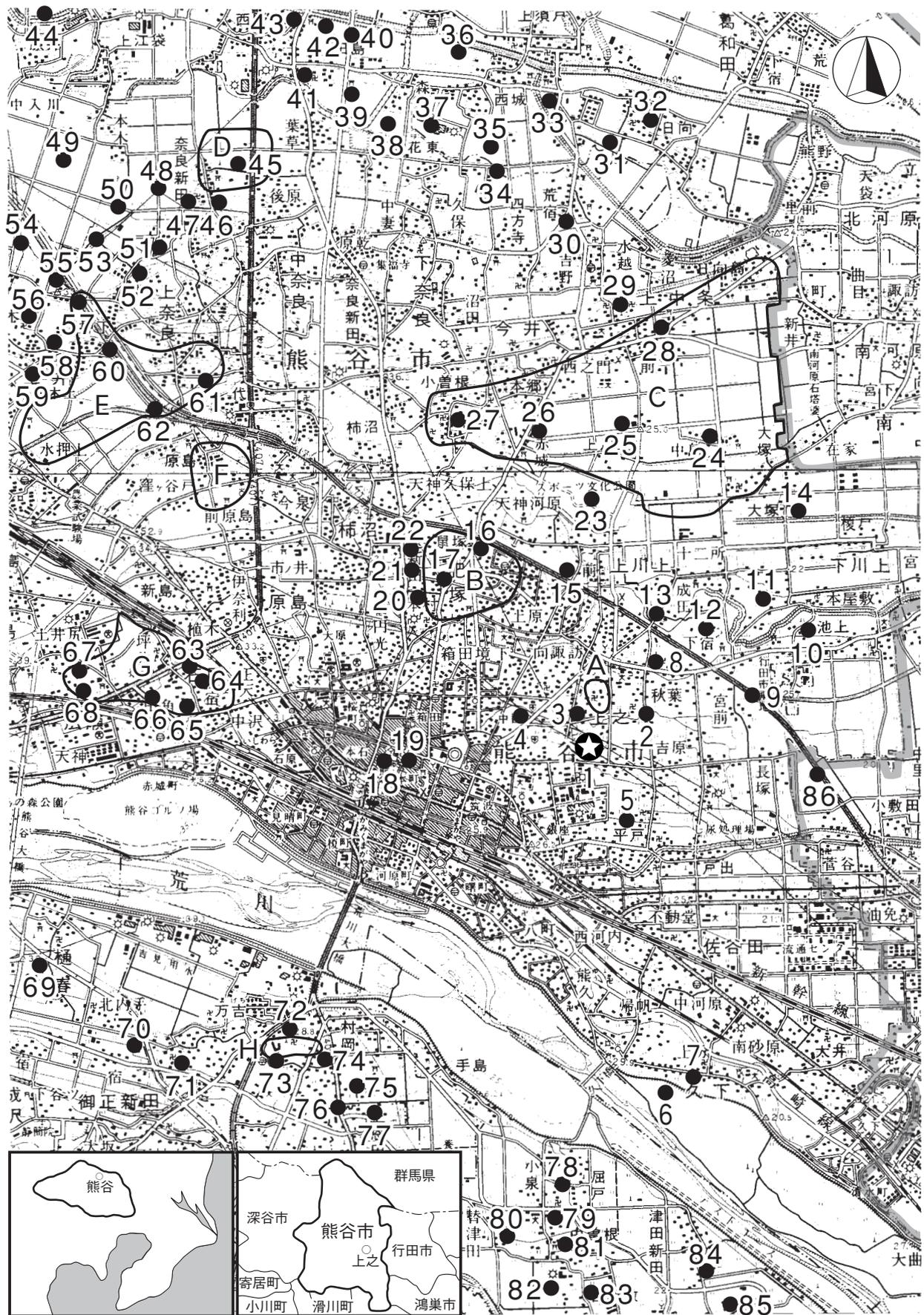
第1図 埼玉県の地形図

び台地直下の低地上に集中している。後期になると、徐々に低地へ進出しはじめ、西城切通遺跡(36)、場違ヶ谷戸遺跡(41)など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。前中西遺跡周辺では、隣接する諏訪木遺跡(2)でのみ確認例がある。晩期は遺跡数が減少する。諏訪木遺跡では、後期に続いて集落が営まれているが、唯一の事例と言える。熊谷市遺跡調査会による調査(熊谷市遺跡調査会2001)や埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007)では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者では、遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。この他では、櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡(地図未掲載)で晩期最終末の浮線土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半頃は、隣接する藤之宮遺跡(3)で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡は、櫛引台地直下の低地上に集中するが、集落ではなく再葬墓である。横間栗遺跡(地図未掲載)では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は、1999年3月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市(旧妻沼町)飯塚遺跡、飯塚南遺跡(ともに地図未掲載)や先の深谷市上敷免遺跡などでも再葬墓が検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では、包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になると、これまでの状況と一変して集落跡が増す。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡(9)、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡(86)などがあり、本格的に展開される。中期後半は今回報告する前中西遺跡(1)をはじめ、諏訪木遺跡や北島遺跡(23)などで集落が営まれ、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。特に前中西遺跡では、遺跡範囲北側に集落、南側に墓域が広がっていることが確認されており、集落・墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている(熊谷市教育委員会2002・2003・2009・2010・2011)。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団による調査(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008)で初めて住居跡と方形周溝墓が確認された。両者はほぼ同一箇所を確認されたことから時期差を持つ。確認された住居跡は1軒のみであり、出土土器も甕1点のみであるため断言はできないが、出土土器の比較では方形周溝墓が住居跡よりも新しい要素を持つ。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきことは水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目される。後期初頭以降については、藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡としては前中西遺跡、北島遺跡以外に近辺では確認例がない。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。前代に引き続き、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査で河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「榎部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる(埼玉県埋蔵文化財調



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			49	別府条里遺跡	奈良・平安
1	前中西遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	50	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
2	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	51	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	52	奈良氏館跡	平安末～中世
4	箱田氏館跡	平安末～中世	53	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
5	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	54	寺東遺跡	縄文中・後
6	久下氏館跡	中世	55	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
7	市田氏館跡	中世	56	玉井陣屋跡	平安末～中世
8	成田氏館跡	中世	57	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	58	水押下遺跡	古墳後
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	59	稲荷木上遺跡	古墳後
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	60	下河原中遺跡	奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	61	本代遺跡	古墳後、近世
13	成田遺跡	古墳後	62	下河原上遺跡	近世
14	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	63	天神前遺跡	古墳中・後、中世
15	河上氏館跡	中世	64	兵部裏屋敷跡	中世
16	八幡山遺跡	古墳	65	御蔵場跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	66	田角遺跡	平安
18	熊谷氏館跡	中世	67	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
19	宮町遺跡	奈良・平安・中世	68	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
20	肥塚館跡	中世	69	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
21	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	70	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	71	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
23	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中世	72	村岡館跡	平安末
24	中島遺跡	古墳後、奈良・平安	73	村岡北西原遺跡	平安
25	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	74	北西原遺跡	奈良・平安
26	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	75	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
27	東浦遺跡	古墳前、平安	76	西浦遺跡	奈良・平安
28	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	77	腰廻遺跡	奈良・平安
29	中条氏館跡	中世	78	北方遺跡	奈良・平安
30	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	79	宮前遺跡	奈良・平安
31	先載場遺跡	古墳後、奈良	80	西浦町遺跡	奈良・平安
32	八幡間遺跡	古墳後、奈良	81	宮前町遺跡	奈良・平安
33	東城館跡	平安	82	宮町遺跡	奈良・平安
34	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	83	仲町遺跡	奈良・平安
35	西城館跡	平安	84	旭町遺跡	奈良・平安
36	西城切通遺跡	縄文後	85	北町遺跡	奈良・平安
37	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	行田市		
38	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
39	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
40	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	熊谷市		
41	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	A	上之古墳群	古墳後～末
42	宮前遺跡	奈良・平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
43	実盛館	平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	横塚遺跡	古墳前、平安	E	玉井古墳群	古墳後
46	東通遺跡	古墳後	F	原島古墳群	古墳後
47	西通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
48	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	H	村岡古墳群	古墳後

査事業団2008)。中条遺跡(28)では木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期はたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や藤之宮遺跡、中条遺跡などで集落跡が営まれている。また、5世紀末頃の鎧塚古墳や女塚1号墳(C:中条古墳群)、市の指定史跡である横塚山古墳(D:奈良古墳群)などといった古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡2箇所から須恵器高坏型器台(県指定文化財)が出土している。女塚1号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重

周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はB種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では前中西遺跡北側に分布する上之古墳群(A)の他に、肥塚古墳群(B)、中条古墳群(C)、奈良古墳群(D)、玉井古墳群(E)、原島古墳群(F)、石原古墳群(G)などがある。これらは概ね6世紀から7世紀末ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群(中条古墳群など)では埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また遺物では、「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立柱建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡(14)、行田市南河原条里遺跡(地図未掲載)などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも多くの館跡がみられる。久下氏館跡(6)、市田氏館跡(7)、成田氏館跡(8)、河上氏館跡(15)、熊谷氏館跡(19)、肥塚館跡(20)、中条氏館跡(29)などがある。このうち、前中西遺跡に近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する諏訪木遺跡では過去の調査で成田氏関連と思われる遺構や遺物が確認されている。まず県事業団による平成13年度調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002)。同じく県事業団による平成14年度調査では、井戸枠に器高70cmを超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものとして推定されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008)。そして、熊谷市教育委員会による平成20年度調査では、古墳時代後期の古墳周溝が埋没した後に掘削された土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭はおそらく15世紀前半を上限とし、枚数が5,000枚以上と膨大な数であることから成田氏に関連するものであることは間違いない。

中世段階については、館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様で隣接する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

今回報告するのは、第Ⅰ章2でも述べたとおり、平成21年度に遺跡範囲北東部で行われた調査の西側調査区800.7㎡についてである。

調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺5mのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。なお、住居跡出土遺物については、時間的な制約があったため、床面直上ないし付近出土の遺物のみ位置の記録を行った。

今回報告する調査地点のグリッドは、東西が53から72まで、南北は134から138までが該当する。区画整理地内全体のグリッド図については、過去の前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

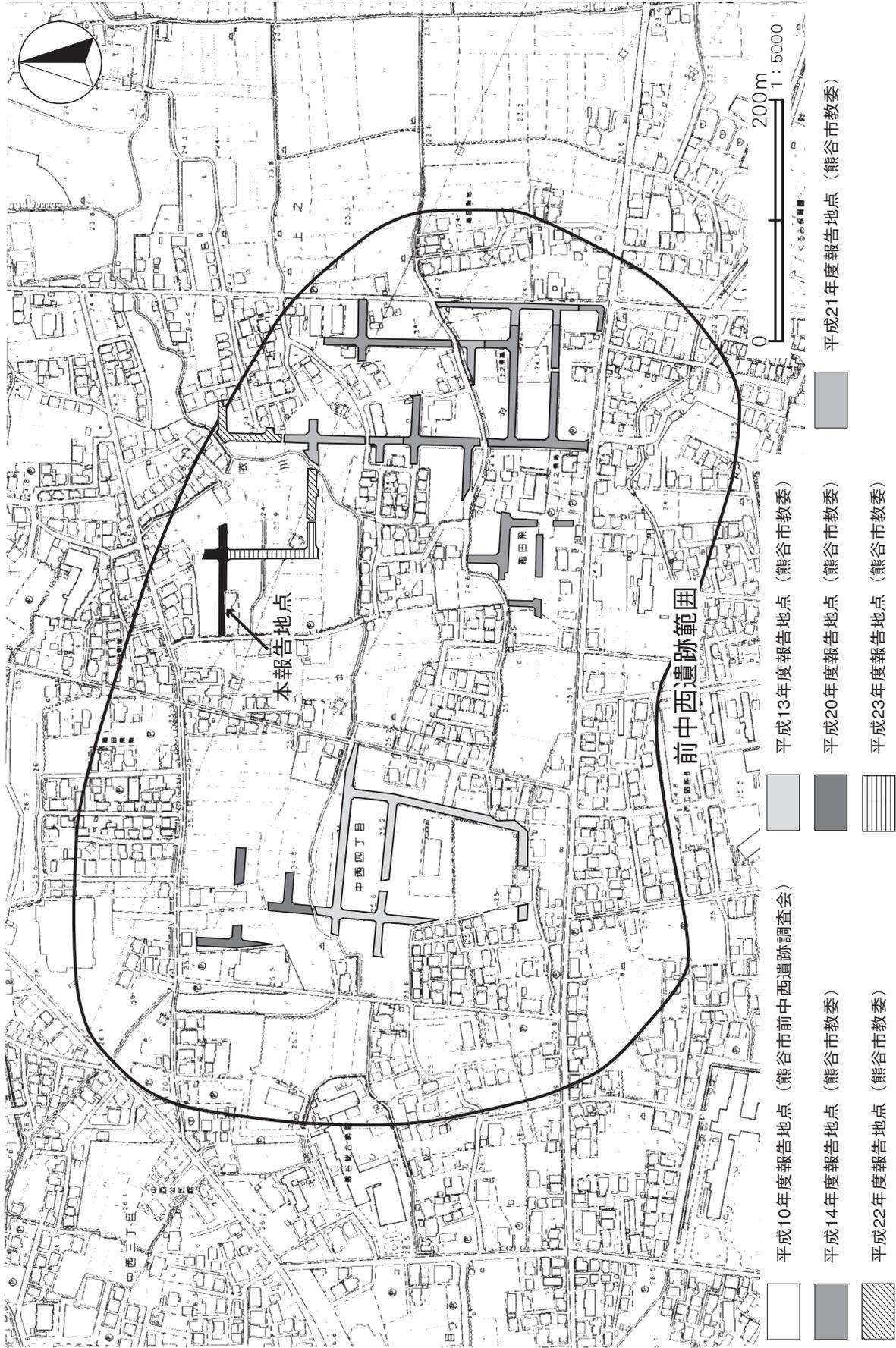
2 検出された遺構と遺物

今回報告する地点は、遺跡範囲北東部に位置する（第3図）。検出された遺構は、住居跡15軒、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡1棟、溝跡7条、土坑10基、方形周溝墓1基、土器棺墓2基、ピット多数である（第4図）。東から西側にやや下る地形にあり、遺構の多くが調査区中央から東側に分布する。

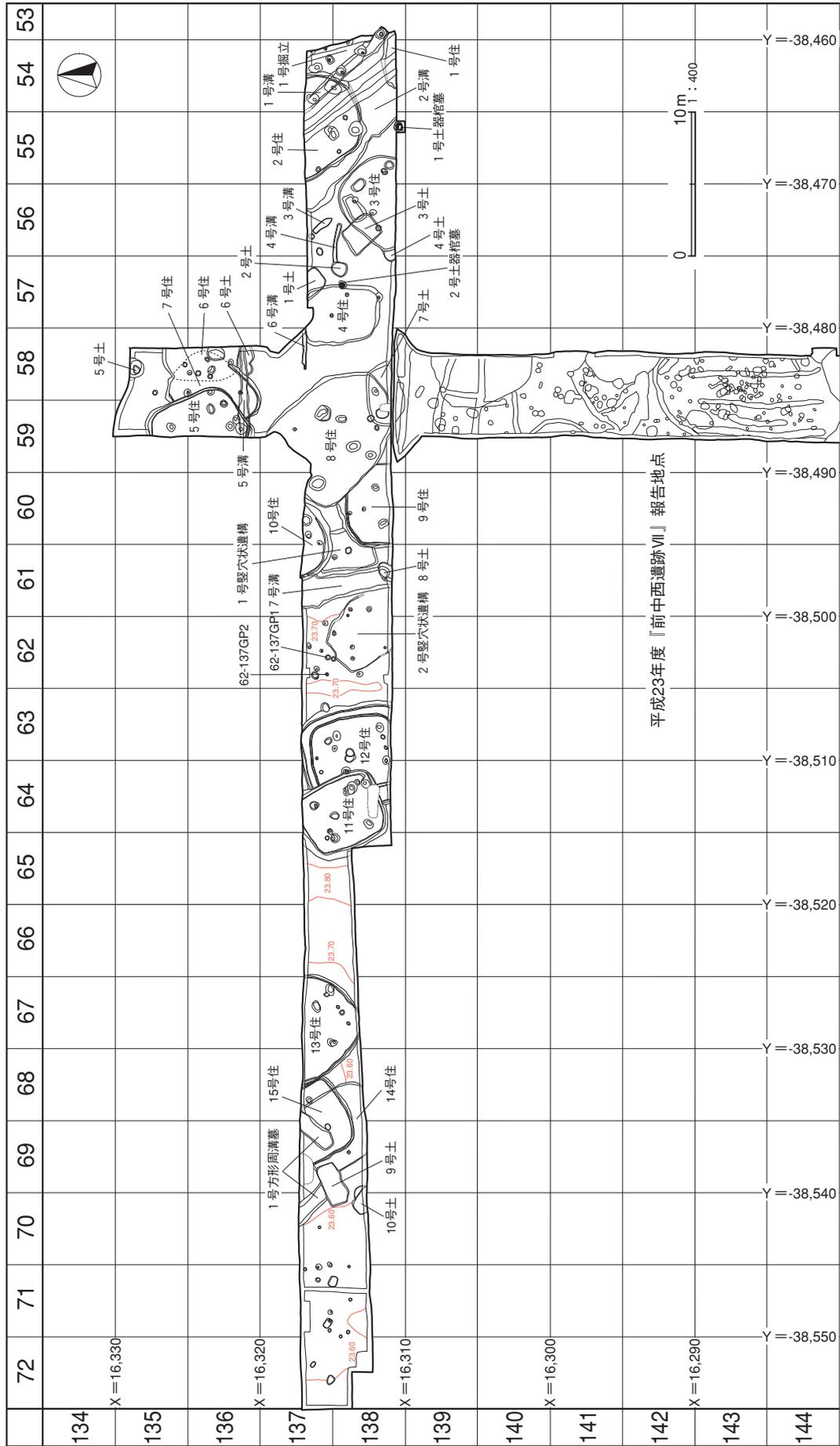
住居跡は、15軒検出された。すべて弥生時代中期後半から末までに収まり、渦渡的な様相を呈するものが多い。住居跡は、地形的に下がる西端を除くほぼ全面に分布するが、特に高台となる中央から東側にかけて密集する。重複するものが多く、また重複しなくても非常に近接しており、軸が西に触れるものとはほぼ東西南北に揃うもの等があることから若干の時期差を持つ。全形を検出したものはないが、規模は長軸が6～7m、短軸は5～6m前後を測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸5m、短軸4m前後を測る小型の4・6号は、東西南北に軸がほぼ揃う。8号は長軸が9m以上を測り、大型の部類に入る。12号は今回の報告では唯一拡張が行われていた。出土遺物は、土器、石器・石製品、玉類などがある。土器は完形のもの少ないが、各住居跡からは残存状態の比較的良好なものが多数検出されている。壺は文様が頸部に集約されるもの、甕は櫛歯状工具により文様が施文されるものが目立つ。石器・石製品は検出数が少ないが、4号からはほぼ完形で大型の太形蛤刃石斧、11・12号からは中央が穿孔された小型の円盤状石製品等が検出された。玉類は、11号から扁平な勾玉が検出された。

竪穴状遺構は、調査区ほぼ中央から2基検出された。小型で住居跡よりも掘り込みが浅く、炉跡や壁溝等を伴わないことから竪穴状遺構としたが、住居跡の可能性もある。いずれも残存状態はあまり良くないが、時期を特定し得る土器が検出された。時期は、1号が弥生時代中期中頃から後半にかけて、2号は中期後半と思われる。

掘立柱建物跡は、調査区東端から1棟検出された。大半が調査区外にあるため、正確な規模等は不明である。出土遺物はないが、他の重複する遺構の出土遺物や新旧関係からみて、本遺構の時期は9世紀代と思われる。



第3図 調査地点位置図



第4図 調査区全測図

溝跡は、7条検出された。調査区中央から東側にかけて分布する。南東から北西に走るもの、東西に走るもの、南北に走るものがある。古墳時代前期の良好な土器がまとまって検出された2号以外は、古墳時代後期と思われる。遺物は須恵器や弥生土器が検出されているが、流れ込みと思われる。

土坑は、10基検出された。住居跡群内に点在する。時期は不明のものもあるが、弥生時代中期後半から末にかけて、古墳時代後期、近世と幅広い。古墳時代後期及び近世のものは、平面プランが隅丸長方形を呈する。

方形周溝墓は、調査区西側から1基検出された。弥生時代中期末の住居跡を切っており、近世の土坑に切られている。約半分のみを検出であり、正確な規模は不明であるが、平面プランは四隅が切れるタイプと思われる。出土遺物は、ほぼ完形の甕をはじめ数点が検出された。時期は弥生時代後期初頭と思われる。

土器棺墓は、2基検出された。いずれも調査区東側の住居跡群内に分布する。1号は単独、2号は4号住居跡の壁上位を切っている。1号は棺蓋・棺身ともに壺、2号は棺蓋に壺、棺身に甕が使用されており、1号の棺身からは骨片が若干検出された。時期は、1号が弥生時代後期初頭、2号は弥生時代中期末と思われる。

ピットは調査区内に点在するが、概ね5つのブロックに分けられる。単独で規則的に並ばないため、詳細については不明である。出土遺物は弥生土器に限られるが、流れ込みの可能性がある、時期の特定は困難である。

遺構外出土遺物は、弥生土器、石器、古墳時代後期の須恵器、土師器、土錘、近世の陶器がある。遺構の密集する調査区東側からの検出が多い。出土遺物の大半は弥生土器が占め、時期は検出された遺構と同じく中期後半～末に相当する。

IV 遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第5図）

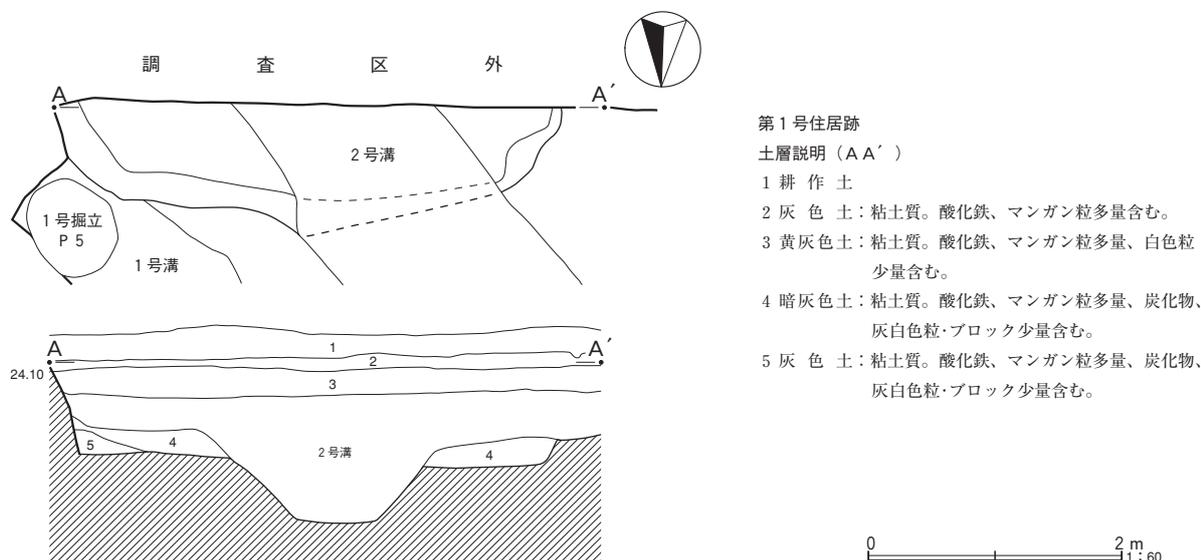
53・54-138グリッドに位置する。北東隅付近のみの検出であり、大半は調査区外にある。北東隅の壁上位を1号溝跡、覆土上位全面及び床面大半を2号溝跡に切られており、残存状態が悪い。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は4m測る。平面プランは隅丸方形を呈し、主軸方向はN-51°-Wを指すと思われる。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は2層（4・5層）のみ確認された。混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

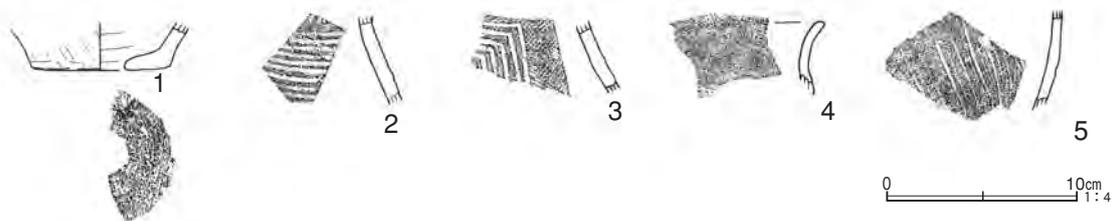
検出範囲が狭いため、炉跡やピット、貯蔵穴、壁溝等は確認されなかった。

出土遺物（第6図）は、弥生土器壺（2・3）、甕（4・5）、甑（1）がある。図示可能な遺物は少なく、すべて覆土からの検出である。

2・3は壺の肩部片。分かりづらいが、2は爪形状の刺突列下に平行沈線が複数巡る。3はLR単節縄文地に重四角文が描かれている。2・3の内面調整は、ともに横位のヘラナデである。4・5は甕。4は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部にRL単節縄文が施文され、頸部は分かりづらいが、単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡る。口縁部外面の無文部及び内面の調整は、横位のヘラミガキである。5は胴部中段から下部にかけての破片。7本一単位で横位の羽状文がやや乱雑に描かれている。内面調



第5図 第1号住居跡



第6図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甑	—	(2.5)	(7.4)	ABDIK	暗灰色	B	底部45%	底面焼成前穿孔有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
3	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい橙色	B	肩部片	内面やや磨耗。
4	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	暗褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。

整は、斜位のヘラミガキである。1は甑の底部。内外面ともにヘラナデ調整である。底面に焼成前穿孔がみられた。

出土遺物が少ないため、本住居跡の時期は弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

第2号住居跡（第7図）

54・55-137・138グリッドに位置する。東側の覆土上位を1号溝跡、床面中央及びほぼ全面の覆土上位を2号溝跡に切られている。北東部は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、短軸となる東西は6.5m程を測る。平面プランは隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-35°-Wを指すと思われる。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は3層（1～3層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは5基検出された。P1・2は支柱穴と思われ、P2は覆土に柱痕跡と思われる土層（9層）が確認された。P3～5は覆土を図示できなかったが、いずれも柱痕跡は認められなかった。P3・4は屋根を支えるための柱穴、P5は出入口に関連するものと思われる。

壁溝は検出された範囲内を全周する。幅は0.3m前後、床面からの深さは0.05m程を測る。

貯蔵穴は南壁沿い両隅から確認された。南西隅に位置する貯蔵穴1は、径1m前後の不整円形を呈し、床面からの深さは0.22mを測る。南東隅に位置する貯蔵穴2は、長軸1.11m、短軸0.83mの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは0.43mを測る。

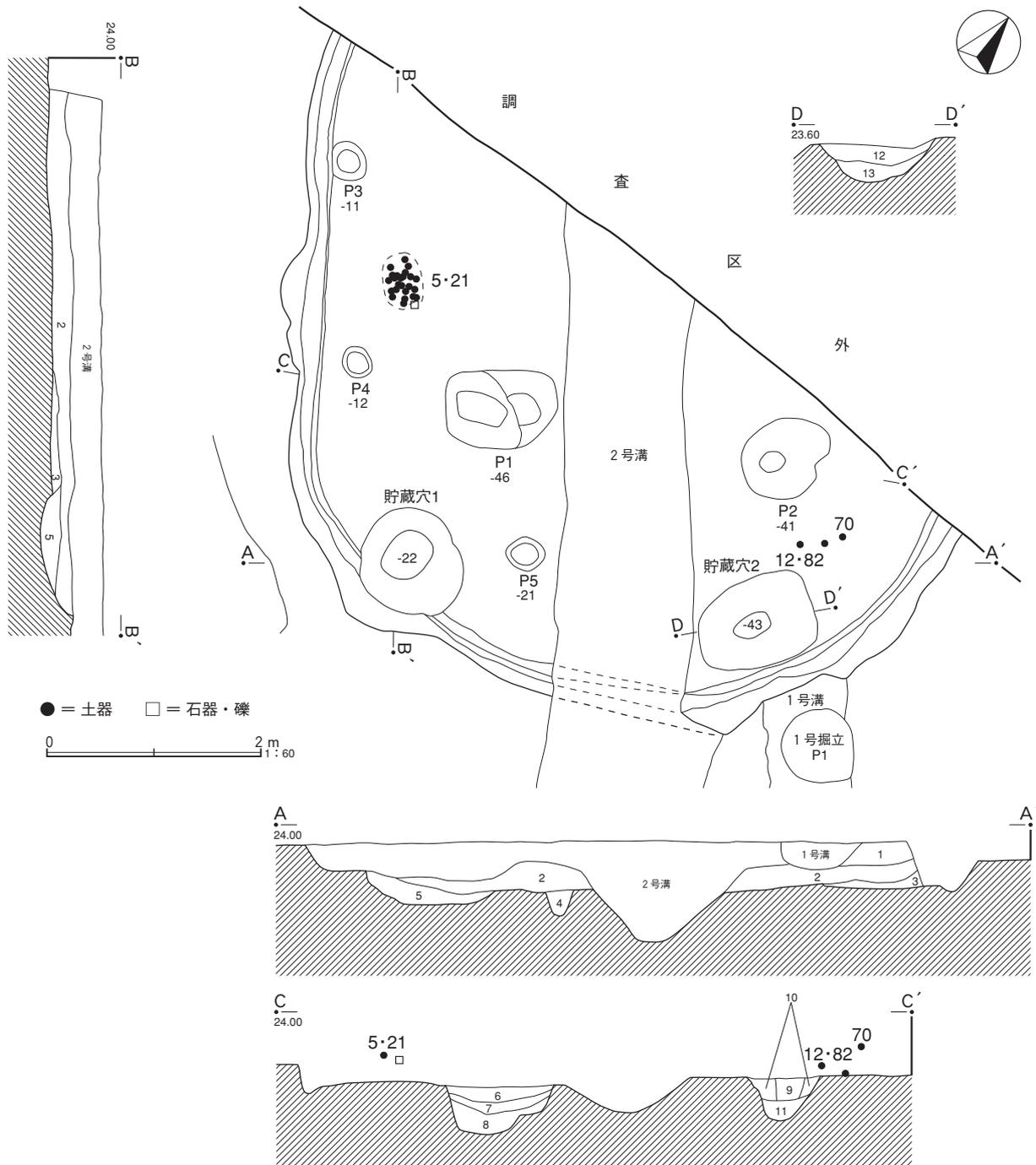
炉跡は検出されなかった。

出土遺物（第8～11図）は、弥生土器壺（1・2・9～15・28～65）、広口壺（3）、甕（4～8・16～25・66～126）、高坏（26・27・127・128）、筒形土器（129）がある。遺物量が多いが、残存状態の良好なものは少ない。大半が覆土からの検出であり、床面直上からの検出はほとんどない。

1・2・9～15・28～65は壺。1は口縁部から頸部までの部位。口縁部は緩やかに外反し、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肥厚した口縁部及び頸部に巡る半円形刺突列2列間にLR単節縄文が施文されており、前者には赤彩が施されている。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。2は肩部から胴上部までの部位。肩が張らず、上位は無文でヘラミガキ調整が施されているが、ヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。文様は下位に2条の平行沈線と波状沈線が巡り、間にLR単節縄文が充填されている。内面調整はヘラナデである。

9～15は胴下部から底部までの部位。すべて外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。13のみ外面に赤彩が施されている。9・13以外は甕の可能性もある。14は外面に輪積痕が残る。

28～34は口縁部から頸部までに収まる破片。28～31は口縁部ないし口縁端部に縄文が施文され、以下は無文となるが、31のみ頸部に細い沈線が連弧文状に複数巡る。縄文は31のみRL、その他はLR単節縄文である。外面無文部の調整は、28のみ縦位、29・30は斜位のヘラミガキである。32～34は突帯ないし突起が付く。32は肥厚した口縁部にLR単節縄文が施文され、突帯が垂下する。突帯脇は4

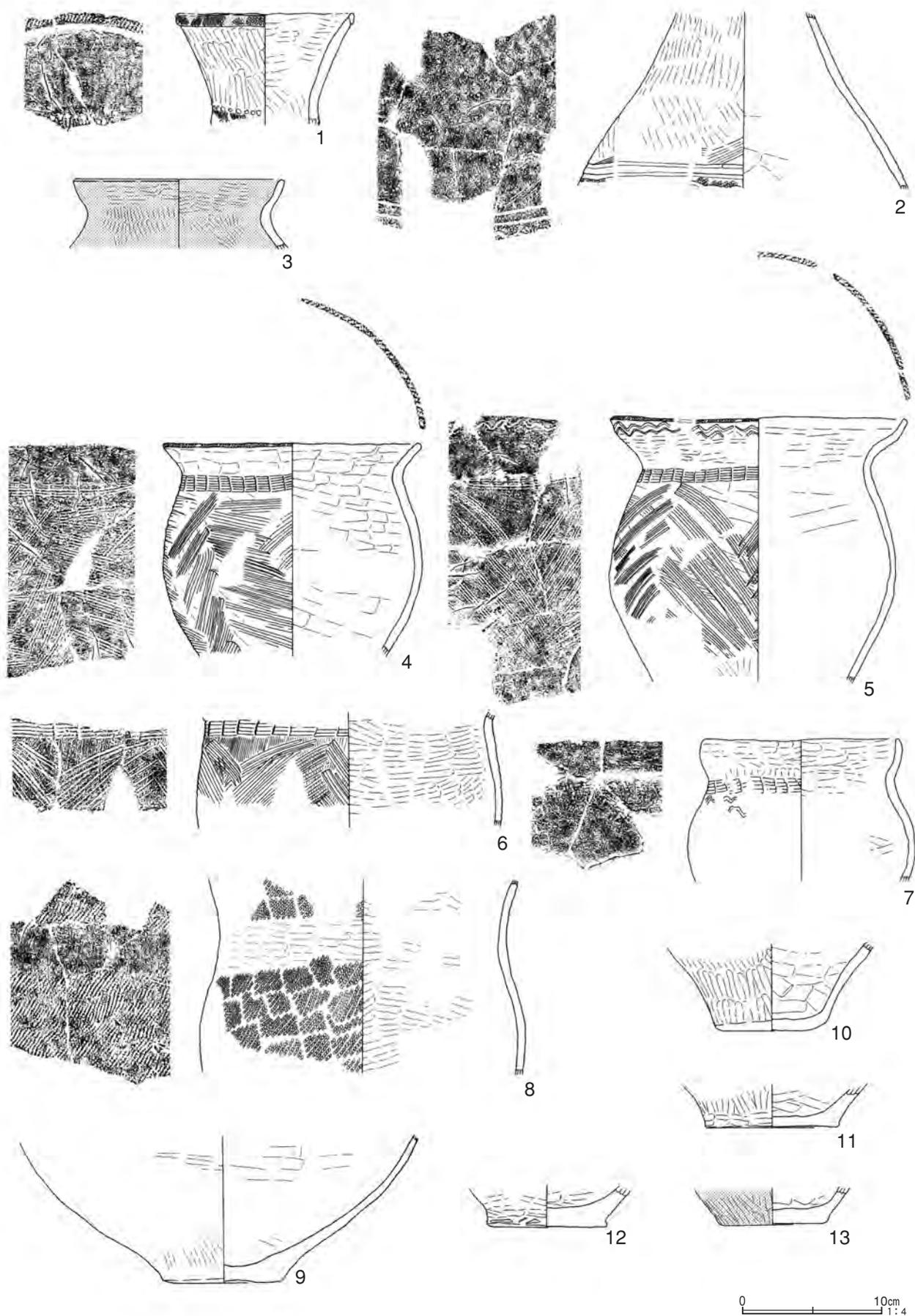


第2号住居跡

土層説明 (AA' BB' CC' DD')

- | | |
|---|--|
| <p>1 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色粒少量含む。</p> <p>2 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。</p> <p>4 灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒少量含む。</p> <p>5 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>6 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。</p> | <p>7 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。</p> <p>8 灰オリーブ色土：シルト質。灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。</p> <p>9 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。柱痕跡？</p> <p>10 灰白色土：シルト質。黒色土、酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>11 灰オリーブ色土：シルト質。黒色土、酸化鉄、マンガン粒少量含む。</p> <p>12 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。</p> <p>13 暗灰色土：粘土質。炭化物多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。</p> |
|---|--|

第7図 第2号住居跡



第8图 第2号住居跡出土遺物(1)

本一単位の波状文がやや乱雑に複数巡る。33は分かりづらいが、縦長の突起が付く。ほぼ中央脇に穿孔がみられた。突起脇はLR単節縄文地に平行沈線が複数巡る。34は縦長の短い突起脇に太い沈線による山形文が巡り、地文にLR単節縄文が施文されている。28～34の内面調整は、すべてヘラミガキであるが、29のみ横・斜位、その他は横位に施されている。35～37は鋸歯文の描かれた肩部片。35・36は鋸歯文区画下にLR単節縄文が充填され、35は鋸歯文下に巡る波状沈線下にもLR単節縄文が施文されている。36は鋸歯文下に2本一単位の簾状文と平行沈線が巡る。37は鋸歯文上が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。35～37の内面調整は、35のみ横・斜位、その他は横位のヘラナデである。38・39は刺突列が施文された破片。38は肩部から胴上部にかけての破片。RL単節縄文下の段に円形の刺突列が2列巡る。以下は無文で縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。39は胴上部片。横位のヘラミガキ調整が施された無文部下に半円形の刺突列が巡り、下にRL単節縄文が施文されている。38・39の内面調整は、いずれも横位のヘラナデであり、39は輪積痕が残る。40～49は平行沈線が巡る破片。40は頸部から肩部にかけての破片。頸部に太い平行沈線が複数巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。41～47は肩部から胴上部までに収まる破片。41は斜位のヘラミガキが施された無文部下に平行沈線が複数巡る。42はLR単節縄文下に平行沈線が3条巡る。43は3本一単位の簾状文風の刺突列下にLR単節縄文、以下に4本一単位の直線文が施文されている。44は上下に巡る複数の平行沈線間に半円形の刺突列2列と細かいLR単節縄文が施文されている。45は半円形の刺突列下にLR単節縄文が施文され、以下に2本一単位の直線文が巡る。46はLR単節縄文下に平行沈線が巡る。47はやや乱雑に巡る複数の平行沈線間にLR単節縄文が施文されている。48・49は胴部中段から下部までに収まる破片。48は地文にLR単節縄文が施文され、上位に太い平行沈線が複数巡る。49は胴部中段に無節Rと平行沈線が施文されている。胴下部は無文で上位が横位、下位は斜位のヘラミガキ調整が施されている。40～49の内面調整は、40は上位が横位のヘラミガキ、下位は横位のヘラナデ、43は上位が斜位のヘラミガキ、下位は横位のヘラナデ、その他はすべてヘラナデであるが、44のみ横・斜位、その他は横位に施されている。50～53は波状文が巡る破片。52のみ肩部片、その他は胴上部片である。50は半円形の刺突列下に3本一単位の比較的丁寧な波状文が巡り、以下にLR単節縄文が施文されている。51はRL単節縄文地に2本一単位のやや振りの大きい波状文が等間隔に複数巡る。52は斜位のヘラミガキが施された無文部下にLR単節縄文が施文され、太い波状沈線が巡る。縄文下は爪形状の刺突列が巡る。53は横・斜位のヘラミガキが施された無文部下にやや間隔を空けて乱雑な波状沈線が複数巡る。50～53の内面調整は、51以外横位のヘラナデである。51は図示しなかったが、斜位のハケメ調整が施されている。54・55は乱雑な重山形文が描かれた破片。54は胴上部片。LR単節縄文地に重山形文が巡る。55は胴部中段から下部にかけての破片。LR単節縄文地に重山形文が巡る。下位は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。54・55の内面調整は、54は横位、55は横・斜位のヘラナデである。56～59は重四角文が描かれた破片。56～58は肩部から胴上部までに収まる破片、59は胴部中段の破片である。56のみ沈線が太く、その他は細い。56は重四角文外にLR単節縄文が施文されている。57は鋸歯文下に重四角文が描かれ、鋸歯文区画上及び重四角文間にLR単節縄文が充填されている。58は地文に無節R、59はLR単節縄文が施文されている。56～59の内面調整は、56・58が横位、57・59は横・斜位のヘラナデであり、57は輪積痕が残る。60・61は重三角文が描かれた胴上部片。60は沈線間に無

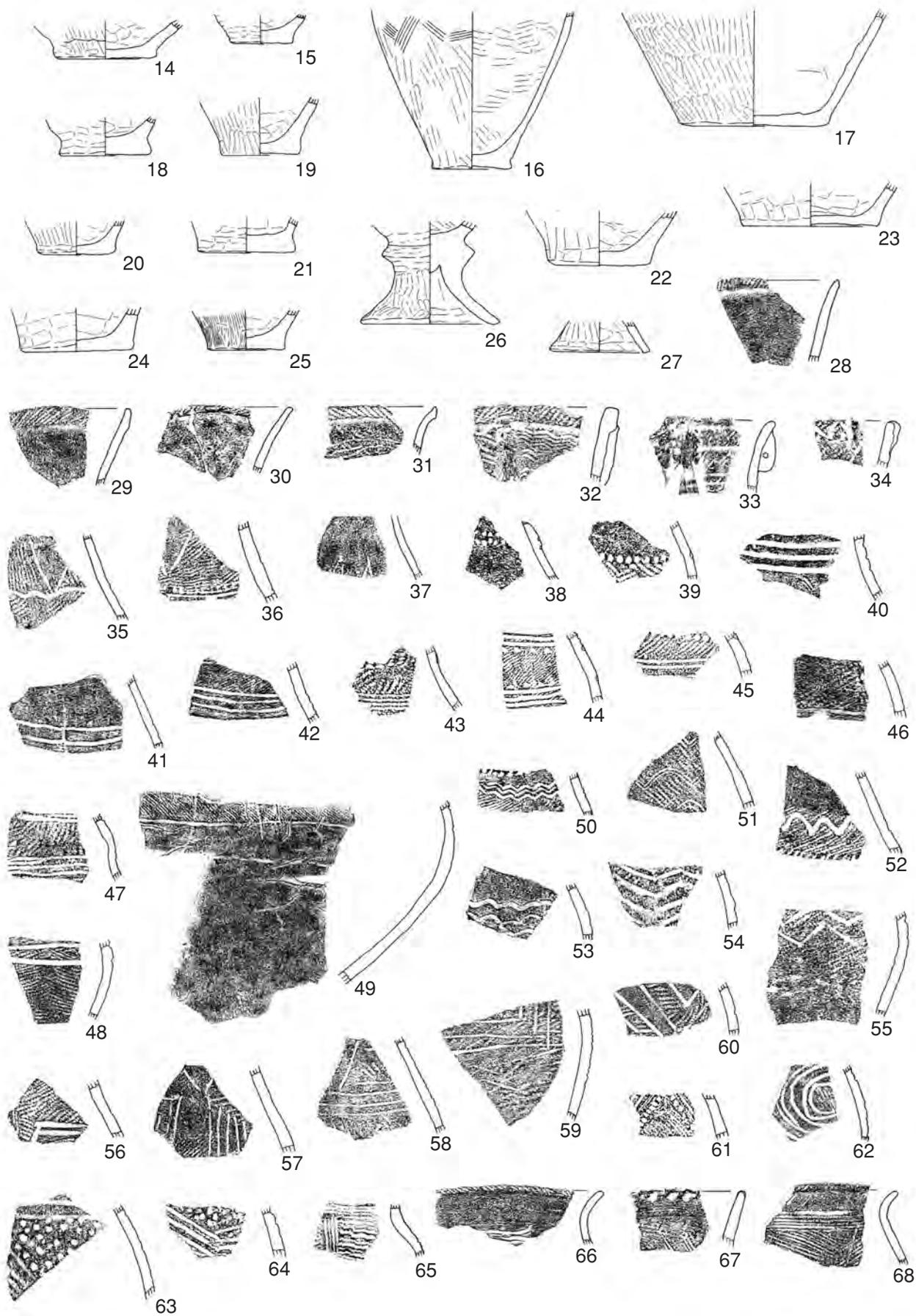
文部とLR単節縄文施文部を交互に配置している。61は3本一単位の櫛歯状工具で重三角文が描かれており、重三角文に沿って半円形の刺突列が刻まれている。区画内は無節Rが充填されている。60・61の内面調整は、60は横位、61は横・斜位のヘラナデである。62はフラスコ文が描かれた胴上部片。乱雑であり、中心にRL単節縄文が充填されている。内面調整は、横位のヘラナデである。63～65は弥生時代中期中頃池上式に相当する破片。流れ込み。63・64は胴上部片。63は重三角文内、64は重菱形文内に円形の刺突がランダムに刻まれている。65は頸部から胴上部にかけての破片。文様は4本一単位で頸部は直線文、以下は垂下する直線文脇に振りの小さい波状文が複数巡る。63～65の内面調整は、すべてヘラナデであるが、63・65は横・斜位、64は横位に施されている。

3は広口壺。口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまり、胴上部に向かって広がる。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

4～8・16～25・66～126は甕。4～7は櫛歯状工具で文様が描かれている。櫛歯の単位は5本前後である。4～6は頸部に簾状文、胴部に縦位の羽状文が描かれている。4・6の羽状文は密でやや乱雑、5はやや間隔を空けて比較的丁寧に描かれている。4・5は口縁部から胴下部までの部位。4は短い口縁部がくの字状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は中段が膨らみ、球形を呈する。最大径を口径に持つが、胴部の径とあまり変わらない。頸・胴部以外の文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文されている。外面の無文部及び内面の調整は、ヘラナデである。5は口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は中段が膨らみ、球形を呈する。4同様、最大径を口径に持つが、胴部の径とあまり変わらない。頸・胴部以外の文様は、口縁端部にLR単節縄文が施文され、口縁部は2本一単位の波状文が巡る。外面無文部の調整は、ヘラミガキであるが、胴部は羽状文施文前に施されたハケメが残る。内面調整は、口縁部から頸部にかけてヘラミガキ、以下はヘラナデである。6は頸部から胴部中段までの部位。頸部はほぼ直立し、胴部はほとんど膨らまない。外面は羽状文施文前に施されたハケメ調整が残る。内面調整はヘラミガキである。7は口縁部から胴部中段までの部位。口縁部は受け口状を呈し、頸部がすぼまる。胴部は中段が膨らみ、球形を呈する。磨耗が著しいが、頸部に簾状文、胴部に波状文が乱雑に巡る。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。8は頸部から胴部中段までの部位。頸部がすぼまり、胴部の膨らみは小さい。文様は頸部以外にLR単節縄文が施文されている。頸部外面及び内面の調整は、ヘラミガキである。

16～25は胴下部から底部までの部位。16のみ内外面ともにヘラミガキ、17～20は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、21～24は内外面ともにヘラナデ、25は外面がハケメ、内面はヘラナデ調整が施されている。胴下部に縦位の羽状文が描かれた16以外は、壺の可能性もある。

66～98は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。66は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部にRL単節縄文が施文され、頸部には直線文と思われる文様が乱雑に巡る。外面無文部及び内面の調整は、横位のヘラミガキである。67～84は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。比較的丁寧に描かれたものと乱雑に描かれたものがあるが、後者が目立つ。櫛歯は細いものが多い。67は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部に刻み、頸部以下は羽状文が施文されている。外面無文部の調整は、上位が横位、下位が斜位のハケメであり、内面は横位のヘラナデである。68～84は口縁部から胴部中段までに収まる破片。78・84は同一個体。頸部の残る68～72は、68・72が直線文、その他は簾状文が巡る。68・69は口縁端部にLR単節縄文が施文され、70は口縁端部にカナムグラによる擬縄文が

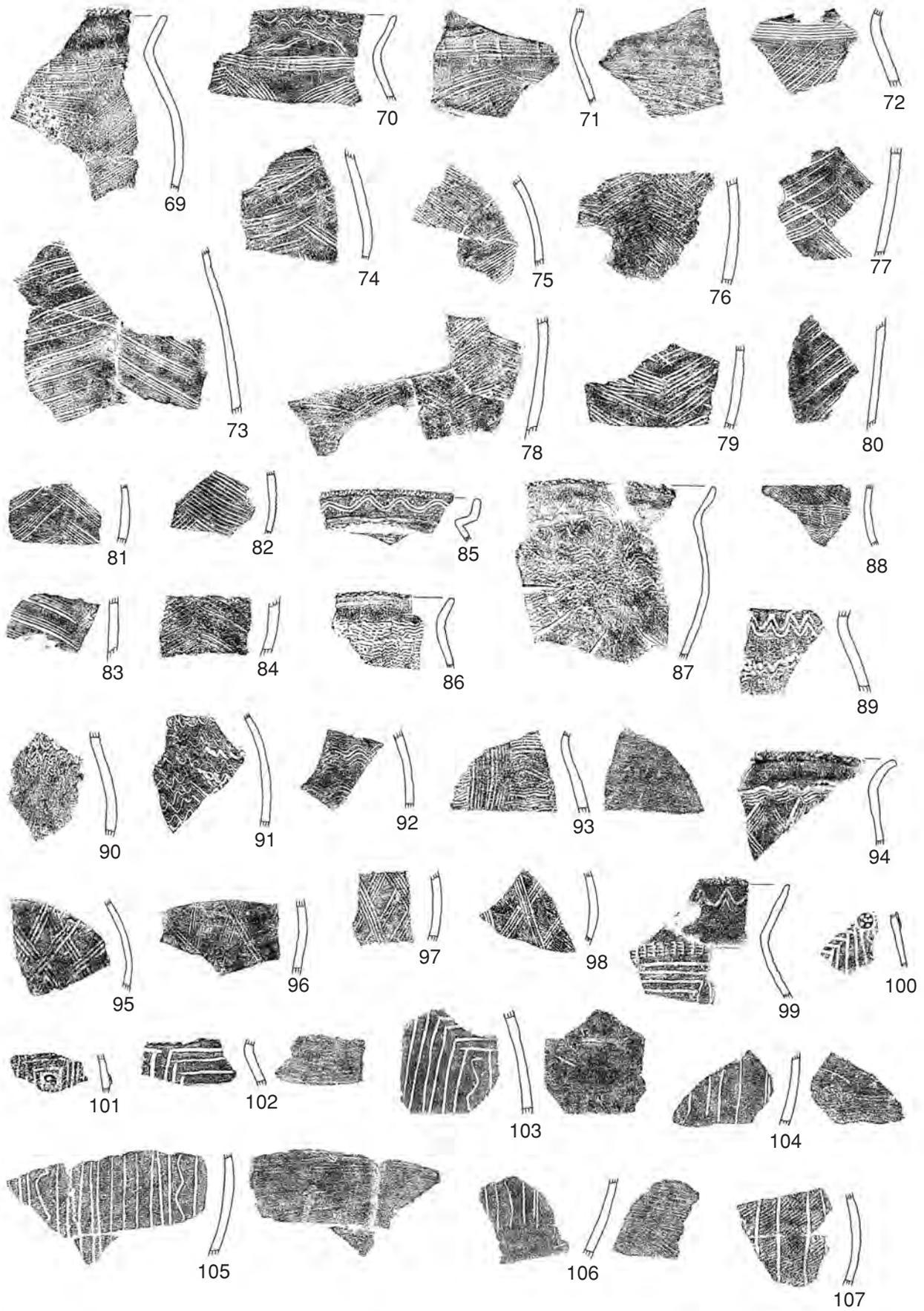


第9図 第2号住居跡出土遺物(2)

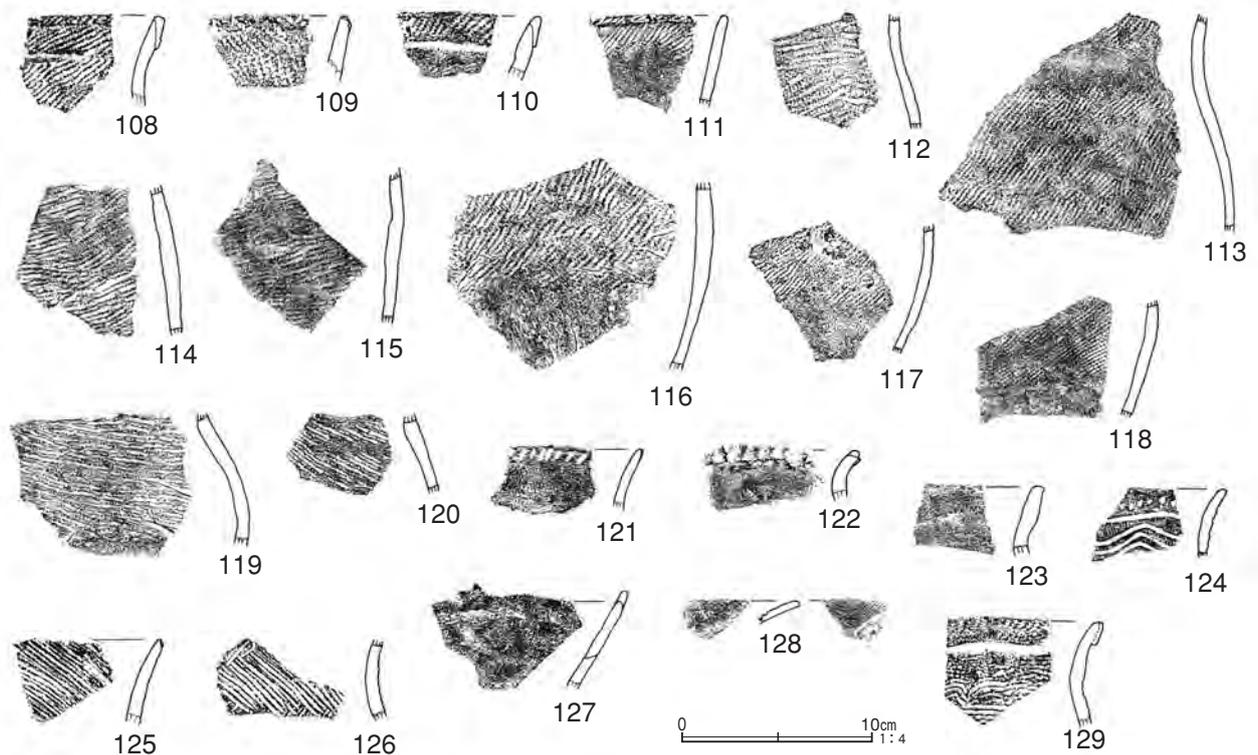
施文され、口縁部に振りの大きい波状文が巡る。68～71の外面无文部の調整は、すべて横位のヘラミガキである。内面調整は、68・69・72・73・77～79・81・83・84が横位、76・80が斜位のヘラミガキ、70は図示しなかったが、口縁部から頸部までが横位のヘラミガキ、以下は斜位のハケメ、71も口縁部から頸部までが横位のヘラミガキであるが、以下は横・斜位のハケメ、74も図示しなかったが、上位が横・斜位のハケメ、下位が横位のヘラミガキ、75は横・斜位、82は斜位のヘラナデである。85～93は波状文が描かれた破片。口縁部から胴部中段までに収まる。波状文は振りの大きいものと小さいものがあるが、前者が目立つ。胴部に描かれた波状文は、乱雑で密に描かれたものが多い。85は口縁部に2本一単位で比較的丁寧に描かれている。口縁端部はカナムグラによる擬縄文が施文されている。86は口縁端部にLR、87はRL単節縄文が施文されている。86・87の口縁部外面無文部は横位のヘラミガキ、87の胴下部は分かりづらいが、斜位のハケメ調整が施されている。88は頸部の簾状文下に波状文が巡る。櫛歯が8本と多い。口縁部外面の無文部は、斜位のハケメ調整が施されている。89～91は波状文が特に乱雑であり、89は上下で波状文の振りが異なる。92は、波状文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。93は垂下する6本一単位の直線文2列脇に振りの小さい波状文が複数巡る。85～93の内面調整は、85・86・88・92が横位、90が斜位のヘラミガキ、87は口縁部から頸部までが横位のヘラミガキ、以下は横・斜位のヘラナデ、89・91は斜位のヘラナデ、93は横位のハケメ後、横位のヘラミガキが施されている。87は胴部中段内面に輪積痕が残る。94～98は胴部に斜格子文が描かれた破片。乱雑で櫛歯の細いものが多い。94は口縁部から胴上部にかけての破片。口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部に乱雑な波状文が巡る。口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。95～98は胴上部から中段までに収まる。いずれも斜格子文が縦長である。94～98の内面調整は、94は図示しなかったが、口縁部から頸部までが横位のヘラミガキ、以下は斜位のハケメ、95・98は横・斜位、96・97は横位のヘラミガキである。

99～107は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。99のみ口縁部から胴上部までの破片、その他は頸部から胴下部までに収まる。99は口縁端部にRL単節縄文が施文され、口縁部は2本一単位で振りの大きい波状文、頸部は4本一単位の簾状文が巡る。外面無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。100・101はボタン状貼付文が付く。100は6つ、101は1つのみボタン上に円形刺突が刻まれている。100はコの字重ね文間頂点に付き、波状沈線が垂下する。101はコの字中央に付く。102～106は同一個体。コの字中央から波状沈線が垂下する。107は地文にLR単節縄文が施文されている。99～107の内面調整は、99が横位のヘラミガキ、100は横・斜位、101は横位のヘラナデ、102～106は横・斜位のハケメ後に横位のヘラミガキ、107は上位が横位、下位は斜位のヘラミガキが施されている。

108～120は縄文が施文された破片。108～111は口縁部から頸部まで、112～115・119・120は頸部から胴部中段まで、116～118は胴部中段から下部までに収まる。縄文は、109がRL単節縄文、119・120は無節R、その他はLR単節縄文である。108は口縁端部を含む全面、109は口縁端部に施された刻み以下、110は口縁部、111は端部も含む口縁部に縄文が施文されている。108・110は口縁部が肥厚している。110・111は縄文以下が無文であり、110は横位、111は横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。112～115・119・120のうち、113のみ頸部が無文であるが、その他は全面に縄文が施文されている。113の頸部の調整は横位のヘラミガキである。116～118は縄文以下が無文であり、116は横・斜位、117・118は斜位のヘラミガキ調整が施されている。108～120の内面調整は、108～110・113が横位、111・117は斜位、



第10图 第2号住居跡出土遺物(3)



第 11 図 第 2 号住居跡出土遺物 (4)

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(12.6)	(8.15)	—	ABIK	浅黄色	B	口~頸 30%	口縁部外面縄文施文部赤彩。内面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	(12.6)	—	ABIJN	にぶい黄橙色	B	肩~胴 40%	内面剥離、外面磨耗顕著。
3	弥生土器 広口壺	(15.0)	(5.0)	—	BDHIK	にぶい黄橙色	B	口~胴 15%	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
4	弥生土器 甕	(18.4)	(15.25)	—	ABN	にぶい黄橙色	B	口~胴 25%	内外面所々磨耗。
5	弥生土器 甕	21.2	(19.0)	—	ABEIN	灰褐色	B	口~胴 70%	内面大半、外面所々磨耗。
6	弥生土器 甕	—	(8.2)	—	ABHJKN	褐灰色	B	頸~胴 40%	
7	弥生土器 甕	(13.7)	(10.25)	—	ABHK	黄灰色	B	口~胴 40%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 甕	—	(13.9)	—	ABDHIK	黒褐色	B	頸~胴 20%	内面大半、外面所々磨耗。
9	弥生土器 壺	—	(10.5)	8.5	ABEHIKM	橙色	B	胴~底 50%	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	(6.3)	7.8	AIKN	黒色	B	胴~底 50%	
11	弥生土器 壺	—	(3.1)	9.4	ABDHN	にぶい黄橙色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 壺	—	(3.0)	8.5	ABHIN	黒色	B	底部 100%	外面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	(2.65)	(7.6)	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	底部 45%	外面赤彩、大半剥落。
14	弥生土器 壺	—	(2.7)	7.2	ABEIN	にぶい橙色	B	底部 70%	外面輪積痕有。内面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	(2.1)	4.5	ABDEI	褐灰色	B	底部 60%	内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 甕	—	(11.3)	5.6	ABDK	黒色	B	胴~底 60%	内外面所々磨耗。
17	弥生土器 甕	—	(8.3)	(10.4)	ABJKN	灰黄色	B	胴~底 45%	内面剥離顕著。
18	弥生土器 甕	—	(2.7)	6.5	ABCDIK	褐灰色	B	底部 100%	外面磨耗顕著。
19	弥生土器 甕	—	(4.1)	5.5	ABDHI	灰色	B	底部 60%	P2 出土。
20	弥生土器 甕	—	(2.45)	5.5	ABIN	褐灰色	B	底部 100%	
21	弥生土器 甕	—	(2.6)	6.9	ABEIJKN	橙色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 甕	—	(3.9)	7.2	ABDEHIN	褐灰色	B	底部 70%	内外面やや磨耗。
23	弥生土器 甕	—	(3.1)	(9.4)	ABIKN	にぶい黄橙色	B	底部 50%	外面磨耗顕著。
24	弥生土器 甕	—	(3.1)	(7.9)	ABDIK	灰褐色	B	底部 40%	P2 出土。外面磨耗顕著。
25	弥生土器 甕	—	(2.85)	5.5	ABDIN	褐灰色	B	底部 100%	
26	弥生土器 高坏	—	(7.4)	9.8	ABDIK	にぶい黄橙色	B	接~脚 90%	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 高坏	—	(2.2)	7.2	ABDIK	にぶい橙色	B	脚部 60%	
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJKM	浅黄色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	黄灰色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 壺	—	—	—	ACDHN	にぶい橙色	B	口~頸部片	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABHK	暗オリーブ褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKM	にぶい褐色	B	口～頸部片	外面突帯有。内外面やや磨耗。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ADIKN	にぶい黄色	B	口～頸部片	外面突起有。
34	弥生土器 壺	—	—	—	AHIK	黄灰色	B	口縁部片	外面突起有。
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	灰黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJ	にぶい黄橙色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内面輪積痕有。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	浅黄橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄色	B	肩部片	P2 出土。外面やや磨耗。
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	肩部片	
44	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHK	灰黄色	B	胴上部片	
45	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
46	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
47	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	外面磨耗顕著。
48	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴中段片	
49	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	
50	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	褐灰色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
51	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
52	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
53	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
54	弥生土器 壺	—	—	—	ABIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
55	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGIKN	にぶい橙色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
56	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
57	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	肩～胴上片	内面輪積痕有。内面磨耗顕著。
58	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
59	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	灰黄褐色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
60	弥生土器 壺	—	—	—	ABDI	灰黄褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
61	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHI	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
62	弥生土器 壺	—	—	—	BHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
63	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEK	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
64	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGHKN	浅黄色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
65	弥生土器 壺	—	—	—	AIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
66	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
67	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	灰褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
68	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKMN	黒褐色	B	口～胴上片	P1 出土。
69	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	灰褐色	B	口～胴中片	内外面やや磨耗。
70	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～胴上片	
71	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	明褐色	B	頸～胴上片	外面磨耗顕著。
72	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
73	弥生土器 甕	—	—	—	ACHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
74	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIK	にぶい褐色	B	胴上～中片	
75	弥生土器 甕	—	—	—	AIK	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
76	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	
77	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
78	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDI	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。No.84 と同一個体。
79	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
80	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
81	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	胴中段片	
82	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	褐灰色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
83	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	
84	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。No.78 と同一個体。
85	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	P2 出土。
86	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
87	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKMN	にぶい橙色	B	口～胴下片	胴部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
88	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
89	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	にぶい橙色	B	胴上～中片	内外面磨耗顕著。
91	弥生土器 甕	—	—	—	ADEHIN	にぶい褐色	B	胴上～中片	内面磨耗顕著。
92	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴上部片	
93	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
94	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面やや磨耗。
95	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEI	にぶい黄橙色	B	胴上～中片	内外面磨耗顕著。
96	弥生土器 甕	—	—	—	ABCEHIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
97	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	にぶい褐色	B	胴中段片	
98	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	暗オリーブ褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
99	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHKN	にぶい赤褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
100	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
101	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEI	にぶい褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
102	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	No.103～106と同一個体。
103	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	黒褐色	B	胴上部片	No.102・104～106と同一個体。
104	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴中～下片	No.102・103・105・106と同一個体。
105	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	褐灰色	B	胴中段片	No.102～104・106と同一個体。
106	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴中～下片	No.102～105と同一個体。
107	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴中段片	
108	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口～頸部片	
109	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒色	B	口縁部片	
110	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口縁部片	内外面やや磨耗。
111	弥生土器 甕	—	—	—	BDHI	黒褐色	B	口～頸部片	
112	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
113	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	黒褐色	B	頸～胴中片	内面磨耗顕著。
114	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
115	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIN	橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
116	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	暗オリーブ褐色	B	胴中～下片	外面磨耗顕著。
117	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	褐灰色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
118	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	褐灰色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
119	弥生土器 甕	—	—	—	ABDGIKMN	灰黄褐色	B	胴上～中片	内面磨耗顕著。
120	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
121	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
122	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
123	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	褐色	B	口～頸部片	
124	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
125	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
126	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	暗オリーブ褐色	B	頸部片	
127	弥生土器高坏	—	—	—	BDEIKN	灰黄色	B	口縁部片	口縁部突起、焼成後穿孔有。内外面磨耗顕著。
128	弥生土器高坏	—	—	—	ABN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面赤彩。
129	弥生土器筒形	—	—	—	AIKMN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。

116・118は横・斜位のヘラミガキ、112は横・斜位、114・115は斜位、119・120は横位のヘラナデである。

121～123は、ほぼ無文の口縁部から頸部にかけての破片。121・122は口縁端部に刻みが施されている。無文部の調整は、121・123が内外面ともに横位のヘラナデ、122は内外面ともに横位のヘラミガキである。

124～126は、弥生時代中期中頃池上式に相当する破片。流れ込み。口縁部から頸部までに収まる。124は円形刺突列下に平行沈線と複数の波状沈線が巡る。外面は文様施文前に施された縦位のハケメ調整が残る。125・126は横位の羽状文が密に描かれている。125は口縁端部に刻みが施されている。124～126の内面調整は、124が横・斜位、125は横位、126は斜位のヘラミガキである。

26・27・127・128は高坏。26は接合部から脚部までの部位。接合部に突帯が巡る。脚部が短く、緩やかに開く。外面及び坏部内面の調整はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。27はハの字に開く脚部。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。127・128は口縁部片。127は口縁端部に二個一対の突起が付き、下位に焼成後穿孔がみられた。128は内面に鋸歯文が描かれ、区画下に円形刺突が充填されている。外面は斜位、内面無文部は横位のヘラミガキと赤彩が施されている。

129は筒形土器。口縁部から胴上部にかけての破片。複合口縁部から頸部上位にかけてLR単節縄文が施文され、以下は3本一単位の乱雑な波状文と直線文が巡る。内面調整は、横位のヘラミガキである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

第3号住居跡（第12図）

55・56-138グリッドに位置する。北壁中央の上位を3号土坑に切られ、北西隅の調査区との境では4号土坑を切っている。南西部の大半は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸6.2m、短軸5.5m程の横長の隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-47°-Wを指す。確認面からの深さは0.3m前後を測り、床面は東側がやや高いが、その他はほぼ平坦であった。覆土は6層（1~6層）確認された。ブロックを含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

北東隅付近では、北壁及び東壁に沿って床下土坑が2基検出された。床下土坑1は長軸1.98m、短軸1.13m、床面からの深さ0.14mを測り、平面プランは長方形を呈する。覆土（7層）にブロックを多量含むことから人為的に埋め戻されたと思われる。南東部でP2と重複している。床下土坑2は長軸0.97m、短軸0.71m、床面からの深さ0.27mの楕円形状を呈する。覆土は2層（8・9層）確認された。ほぼ水平に堆積しており、ブロックを含むことから人為的に埋め戻されたと思われる。

ピットは4基検出された。P1~3は主柱穴と思われる。P4はその位置から当初炉跡と思われたが、掘り込みが深く、覆土に焼土等を含まないことから主柱穴を補佐する柱穴であろうか。覆土は図示できなかったが、いずれからも柱痕跡は認められなかった。

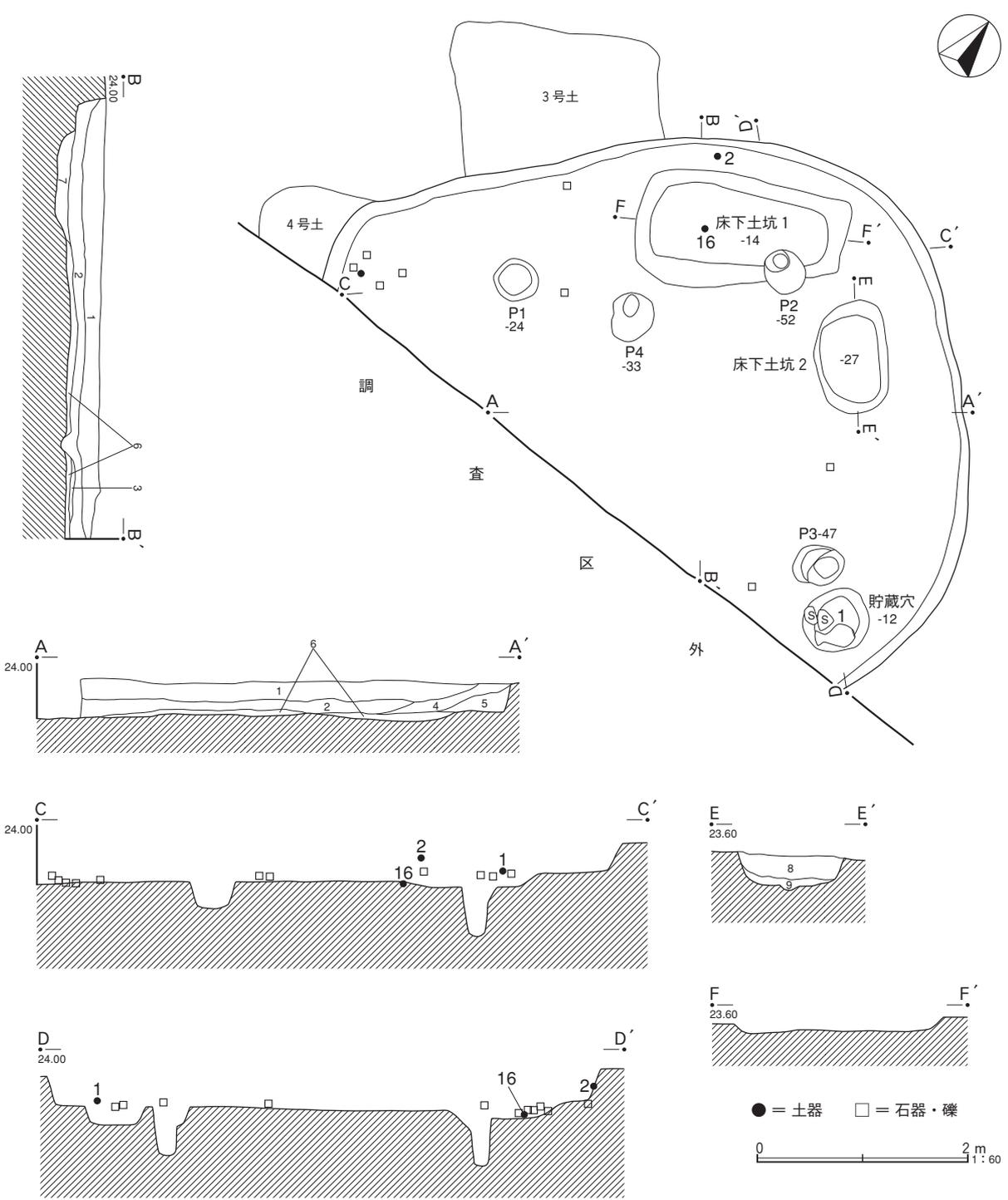
貯蔵穴は南東隅から確認された。径0.6m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.12mを測る。

炉跡、壁溝は検出されなかった。

出土遺物（第13~15図）は、弥生土器壺（1~6・14~16・23~61）、無頸壺（7）、甕（8~13・17~20・62~93）、高坏（21・22）、搔器と思われる石器（94）がある。残存状態の良好なものは少ないが、完形の1は貯蔵穴直上、残存状態の比較的良好な2は北東隅付近から検出された。遺物はピットや床下土坑からも検出されたが、大半は覆土からの検出である。

1~6・14~16・23~61は壺。1は完形。口縁部は緩やかに外反し、頸部はすぼまるがやや太い。肩の張りが弱く、肩部以下はやや縦長の算盤玉状を呈し、最大径を胴部中段に持つ。磨耗が著しく、また計測不可能な部分もあるが、全面無文で内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。2は小型の壺。口縁部を欠くが、残存状態は良好である。器形が1に似ているが、底部が大きく、全体的に詰まった形状を呈する。1と同じく無文であり、内面は胴部中段以下が計測不可能であるが、内外面ともにヘラミガキ調整である。3は口縁部から頸部にかけての部位。やや受け口状を呈する。口縁端部にLR単節縄文が施文されており、以下は無文で内面とともにヘラミガキ調整が施されている。4は頸部から胴上部にかけての部位。頸部以下、緩やかに下る。文様は頸部にのみ施文されている。LR単節縄文地に複数の平行沈線が巡り、下に鋸歯文が描かれている。文様帯以下は無文でヘラミガキ調整が施されている。内面は頸部がヘラミガキ、以下はヘラナデ調整であり、所々に輪積痕が残る。5は胴上部から下部にかけての部位。球形を呈する。外面は剥離が著しいが、文様が胴上部から中段まで描かれている。上3条と下4条の平行沈線間に振りの小さい波状沈線が巡り、以下はカーブの緩い4条の連弧文が巡る。内面調整はヘラナデである。6は胴部中段から下部にかけての部位。半球形を呈する。胴部中段に複数の平行沈線が巡る。以下は無文でヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、ヘラナデである。

14~16は胴下部から底部までの部位。すべて外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデである。壺と

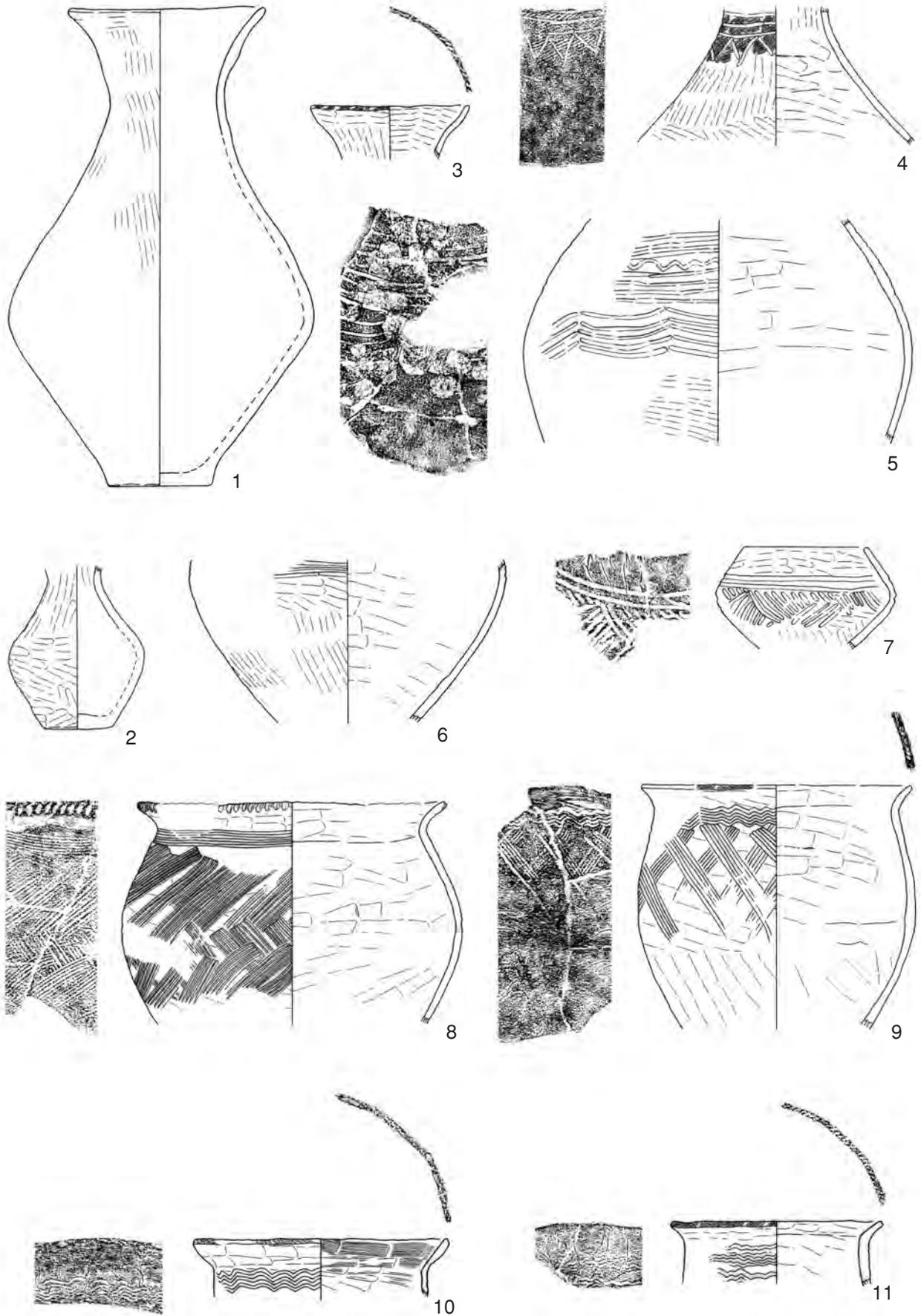


第3号住居跡

土層説明 (A A' B B' E E')

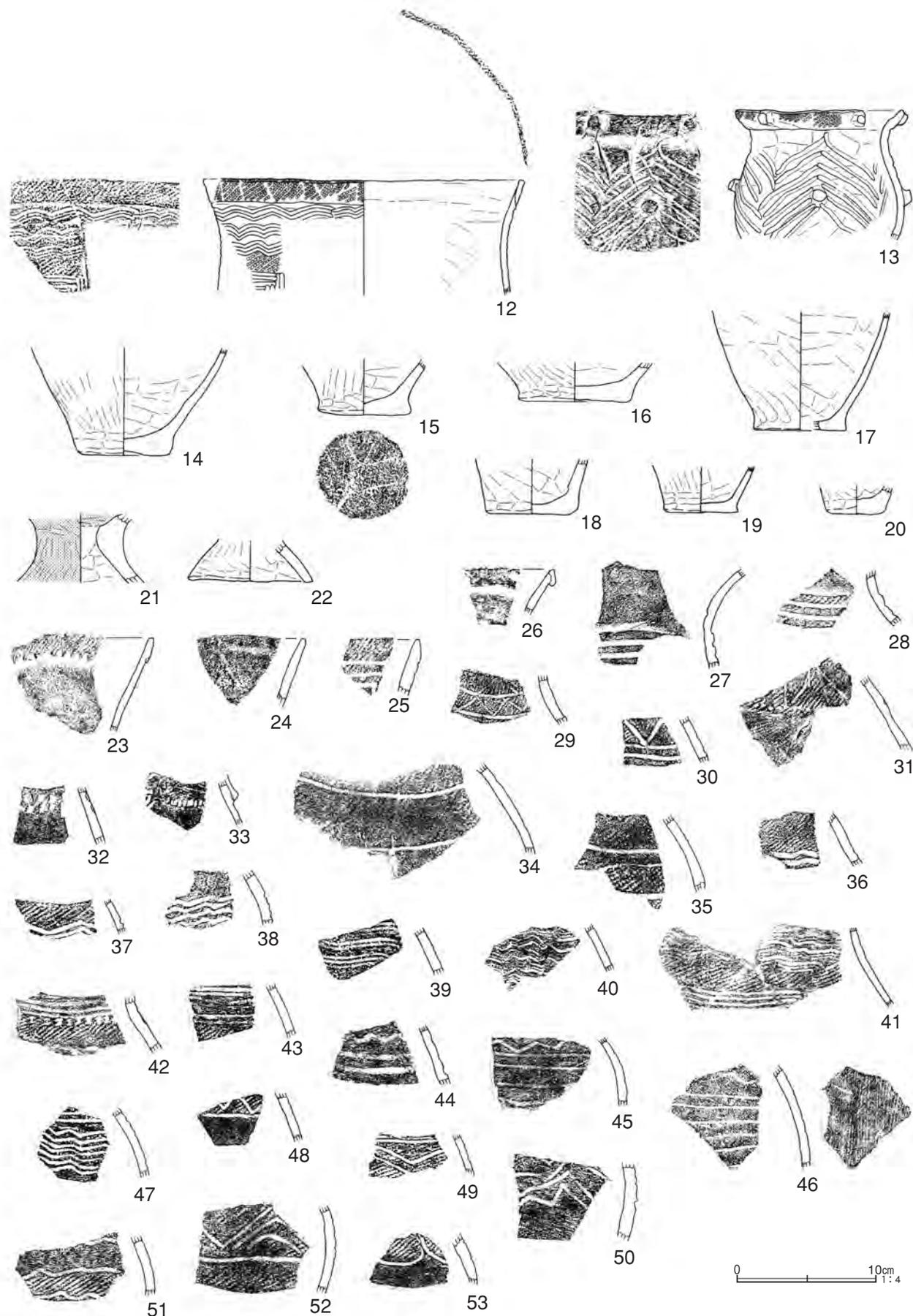
- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 2 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量、炭化物少量含む。
- 3 炭化物層
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒多量、マンガン粒少量含む。
- 5 灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 6 灰白色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 7 青黒色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量含む。
- 8 灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 9 灰色土：シルト質。灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。

第12図 第3号住居跡



0 10cm
1:4

第13图 第3号住居跡出土遺物(1)



第14图 第3号住居跡出土遺物(2)

したが、甕の可能性もある。15は底面に木葉痕が見られた。

23～26は口縁部から頸部までに収まる破片。23～25は縄文が施文され、26のみ無文である。23は肥厚した口縁部にL R単節縄文が施文され、下に半円形の刺突列が巡る。以下は無文で縦位のヘラミガキ調整が施されている。胎土が粗い。24は分かりづらいが、口縁部にL R単節縄文と思われる縄文が施文され、以下は無文で縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。縄文帯と無文部境に輪積痕が残る。25はL R単節縄文地に重四角文が描かれている。器壁が厚い。壺としたが、筒形土器の可能性もある。26は複合口縁部が横位、以下は縦位のヘラミガキ調整が施されている。23～26の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。27は頸部片、28は肩部片である。いずれも太い平行沈線が複数巡るが、最上位の沈線は器面を削り出すことで沈線状を呈する。27は上位が無文で縦位のヘラミガキ調整が施されている。28は沈線間にL R単節縄文が施文され、上位は無文で縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。27・28の内面調整は、27が横位のヘラミガキ、28は横位のヘラナデ調整である。29～31は鋸歯文が描かれた破片。29は肩部片、30・31は胴上部片である。29はL R単節縄文地に鋸歯文と平行沈線が交互に描かれている。沈線が細い。鋸歯文としたが、山形文と見た方が良くかもしれない。30は鋸歯文区画下にL R単節縄文が充填され、以下は平行沈線が複数巡る。沈線が太い。31は半円形の刺突列が施された段上に鋸歯文が描かれ、鋸歯文区画下と段下にL R単節縄文が施文されている。29～31の内面調整は、29が斜位のヘラミガキ、30は横・斜位、31は斜位のヘラナデである。32・33は刺突列の施された胴上部片。32は四角形状を呈する刺突列が2列巡る。以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。33は半円形の刺突列の施された段上に中央が窪んだ縦長の突帯が付き、脇にL R単節縄文と思われる縄文が施文されている。段下は無文で縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。32・33の内面調整は、ともに横位のヘラナデである。34・35は平行沈線とL R単節縄文が施文された胴上部片。34は幅広の平行沈線間にL R単節縄文が充填され、上下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。35はL R単節縄文地にやや間隔を空けて平行沈線が巡る。34・35の内面調整は、34は横・斜位、35は横位のヘラナデである。36～40は波状文が複数巡る破片。36のみ肩部片、その他は胴上部片である。36～38はL R単節縄文下に太く、振りの小さい波状沈線が複数巡る。39・40は3本一単位の振りの小さい波状文が複数巡るが、39は丁寧、40はやや乱雑に描かれている。36～40の内面調整は、36～38が横位、39は斜位、40は横・斜位のヘラナデである。41～47は平行沈線ないし櫛歯による直線文と波状文が巡る破片。41・42・44は肩部片、43・45～47は胴上部片である。41は3本一単位の振りの小さい波状文3条と直線文間にL R単節縄文が充填されている。胎土が粗い。42は複数の平行沈線下に2本一単位の簾状文風の刺突列が巡り、以下にL R単節縄文、波状沈線が施文されている。43は上下に2本一単位の直線文、間に振りの弱い波状文が巡る。以下はL R単節縄文が施文されている。44～46は波状沈線下に平行沈線が複数巡る。45の最下沈線はやや波状を呈する。47は平行沈線下に複数の波状沈線が巡る。41～47の内面調整は、41が横位のヘラミガキ、42・47は横・斜位、43～45は横位のヘラナデ、46は縦位のハケメである。48～50は山形文が描かれた破片。48・49は胴上部片、50は胴部中段の破片である。48はL R単節縄文地に山形文と平行沈線が巡り、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。山形文としたが、振りの大きい波状沈線と見た方が良くかもしれない。49は地文にL R単節縄文が施文され、平行沈線下に2条の山形文が巡る。50は山形文が乱雑に描かれている。文様下は無文で斜位

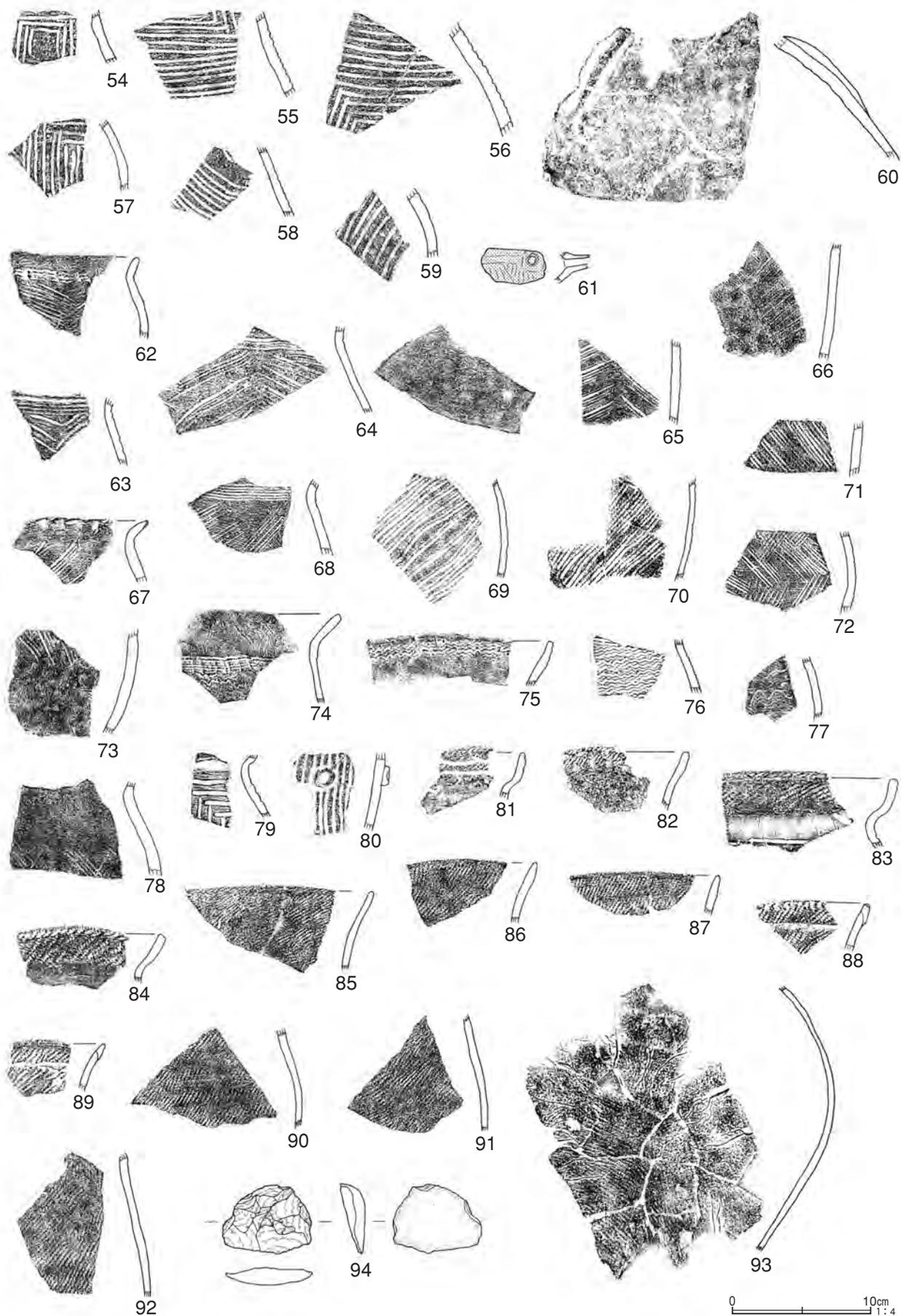
のヘラミガキ調整が施されている。胎土が粗い。48～50の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。51は複数巡る波状沈線間に無文部とLR単節縄文施文部を交互に配置した胴上部片。外面無文部の調整は横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。52は重山形文が描かれた胴部中段の破片。地文にLR単節縄文が施文され、重山形文下に1条の平行沈線が巡る。内面調整は、横位のヘラナデである。53は沈線で眼鏡状の文様が描かれた胴上部片。区画内にLR単節縄文が充填されている。眼鏡状文様下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、横位のヘラナデである。54～57は重四角文が描かれた破片。54・55は肩部片、56・57は胴上部片である。いずれも沈線が太い。内面調整は、すべて横位のヘラナデである。58・59はフラスコ文が描かれた破片。58は肩部片、59は胴上部片である。内面調整は、ともに横位のヘラナデである。60は縦長の突帯が垂下する大型壺の胴上部片。突帯脇は無文で横・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデ調整が施されている。61は注口の付いた胴部中段の破片。外面はヘラミガキと赤彩、内面は横位のヘラナデ調整が施されている。

7は算盤玉状を呈する小型の無頸壺。底部を欠く。口縁部は無文でヘラミガキ調整が施されており、胴上部から中段にかけて2条の平行沈線、以下に複合鋸歯文が描かれている。内面は図示できなかったが、ヘラナデ調整が施されている。

8～13・17～20・62～93は甕。8～11は櫛歯状工具による文様が主体となる。櫛歯の単位は5本前後である。

8は口縁部から胴部中段下までの部位。短い口縁部がやや外反する。頸部はすぼまり、胴部は最大径を持つ中段が膨らみ、球形を呈する。文様は口縁端部に刻みが施され、頸部に直線文が巡る。胴部は横位の羽状文が乱雑であるが、密に描かれている。外面無文部及び内面はヘラナデ調整が施されている。9～11は頸部に波状文が巡る。9・10は比較的丁寧、11はやや乱雑に巡る。9は口縁部から胴下部までの部位。短い口縁部がやや外反する。頸部がすぼまり、胴部は中段がやや膨らむ。最大径を胴部中段に持つが、口径とあまり変わらない。頸部以外の文様は、口縁端部にLR単節縄文、胴部に比較的丁寧な斜格子文が施文されている。外面無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。内面の所々に輪積痕が残る。10は口縁部から頸部までの部位。肥厚した短い口縁部がくの字に開き、頸部はほぼ直立する。頸部以外の文様は、口縁端部にRL単節縄文が施文されている。口縁部外面の無文部はヘラナデ、内面はハケメ調整が施されている。11は口縁部から胴上部までの部位。短い口縁部がやや外反しながら立ち上がり、頸部以下はほぼ垂直に下る。文様は口縁端部にLR単節縄文が施文され、波状文は頸部以下に複数巡る。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。器壁が厚い。12は口縁部から胴上部までの部位。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。頸部はややすぼまるが、胴上部の膨らみは小さい。文様は全面に施文されている。端部を含む口縁部にLR単節縄文、以下に3本一単位の波状文が比較的丁寧に3条巡り、LR単節縄文帯を挟んで胴上部以下にコの字重ね文が描かれている。内面調整はヘラナデである。13は小型の甕。器壁が厚い。短い口縁部がやや受け口状を呈する。頸部がすぼまり、胴部は中段付近が膨らみ、球形を呈する。最大径を胴部中段に持つが、口径とあまり変わらない。文様は口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部以下は沈線で縦位の羽状文がやや乱雑に描かれている。口縁部及び胴部中段にボタン状貼付文が等間隔に付くが、口縁部と胴部で位置をずらして配置されている。内面は図示できなかったが、外面無文部も含めて横位のヘラナデ調整が施されている。

17～20は胴下部から底部までの部位。17・18が内外面ともにヘラナデ、19・20は外面がヘラミガキ、内



第15图 第3号住居跡出土遺物(3)

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	13.7	33.85	7.2	ABIKN	橙色	B	完形	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	(11.6)	4.8	ABCHIKN	にぶい橙色	B	頸~底 100%	外面所々磨耗。
3	弥生土器 壺	(11.2)	(3.8)	—	ABCEHIK	にぶい橙色	B	口~頸 40%	内外面磨耗顕著。床下土坑 2 出土。
4	弥生土器 壺	—	(9.8)	—	ABEHIKN	にぶい橙色	B	頸~胴 25%	内面輪積痕有。
5	弥生土器 壺	—	(15.85)	—	AHIKN	黒色	B	胴部 40%	内面摩耗、外面剥離顕著。
6	弥生土器 壺	—	(11.5)	—	ABDHIN	褐灰色	B	胴部 40%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器無頸壺	(8.7)	(7.2)	—	ABDEHN	にぶい黄橙色	B	口~胴 40%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 甕	(21.8)	(15.7)	—	ABHIKN	黒褐色	B	口~胴 25%	内外面所々磨耗。
9	弥生土器 甕	(19.0)	(17.25)	—	ABEGHIKN	黒褐色	B	口~胴 25%	内面所々輪積痕有。内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 甕	(18.0)	(4.15)	—	ABEIKN	にぶい褐色	B	口~頸 20%	
11	弥生土器 甕	(14.8)	(4.7)	—	ABCEHIN	にぶい橙色	B	口~胴 20%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	(22.8)	(8.3)	—	ABDKN	黒褐色	B	口~胴 15%	内面大半、外面所々磨耗。
13	弥生土器 甕	(12.0)	(9.3)	—	AEHIN	にぶい赤褐色	B	口~胴 25%	P4 出土。
14	弥生土器 壺	—	(7.65)	6.5	ABDHIKN	灰褐色	B	胴~底 90%	外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	(3.95)	6.6	ADHIN	にぶい赤褐色	B	底部 90%	底面木葉痕有。内外面やや磨耗。
16	弥生土器 壺	—	(2.85)	8.0	ABCEIK	にぶい黄橙色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 甕	—	(8.5)	(6.5)	ABDHIN	にぶい赤褐色	B	胴~底 25%	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 甕	—	(3.9)	6.5	ABCDHIKN	褐灰色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。床下土坑 2 出土。
19	弥生土器 甕	—	(3.3)	5.2	ABCEHI	黒褐色	B	底部 80%	内外面磨耗顕著。
20	弥生土器 甕	—	(2.05)	4.2	ABDIKN	灰褐色	B	底部 100%	外面磨耗顕著。
21	弥生土器高坏	—	(5.0)	—	ABGIK	にぶい黄橙色	B	接合部 90%	内外面赤彩、ほぼ剥落。P4 出土。
22	弥生土器高坏	—	(3.0)	(8.8)	ABDHN	橙色	B	脚部 45%	外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABDI	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDI	浅黄色	B	口~頸部片	外面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	灰黄褐色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIK	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHIKMN	にぶい黄褐色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	AIKN	黒色	B	肩部片	
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHK	灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	暗灰黄色	B	胴上部片	外面突帯有。内外面磨耗顕著。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 壺	—	—	—	AIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黄灰色	B	胴上部片	
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIN	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	灰黄色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIK	浅黄橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
44	弥生土器 壺	—	—	—	BDGN	浅黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
45	弥生土器 壺	—	—	—	ABEI	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
46	弥生土器 壺	—	—	—	ABGIKN	灰白色	B	胴上部片	
47	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
48	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	黒色	B	胴上部片	
49	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	明赤褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。P1 出土。
50	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
51	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
52	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
53	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
54	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEK	浅黄色	B	肩部片	内外面やや磨耗。P4 出土。
55	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
56	弥生土器 壺	—	—	—	ABHN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
57	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
58	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	
59	弥生土器 壺	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴上部片	
60	弥生土器 壺	—	—	—	ABEN	にぶい赤褐色	B	胴上部片	外面突帯有。内外面磨耗顕著。
61	弥生土器 壺	—	—	—	AEKN	橙色	B	胴中段片	注口有。外面赤彩。
62	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい赤褐色	B	口~胴上片	胴部内面輪積痕有。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGIKN	黄灰色	B	頸～胴上片	
64	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
65	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIK	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
66	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
67	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
68	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKM	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
69	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	胴上～中片	No.70 と同一個体。
70	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。No.69 と同一個体。
71	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
72	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上～中片	
73	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい橙色	B	胴中～下片	P4 出土。
74	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
75	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
76	弥生土器 甕	—	—	—	ADHKN	黒色	B	頸～胴上片	
77	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKM	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
78	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKMN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	外面磨耗顕著。
79	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
80	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。P1 出土。
81	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口～頸部片	
82	弥生土器 甕	—	—	—	ABE	灰黄色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
83	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	口～胴上片	外面やや磨耗。
84	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
85	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
86	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIN	黒褐色	B	口～頸部片	
87	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	灰黄褐色	B	口縁部片	
88	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	P4 出土。
89	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴上～中片	
91	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIK	灰褐色	B	胴上～中片	内面磨耗顕著。
92	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEGKN	にぶい黄褐色	B	胴上～中片	内外面磨耗顕著。
93	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい赤褐色	B	胴上～下片	内外面磨耗顕著。
94	搔器	最大長 5.0 cm、最大幅 6.3 cm、最大厚 1.25 cm。重量 47g。完形。ホルンフェルス製。							

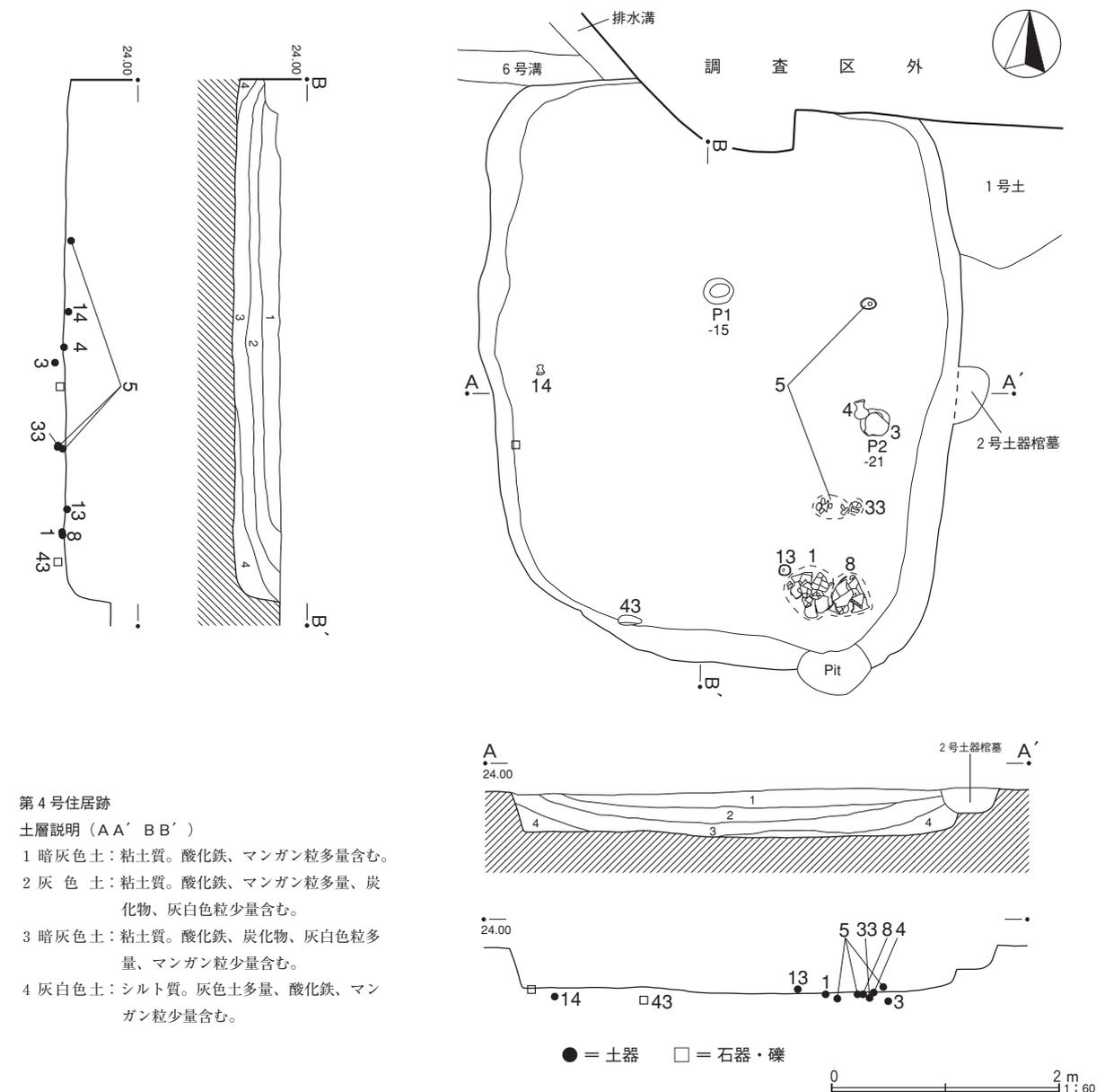
面はヘラナデ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。

62～78 は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は 5 本前後が多い。62～66 は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。櫛歯の細いものが多く、やや間隔を空けるものと密に描かれるものがある。62～64 は口縁部から胴上部までに収まる破片、65・66 は胴部中段の破片である。62 は頸部に 3 本一単位の簾状文が巡る。口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。63・64 は頸部に直線文が巡る。64 は胎土が粗い。62～66 の内面調整は、62・63 が横位のヘラミガキ、64 は横・斜位のハケメ、65・66 は横位のヘラナデである。62 は胴上部内面に輪積痕が残る。67～73 は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。67 以外は密に描かれている。67・68 は口縁部から胴上部まで、69～73 は胴上部から胴下部までに収まる。67 は口縁端部に刻みが施されている。68 は頸部に直線文が巡り、胴上部は所々に羽状文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。69・70 は同一個体。2 本一単位で密に描かれている。72 は羽状文施文前に施された横位のハケメ調整が所々に残る。73 は羽状文下が無文で縦位のヘラミガキ調整が施されている。67～73 の内面調整は、67 が図示しなかったが、横・斜位のハケメ、68 は横位のヘラミガキ、69・70 は横・斜位、71 は横位、72・73 は斜位のヘラナデである。74～78 は波状文が描かれた破片。74～76 は振りが小さく、77・78 はやや大きい。いずれも櫛歯が細い。すべて口縁部から胴上部までに収まる。74 は頸部に簾状文が巡り、以下に波状文が巡る。口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。75 は波状文が口縁部に 2 条、分かりづらいが、頸部に簾状文も巡る。外面無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。76 は僅かに残る簾状文下に波状文が密に巡る。

77は波状文が乱雑に巡る。78は分かりづらいが、頸部に波状文が巡り、横位のヘラミガキが施された無文部下に斜格子文が描かれている。74~78の内面調整は、74・75・78が横位、76が斜位、77が横・斜位のヘラミガキである。

79・80は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。79は頸部から胴上部にかけて、80は胴部中段の破片である。79は頸部が無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。80は中央に円形刺突が施されたボタン状貼付文が付く。内面調整は、79が横位のヘラミガキ、80が横位のヘラミガキである。

81~92はLR単節縄文が施文された破片。81~89は口縁部から胴上部まで、90~92は胴上部から中段までに収まる破片である。81~84は端部も含む口縁部に縄文が施文され、頸部は無文である。81はカーブの緩い連弧文が巡る。83は胴上部にコの字重ね文と思われる文様が描かれている。頸部外面の無文部は、81・83が横位、82は縦・斜位のヘラミガキ、84は横位のハケメ調整が施されている。85~89



第16図 第4号住居跡

は全面に縄文が施文されている。88・89は口縁部が肥厚しており、88は端部に刻みが施されている。81～92の内面調整は、81～83・86～88が横位、89が斜位のヘラミガキ、84・85・90～92が横位のヘラナデである。

93は無文の胴上部から下部にかけての破片。外面は斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデ調整が施されている。

21・22は高坏。21は接合部。坏部底面を欠く。外面及び坏部内面はヘラミガキと赤彩、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。22はハの字に開く短い脚部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。

94は搔器と思われる石器。片面のみ加工され、もう片面は自然面を残す。刃部に刃こぼれが生じている。ホルンフェルス製。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

第4号住居跡（第16図）

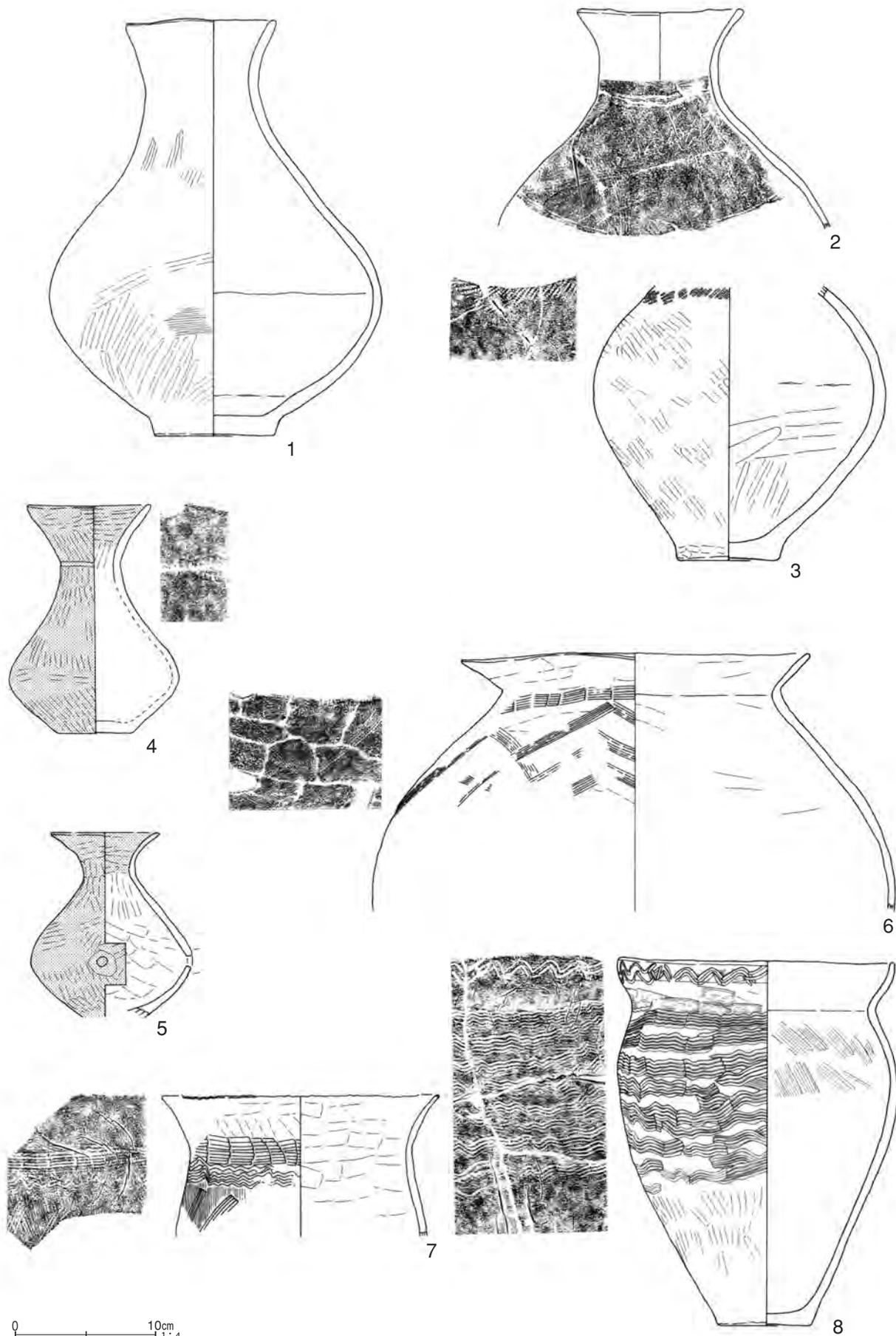
57・58－137・138グリッドに位置する。北東隅の調査区との境で1号土坑、北西隅で6号溝跡にそれぞれ壁の上位を切られている。また東壁中央は2号土器棺墓、南東隅は時期不明のピットに切られている。北壁中央付近は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸は5.15m程、短軸は4.24mを測り、他に比べて小型の部類に入る。平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-4°-Wを指し、ほぼ東西南北に軸が合う。確認面からの深さは0.4m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は4層（1～4層）確認された。混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡や貯蔵穴、壁溝等は確認されず、伴う施設は小さいピット2基のみである。P1は床面ほぼ中央よりやや北側、P2は東壁沿い中央付近に位置し、いずれも支柱穴とは考えにくい。覆土は図示できなかつたが、いずれも柱痕跡は認められなかつた。

出土遺物（第17・18図）は、弥生土器壺（1～5・9・15～25）、甕（6～8・10・11・26～42）、高坏（12・13）、ミニチュア土器（14）、磨製石斧（43）がある。床面直上から残存状態の良好なものが多数出土した。破片の大半は、覆土からの検出である。

1～5・9・15～25は壺。1は残存状態が良好である。口縁部は外反しながら小さく開く。頸部はすぼまるが太い。頸部以下は肩が張らず、無花果状を呈する。最大径を胴部中段に持つ。器壁が厚い。内外面ともに磨耗が著しいため、ほとんど図示できなかつたが、無文である。外面及び口縁部から頸部までの内面は、ヘラミガキ調整が施されており、胴部中段外面にはヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。胴部中段及び下部内面に輪積痕が残る。2は口縁部から胴上部までの部位。口縁部が逆ハの字に開く。頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肩がやや張り、胴部に向かって大きく膨らむ。文様は磨耗が著しいため定かではないが、口縁部は無文、頸部は5本一単位の直線文、肩部は波状文が2段巡る。胴上部は斜格子文状を呈する文様が描かれ、下位に直線文が巡る。口縁部外面及び内面の調整は不明である。3は肩部以上を欠くが、残存状態は良好である。胴部は球形を呈する。文様は肩部に無区画のLR単節縄文帯が施文されているのみである。以下は無文でヘラミガキ調整が施されている。内面は上位が磨耗顕著により不明であるが、中段付近はヘラナデ、下部はヘラミガキ調整が施されている。4・5は小型の壺。



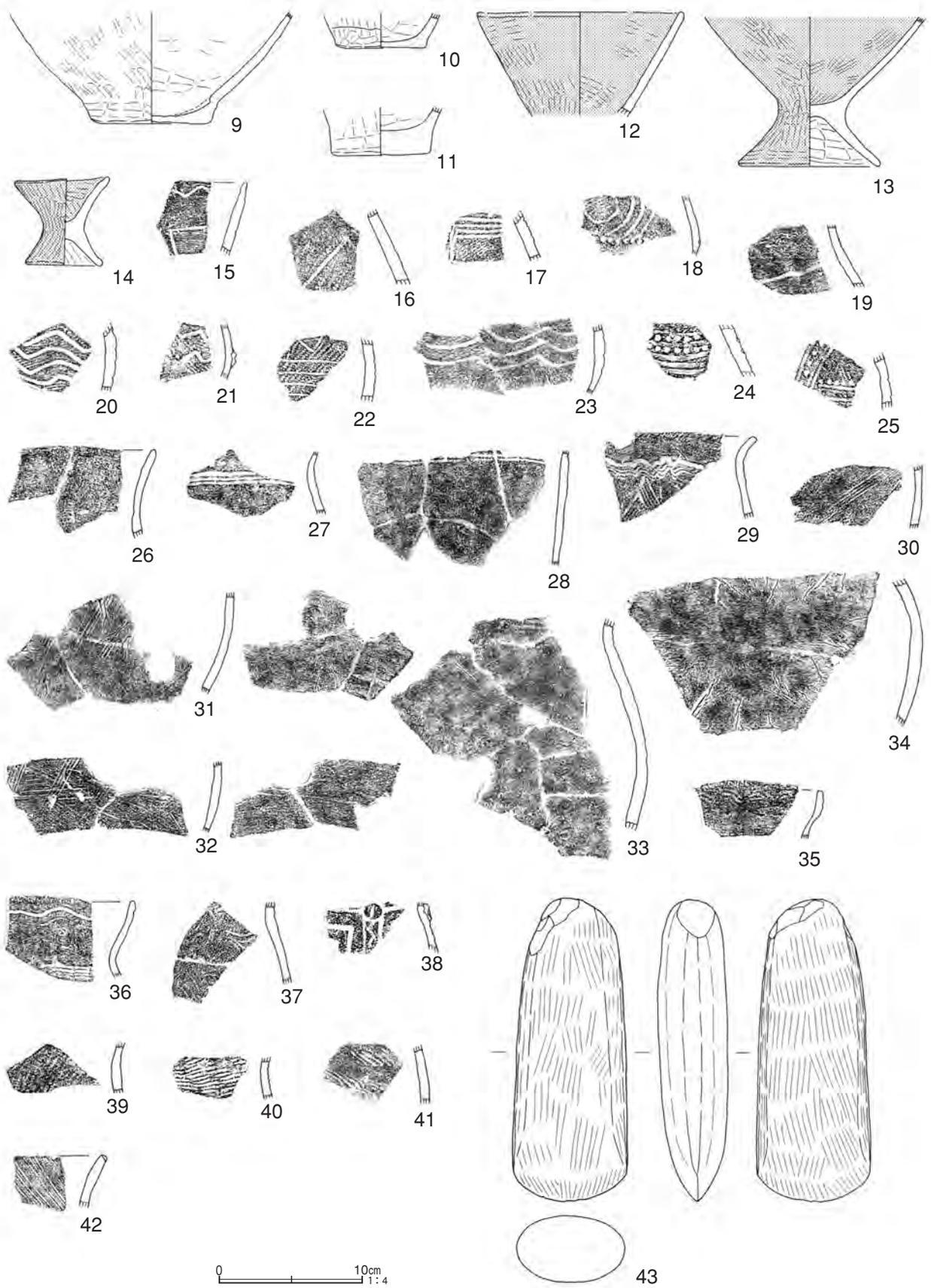
第 17 图 第 4 号住居跡出土遺物 (1)

いずれも外面及び口縁部から頸部までの内面に赤彩が施されている。4はほぼ完形。口縁部はやや外反しながら開き、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肩部以下は無花果状を呈する。文様は頸部にやや太い平行沈線が巡るのみである。外面及び内面の赤彩箇所は、ヘラミガキ調整が施されている。頸部内面以下は計測不可能であり、調整不明である。5は底部を欠くが、残存状態が比較的良好である。口縁部が外反しながら大きく開き、頸部はすぼまり、肩部以下は無花果状を呈する。無文で外面及び口縁部から肩部までの内面はヘラミガキ、胴上部内面以下はヘラナデ調整が施されている。胴部中段に注口が付くが、欠損しており、孔のみ認められた。9は胴下部から底部までの部位。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。

15は口縁部から頸部にかけての破片。波状沈線下に無文部を挟んで四角文が描かれており、区画内に横位のハケメが充填されている。外面無文部及び内面は、横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。16は鋸歯文、17は重四角文が描かれた肩部片。16は鋸歯文区画下、17は重四角文内にL R単節縄文が充填されている。内面調整は、いずれも横位のヘラナデである。18は渦巻文の描かれた胴上部片。渦巻文下に半円形の刺突列が巡り、渦巻文内及び刺突列下にL R単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラナデである。19は波状文が巡る肩部片。分かりづらいが、上位に5本一単位で乱雑に巡る。以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。20～22は波状沈線、23は連弧文が巡る胴部中段の破片。20はL R単節縄文地にやや太い波状沈線が複数巡る。21はR L単節縄文地に2条の波状沈線が等間隔に巡る。下位の波状沈線に円形刺突が1つ施されたボタン状貼付文が付く。22はL R単節縄文地に振りの大きい波状沈線と複数の平行沈線が等間隔に巡る。23は太い連弧文がやや乱雑に描かれている。以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。16～23の内面調整は、19のみ横・斜位、その他は横位のヘラナデである。24・25は弥生時代中期中頃池上式に相当する破片。24は肩部片、25は胴上部片である。24は太い平行沈線が複数巡り、上位に円形刺突列が2列伴う。25は重三角文に沿って半円形の刺突列が刻まれている。内面調整は24が横位、25は斜位のヘラナデである。

6～8・10・11・26～42は甕。6～8は櫛歯状工具で文様が描かれている。櫛歯の単位は4～5本である。6は大型甕の口縁部から胴部中段までの部位。口縁部はくの字に大きく開き、頸部はすぼまる。胴部は大きく膨らみ、最大径を中段に持つ。文様・調整は磨耗が著しいため、大半が確認できなかったが、文様は頸部に簾状文、胴部は斜格子文と縦位の羽状文が合体した文様が描かれている。調整は内外面ともにヘラナデである。7は口縁部から胴上部までの部位。口縁部は緩やかに外反し、頸部がすぼまり、胴部はやや膨らむ。文様は口縁端部に指頭圧痕、頸部は乱雑な簾状文2段と波状文が巡り、胴上部は横位の羽状文が間隔を空けて施文されている。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラナデが施され、胴上部外面は羽状文施文前に施された縦位のハケメ調整が明確に残る。8はほぼ完形。口縁部は受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は膨らみが小さく、最大径を胴上部に持つが、口径とほとんど変わらない。文様は頸部及び胴下部以外に施文されている。口縁部は2本一単位のやや振りの大きい波状文、胴上部以下は5本一単位の振りの小さい波状文が乱雑に8～9段巡る。頸部外面の無文部はハケメ、胴下部はヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、磨耗が著しいため図示できない箇所が多いが、確認できた胴上部はハケメ調整である。胎土に白雲母を多量含む。

10・11は底部。10は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、11は内外面ともにヘラナデ調整が施され



第 18 图 第 4 号住居跡出土遺物 (2)

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(10.8)	30.25	8.7	ABDEHIN	灰白色	B	80%	胴部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	(12.0)	(15.7)	—	ABDHN	灰黄色	B	口~胴 80%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	—	(19.9)	7.4	ABCIN	にぶい橙色	B	肩~底 100%	内外面所々磨耗。
4	弥生土器 壺	8.85	16.5	5.4	ABDI	灰白色	B	ほぼ完形	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	(7.8)	(13.4)	—	ABIKN	にぶい橙色	B	口~胴 90%	内外面赤彩、ほぼ剥落。胴部注口欠。
6	弥生土器 甕	(25.0)	(18.7)	—	ABHN	橙色	B	口~胴 40%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	(20.0)	(10.3)	—	ABHIKN	灰褐色	B	口~胴 20%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 甕	19.8	26.6	6.7	ABCIKN	暗褐色	B	ほぼ完形	内面大半、外面下位磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	(7.9)	8.4	ABHIKN	淡黄色	B	胴~底 50%	内外面磨耗、底部内面剥離顕著。
10	弥生土器 甕	—	(2.4)	6.3	ABDI	灰褐色	B	底部 70%	外面輪積痕有。
11	弥生土器 甕	—	(3.4)	6.9	ABDIKM	にぶい橙色	B	底部 90%	外面磨耗顕著。
12	弥生土器高坏	(14.5)	(7.3)	—	ABDHIJK	にぶい赤褐色	B	口~坏 20%	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
13	弥生土器高坏	—	(10.6)	9.9	ABIK	赤色	B	坏~脚 70%	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
14	弥生土器ニナフ	6.7	6.4	5.4	ABHIK	にぶい赤褐色	B	90%	内外面赤彩、大半剥落。所々磨耗。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	褐灰色	B	口~頸部片	
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKM	浅黄色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	浅黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJN	橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIMN	灰白色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 壺	—	—	—	ABDN	にぶい褐色	B	胴中段片	
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHMN	にぶい橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい赤褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIN	にぶい赤褐色	B	口~頸部片	外面磨耗顕著。
27	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸~胴上片	胴上部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 甕	—	—	—	ADEIN	明赤褐色	B	頸~胴中片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口~胴上片	内外面やや磨耗。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABIMN	灰褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	にぶい褐色	B	胴中~下片	内外面やや磨耗。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABI	灰黄褐色	B	胴中~下片	内面やや磨耗。
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	橙色	B	頸~胴中片	内外面磨耗顕著。
34	弥生土器 甕	—	—	—	ADEIKN	橙色	B	胴上~中片	内外面やや磨耗。
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHK	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
36	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDIKN	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	
37	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	にぶい褐色	B	頸~胴上片	内外面磨耗顕著。
38	弥生土器 甕	—	—	—	ABCKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
39	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	にぶい黄褐色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
40	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIN	褐色	B	頸部片	内面磨耗顕著。
41	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
42	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIMN	灰黄褐色	B	口~頸部片	内面磨耗顕著。
43	磨製石斧	最大長 21.3 cm、最大幅 8.0 cm、最大厚 4.85 cm。重量 (1,370)g。基部一部欠。緑色岩製。							

ている。10は外面に輪積痕が残る。甕としたが、壺の可能性もある。

26~37は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。26~28は頸部に簾状文が巡る破片。26は口縁部から頸部にかけて、27は頸部から胴上部にかけて、28は頸部から胴部中段にかけての破片である。26は口縁部が無文であるが、磨耗が著しいため調整不明である。胎土が粗い。27は簾状文上下が無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。28は簾状文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。26~28の内面調整は、26・28が横位のヘラミガキ、27は磨耗顕著により不明である。27は胴上部内面に輪積痕が残る。29~34は胴部に斜格子文が描かれた破片。いずれも櫛歯が細い。29は口縁部から胴上部にかけて、30は胴部中段、31・32は胴部中段から下部にかけて、33は頸部から胴部中段にかけて、34は胴上部から中段にかけての破片である。29は口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部は乱雑な波状文が巡る。口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されて

いる。30～32は分かりづらいが、斜格子文施文前に施された横位ないし斜位のハケメ調整が残る。33は頸部に簾状文が巡る。34も分かりづらいが、3本一単位の斜格子文下に横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。29～34の内面調整は、29・33が横位のヘラミガキ、30・34は横・斜位のヘラナデ、31・32は横・斜位のハケメである。35～37は波状文が描かれた破片。35・36は口縁部から頸部にかけて、37は頸部から胴上部にかけての破片である。35は分かりづらいが、口縁端部にRL単節縄文が施文され、口縁部は2本一単位の波状文が巡る。頸部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。36は口縁端部にLR単節縄文が施文され、分かりづらいが、口縁部は2本一単位の波状文が巡る。波状文下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されており、頸部に簾状文が巡る。37も分かりづらいが、胴上部に乱雑な波状文が複数巡る。35～37の内面調整は、35・36が横位、37は横・斜位のヘラミガキである。

38はコの字重ね文が描かれた胴上部片。コの字重ね文間頂点に縦位の短沈線が施されたボタン状貼付文が付き、下に波状沈線が垂下する。内面調整は、横位のヘラナデである。

39～41は縄文の施文された破片。39・40は頸部片、41は胴上部片である。縄文は39・40がLR、41はRL単節縄文である。内面調整は、39・41が横位、40は横・斜位のヘラナデである。

42は弥生時代中期中頃池上式に相当する口縁部から頸部にかけての破片。流れ込み。口縁端部に刻みが施され、外面は横位の羽状文が密に描かれている。内面調整は、横位のヘラナデである。

12・13は高坏。12は口縁部から坏部までの部位。身が深く、口縁部は逆ハの字に開く。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。13は坏部から脚部までの部位。坏部がやや内湾し、短い脚部は緩やかに開く。外面及び坏部内面はヘラミガキと赤彩、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。

14は高坏を模倣したミニチュア土器。ほぼ完形。12・13同様、外面及び坏部内面にヘラミガキと赤彩、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。

43は大型の磨製石斧。全長21.3cmを測る榎田型の太形蛤刃石斧である。基部がやや欠損する。基部以外、全面が丁寧に磨かれており、丸みを帯びる。刃部先端に刃こぼれがほとんど認められない。緑色岩製。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

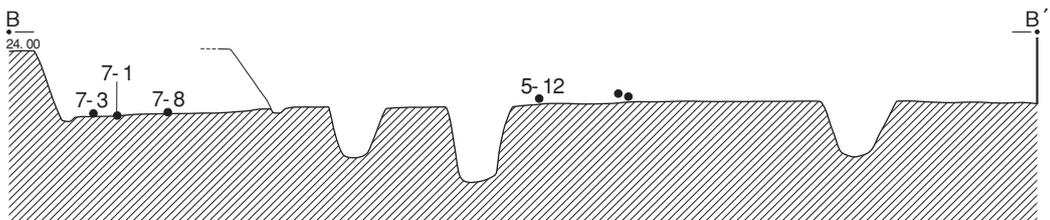
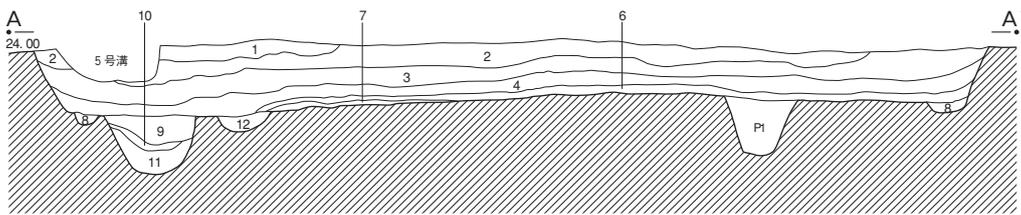
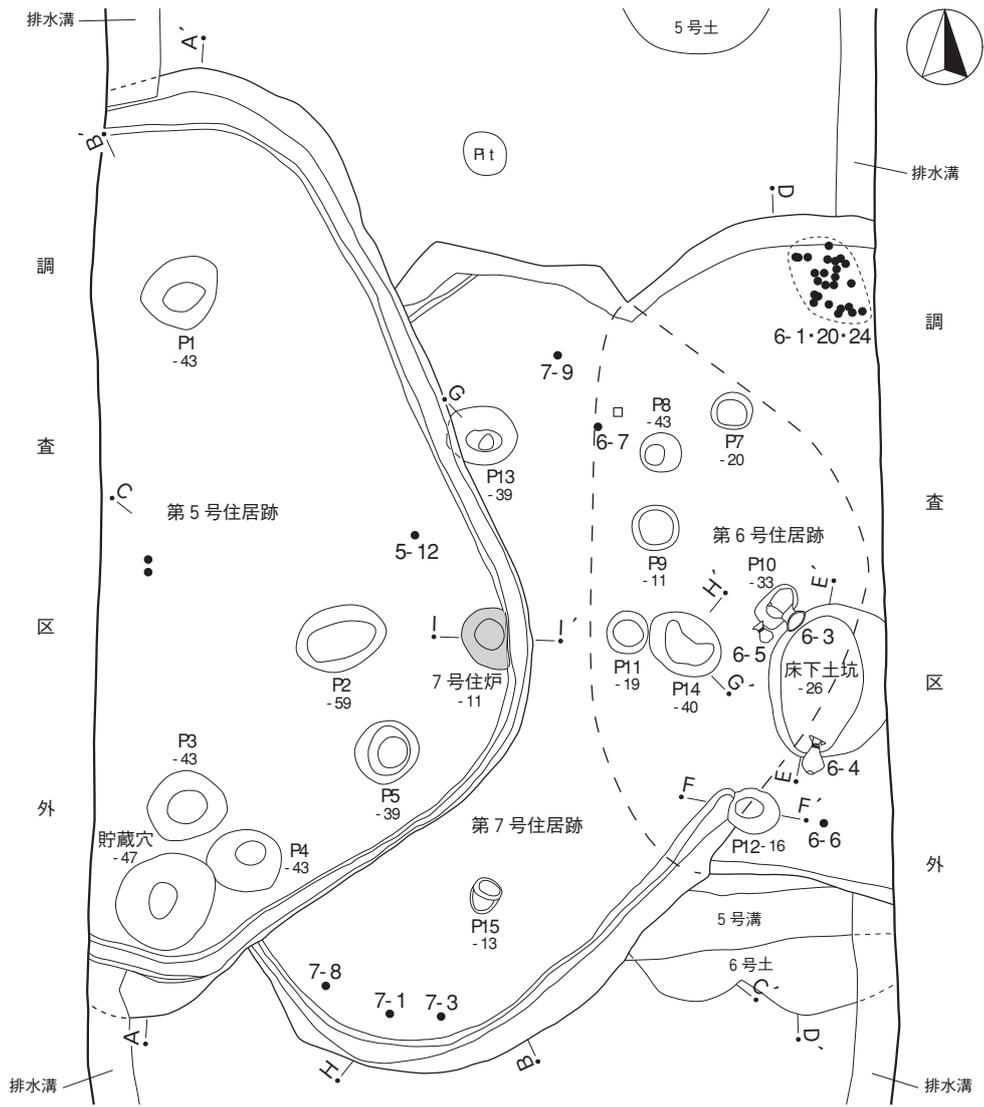
第5号住居跡（第19・20図）

58・59-135・136グリッドに位置する。6・7号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が7号住居跡を切っている。6号住居跡とは直接的な切り合い関係にないが、近接することから時期差を持ち、出土遺物の比較等から本住居跡がやや古いと思われる。南西隅では東西に走る5号溝跡に壁及び覆土上位を切られており、東側半分は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸となる南北が6.2m、短軸となる東西はおそらく5m程を測る。平面プランは隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-24°-Wを指すと思われる。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面は中央付近が周囲よりもやや高くなっていた。覆土は8層（1～8層）確認された。混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは5基検出された。P1～3は支柱穴と思われ、P4・5は出入口に関連するものと思われる。覆土を図示できたものは少ないが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

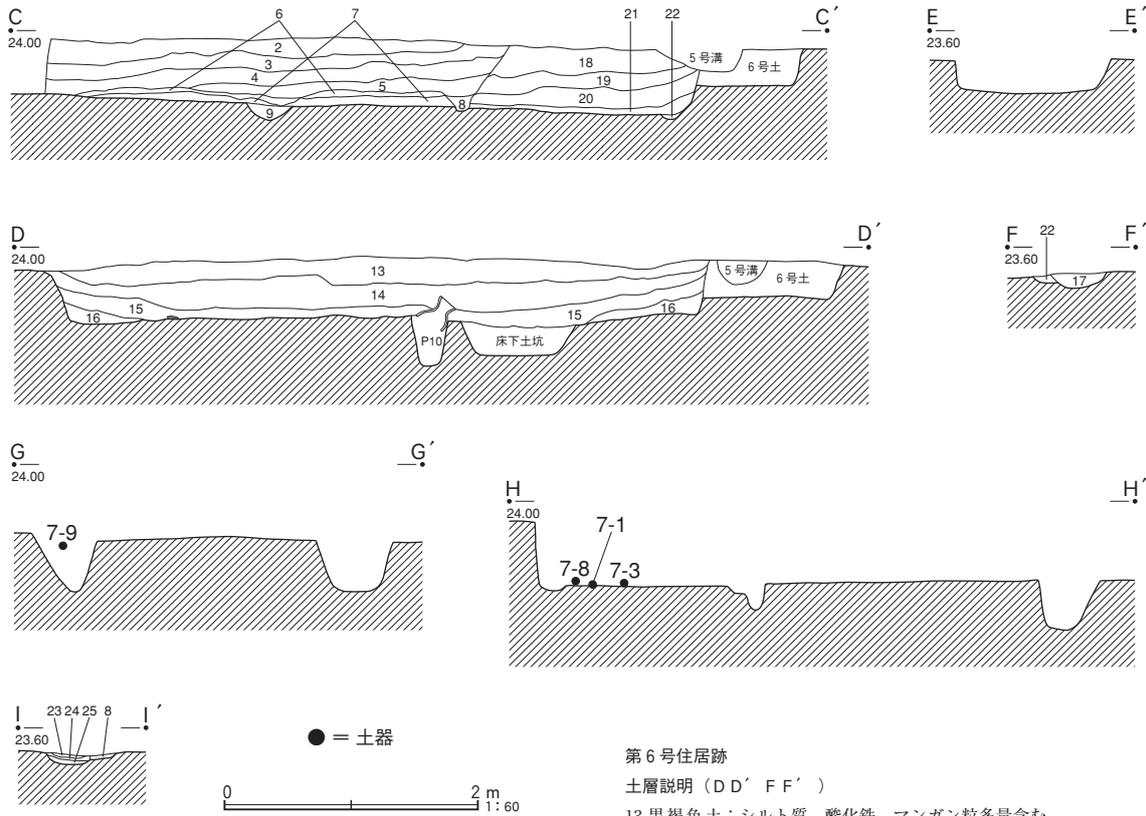
壁溝は検出された範囲内を全周する。幅は0.25m前後が主体となり、床面からの深さは0.07m程を測る。南東隅で7号住居跡の炉跡を切っている。



● = 土器 □ = 石器・礫

0 2 m 1:60

第19図 第5~7号住居跡(1)



第5号住居跡

土層説明 (A A' C C')

- 1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 4 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。3層より暗い。
- 5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。3・4層より明るい。
- 6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物微量含む。
- 7 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒、炭化物少量含む。床張替。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 8 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 9 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒、炭化物少量含む。
- 10 炭化物層：酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 11 灰色粘土：酸化鉄、マンガン粒、灰白色粒・ブロック少量含む。
- 12 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。

第6号住居跡

土層説明 (D D' F F')

- 13 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 14 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 15 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。14層より明るい。
- 16 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。15層より明るい。
- 17 灰 色 土：シルト質。黒色粒、酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。

第7号住居跡

土層説明 (C C' I I')

- 18 淡黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 19 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 20 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。19層より暗い。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 21 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒、炭化物少量含む。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 22 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 23 焼 土 層
- 24 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒、焼土粒少量含む。
- 25 灰白色土：シルト質。上層に炭化物が帯状に薄く堆積。

第20図 第5～7号住居跡 (2)

貯蔵穴は南西隅から確認された。径0.75m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.47mを測る。覆土中層で炭化物層 (10層) が確認された。

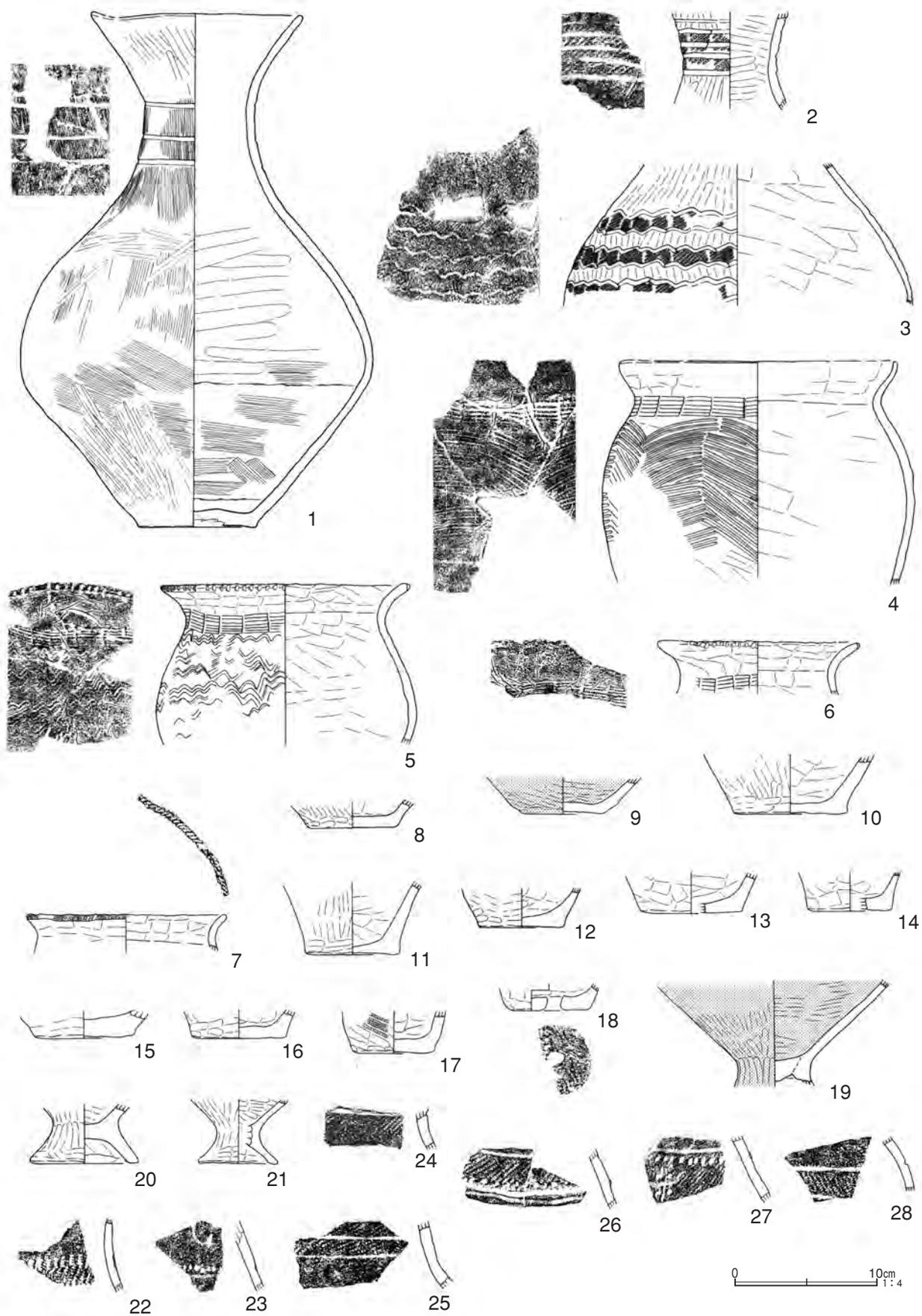
炉跡は確認されなかった。

出土遺物 (第21・22図) は、弥生土器壺 (1～3・8・22～39)、広口壺 (9)、甕 (4～7・10～17・40～60)、甑 (18)、高坏 (19～21・61) がある。床面直上から検出されたものは少なく、大半が覆土からの検出である。残存状態の良好な1は、ピット1から検出されたが、この他にもピットや貯蔵穴から検出されたものがある。

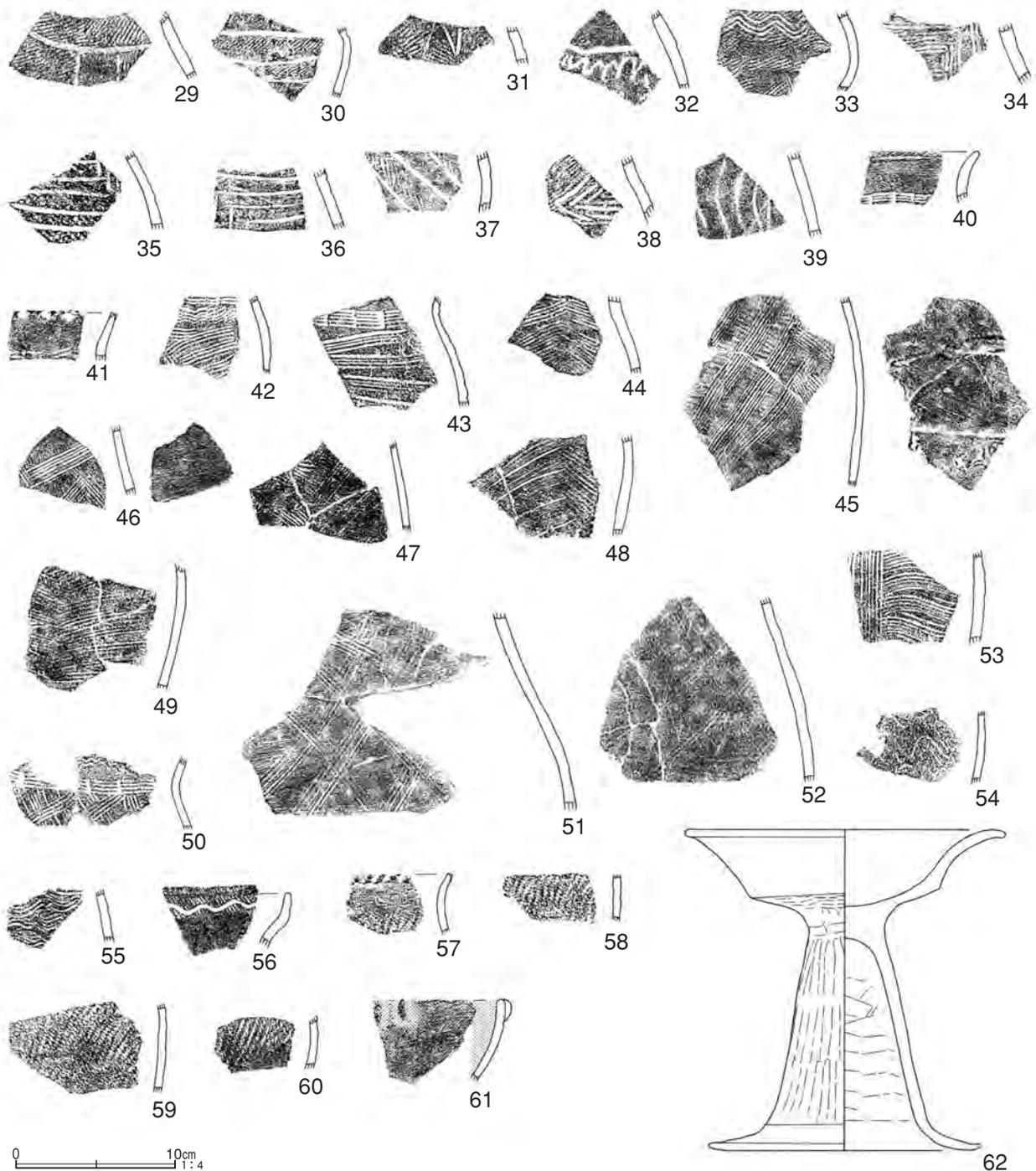
なお、古墳時代の土師器高坏（62）も検出されており、覆土中に古墳時代の遺構が存在した可能性があるが、詳細については不明と言わざるを得ない。

1～3・8・22～39は壺。1は残存状態の良好な壺。口縁部は逆ハの字に大きく開き、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肩がやや張り、胴部は球形を呈するが、中段よりやや下位に最大径を持ち、無花果状を呈する。文様は頸部に3条の平行沈線が等間隔に巡るのみである。外面の調整は口縁部と肩部、胴下部にヘラミガキが施されているが、頸部や胴部中段付近はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が残る。内面は口縁部から肩部にかけて磨耗が著しいため不明であるが、胴上部はヘラナデ、胴下部はハケメ調整が施されている。胴部中段及び下部に輪積痕が残る。2は中段がすぼまる頸部。5条の平行沈線がほぼ等間隔に巡り、最上位の沈線のみ他に比べて細い。最上位の細沈線を除く沈線間にL R単節縄文が施文されている。外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。3は肩部から胴部中段までの部位。肩の張りが弱く、胴部中段まで緩やかに下る。文様はL R単節縄文を充填した2条の波状沈線が等間隔に複数巡る。外面無文部はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。8は底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。壺としたが、甕の可能性もある。

22・23は刺突列が巡る破片。22は頸部から肩部にかけての破片。横位のヘラミガキ調整が施された無文部下に4本一単位の簾状文風の刺突列が巡り、下にL R単節縄文が施文されている。23は肩部片。弱い段下に半円形の刺突列が巡り、下に平行沈線とL R単節縄文が施文されている。段上は舌状文と思われる文様が描かれている。22・23の内面調整は、22が横位のヘラミガキ、23は横位のヘラナデである。24～30は平行沈線と縄文が施文された破片。24～29は肩部から胴上部までに収まる破片、30のみ胴部中段の破片である。24は平行沈線下にL R単節縄文が施文されている。縄文下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。25は複数巡る平行沈線間にL R単節縄文が充填されている。以下は無文で縦位のヘラミガキ調整が施されている。26は半円形の刺突列が刻まれた弱い段の上下に平行沈線が巡り、上は平行沈線と刺突列間にL R単節縄文が施文されている。27は平行沈線下に半円形の刺突列が巡り、下はL R単節縄文地に2本一単位の直線文が垂下し、両脇に刺突列が刻まれている。28は横位のヘラミガキ調整が施された無文部下にR L単節縄文と赤彩が施された平行沈線2条が巡る。29は無節L地に太い平行沈線が巡り、下に2条の沈線が垂下するが、垂下沈線間のみ無文となっている。30は等間隔に巡る複数の平行沈線間にL R単節縄文が充填されている。最下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。24～30の内面調整は、24が横位、25は横・斜位のヘラミガキ、26～30は横位のヘラナデである。31は鋸歯文が描かれた胴上部片。鋸歯文区画下にL R単節縄文が充填されている。内面調整は、横位のヘラナデである。32・33は波状文が描かれた破片。32は胴上部片、33は胴部中段の破片である。32は太い平行沈線下に振りの大きい波状文が乱雑に巡る。上位は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。33はL R単節縄文地に4本一単位の波状文が上位に巡る。32・33の内面調整は、ともに横位のヘラナデである。34～36は重四角文が描かれた破片。34・36は肩部片、35は胴上部片である。34は2本一単位の櫛歯で描かれている。35は地文にR L単節縄文が施文されている。36は分かりづらいが、上位に半円形の刺突列が巡る。34～37の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。37・38は重三角文が描かれた破片。37は胴部中段の破片、38は胴上部片である。37は沈線間にR L単節縄文施文部と無文部を交互に配置している。38は地文にL R単節縄文が施文されている。37・38の内面調整は、ともに横位のヘラナデである。



第 21 图 第 5 号住居跡出土遺物 (1)



第22図 第5号住居跡出土遺物(2)

39はフラスコ文が描かれた胴上部片。沈線間が広い。内面調整は、横位のヘラナデである。

9は広口壺の底部。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。広口壺としたが、鉢の可能性もある。

4~7・10~17・40~60は甕。4~6は櫛歯状工具で文様が描かれており、頸部に簾状文が巡る。4・5は口縁部から胴部中段付近までの部位。4は口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は中段よりやや上が膨らみ、最大径を上位に持つが、口径とあまり変わらない。頸部以外の文様は、胴部に縦位の羽

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(15.0)	36.8	8.4	ABIJN	灰褐色	B	70%	胴部内面輪積痕有。内面磨耗顕著。P1出土。
2	弥生土器 壺	—	(6.95)	—	ABCGHIKN	灰褐色	B	頸部 30%	内外面やや磨耗。
3	弥生土器 壺	—	(10.15)	—	ABDEHK	にぶい黄橙色	B	肩～胴 25%	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 甕	(19.8)	(15.4)	—	ABHI	黒褐色	B	口～胴 40%	内面磨耗顕著。
5	弥生土器 甕	(17.7)	(11.45)	—	ABIKN	褐色	B	口～胴 30%	内外面所々磨耗。
6	弥生土器 甕	(14.4)	(3.7)	—	ABEHKN	浅黄橙色	B	口～頸 25%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	(14.2)	(2.65)	—	AGHIK	黒褐色	B	口～頸 25%	内外面やや磨耗。
8	弥生土器 壺	—	(1.9)	6.2	ABCGHI	灰褐色	B	底部 50%	内面磨耗顕著。P2出土。
9	弥生土器 大口壺	—	(2.6)	5.8	ABDHI	灰白色	B	底部 60%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
10	弥生土器 甕	—	(4.2)	8.1	ABGIK	黒褐色	B	底部 70%	内外面所々磨耗。
11	弥生土器 甕	—	(5.2)	(6.7)	ABCDGIK	灰黄褐色	B	胴～底 40%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	—	(2.85)	6.1	ABEHI	灰褐色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 甕	—	(2.85)	(7.2)	ABHIK	黄灰色	B	底部 40%	外面磨耗顕著。
14	弥生土器 甕	—	(2.8)	(5.9)	ABDGH	にぶい褐色	B	底部 40%	外面磨耗顕著。
15	弥生土器 甕	—	(1.95)	7.0	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 甕	—	(2.1)	6.7	ABDHI	にぶい褐色	B	底部 55%	
17	弥生土器 甕	—	(3.0)	5.8	ABEHIKN	暗灰黄色	B	底部 80%	内面輪積痕有。
18	弥生土器 甗	—	(1.9)	5.6	ACHIKN	黒褐色	B	底部 60%	底面焼成前穿孔。内外面磨耗顕著。
19	弥生土器 高坏	—	(7.6)	—	ABDH	灰白色・赤色	B	坏～接 60%	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
20	弥生土器 高坏	—	(4.2)	7.7	ABDEGIK	にぶい橙色	B	接～脚 90%	脚部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
21	弥生土器 高坏	—	(4.6)	(5.6)	ABEJKN	にぶい橙色	B	接～脚 25%	脚部内面輪積痕有。貯蔵穴出土。
22	弥生土器 壺	—	—	—	AHIJK	黒褐色	B	頸～肩部片	
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKM	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	外面やや磨耗。P5出土。
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	オリーブ黒色	B	肩～胴上片	内外面やや磨耗。
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDKM	浅黄橙色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIK	褐灰色	B	胴上部片	外面縄文施文部赤彩。内面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIK	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。P4出土。
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。P4出土。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABCK	にぶい黄色	B	胴上部片	
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKM	灰黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。P5出土。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEI	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDJKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIJN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIK	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
40	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIK	灰黄褐色	B	口～頸部片	
41	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
42	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	頸～胴上片	
43	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	褐灰色	B	頸～胴上片	
44	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKM	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
45	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	胴上～中片	内面輪積痕有。内面磨耗顕著。
46	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	黄灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
47	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
48	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
49	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴中段片	
50	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
51	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	褐灰色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。No.52 と同一個体。
52	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	褐灰色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。No.51 と同一個体。
53	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
54	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIK	浅黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
55	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	
56	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
57	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	赤褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
58	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
59	弥生土器 甕	—	—	—	AHIN	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
60	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
61	弥生土器 高坏	—	—	—	ABDIK	赤色	B	口縁部片	内外面赤彩、内面ほぼ剥落。口縁部突起有。
62	土師器 高坏	20.2	20.3	17.0	AEGKN	橙色	B	80%	内外面磨耗顕著。

状文が密に描かれている。櫛歯の単位は5本である。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。5は口縁部が外反し、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。胴部は中段が膨らみ、球形を呈する。最大径を胴部中段に持つが、口径とあまり変わらない。頸部以外の文様は、口縁端部に刻みが施され、胴部は乱雑な波状文が複数巡る。櫛歯の単位は6本である。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。6・7は口縁部から頸部までの部位。6は口縁部が外反し、頸部はすぼまる。頸部以外の文様は、口縁端部に刻みが施されている。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。器壁が厚い。7は短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文されているのみである。外面無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。

10～17は胴下部から底部までの部位。10～12・16・17は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。17は胴下部の一部にR L単節縄文が施文されており、内面に輪積痕が残る。13～15は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。甕としたが、17以外は壺の可能性もある。

40～55は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。40・41は口縁部から頸部にかけての破片。頸部に簾状文が巡る。40は口縁端部にL R単節縄文、41は指頭圧痕が施されている。40は内面を図示しなかったが、口縁部外面の無文部も含め、横位のハケメ調整が施されている。41は口縁部外面の無文部が横・斜位、内面は横位のヘラミガキ調整が施されている。42～49は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。やや間隔を空けるものと密に描かれるものがあり、乱雑なものが多い。42・43は頸部から胴上部にかけての破片、44～49は胴上部から中段までに収まる破片である。42・43は頸部に簾状文が巡り、42は簾状文下に振りの小さい波状文も巡る。45・46は羽状文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。47～49は櫛歯が細い。42～49の内面調整は、42・44・47が横位、43・48は横・斜位、49は斜位のヘラミガキ、45・46は斜位のハケメである。45は内面に輪積痕が残る。50～52は胴部に斜格子文が描かれた破片。50は頸部から胴上部にかけての破片。頸部に簾状文、上に振りの小さい乱雑な波状文が巡る。51・52は胴上部片で同一個体。斜格子文はやや乱雑であり、文様施文前に施された斜位のハケメ調整が全面に残る。50～52の内面調整は、50が横位、51・52は斜位のヘラミガキである。53～55は胴部に波状文が描かれた胴部中段の破片。53は6本一単位の直線文が2条垂下し、脇に振りの緩い波状文が複数巡る。54は振りの大きい波状文、55は振りの小さい波状文がやや乱雑に複数巡る。53～55の内面調整は、53が横位、55は横・斜位のヘラミガキ、54は横位のヘラナデである。

56～60は縄文の施文された破片。56・57は口縁部から頸部にかけて、58～60は胴部中段の破片である。縄文は56がR L、57～59はL R単節縄文、60は無節Lである。56は端部も含む口縁部に縄文が施文され、振りの小さい波状沈線が巡る。頸部は無文で横位のハケメ調整が施されている。57は口縁端部に刻みが施され、横位のハケメ調整が施された口縁部下の頸部に縄文が施文されている。57～59は胎土が粗い。56～60の内面調整は、56～58が横位のヘラミガキ、59は横・斜位、60は斜位のヘラナデである。

18は甗の底部。内外面ともにヘラナデ調整が施されている。底面に焼成前穿孔がみられた。

19～21・61は高坏。19は坏部から接合部までの部位。坏部は逆ハの字に開く。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。20・21は接合部から脚部までの部位。ともに脚部が短く、外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整が施されており、輪積痕が残る。61は口縁部片。口縁端部に二個一対の突起が付く。内外面ともに横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

62は古墳時代後期の土師器高坏。残存状態が良好である。口縁部が大きく外反し、坏部下位に明確な稜を持つ。脚部が長く、裾は緩やかに外反する。器壁が厚い。口縁部から坏部までは内外面ともに横ナデ、以下の外面は脚部裾までがヘラミガキ、裾は横ナデ、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第6号住居跡（第19・20図）

58-135・136グリッドに位置する。5・7号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が7号住居跡を切り、直接的な切り合い関係にない5号住居跡とは、出土遺物等の比較から本住居跡が新しい。南側では6号土坑を切り、調査区境では壁上位の一部を5号溝跡に切られている。東側半分は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、長軸となる南北が5.4mを測り、短軸となる東西は不明であるが、小型の部類に入る。平面プランは隅丸長方形、主軸方向はN-2°-Wを指し、ほぼ東西南北に軸が揃う。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面は南側がやや低くなるが、概ね平坦であった。覆土は4層（13～16層）確認された。混入物が比較的少なく、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

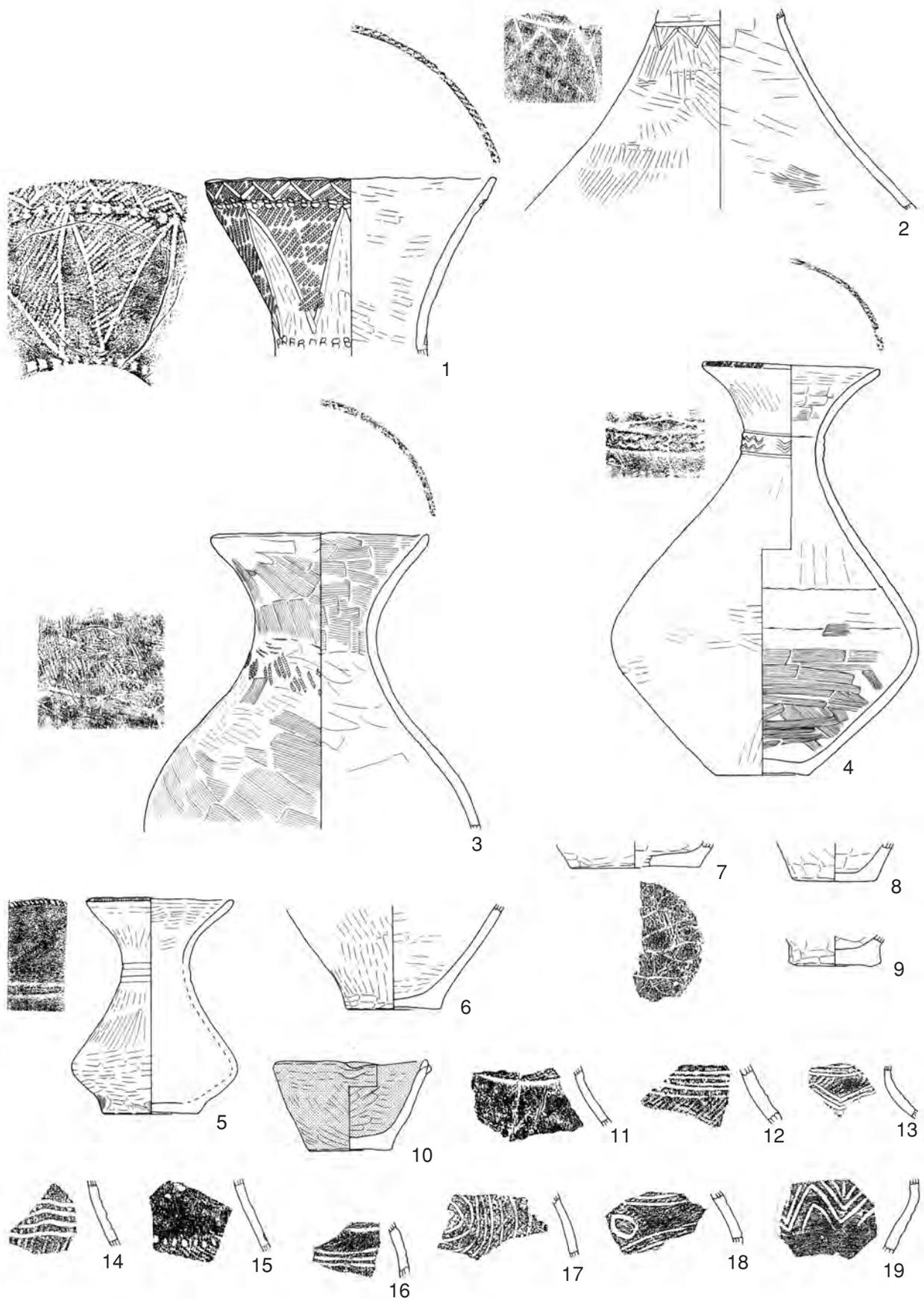
床面中央から南側では、調査区との境で床下土坑が1基確認された。長軸1.31m、短軸1.1m程度の楕円形を呈し、床面からの深さは0.26mを測る。覆土は図示できなかったが、灰色系の単一層であり、上面から残存状態の良好な土器が検出されていることから人為的に埋め戻されたと思われる。

ピットは6基検出された。P7はその位置から主柱穴と思われるが、その他は不規則に配置されており、P8～11の中には7号住居跡に伴うものがあるかもしれない。またP12は径0.35m前後、床面からの深さ0.16mと小さいが、その位置から貯蔵穴の可能性がある。P12以外は覆土を図示できなかったが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

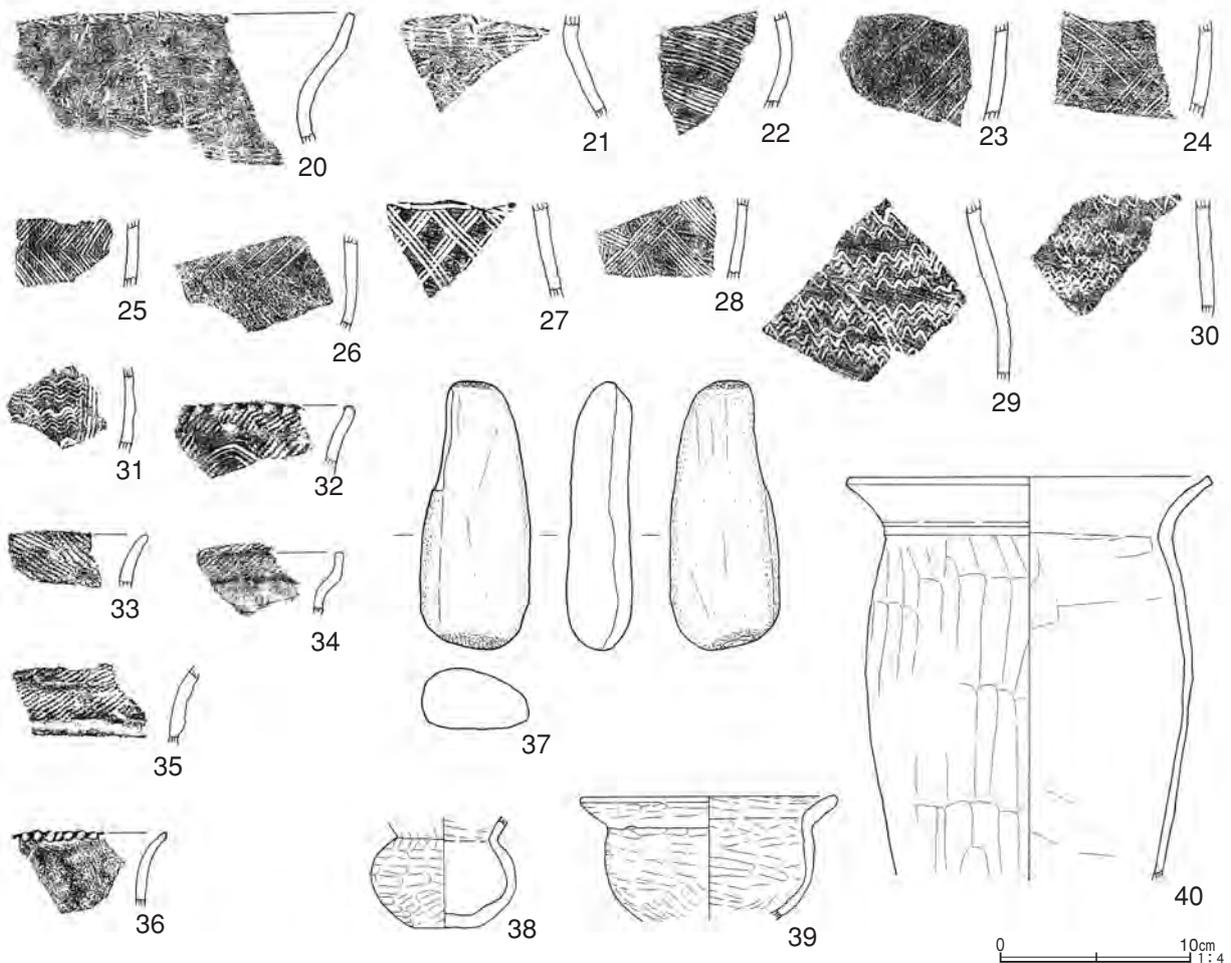
炉跡、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第23・24図）は、弥生土器壺（1～7・11～19）、甕（8・9・20～36）、片口（10）、敲打器（37）がある。他の住居跡に比べると遺物量が少ないが、床面直上から残存状態の良好な壺が出土した。破片等の大半は覆土からの検出である。なお、5号住居跡同様、本住居跡からも古墳時代の土師器小型壺（38）、椀（39）、甕（40）が検出されており、覆土中にこれらの遺物に相当する遺構が存在した可能性があるが、詳細は不明である。

1～7・11～19は壺。1は口縁部から頸部までの部位。口縁部は緩やかに外反し、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。文様は端部も含めた口縁部にL R単節縄文が施文され、山形文が巡る。山形文下は2本一単位の刺突列が巡り、下に縦長で大振りの鋸歯文が描かれ、区画上にL R単節縄文が充填されている。頸部は山形文下に施文されたものと同じ刺突列が巡る。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。2は頸部から胴上部までの部位。頸部から胴上部まで緩やかに広がる。文様は頸部に平行沈線と鋸歯文が描かれているのみである。頸部文様以下は無文でヘラミガキ調整が施されているが、所々にヘラミガキ前に施されたハケメ調整が残る。内面調整はヘラナデが主体となるが、一部ハケメもみられた。3は胴部中段以下を欠くが、残存状態が良好である。口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、頸部はすぼまるが、やや太い。肩がやや張り、胴部は大きく膨らむ。器壁が厚い。文様は頸部にR L単節縄文が乱雑に施文されているのみである。外面無文部の調整はハケメが主体となるが、口縁部はヘラナデ、肩部はヘラミガキが施されている。内面調整は、口縁部から頸部までがハケメ、以下はヘラナデである。4



第 23 图 第 6 号住居跡出土遺物 (1)



第24図 第6号住居跡出土遺物(2)

はほぼ完形。口縁部は外反しながら大きく開き、頸部はすぼまり、直立する。肩の張りが弱く、以下は無花果状を呈し、最大径を胴中段より下に持つ。文様は口縁端部と頸部にのみ施文されており、口縁端部はLR単節縄文、頸部は2条の平行沈線間に波状沈線が2条施文されている。外面無文部の調整は、磨耗が著しいためほとんど図示できなかったが、ヘラミガキである。内面調整は、口縁部上位のみヘラミガキ、以下はハケメが主体となるが、胴上部付近はヘラナデが施されており、輪積痕が残る。5は小型の壺。完形。器形は4に似ているが、全体的に詰まった形状を呈する。文様も4と同じく口縁端部と頸部にのみみられた。口縁端部は刻みが施され、頸部は2条のやや太い平行沈線が巡る。外面無文部の調整は、ヘラミガキであるが、胴下部はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。内面調整は、口縁部がヘラミガキ、頸部以下は計測不可能であった。

6・7は胴下部から底部までの部位。ともに外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。壺としたが、甕の可能性もある。7は底面に木葉痕がみられた。

11~15は肩部片。11はLR単節縄文下に平行沈線が巡る。以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。12は5条の平行沈線下に無節Lと赤彩が施されている。13は3本一単位の直線文下にLR単節縄文が施文され、振りの大きい波状文が巡る。14は無節L地に太くて振りの小さい波状沈線が4条巡る。15は斜位のヘラミガキが施された無文部下に半円形の刺突列が巡り、下にRL単節縄文が施

第7表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(20.6)	(12.7)	—	ABDIKN	淡黄色	B	口～頸 40%	内面大半、外面所々磨耗。
2	弥生土器 壺	—	(14.15)	—	ABDIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴 40%	内外面所々磨耗。
3	弥生土器 壺	15.1	(21.0)	—	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴 90%	内面下位磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	12.3	29.3	6.5	ABIN	橙色	B	ほぼ完形	胴部内面輪積痕有。内面所々、外面大半磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	10.4	15.35	6.8	ABEHIKN	暗褐色	B	完形	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 壺	—	(7.4)	6.6	ABEHIKN	橙色	B	胴～底 50%	内面磨耗顕著
7	弥生土器 壺	—	(1.8)	(9.2)	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	底部 45%	底面木葉痕有。
8	弥生土器 甕	—	(2.8)	6.0	ABDHKN	黒褐色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甕	—	(2.2)	(6.5)	ADHIKN	にぶい橙色	B	底部 45%	外面磨耗顕著。
10	弥生土器片口	10.9	6.3	6.0	BDIM	灰白色	B	ほぼ完形	内外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	外面縄文施文部赤彩。内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKM	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	浅黄色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	黄灰色	B	胴上部片	
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABD	浅黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	橙色	B	胴中～下片	内面やや磨耗。
20	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	口縁部外面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
21	弥生土器 甕	—	—	—	ABHK	にぶい橙色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴中段片	
23	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKMN	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 甕	—	—	—	ABIJKN	黒褐色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
25	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	黒褐色	B	胴中段片	
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIMN	灰黄褐色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
27	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	頸～胴上片	
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴中段片	
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上部片	内面やや磨耗。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	暗褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABHKN	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABDI	灰黄色	B	口縁部片	
34	弥生土器 甕	—	—	—	AIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
35	弥生土器 甕	—	—	—	AGHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	
36	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
37	敲打器	最大長 14.3 cm、最大幅 5.75 cm、最大厚 3.45 cm。重量 (414)g。一部欠。粘板岩製。上下敲打痕有。							
38	土師器小型壺	—	(5.85)	3.4	ABEHJKN	にぶい橙色	B	頸～底 80%	
39	土師器 椀	(13.8)	(6.65)	—	ADEHN	赤褐色	B	口～体 70%	内外面磨耗顕著。
40	土師器 甕	(19.4)	(21.65)	—	ABHN	にぶい橙色	B	口～胴 25%	内面やや磨耗。

文されている。11～15の内面調整は、11が斜位のヘラミガキ、12・14は横・斜位、13は横位、15は斜位のヘラナデである。16～18は胴上部片、19は胴部中段から下部にかけての破片。16は横・斜位のヘラミガキ調整が施された無文部を挟んで上下に平行沈線が複数巡る。17は無節L地にフラスコ文が描かれている。18は地文にLR単節縄文が施文され、上位に平行沈線、下位に弧状を呈する沈線が複数巡り、間に円形文が描かれている。19は重山形文が乱雑に描かれている。下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。16～19の内面調整は、18が斜位、その他は横位のヘラナデである。

8・9・20～36は甕。8・9は底部。いずれも内外面ともにヘラナデ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。

20～31は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。20は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部にRL単節縄文、頸部に簾状文が巡る。口縁部外面の無文部は、横・斜位のヘラミガキ調整が施されており、一部輪積痕が残る。21～23は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。細かい櫛歯でやや間隔を空けて描かれている。21は頸部から胴上部にかけて、22・23は胴部中段の破片。21

は頸部に簾状文が巡る。24～26は横位の羽状文が描かれた胴部中段の破片。細い櫛歯で密に描かれている。27・28は胴部に斜格子文が描かれた破片。27は頸部から胴上部にかけて、28は胴部中段の破片である。27は3本一単位で比較的丁寧に描かれている。頸部は簾状文が巡る。28は櫛歯が細く、乱雑である。29～31は胴部に波状文が描かれた破片。29・30は胴上部片、31は胴部中段の破片である。すべて波状文が乱雑に複数巡るが、30は特に崩れている。31は脇に直線文が垂下する。29は波状文施文前に施された横・斜位のハケメ調整が残る。20～31の内面調整は、20・21・24・27・30が横位、22・25・29は横・斜位、26・28は斜位のヘラミガキ、23のみ横位のヘラナデである。

32～35は縄文の施文された破片。口縁部から頸部までに収まる。縄文は、33のみ無節R、その他はすべてLR単節縄文である。32・33は全面、34・35は口縁部に施文されている。32は口縁端部に刻みが施され、口縁部に3本一単位の振りの大きい波状文が巡る。34は縄文下が無文で横位のヘラミガキ調整が施されており、分かりづらいが、頸部に簾状文が巡る。35は頸部が無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。32～35の内面調整は、すべて横位のヘラミガキ調整であるが、35はやや粗く施されている。

36はほぼ無文の口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部に刻みが施されている。無文部の調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、外面は横・斜位、内面は横位に施されている。

10は片口。ほぼ完形。口縁部から体部はやや内湾しながら立ち上がる。器壁が厚い。片口は1箇所のみ設けられている。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

37は敲打器。一部を欠く。上下に敲打痕がみられた。粘板岩製。

38・39は古墳時代前期、40は古墳時代後期の土師器。38は小型壺、39は椀、40は甕である。38は口縁部を欠く。胴がやや詰まった球形を呈し、底部は若干上げ底である。調整は外面及び口縁部内面がヘラミガキ、頸部以下の内面は計測不可能であったが、ヘラナデ調整が施されている。39は底部を欠く。短い口縁部が大きく開き、体部は膨らまない。最大径を口径に持つ。調整は内外面ともにヘラミガキである。40は胴下部以下を欠く。口縁部がくの字状を呈し、胴部はほとんど膨らまない。最大径を口径に持つ。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。

本住居跡の時期は、5号住居跡より新しい弥生時代中期末と思われる。

第7号住居跡（第19・20図）

58・59-135～137グリッドに位置する。5・6号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が両住居跡に切られており、最も古い。南側では5号溝跡に壁及び覆土上位を切られており、6号土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。

正確な規模は不明であるが、長軸6m、短軸4.8m程を測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-51°-Wを指す。確認面からの深さは0.5m前後を測り、床面は残存箇所が少ないが、ほぼ平坦であった。覆土は確認した箇所では、5層（18～22層）確認された。混入物がやや多いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面ほぼ中央に位置する。重複する5号住居跡の南東隅から確認され、東側を5号住居跡の壁溝に切られている。径0.45m前後の円形を呈すると思われ、床面からの深さは0.11mを測る。覆土は焼土層を含む計3層（23～25層）が確認された。

本住居跡に伴うと思われるピットは、3基（P13～15）検出された。いずれもその位置から支柱穴と

思われる。覆土は図示できなかつたが、いずれも柱痕跡は認められなかつた。なお、6号住居跡でも述べたとおり、ピット8～11には本住居跡に伴うものがあるかもしれない。

壁溝は北壁及び6号住居跡との重複箇所以外を走る。幅は0.3m前後が主体となり、床面からの深さは0.05m程を測る。東壁中央付近の途切れる箇所では、6号住居跡のP12に切られていることが確認された。

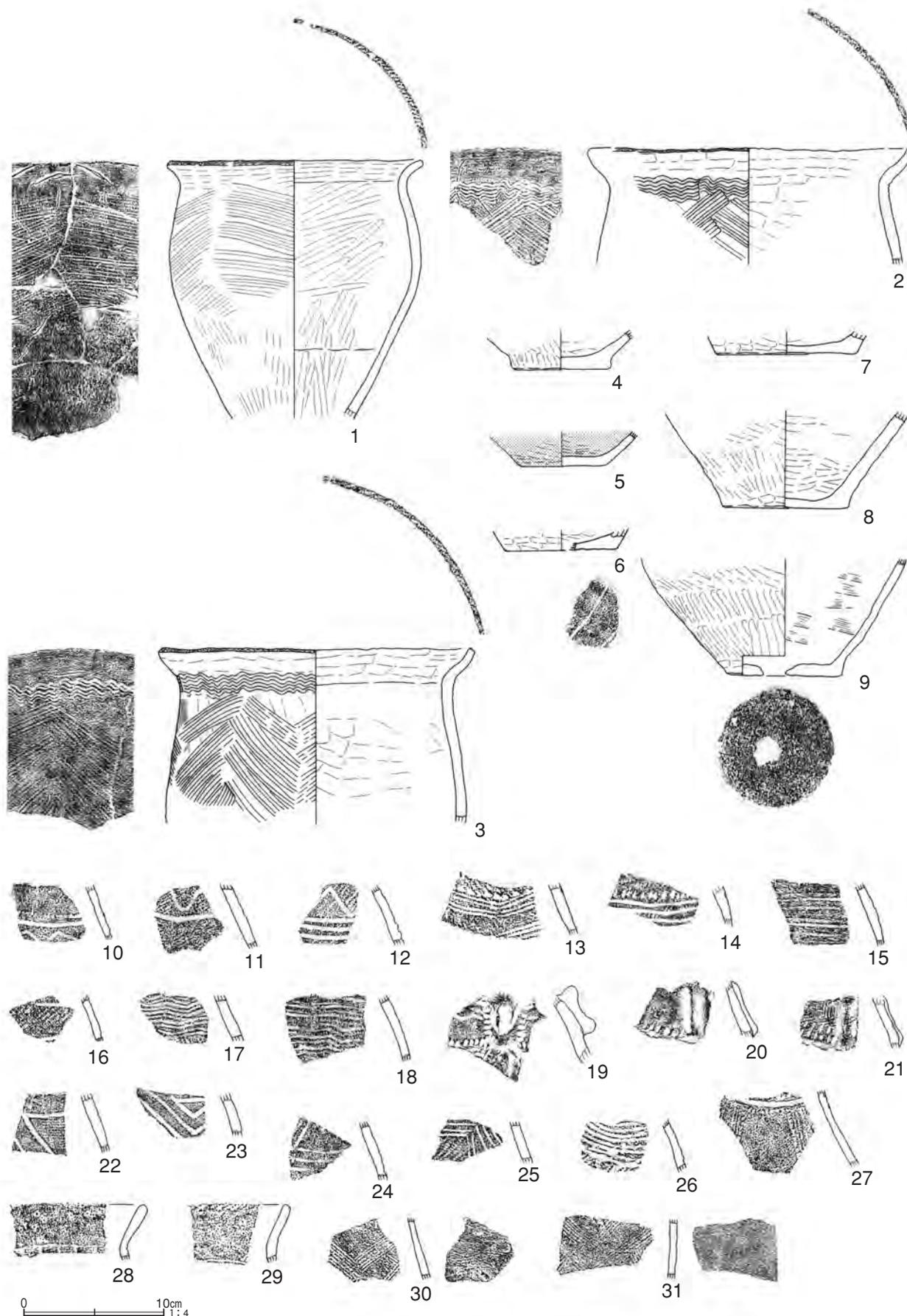
貯蔵穴は確認されなかつた。

出土遺物(第25・26図)は、弥生土器壺(4・10～27)、広口壺(5)、甕(1～3・6～8・28～44)、甑(9)、高坏(45)、筒形土器(46)がある。比較的残存状態の良いものは、北東隅と南西隅の床面直上から検出された。破片はすべて覆土からの検出である。

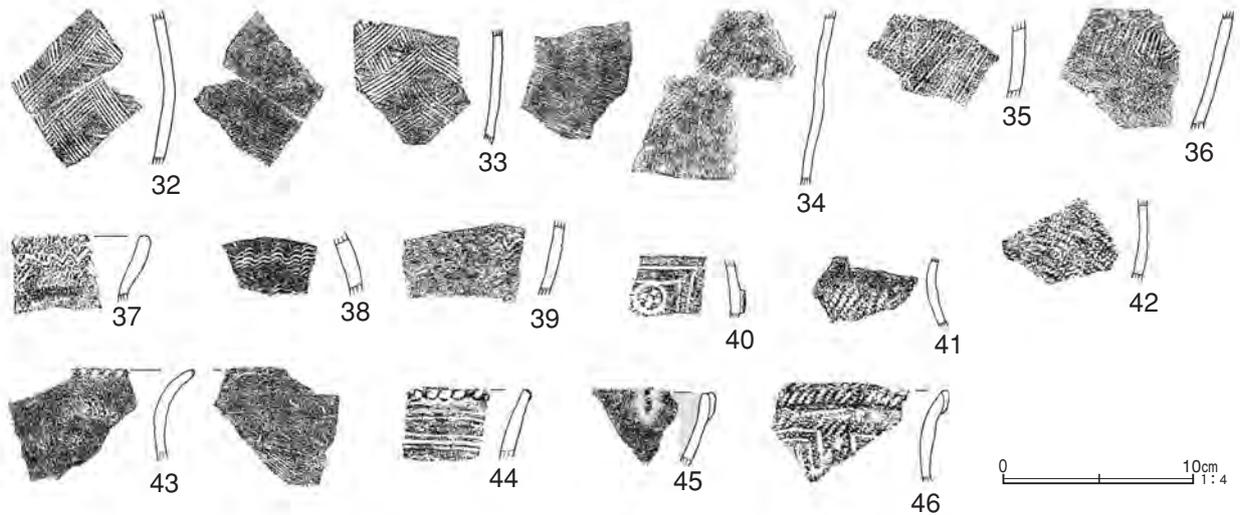
4・10～27は壺。4は底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。壺としたが、甕の可能性もある。10～12は平行沈線と波状沈線が巡る胴上部片。10は縦位のヘラミガキが施された無文部下に上から半円形の刺突列、平行沈線、波状沈線の順で施文されている。11はLR単節縄文地に振りの大きい波状沈線と平行沈線が巡る。12は複数巡る平行沈線の上にLR単節縄文と山形状の波状沈線が施文されている。13～16は平行沈線ないし櫛歯による直線文が巡る破片。13は肩部片、その他は胴上部片である。13は半円形の刺突列下に2本一単位の直線文2段が間隔を空けて巡り、刺突列上と上下の直線文間にRL単節縄文が施文されている。14は爪形状の刺突列下に平行沈線が複数巡る。15は単位不明の直線文が複数巡る。16は平行沈線間にLR単節縄文と赤彩が施されている。17・18は振りの小さい波状文が複数巡る破片。17は肩部片、18は胴上部片である。櫛歯の単位は17が4本、18は2本である。19～21は突帯が付く肩部から胴上部にかけての破片。突帯の長さが異なるが、いずれも中央部分が窪む。19は突帯下と突帯に沿って爪形状の刺突列が巡り、突帯脇は振りの小さい波状沈線、下はRL単節縄文が施文されている。20は突帯下に半円形の刺突列が巡る。突帯脇は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。21は突帯脇にRL単節縄文、段に爪形状の刺突列2列が施文されており、下に平行沈線が巡る。22・23は重三角文が描かれた胴上部片。いずれも沈線が太い。22は区画内に細かいRL単節縄文が充填されている。24・25は重四角文が描かれた胴上部片。24は分かりづらいが、地文にLR単節縄文と思われる縄文が施文されている。25は区画内にLR単節縄文が充填されている。26はフラスコ文が描かれた胴上部片。フラスコ文下にLR単節縄文が施文されている。27は肩部片。半円形の刺突列下に太い平行沈線が巡り、単位不明の直線文が垂下する。平行沈線及び直線文に沿って刺突列が巡る。10～27の内面調整は、24が斜位、27は横・斜位、その他はすべて横位のヘラナデである。10は輪積痕が残る。

5は広口壺の底部。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。鉢の可能性もある。

1～3・6～8・28～44は甕。1～3は口縁端部にLR単節縄文が施文され、胴部は縦位の羽状文が描かれている。羽状文はいずれも密に描かれているが、やや乱雑である。2・3は頸部に振りの小さい波状文がやや乱雑に巡る。櫛歯の単位は6～7本である。1は底部を欠く。短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。胴部は膨らみが小さく、倒卵形を呈する。最大径を口径に持つが、胴部の径とあまり変わらない。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。2は口縁部から胴上部までの部位。口縁部は受け口状を呈する。頸部はすぼまり、胴部はやや膨らむ。口縁部外面の無文部及び内面の調整は、ヘラナデである。3は口縁部から胴部中段までの部位。器形・文様・調整すべて2に似ている。



第 25 图 第 7 号住居跡出土遺物 (1)



第 26 図 第 7 号住居跡出土遺物 (2)

6～8は胴下部から底部までの部位。6・7は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、8は内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。6は底面に木葉痕がみられた。

28～39は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は6本前後が多い。28・29は口縁部から頸部にかけての破片。頸部に簾状文が巡る。ともに胎土が粗い。28は口縁部が無文で内外面ともに横位のヘラミガキ調整が施されている。29は口縁端部にL R単節縄文が施文され、口縁部外面の無文部は、横・斜位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデ調整が施されている。30～34は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。いずれもやや間隔を空けて描かれており、櫛歯が細い。30のみ胴上部片、その他は胴部中段の破片である。30は羽状文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。32・33は同一個体。30～34の内面調整は、30～33が斜位のハケメ、34のみ横・斜位のヘラミガキである。35・36は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。櫛歯が細く、やや密に描かれている。35は胴部中段、36は胴部中段から下部にかけての破片である。36は羽状文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。35・36の内面調整は、35が斜位のヘラミガキ、36は斜位のヘラナデである。37～39は波状文が乱雑に巡る破片。37は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部にL R単節縄文が施文され、口縁部に2本一単位の波状文が巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。38は胴上部片。波状文の振りが小さい。39は胴部中段から下部にかけての破片。波状文下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。37～39の内面調整は、37のみ横位のヘラミガキ、その他は横位のヘラナデである。

40はコの字重ね文が描かれた胴上部片。沈線が細い。円形刺突が5つ施されたボタン状貼付文がコの字中央に付く。内面調整は、横位のヘラミガキである。

41・42は縄文が施文された破片。41は頸部から胴上部にかけて、42は胴部中段の破片である。41は頸部が無文で胴上部にL R単節縄文が施文されている。無文部の調整は、横位のヘラミガキである。42はR L単節縄文が施文されている。41・42の内面調整は、41は磨耗が著しいため不明、42は横位のヘラナデである。

43はほぼ無文の口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部に刻みが施されている。外面無文部の調整は、磨耗が著しいため不明、内面は斜位のハケメである。

44は弥生時代中期中頃池上式に相当する口縁部片。流れ込み。口縁端部に刻みが施され、以下3本

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	(18.2)	(18.6)	—	ABHIN	黒褐色	B	口~胴 50%	内外面所々磨耗。
2	弥生土器 甕	(23.2)	(8.3)	—	ABHIK	褐灰色	B	口~胴 15%	内面磨耗顕著。
3	弥生土器 甕	(22.6)	(12.6)	—	AHIKN	黒色	B	口~胴 45%	内外面所々磨耗。
4	弥生土器 壺	—	(2.8)	7.0	ABHIK	灰黄色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 広口壺	—	(2.5)	6.0	ABDGHK	にぶい黄橙色	B	底部 70%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	—	(1.55)	(8.0)	ABIKN	浅黄橙色	B	底部 25%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	—	(1.65)	10.0	ABDEIK	暗褐色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 甕	—	(7.0)	(9.0)	ABEIKN	にぶい黄橙・橙色	B	胴~底 40%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甗	—	(8.5)	8.3	ABCHIKN	にぶい褐色	B	胴~底 80%	底面焼成後穿孔。内面剥離顕著。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIN	浅黄橙色	B	胴上部片	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ACDN	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIN	褐灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEI	浅黄橙色	B	肩部片	外面やや磨耗。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABKN	浅黄色	B	胴上部片	外面縄文施文部赤彩。内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰白色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIMN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIN	灰白色	B	肩~胴上片	外面突帯有。内面磨耗顕著。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	肩~胴上片	外面突帯有。
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	肩~胴上片	外面突帯有。
22	弥生土器 壺	—	—	—	AEHIKN	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDKM	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	褐灰色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHIN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEGIN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 甕	—	—	—	AEHIN	黒褐色	B	口~頸部片	外面磨耗顕著。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	褐灰色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	胴中段片	内面やや磨耗。No33と同一個体。P14出土。
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	胴中段片	内面やや磨耗。No32と同一個体。P14出土。
34	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黄灰色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABIN	灰黄褐色	B	胴中段片	
36	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	胴中~下片	内面磨耗顕著。
37	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIK	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	内外面やや磨耗。
38	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIN	黒褐色	B	胴上部片	
39	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKMN	灰黄褐色	B	胴中~下片	内外面磨耗顕著。
40	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	褐灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
41	弥生土器 甕	—	—	—	AHKN	黒褐色	B	頸~胴上片	内面磨耗顕著。
42	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴中段片	
43	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	口~頸部片	外面磨耗顕著。
44	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	黒褐色	B	口縁部片	内面磨耗顕著。
45	弥生土器 高坏	—	—	—	ABN	浅黄橙色	B	口縁部片	内外面赤彩。外面突起有。
46	弥生土器 筒形	—	—	—	ACIKMN	黒色	B	口~頸部片	内面磨耗顕著。

一単位の直線文がやや間隔を空けて複数巡る。内面調整は、横位のヘラミガキである。

9は甗。胴下部から底部までの部位。底面に焼成後穿孔がみられたことから甕の転用と思われる。外面調整はヘラミガキ、内面は剥離が顕著であるためほとんど図示できなかったが、ハケメが施されている。

45は高坏の口縁部片。口縁端部に縦長の短い突起が付く。内外面ともに横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

46は筒形土器。口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁部も含め、全面に地文としてLR単節縄文が施文されており、頸部以下に重四角文が描かれている。内面調整は、横位のヘラミガキである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

第8号住居跡（第27・28図）

58～60-137・138グリッドに位置する。南側は壁及び覆土上位を7号土坑に切られており、西側は発掘調査段階では9号住居跡に切られていると判断したが、整理調査による出土遺物の比較の結果、本住居跡が古いと思われる。北壁付近及び南西隅は、調査区外にある。また重複関係にないが、北西部に近接して10号住居跡が位置する。

正確な規模は不明であるが、長軸9.3m程度、短軸は7.17mを測り、大型の部類に入る。平面プランは隅丸長方形に近い。主軸方向はN-45°-Wを指す。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面は概ね平坦であった。覆土は9層（1～9層）確認された。下層に混入物を多く含む傾向にあるが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや南東寄りに位置する。長軸0.74m、短軸0.49mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.07mと浅い。覆土は、炭化物層や焼土層等5層（11～15層）が確認された。

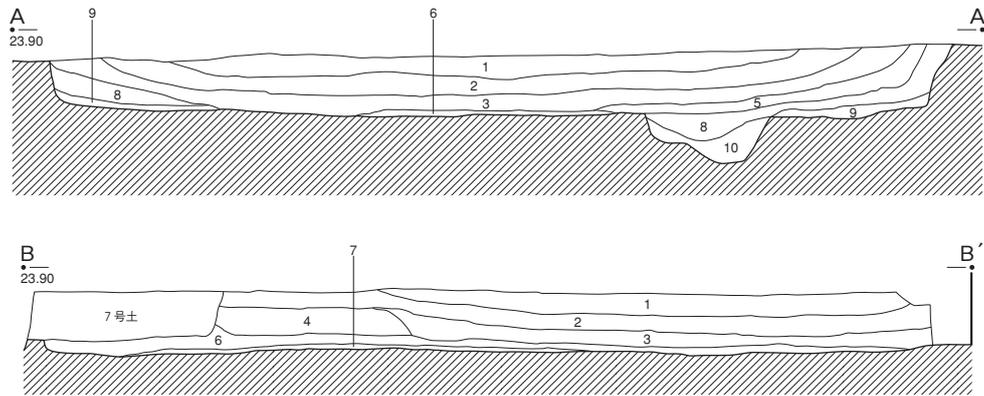
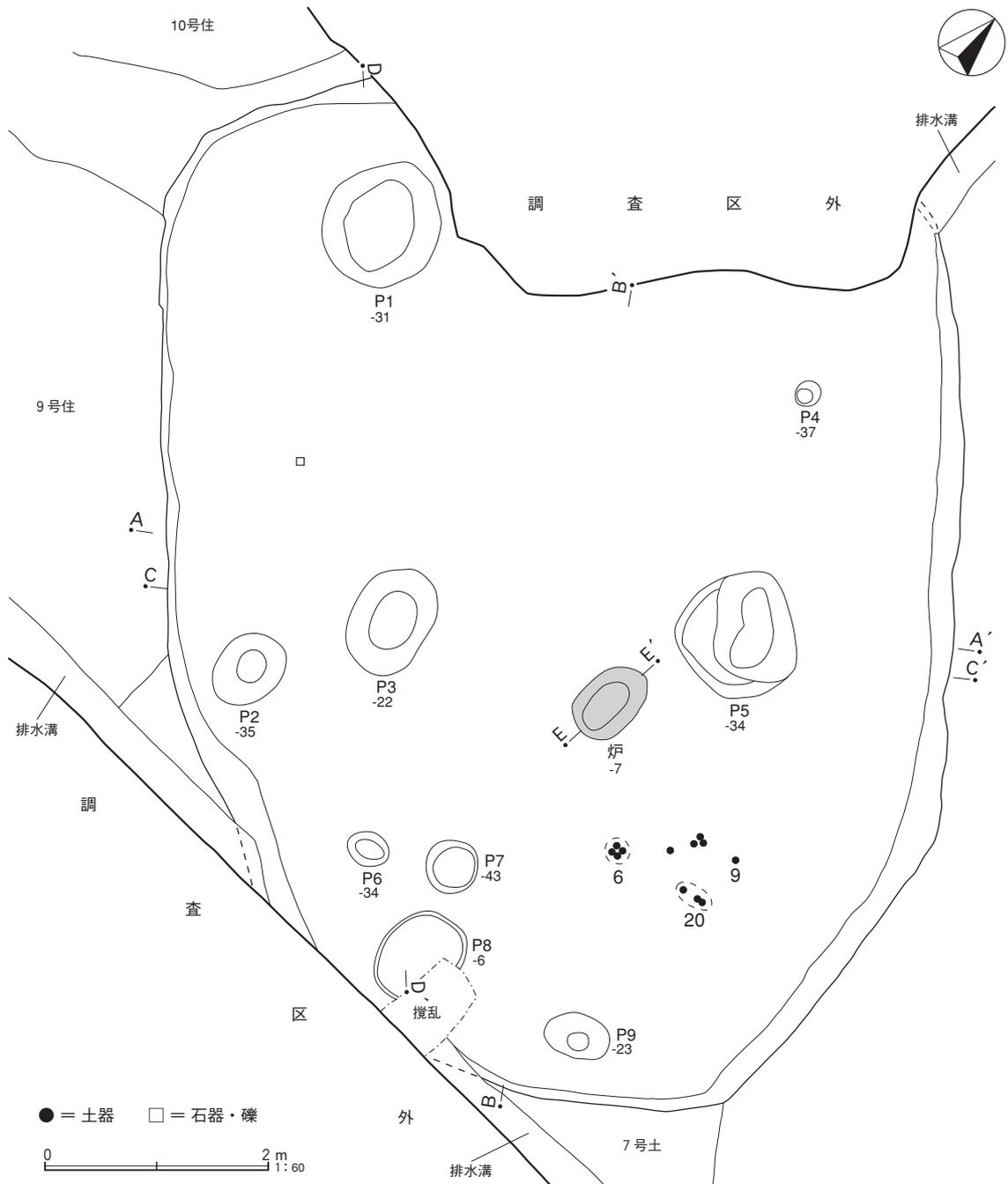
ピットは9基確認された。P1・3・5は変則的な位置にあるが、支柱穴か。またP2・4・6・7も変則的に配置されているが、掘り込みがしっかりしていることから屋根等を支える柱穴であろうか。P8は床面からの深さが0.06mと非常に浅いが、貯蔵穴の可能性はある。P9は出入口に関連するものと思われる。

壁溝は確認されなかった。

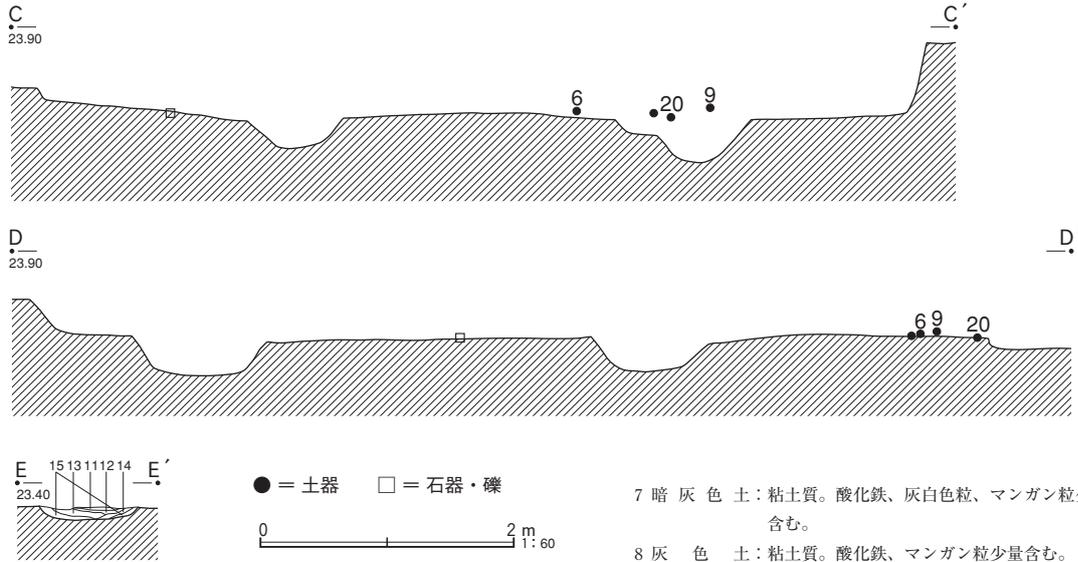
出土遺物（第29～31図）は、弥生土器壺（1～3・7・8・20～65）、甕（4～6・9～15・66～101）、甌（16・17）、高坏（18・19）、磨石（102・103）がある。残存状態の良好な6を含む床面直上の遺物は、炉跡南東に限られる。遺物の大半は覆土からの検出である。比較的残存状態の良好な2は、ピット5から検出された。

1～3・7・8・20～65は壺。1は口縁部から頸部までの部位。口縁部は外反しながら大きく開く。頸部はすぼまり、ほぼ直立する。文様は頸部にRL単節縄文が施文されているのみである。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。2は頸部から胴上部までの部位。頸部はほぼ直立し、肩が張らずに緩やかに下る。文様は頸部にのみ施文されており、LR単節縄文地に2条の平行沈線が巡り、間に山形文、下に連弧文が描かれている。頸部文様帯以下は無文で内面も含め、ヘラミガキ調整が施されている。胴上部内面に輪積痕が残る。3は胴部中段から下部までの部位。半球形を呈する。外面は無文でヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。7・8は底部。ともに外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。8は外面に赤彩が施されている。

20・21は頸部片。器面の削り出しによって形成された幅広の沈線と突帯が複数巡る。いずれも突帯にRL単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラミガキである。21は胎土が粗い。22～25は刺突列が巡る破片。肩部から胴上部までに収まる。22は分かりづらいが、LR単節縄文下に爪形状を呈する刺突列が巡る。23・24はLR単節縄文下の弱い段に刺突列が巡る。刺突は23が円形、24は半円形を呈する。段下は無文で23が斜位、24は横位のヘラミガキ調整が施されている。25は無文部下に設けられた段に2本一単位の簾状文風の刺突列が巡り、以下にLR単節縄文が施文されている。無文部の調整は、斜位のヘラミガキである。22～25の内面調整は、25のみ横・斜位、その他はすべて横位のヘラナデである。26～28は鋸歯文が描かれた破片。肩部から胴上部までに収まる。26は大振りの鋸歯文区画下、27は区画上にLR単節縄文が充填されており、27は鋸歯文下に巡る2条の平行沈線間にもLR単節縄文が充填され、平行沈線下は斜沈線が描かれている。28は鋸歯文下に半円形の刺突列が3列巡る。



第 27 図 第 8 号住居跡 (1)



第8号住居跡

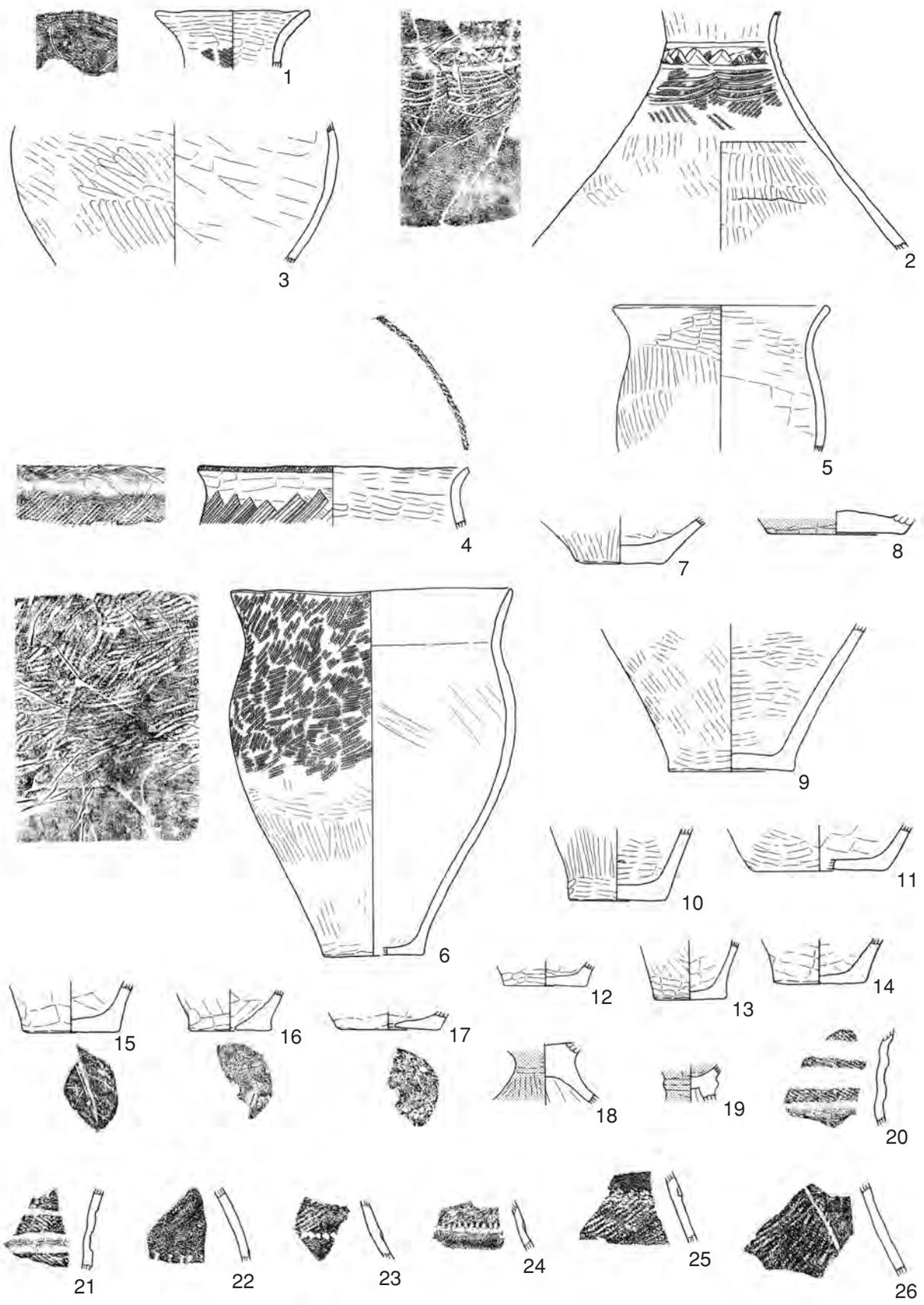
土層説明 (AA' BB' EE')

- 1 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 4 灰オリーブ色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 5 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 6 灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。

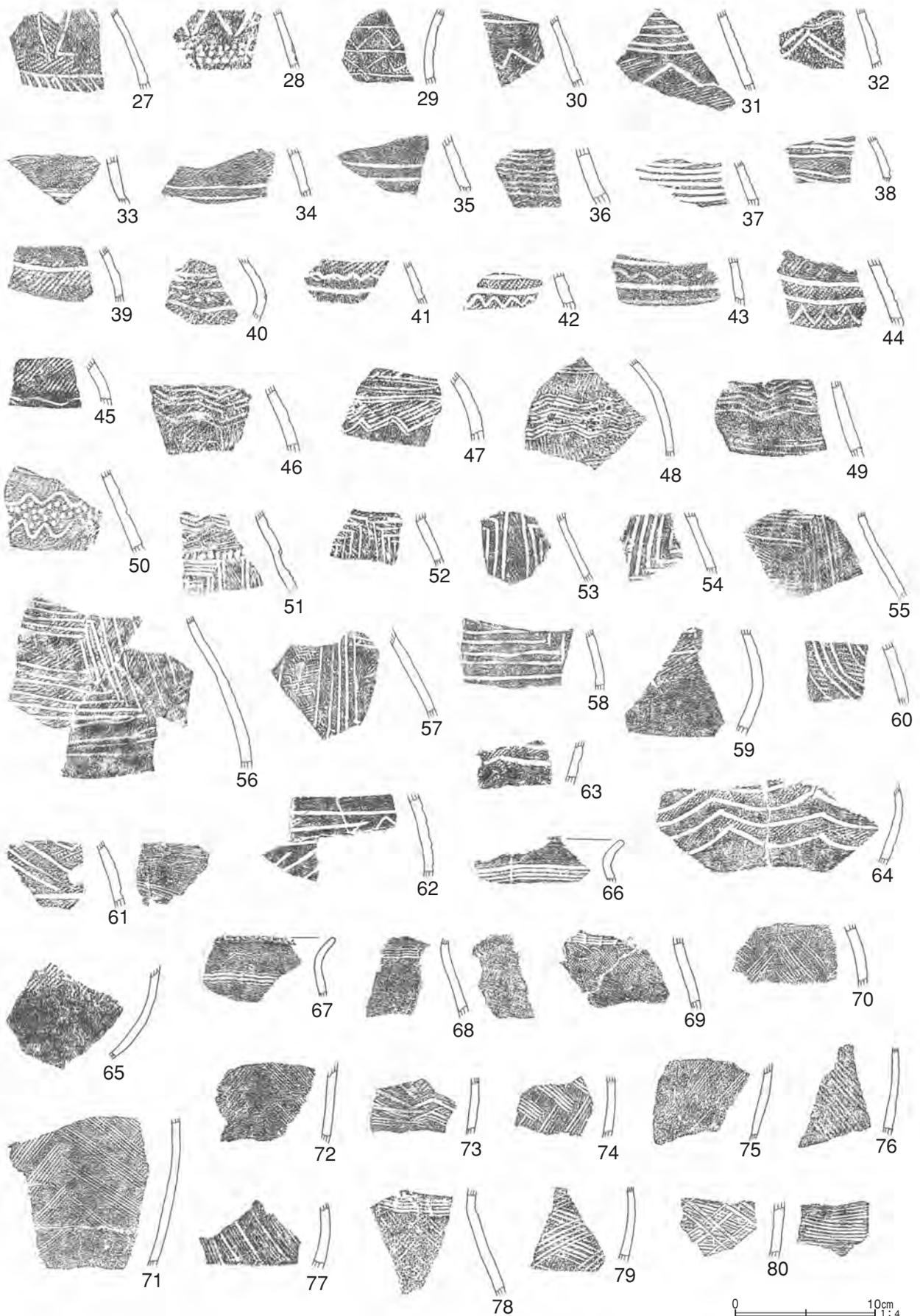
- 7 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量、炭化物微量含む。
- 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 9 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。
- 11 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒少量含む。
- 12 炭化物層
- 13 焼土層
- 14 灰色土：粘土質。焼土粒、炭化物多量含む。
- 15 灰白色土：粘土質。焼土粒、炭化物多量含む。

第28図 第8号住居跡(2)

26~28の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。29~32は山形文が巡る破片。29は頸部片、その他は胴上部片である。29は平行沈線が等間隔に3条巡り、間にLR単節縄文と山形文が施文されている。上下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。沈線が細かい。30は無節L地に平行沈線と山形文がやや間隔を空けて巡る。31は複数の平行沈線下に山形文が巡り、周囲に斜位のハケメ調整が残る。32は2本一単位の振りの小さい波状文下にやや太い沈線2条で山形文が描かれている。29~32の内面調整は、29が横位のヘラミガキ、30は斜位、31・32は横位のヘラナデである。33~40は平行沈線ないし櫛歯による直線文が巡る破片。33~37は肩部片、38・39は胴上部片、40は胴上部から中段にかけての破片である。33・34はLR単節縄文下に33が2本一単位の直線文、34は複数の平行沈線が巡る。35は横位のヘラミガキが施された無文部下に複数の平行沈線が巡る。36は3本一単位の直線文が複数巡るが、全体的に振れており、波状文と見た方が良くもしい。以下はLR単節縄文が施文されている。37は太い平行沈線が複数巡る。38は複数の沈線がやや蛇行しながら上下に巡り、間にLR単節縄文が施文されている。39は横位のヘラミガキが施された無文部下に太い平行沈線が巡り、下にLR単節縄文が施文されている。40は平行沈線が3条巡り、下の平行沈線間に半円形の刺突列が刻まれている。上下はLR単節縄文が施文されている。33~40の内面調整は、35・40が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。33・36は内面に輪積痕が残る。41~50は波状文や平行沈線、櫛歯による直線文が巡る破片。41~44・46・50は肩部片、45・47~49は胴上部片である。41はLR単節縄文下に振りの小さい波状沈線と平行沈線が巡る。42はLR単節縄文地に複数の太い平行沈線と波状沈線が巡る。43は複数の平行沈線が巡り、上位2条の平行沈線間に波状沈線が巡る。44はLR単節縄文地に複数の平行沈線と山形文に近い波状沈線が巡る。45はL



第29图 第8号住居跡出土遺物(1)

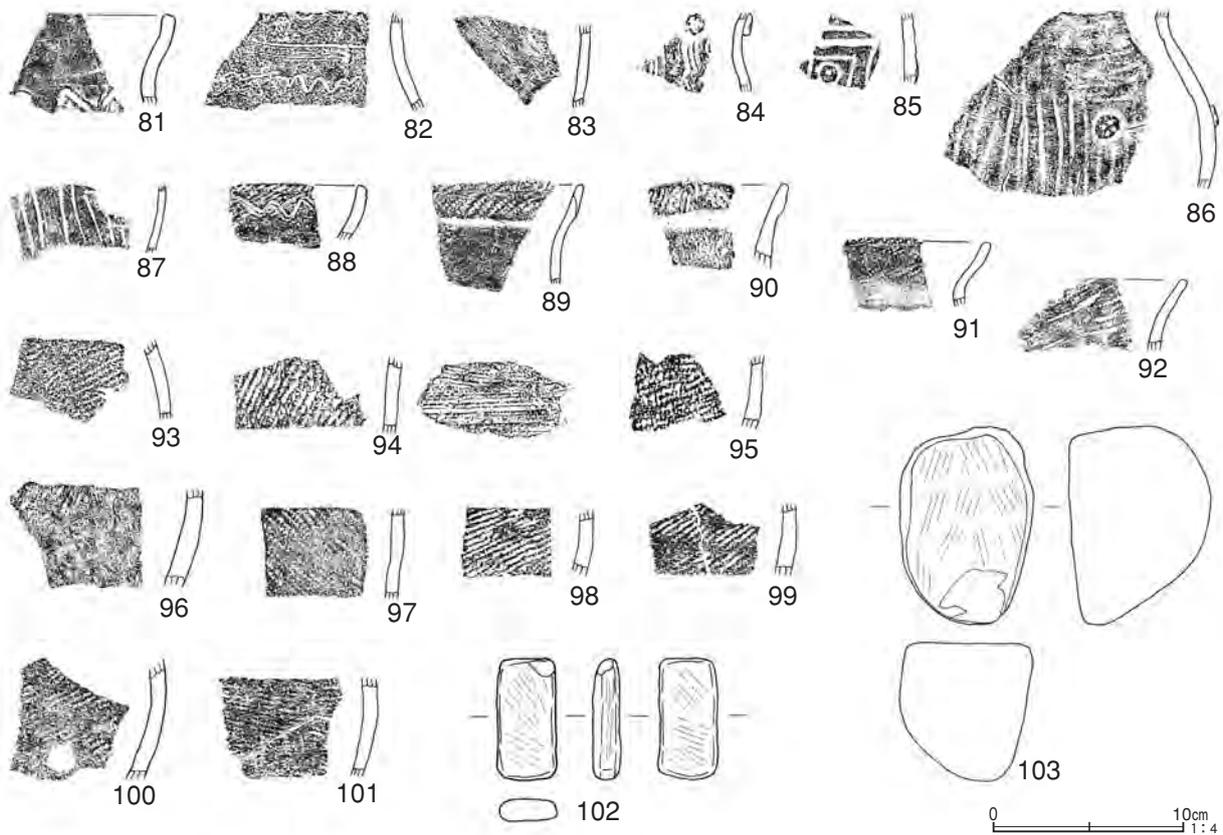


第30图 第8号住居跡出土遺物(2)

R単節縄文下に緩やかな波状沈線が巡る。46はL R単節縄文地に2本一単位の波状文が複数巡る。47は2本一単位の直線文が複数と波状文が巡り、間にL R単節縄文が充填されている。波状文下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。48は3本一単位の直線文下に間隔を空けて波状文が3段巡る。波状文上下はL R単節縄文が充填されている。49は分かりづらいが、2本一単位で複数巡る波状文と下位に巡る直線文間にL R単節縄文が施文されている。50は上下に平行沈線、間に円形刺突が充填された乱雑な波状沈線が2条巡る。無文部は横位のヘラミガキ調整が施されている。41～50の内面調整は、41～43・45～49が横位、50は斜位のヘラナデ、44は横・斜位のヘラミガキである。51～59は重四角文が描かれた破片。51～58は肩部から胴部中段までに収まる破片、59は胴部中段から下部にかけての破片である。51は半円形の刺突列が刻まれた段下に2本一単位で重四角文が描かれており、重四角文間及び段上に巡る3本一単位の波状文下にL R単節縄文が施文されている。52は地文、53は重四角文間にL R単節縄文が施文されている。55は2本一単位の櫛葉状工具で重四角文が描かれ、内外にL R単節縄文が施文されている。56は地文にL R単節縄文が施文されている。57は重四角文内外に無節Lが施文されている。59は重四角文下にL R単節縄文が施文されている。胴下部は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。51～59の内面調整は、56のみ横・斜位、その他はすべて横位のヘラナデであり、58は下位に輪積痕が残る。60はフラスコ文が描かれた胴上部片。幅広の沈線間に無節Rが充填されている。内面調整は、横位のヘラナデである。61・62は重三角文の描かれた胴上部片。61は地文にL R単節縄文が施文され、下に太い平行沈線が巡る。62は分かりづらいが、所々に重三角文施文前に施された横・斜位のハケメ調整が残る。61・62の内面調整は、61が横・斜位のハケメ、62は横位のヘラナデである。63・64は連弧文が描かれた胴部中段から下部にかけての破片。いずれも沈線が太い。沈線間にL R単節縄文施文部と無文部を交互に配置している。胴下部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、63が横位のヘラナデ、64は磨耗が著しいため、不明である。65は胴部中段から下部にかけての破片。L R単節縄文以下は、無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、斜位のヘラナデである。

4～6・9～15・66～101は甕。4は口縁部から胴上部までの部位。短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。胴上部はやや膨らむ。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部以下に5本一単位の横位の羽状文が密に描かれている。口縁部外面の無文部はヘラナデ、内面はヘラミガキ調整が施されている。頸部内面に輪積痕が残る。5は口縁部から胴部中段までの部位。口縁部がやや外反し、頸部はすぼまる。胴部はやや膨らむ。最大径を口径に持つが、胴部の径とほとんど変わらない。全面無文で外面及び口縁部から頸部までの内面はヘラミガキ、以下の内面はヘラナデ調整が施されている。6は比較的残存状態の良好な甕。口縁部の開きが小さく、頸部はすぼまる。胴部は中段より上が膨らみ、倒卵形状を呈する。最大径を胴上部に持つが、口径とほとんど変わらない。文様は口縁部から胴部中段までL R単節縄文が施文されている。胴下部は無文でヘラミガキ調整が施されている。内面は磨耗が著しいため、ほとんど図示できなかったが、ハケメとヘラナデ調整が施されている。

9～15は胴下部から底部までの部位。9は内外面ともにヘラミガキ、10～13は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、14・15は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。15は底面に木葉痕がみられた。



第31図 第8号住居跡出土遺物(3)

66～84は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。66～69は口縁部から胴上部までに収まる破片。頸部は66のみ直線文、その他は簾状文が巡る。66の口縁部外面の無文部は、横位のハケメ調整が施されている。67は口縁端部にR L単節縄文が施文され、口縁部外面の無文部は横位、胴上部は斜位のヘラミガキ調整が施されている。68は簾状文上下が無文であるが、磨耗が著しいため、調整は不明である。69は簾状文下に乱雑な波状文とR L単節縄文が施文されており、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。66～69の内面調整は、66・67が横位、69は斜位のヘラミガキ、68は斜位のハケメである。70～73は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。71以外は密に描かれており、櫛歯の細かいものが多い。70のみ胴上部片、その他は胴部中段の破片である。70・73は乱雑である。70～73の内面調整は、70・72が横位、71・73は横・斜位のヘラミガキである。74～77は横位の羽状文が描かれた胴部中段の破片。74・75はやや間隔を空けて、76・77は密に描かれている。74・76は櫛歯が太く、75・77は細い。74～77の内面調整は、74が斜位のヘラミガキ、75は横・斜位、76は斜位、77は横位のヘラミガキである。78～80は胴部に斜格子文が描かれた破片。78は細かい櫛歯、その他は太い櫛歯で乱雑に描かれている。78は頸部から胴上部にかけて、その他は胴部中段の破片である。78は頸部に簾状文が巡る。80は斜格子文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。78～80の内面調整は、78が横・斜位のヘラミガキ、79は横・斜位のヘラミガキ、80は横・斜位のハケメである。81～84は波状文が描かれた破片。波状文はいずれも乱雑である。81は口縁部から頸部にかけて、82・84は頸部から胴上部にかけて、83は胴部中段の破片である。81は頸部に波状文が巡る。口縁部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。82は頸部の簾状文を挟んで上下に巡るが、上は振りが小さく、下は大きい。83は分かりづらいが、波状

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(10.8)	(4.05)	—	ABHIK	黒色	B	口～頸 20%	
2	弥生土器 壺	—	(16.75)	—	ABHIKN	にぶい橙色	B	頸～胴 70%	胴上部内面輪積痕有。外面磨耗顕著。P5出土。
3	弥生土器 壺	—	(9.9)	—	ABCDGIKN	灰白色・黒色	B	胴部 70%	内外面所々磨耗。
4	弥生土器 甕	(19.0)	(4.25)	—	ABDHJK	褐灰色	B	口～胴 20%	頸部内面輪積痕有。内面所々磨耗。
5	弥生土器 甕	(15.2)	(10.35)	—	AHIK	黒色	B	口～胴 25%	
6	弥生土器 甕	(19.7)	25.65	7.1	ABDHKN	黒色	B	60%	内面大半、外面下位磨耗顕著
7	弥生土器 壺	—	(3.3)	6.4	ABHIK	暗灰色	B	底部 60%	内面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	—	(1.7)	9.6	BDHIJK	淡黄色	B	底部 60%	外面赤彩、大半剥落。
9	弥生土器 甕	—	(10.35)	8.8	ABEIKN	灰黄色	B	胴～底 80%	内面所々、外面磨耗顕著。
10	弥生土器 甕	—	(5.1)	6.7	ABGIKN	黄灰色	B	胴～底 80%	内面輪積痕有、やや磨耗。
11	弥生土器 甕	—	(3.2)	(9.5)	ABEIKN	浅黄色	B	底部 45%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	—	(1.75)	(5.8)	ABI	暗灰黄色	B	底部 45%	外面磨耗顕著。
13	弥生土器 甕	—	(4.15)	5.1	ABIK	黄灰色	B	胴～底 70%	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器 甕	—	(3.2)	6.4	ABHIK	黒褐色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 甕	—	(3.6)	(6.8)	ABHIK	にぶい黄橙色	B	底部 40%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
16	弥生土器 甗	—	(2.9)	(5.8)	ABHIN	にぶい黄褐色	B	底部 45%	底面焼成後穿孔。内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 甗	—	(1.35)	(7.2)	ABDI	にぶい橙色	B	底部 30%	底面焼成前穿孔。内外面磨耗顕著。
18	弥生土器高坏	—	(4.4)	—	ABJKM	橙色	B	接～脚 80%	内外面赤彩、大半剥落。内外面磨耗顕著。
19	弥生土器高坏	—	(2.6)	—	ABHK	褐灰色	B	接合部 70%	内外面赤彩、ほぼ剥落。内外面磨耗顕著。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDKN	淡黄色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEIKN	にぶい黄褐色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 壺	—	—	—	ADIKMN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHK	浅黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABHKMN	にぶい褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	
26	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	浅黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEHIN	淡橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	ACHKN	橙色	B	頸部片	内外面やや磨耗。
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABDGH	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABCGIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	浅黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	黄褐色	B	肩部片	内面輪積痕有、磨耗顕著。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABEGI	浅黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABDK	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIKMN	灰黄褐色	B	肩部片	内面輪積痕有、磨耗顕著。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABHI	灰白色	B	肩部片	
38	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
39	弥生土器 壺	—	—	—	ABDKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHN	にぶい橙色	B	胴上～中片	外面磨耗顕著。
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIM	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
42	弥生土器 壺	—	—	—	AGHK	黒色	B	肩部片	
43	弥生土器 壺	—	—	—	AB	黒色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
44	弥生土器 壺	—	—	—	AHIK	オリーブ黒色	B	肩部片	
45	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黄灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
46	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
47	弥生土器 壺	—	—	—	ADHK	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
48	弥生土器 壺	—	—	—	ABHKN	浅黄色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
49	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	暗灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
50	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIK	橙色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
51	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHKN	にぶい橙色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
52	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKM	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
53	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKM	灰黄色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
54	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	内面やや磨耗。
55	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。
56	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIK	にぶい黄褐色	B	胴上～中片	内外面やや磨耗。
57	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIK	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
58	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEGIK	灰黄色	B	胴上部片	内面輪積痕有。
59	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKM	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
60	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKM	灰黄色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
61	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	胴上部片	外面所々磨耗。
62	弥生土器 壺	—	—	—	ADEHKN	黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHK	にぶい黄色	B	胴中～下片	内面剥離顕著。
64	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい橙色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著。
65	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	暗灰黄色	B	胴中～下片	
66	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
67	弥生土器 甕	—	—	—	ABEI	褐灰色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
68	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
69	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
70	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	褐灰色	B	胴上部片	
71	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	オリーブ黒色	B	胴中段片	
72	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	灰黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
73	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIM	褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
74	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	黒褐色	B	胴中段片	
75	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKM	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
76	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
77	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDI	浅黄色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
78	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	外面磨耗顕著。
79	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKM	褐灰色	B	胴中段片	
80	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒色	B	胴中段片	
81	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKMN	灰褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
82	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEJN	橙色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
83	弥生土器 甕	—	—	—	ABGI	褐灰色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
84	弥生土器 甕	—	—	—	AIK	黒褐色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
85	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
86	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDIKN	淡黄色	B	頸～胴中片	胴部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
87	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	灰黄褐色	B	胴中段片	
88	弥生土器 甕	—	—	—	AHKN	黒褐色	B	口縁部片	
89	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
91	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
92	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
93	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
94	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
95	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIK	褐灰色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
96	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKMN	灰褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
97	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKM	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
98	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	
99	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴中段片	
100	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKMN	褐灰色	B	胴中段片	外面磨耗顕著。
101	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIKN	灰黄色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
102	磨石	最大長 6.4 cm、最大幅 3.0 cm、最大厚 1.2 cm。重量 (50) g。一部欠。砂岩製。三面使用。							
103	磨石	最大長 10.3 cm、最大幅 6.9 cm、最大厚 7.2 cm。重量 753g。完形。砂岩製。一面使用。光沢帯びる。							

文が複数巡る。84は頸部に円形刺突が施されたボタン状貼付文が付き、下に3本一単位の振りの小さい波状文が複数垂下する。81～84の内面調整は、81・82が横位のヘラミガキ、83・84は斜位のヘラナデである。

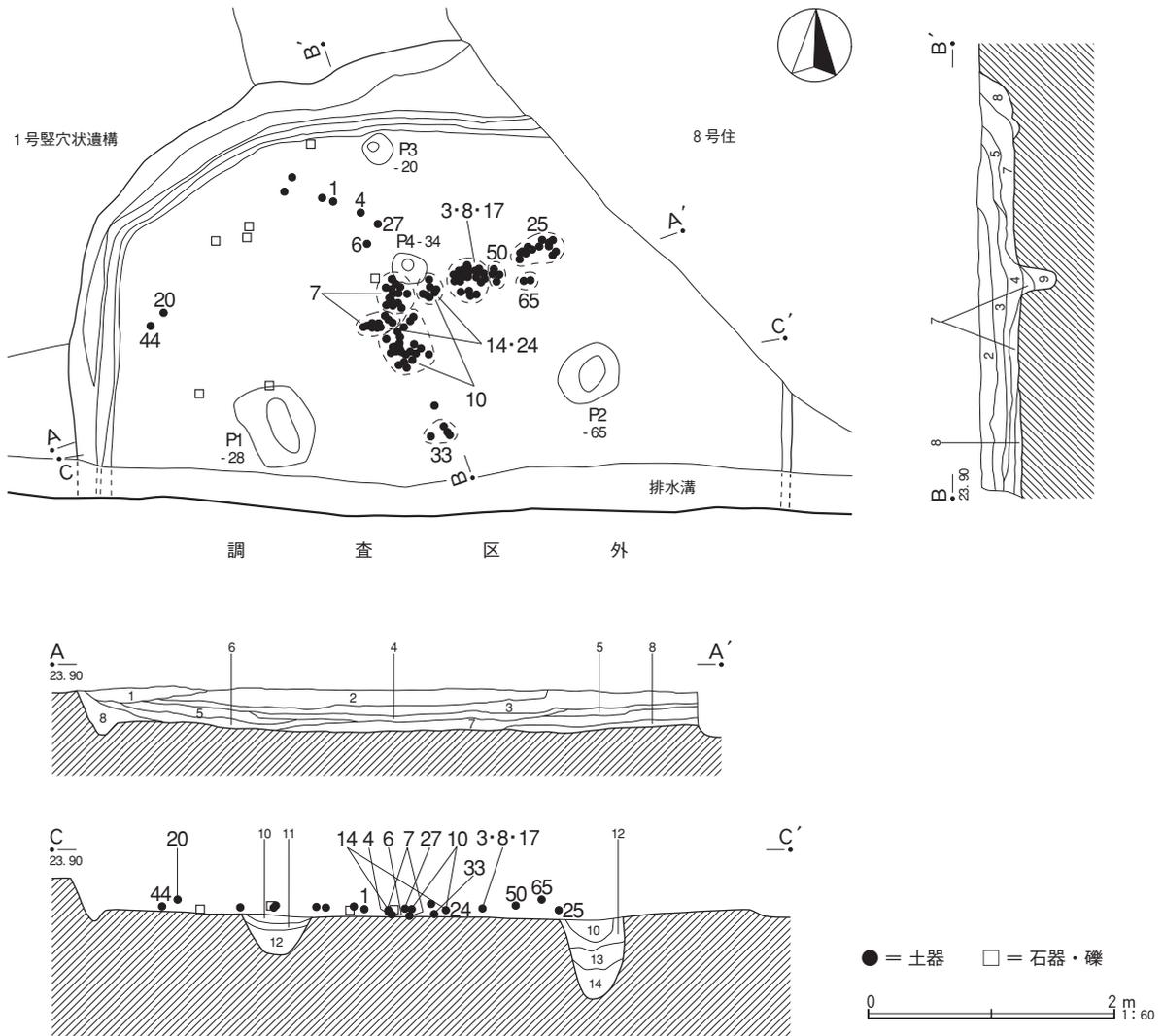
85～87は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。頸部から胴部中段までに収まる。85は1つ、86は4つの円形刺突が施されたボタン状貼付文がコの字中央に付く。85～87の内面調整は、87のみ横位のヘラナデ、その他は横位のヘラミガキである。86は胴部内面に輪積痕が残る。

88～101は縄文が施文された破片。88～92は口縁部から頸部まで、93は胴上部、94・95・97～101は胴部中段、96は胴部中段から下部にかけての破片である。縄文は、88～96がLR、97はRL単節縄文、98～101は無節Lである。88は端部を含む口縁部に縄文が施文され、2本一単位の振りの大きい波状文が巡る。以下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。89・90は複合口縁部に縄文が施文されており、89は端部まで施文されている。いずれも頸部は無文で、89は斜位のハケメ調整が施され、90は磨耗顕著により不明である。91は端部を含む口縁部に縄文が施文されており、頸部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。92～101は全面に縄文が施文されている。88～101の内面調整は、88・91・92が

横位のヘラミガキ、89・93・95～98・100・101は横位、99は横・斜位のヘラナデ、90は磨耗が著しいため不明、94は横・斜位のハケメである。

16・17は甑の底部。いずれも内外面にヘラナデ調整が施されている。底面の穿孔は16が焼成後、17は焼成前のものであり、16は甑の転用と思われる。

18・19は高坏。18は接合部から脚部上位までの部位、19は接合部である。いずれも外面及び坏部内面がヘラミガキと赤彩、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。19は突帯が巡る。



第9号住居跡

土層説明 (A A' B B' C C')

- | | |
|--|--|
| 1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 | 9 黒色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 2 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。 | 10 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒、炭化物少量含む。 |
| 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。 | 11 炭化物層 |
| 4 炭化物層：酸化鉄、マンガン粒少量含む。 | 12 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 5 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。 | 13 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。5層より暗い。 | 14 灰白色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰色土、マンガン粒少量含む。 |
| 7 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。 | |
| 8 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量含む。 | |

第32図 第9号住居跡

102・103は砂岩製の磨石。102はやや扁平で長形状を呈する。一部を欠く。片側側面を含む三面が使用されている。103は半円状を呈する。割れ口一面のみが使用されており、光沢が著しい。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

第9号住居跡（第32図）

59～61-138グリッドに位置する。北西部で1号竪穴状遺構を切っており、北東部は8号住居跡と重複し、発掘調査段階では8号住居跡に切られていると判断したが、整理調査による出土遺物の比較の結果、本住居跡の方が新しいと思われる。北側半分のみを検出であり、南側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は3.86m、短軸となる東西は5.82mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-2°-Wを指し、ほぼ東西南北に軸が揃う。確認面からの深さは0.3m前後を測り、床面は中央付近がやや低くなるが、概ね平坦であった。覆土は8層（1～8層）確認された。中層に炭化物層（4層）等が見られ、下層に混入物を多く含む傾向にあるが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

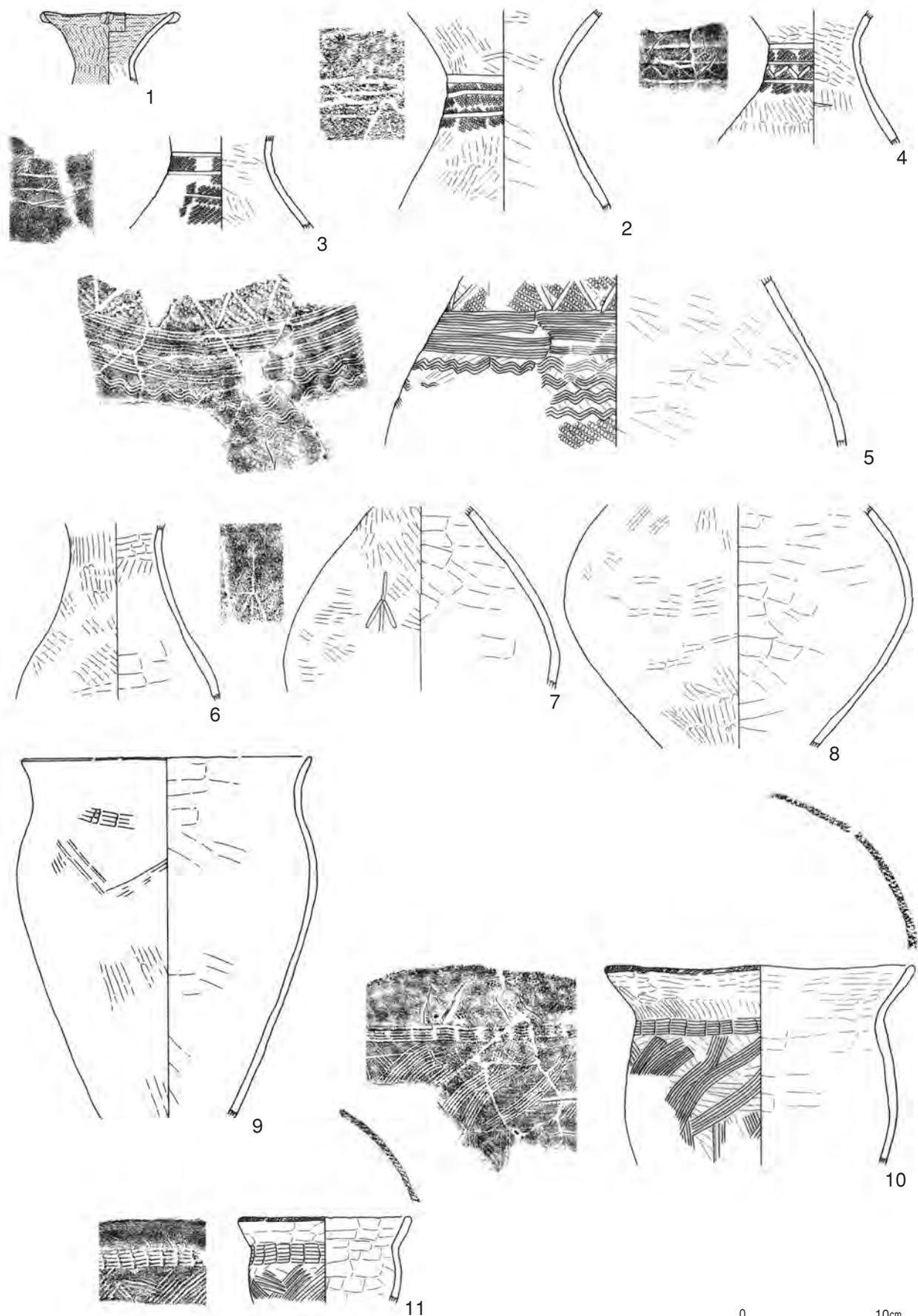
ピットは4基確認された。P1・2は深さが異なり、覆土に柱痕跡が確認されなかったが、その位置から見て支柱穴と思われる。P3・4も覆土に柱痕跡が確認されなかったが、掘り込みがしっかりしていることから屋根等を支える柱穴と思われる。

壁溝は東壁以外検出された範囲内を全周するが、北西隅付近から北壁沿いにかけては、壁からやや離れて巡る。幅は0.15m前後、床面からの深さは0.08m程を測る。

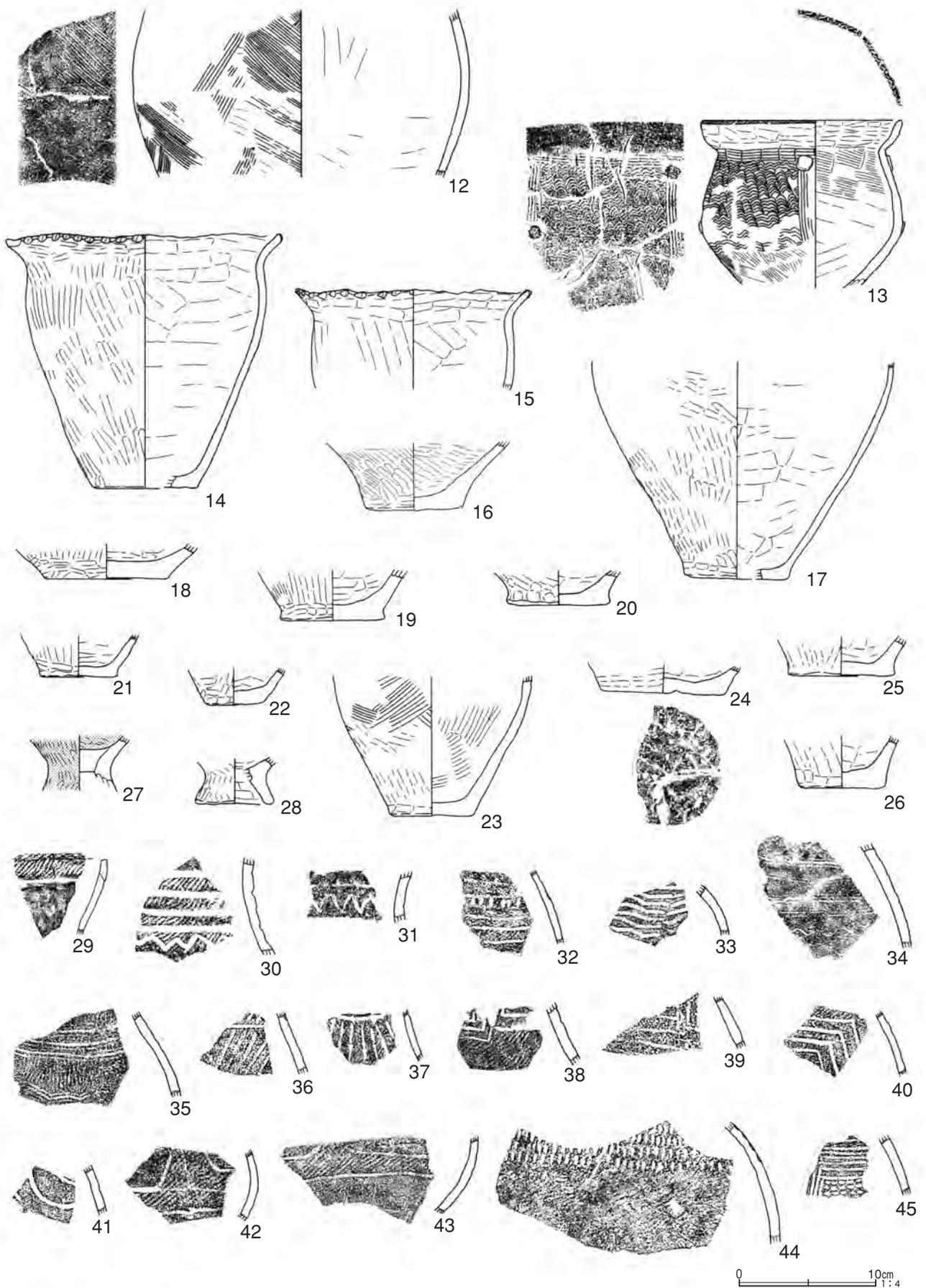
炉跡、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第33～35図）は、弥生土器壺（1～8・16～22・29～45）、甕（9～15・23～26・46～67）、高坏（27・28・68）、磨製石斧（69）、打製石器（70）がある。残存状態の良好なものは少ないが、比較的多くの遺物が検出され、床面直上の遺物はピット4周辺に集中する。破片は覆土からの検出が多い。

1～8・16～22・29～45は壺。1は小型壺の口縁部から頸部までの部位。口縁部は外反しながら大きく開く。頸部はすぼまり、下に向かってやや広がる。口縁端部に突起が付く。内外面ともにヘラミガキ調整が施されており、外面及び口縁部から頸部までの内面に赤彩が施されている。2～4は頸部から肩部までの部位。いずれも頸部がすぼまり、ほぼ直立する。肩部の張りが弱く、胴部に向かって広がる。文様は頸部にのみ施文されている。いずれも平行沈線が3条巡り、沈線間に縄文が施文されるが、最下沈線下にはみ出ている。縄文は2がRL、3はLR単節縄文、4は無節Lである。2・4は最上位の沈線が他に比べて太い。また4は下2条の沈線間に山形文が描かれている。外面無文部はすべてヘラミガキ、内面は2が頸部までヘラミガキ、以下はヘラナデ、3・4はヘラミガキ調整が施されている。4は肩部内面に輪積痕が一部残る。5は大型壺の胴上部から中段までの部位。半球形を呈する。文様は全面に施文されている。上から鋸歯文、3本一単位の直線文4段、波状文4段、RL単節縄文の順に施文されている。RL単節縄文は鋸歯文区画下にも充填されているが、一部区画上にはみ出ている。内面調整は、ヘラナデである。No.34と同一個体。6～8はほぼ無文の壺。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデが主体となる。6は頸部から胴上部までの部位。太い頸部がほぼ直立し、肩が張らず、胴上部に向かって緩やかに膨らむ。内面は頸部上位がヘラミガキ、下位以下にヘラナデ調整が施されている。7は肩部から胴部中段までの部位。肩が張らず、胴部中段に向かって膨らむ。胴上部に鳥足形の文様がみられた。8は胴上部から下部までの部位。球形を呈する。



第33图 第9号住居跡出土遺物(1)

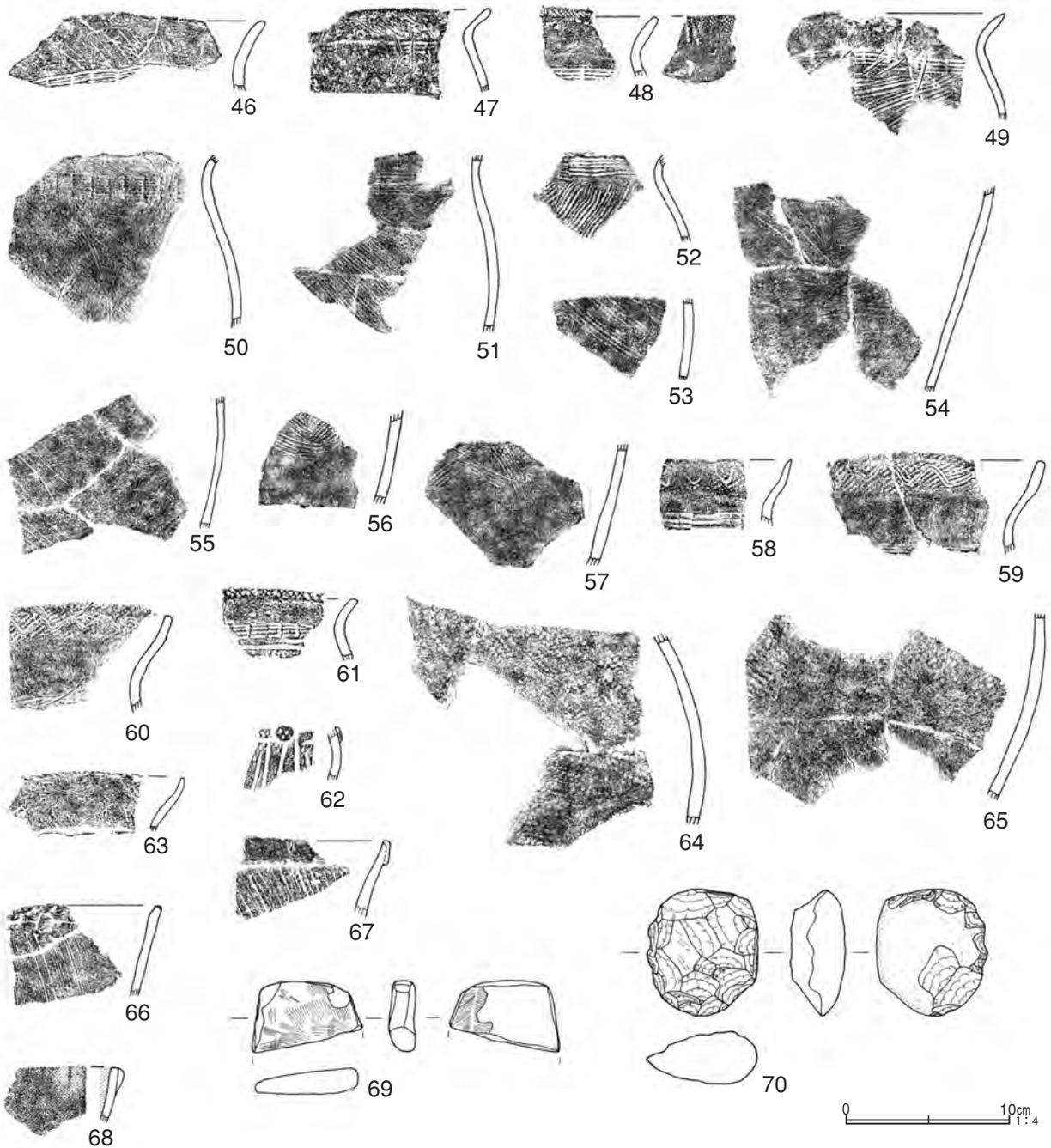


第34图 第9号住居跡出土遺物(2)

16～22は胴下部から底部までの部位。16のみ内外面ともにヘラミガキ、その他は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。20は底部付近に指頭圧痕が施されている。壺としたが、甕の可能性もある。

29は口縁部から頸部にかけての破片。端部を含む肥厚した口縁部にL R単節縄文が施文され、以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、上位が横位、下位は斜位のヘラミガキである。30・31は頸部片。30は太い平行沈線4条下にやや乱雑な波状沈線が巡り、各沈線間にL R単節縄文が施文されている。上下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。31は平行沈線下に振りの大きい波状沈線が巡る。30・31の内面調整は、いずれも横位のヘラミガキである。32～37は平行沈線や櫛歯による直線文、波状文が巡る破片。32～35は胴上部片、36・37は肩部片である。32は平行沈線が複数巡る。中段の沈線間に半円形の刺突列が刻まれており、下3条の平行沈線間はL R単節縄文が施文されている。33は平行沈線下に乱雑な波状沈線が複数巡る。沈線がやや太い。34は分かりづらいが、鋸歯文下に3本一単位の細い直線文が4段巡り、下に波状文が複数巡る。鋸歯文区画下は、R L単節縄文が充填されている。No.5と同一個体。35は2本一単位の直線文が3段巡り、下に縄目が縦位のL R単節縄文と波状文が施文されている。36は爪形状の刺突列下に平行沈線が巡り、下に斜位の短沈線が描かれている。37は分かりづらいが、地文にL R単節縄文が施文されており、平行沈線下に複数の沈線が等間隔に垂下する。32～37の内面調整は、37のみ横・斜位のヘラミガキ、その他はすべて横位のヘラナデである。38～40は重四角文が描かれた破片。38のみ肩部片、その他は胴上部片である。38は重四角文下に無節Lが施文されている。40は地文にL R単節縄文が施文されている。38～40の内面調整は、38が横・斜位のヘラミガキ、39・40は横位のヘラナデである。41は渦巻文が描かれた胴上部片。沈線が太い。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。42・43は胴部中段から下部に収まる破片。いずれも胴部中段に懸垂文が接続した2条の平行沈線が巡り、沈線間にL R単節縄文が充填されている。43は胴下部が無文で、横位のヘラミガキ調整が施されている。42・43の内面調整は、ともに横位のヘラナデである。44は胴上部片。上位に爪形状の刺突列が複数巡り、下にL R単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラナデである。45は弥生時代中期中頃池上式に相当する胴上部片。流れ込み。重四角文内に半円形の刺突列が充填されている。内面調整は、横位のヘラナデである。

9～15・23～26・46～67は甕。9～13は櫛歯状工具で文様が描かれている。櫛歯の単位は5本前後が多い。9は底部付近を欠く。口縁部は緩やかに外反し、頸部はすぼまる。胴上部が膨らみ、下部に向かって直線的に下る。最大径を胴上部に持つが、口径とあまり変わらない。磨耗顕著によりほとんど図示できなかったが、文様は頸部に乱雑な簾状文が巡り、胴部に縦位の羽状文が描かれている。調整は、口縁部外面の無文部が不明、胴下部はヘラミガキ、内面はヘラナデである。10・11は口縁部から胴部中段までの部位。大きさが異なるが、器形や文様構成が似ている。いずれも口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、頸部はすぼまる。胴部はほとんど膨らまない。最大径を口径に持つ。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部に簾状文が巡る。胴部は10が横位の羽状文、11は縦位の羽状文が描かれているが、いずれも乱雑に描かれている。外面無文部及び内面の調整は、10は外面及び口縁部から頸部までの内面がヘラミガキ、頸部以下の内面はヘラナデ、11は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。12は胴上部から下部までの部位。ほぼ球形を呈する。外面は8本一単位で縦位の羽状文が密に描かれている。内



第35図 第9号住居跡出土遺物(3)

面調整は、ヘラナデである。13は小型の甕。底部を欠く。口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は中段が膨らみ、ほぼ球形を呈する。最大径を胴部中段に持つが、口径とほとんど変わらない。文様は口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部に簾状文、胴部は垂下する直線文脇に振りの小さい波状文が7段密に巡る。直線文の頂点及び終点にボタン状貼付文が交互に付く。口縁部外面の無文部及び口縁部から頸部までの内面は粗いヘラミガキ、胴下部外面及び頸部以下の内面は、ハケメとヘラナデ調整が施されている。14・15は口縁端部以外無文の甕。口縁端部に指頭圧痕が施されているが、14は一部施されていない箇所がみられた。14は比較的残存状態が良好であり、15は口縁部から胴上部までの部位である。いずれも短い口縁部がくの字に開き、頸部はすぼまる。胴部はほとんど膨らまず、14は底部

第10表 第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(9.2)	(5.2)	—	BDI	灰白色	B	口～頸 50%	内外面赤彩、大半剥落。所々磨耗。
2	弥生土器 壺	—	(14.35)	—	ABDKN	灰白色	B	頸～肩 60%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	—	(6.7)	—	ABDIN	褐灰色	B	頸～肩 60%	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	—	(9.6)	—	ABIK	褐灰色	B	頸～肩 80%	肩部内面輪積痕有。内外面所々磨耗。
5	弥生土器 壺	—	(12.3)	—	ABI	灰色 淡黄色	B	胴部 40%	内外面所々磨耗。No.34 と同一個体。
6	弥生土器 壺	—	(12.6)	—	ABDKN	灰白色	B	頸～胴 50%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 壺	—	(13.7)	—	ABDIN	淡黄色	B	肩～胴 45%	
8	弥生土器 壺	—	(17.3)	—	ABDIK	灰白色	B	胴部 30%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甕	(20.6)	(25.9)	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	口～胴 30%	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 甕	(22.0)	(14.35)	—	ABEHIK	黒色	B	口～胴 45%	内外面所々磨耗。
11	弥生土器 甕	(12.4)	(6.2)	—	AHK	黒色	B	口～胴 20%	
12	弥生土器 甕	—	(11.9)	—	ABDH	暗灰色	B	胴部 20%	内面大半、外面所々磨耗。
13	弥生土器 甕	14.3	(12.0)	—	ABHIN	黒色	B	口～胴 45%	内外面所々磨耗。
14	弥生土器 甕	(19.7)	(18.2)	7.5	ABHIK	褐灰色	B	50%	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 甕	(16.8)	(7.1)	—	ABIK	黒褐色	B	口～胴 20%	内外面磨耗顕著。P1 出土。
16	弥生土器 壺	—	(4.9)	6.9	ABHIJKN	灰黄褐色	B	胴～底 100%	P1 出土。
17	弥生土器 壺	—	(15.6)	7.5	ABHIK	暗灰色	B	胴～底 40%	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	(2.55)	(8.8)	BDEIKN	淡黄色	B	底部 45%	内面磨耗顕著。
19	弥生土器 壺	—	(3.65)	7.4	ABEHIN	黒色	B	底部 70%	
20	弥生土器 壺	—	(2.5)	7.3	ABDEIK	灰黄色	B	底部 100%	内面剥離顕著。
21	弥生土器 壺	—	(3.0)	5.5	ABCDIKN	灰褐色	B	底部 90%	
22	弥生土器 壺	—	(2.6)	4.1	ABCDIKN	黒色	B	底部 100%	P1 出土。
23	弥生土器 甕	—	(10.1)	5.9	ABHIN	褐灰色	B	胴～底 70%	内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 甕	—	(2.1)	(8.8)	ABDIKN	褐灰色	B	底部 50%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 甕	—	(2.9)	7.5	ABDHIM	暗灰黄色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	—	(3.7)	6.1	ABIKN	灰褐色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器高坏	—	(3.95)	—	ABHIJN	灰褐色	B	接合部 60%	内外面赤彩、ほぼ剥落。所々磨耗。
28	弥生土器高坏	—	(3.45)	5.6	ABEGIKN	にぶい橙色	B	接～脚 60%	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIK	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIK	浅黄色	B	頸部片	内外面やや磨耗。
31	弥生土器 壺	—	—	—	ABDI	浅黄色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
33	弥生土器 壺	—	—	—	ABHI	褐灰色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
34	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDI	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。No.5 と同一個体。
35	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
36	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	褐灰色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
37	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
38	弥生土器 壺	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	肩部片	
39	弥生土器 壺	—	—	—	AIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
40	弥生土器 壺	—	—	—	ABCH	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
41	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
42	弥生土器 壺	—	—	—	ABIN	オリーブ黒色	B	胴中段片	外面磨耗顕著。
43	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
44	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
45	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIJKN	暗灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
46	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	黒色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
47	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHI	灰黄色	B	口～胴上片	外面磨耗顕著。
48	弥生土器 甕	—	—	—	ABDI	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
49	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面所々磨耗。
50	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKMN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
51	弥生土器 甕	—	—	—	ABN	黒褐色	B	頸～胴中片	内外面磨耗顕著。
52	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内面やや磨耗。
53	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
54	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	オリーブ黒色	B	胴中～下片	内面大半、外面一部磨耗。
55	弥生土器 甕	—	—	—	ABIN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
56	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴中～下片	
57	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴中～下片	
58	弥生土器 甕	—	—	—	ABC	黄灰色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
59	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。No.60 と同一個体。P2 出土。
60	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。No.59 と同一個体。
61	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHI	黄灰色	B	口～胴上片	
62	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	胴上部片	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
64	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	にぶい黄色	B	胴上～中片	内外面やや磨耗。No65 と同一個体。
65	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	暗灰黄色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。No64 と同一個体。
66	弥生土器 甕	—	—	—	ADHKN	黒褐色	B	口～頸部片	外面輪積痕有。
67	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	
68	弥生土器高坏	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	口縁部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。突起有。
69	磨製石斧	最大長(4.4)cm、最大幅(6.6)cm、最大厚(1.5)cm。重量(60)g。刃部欠。緑色岩製。							
70	打製石器	最大長7.8cm、最大幅6.7cm、最大厚3.2cm。重量128g。完形。凝灰岩製。一部被熱。							

に向かってほぼ直線的に下る。いずれも最大径を口径に持つ。14は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、15は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。

23～26は胴部中段から底部までに収まる部位。23は内外面ともにヘラミガキ調整であり、胴部中段に5本一単位で縦位の羽状文が密に描かれている。24・25は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、26は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。24は底面に木葉痕がみられた。羽状文の施文された23以外は、壺の可能性もある。

46～57は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。46～48は口縁部から胴上部までに収まる破片。頸部に簾状文が巡る。口縁部外面は無文で46は上位が横位、下位は斜位、47・48は横位のヘラミガキ調整が施されている。47の胴上部は、磨耗顕著により不明である。48は口縁端部と口縁部内面に細かいR L単節縄文が施文されている。46～48の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。49～57は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。乱雑で密に描かれたものが多く、櫛歯のやや太いものと細いものがある。49～52は口縁部から胴部中段まで、53～57は胴部中段から下部までに収まる破片である。49～51は頸部に簾状文、52は直線文が巡る。50は櫛歯が7本と多い。49～51の口縁部外面は無文部は、すべて横位のヘラミガキ調整が施されている。56・57は羽状文下が無文で56は斜位、57は縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。49～57の内面調整は、49～52が横位、56・57は横・斜位のヘラミガキ、53～55は横・斜位のヘラナデである。58～60は振りの大きい波状文が施文された口縁部から頸部にかけての破片。58は1条の波状沈線、同一個体である59・60は2本一単位の波状文が巡る。いずれも口縁部に地文としてL R単節縄文が施文されており、59・60は端部まで縄文が施文されている。縄文以下は無文で横位のヘラミガキが施され、頸部は簾状文が巡る。58～60の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。

61・62は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。61は口縁部から胴上部にかけて、62は胴上部の破片である。61は口縁端部にR L単節縄文が施文され、頸部に簾状文が巡る。62は分かりづらいが、地文にL R単節縄文が施文されており、上位に円形刺突が3つ刻まれたボタン状貼付文が付く。61・62の内面調整は、61が横位、62は横・斜位のヘラミガキである。

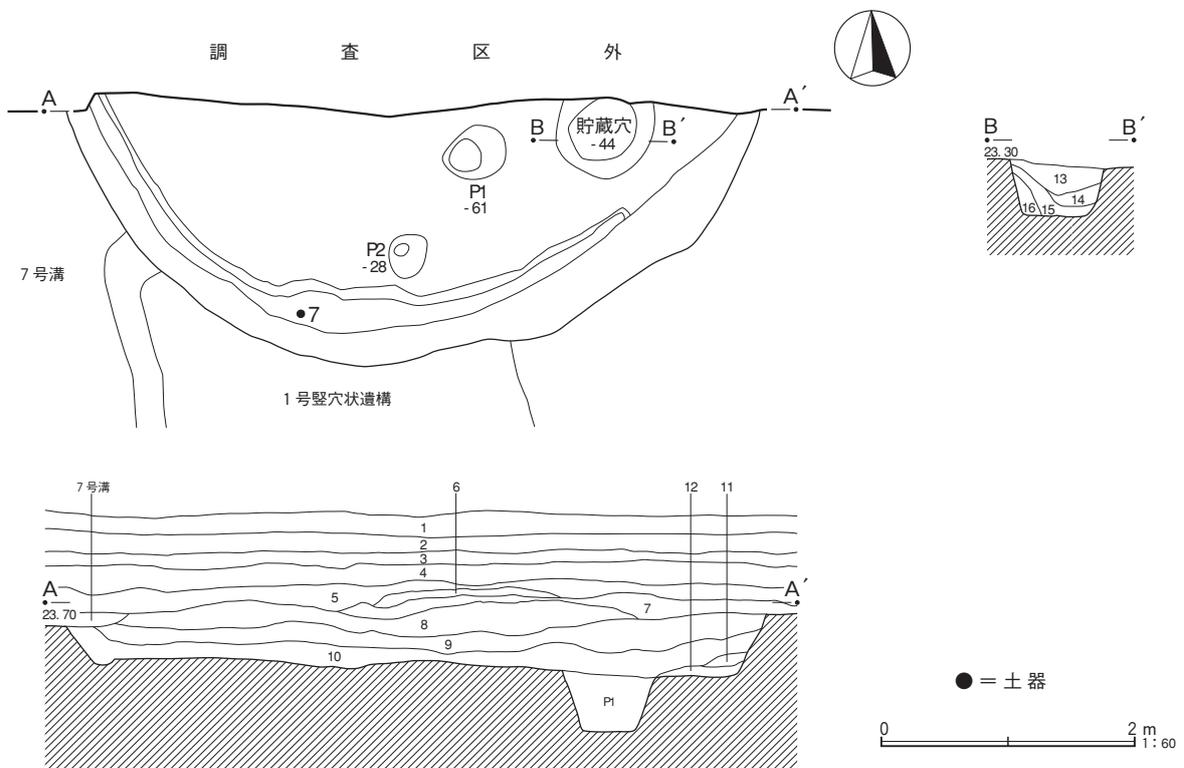
63～65は縄文が施文された破片。63は口縁部から頸部にかけて、64は胴上部から中段にかけて、65は胴部中段から下部にかけての破片である。63は磨耗が著しいため定かではないが、口縁端部にR L単節縄文か無節Rが施文されている。口縁部外面は無文で上位は横位、下位は斜位のヘラミガキ調整が施されている。64・65は同一個体。胴上部から中段にかけてR L単節縄文が施文されている。下部は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。63～65の内面調整は、63は横位のヘラミガキ、64・65は横位のヘラナデである。

66・67は口縁部から頸部にかけての破片。頸部に斜位のハケメ調整が施されている。66は口縁端部に刻みが施され、口縁部はハケメ調整との境に輪積痕が残る。内面調整は、横位のヘラナデである。67は複合口縁部外面が無文で、内面とともに横位のヘラミガキ調整が施されている。

27・28・68は高坏。27は接合部、28は接合部から脚部にかけての部位。28は脚部が短い。いずれも外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。27は外面及び坏部内面に赤彩が施されている。68は口縁部片。口縁部にやや縦長の短い突起が付く。内外面ともに横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

69は磨製石斧・扁平片刃石斧の基部。欠損箇所が多いが、両面に擦痕がみられた。緑色岩製。70は甲羅状を呈する用途不明の打製石器。完形。片面は自然面を大半残す。一部被熱していた。凝灰岩製。

本住居跡の時期は、重複する8号住居跡よりも新しい弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

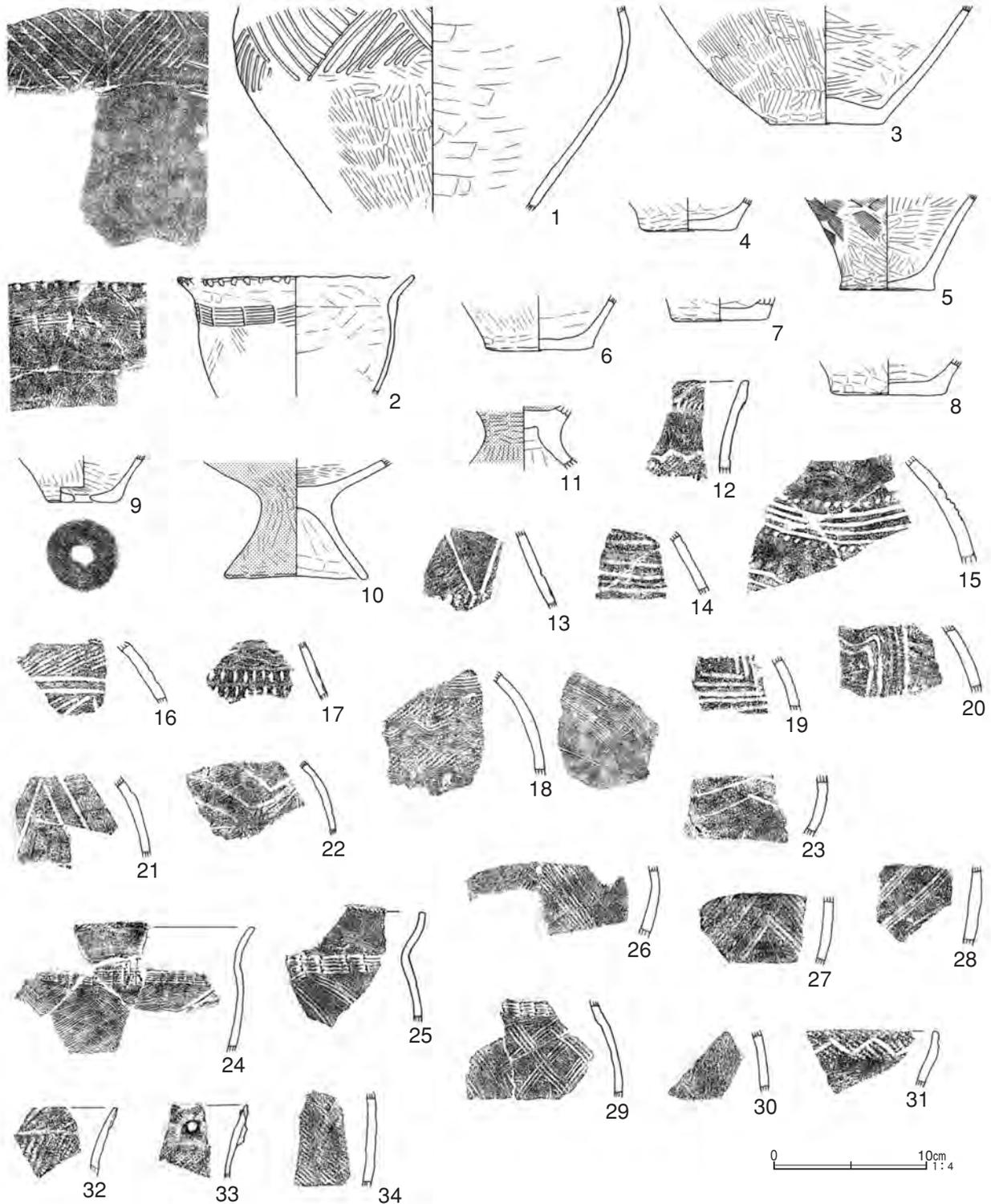


第10号住居跡

土層説明 (A A' B B')

- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1 耕作土 | 10 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。 |
| 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、白色粒少量含む。 | 11 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量含む。 |
| 3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。 | 12 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 4 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。 | 13 暗灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。 |
| 5 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。 | 14 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。 |
| 6 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。5層より暗い。 | 15 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。 |
| 7 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。 | 16 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。 |
| 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 | |
| 9 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 | |

第36図 第10号住居跡



第37図 第10号住居跡出土遺物

の他はすべて横位のヘラナデである。

2・5～8・24～34は甕。2は小型甕の口縁部から胴下部までの部位。短い口縁部がやや外反しながら開く。頸部はすぼまるが、胴部は下部に向かって内湾しながら下る。最大径を口径に持つ。文様は口縁端部に刻みが施され、頸部に6本一単位の簾状文が巡る。胴部は磨耗が著しいため定かではないが、縦位の羽状文が描かれている。外面無文部及び内面の調整は、ヘラナデである。5～8は胴下部から底部までの部位。5は外面上位がハケメ、下位及び内面はヘラミガキ、6・7は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、8は

第10号住居跡（第36図）

60・61-137グリッドに位置する。南西部で1号竪穴状遺構を切り、西側は南北に走る7号溝跡に壁の上位を切られている。南壁付近のみの検出であり、北側大半は調査区外にある。

正確な規模及び主軸方向は不明であるが、東西は5.7m程を測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.45m前後を測り、床面はやや東側に傾く。覆土は5層（8～12層）が該当する。混入物が多く見られたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは2基確認された。いずれもその位置から出入口に関連するものであろうか。覆土を図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

壁溝は南東隅以外検出された範囲内を全周する。幅は0.4m前後、床面からの深さは0.05m程を測る。

貯蔵穴は南東隅の調査区との境から確認された。北側立ち上がりが調査区外にあるが、径0.75m前後の円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.44mを測る。覆土は4層（13～16層）がレンズ状に堆積していたが、ブロックを多量含んでいたことから、埋め戻された可能性がある。

炉跡は確認されなかった。

出土遺物（第37図）は、弥生土器壺（1・3・4・12～23）、甕（2・5～8・24～34）、甑（9）、高坏（10・11）がある。床面直上から検出された遺物はなく、そのほとんどが覆土からの検出である。残存状態が比較的良好な1をはじめ、いくつかの遺物は、貯蔵穴から検出された。

1・3・4・12～23は壺。1は胴部中段から下部にかけての部位。胴部中段は丸みを帯びるが、以下は直線的に下る。文様は胴部中段に複合鋸歯文が描かれている。以下は無文でヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。3は胴下部から底部までの部位。内外面ともにヘラミガキ調整が施されているが、外面はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。4は底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。3・4は壺としたが、甕の可能性もある。

12は口縁部から頸部にかけての破片。肥厚した口縁部に無節Lが施文され、直下に爪形状を呈する刺突列が巡る。以下は斜位のヘラミガキ調整が施された無文部を挟んで波状沈線と無節Lが施文されている。内面調整は、横位のヘラミガキである。13は大振りの鋸歯文が描かれた肩部片。鋸歯文区画下にLR単節縄文が充填され、下に2本一単位の刺突列が巡る。内面調整は、横位のヘラナデである。14～18は平行沈線ないし櫛歯による直線文が巡る破片。肩部から胴上部までに収まる。14はやや太い平行沈線が複数巡る。15は無文部と複数の太い平行沈線が交互に配置され、上位の平行沈線4条は上下に半円形の刺突列が刻まれている。無文部の調整は、横位のヘラミガキである。16はLR単節縄文下に2条の太い平行沈線が巡り、以下に複合鋸歯文と思われる文様が描かれている。17は分かりづらいが、3条の平行沈線が等間隔に巡り、上位の沈線間は2条の波状沈線、下位の沈線間は爪形状の刺突列が巡る。18は4本一単位の直線文下に上からLR単節縄文、波状文、LR単節縄文の順に施文されている。以下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。19・20は重四角文が描かれた胴上部片。20は磨耗が著しいため定かではないが、やや乱雑に描かれている。21は重三角文が描かれた胴上部片。分かりづらいが、区画内にLR単節縄文と思われる縄文が充填されている。22・23は連弧文が描かれた破片。22は胴上部片、23は胴部中段から下部にかけての破片である。23は連弧文下が無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。14～23の内面調整は、18のみ上位が斜位のハケメ、下位が横位のヘラミガキ、そ

第11表 第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(13.65)	—	ABHK	灰白色	B	胴部 40%	内面磨耗顕著。貯蔵穴出土。
2	弥生土器 甕	(15.7)	(8.0)	—	ABGHIJN	にぶい赤褐色	B	口~胴 40%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	—	(7.9)	7.6	ABHI	黒褐色	B	胴~底 70%	内面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	—	(2.15)	6.3	ABCDI	灰黄色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 甕	—	(6.45)	6.3	ABIK	暗褐色	B	胴~底 80%	貯蔵穴出土。
6	弥生土器 甕	—	(3.6)	7.1	ABCGIK	淡黄色	B	底部 80%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	—	(1.6)	6.4	ABCDIM	灰褐色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 甕	—	(2.45)	7.6	ABCIKM	にぶい黄橙色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甕	—	(3.1)	4.9	ABIK	橙色	B	底部 90%	底面焼成前穿孔。内外面所々磨耗。貯蔵穴出土。
10	弥生土器高坏	—	(8.1)	(9.5)	ABEIKN	褐色	B	坏~脚 40%	外面赤彩。内外面磨耗顕著。
11	弥生土器高坏	—	(4.25)	—	ABIK	赤褐色	B	接合部 90%	内外面赤彩。
12	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIK	橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰白色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABGIK	褐灰色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
15	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
16	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。貯蔵穴出土。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	褐灰色	B	胴上部片	
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIJKN	褐灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJN	にぶい褐色	B	胴中~下片	内面磨耗顕著。
24	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEI	褐色	B	口~胴上片	内面所々磨耗。
25	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	口~胴上片	貯蔵穴出土。
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	褐灰色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
27	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	浅黄色	B	胴中段片	貯蔵穴出土。
29	弥生土器 甕	—	—	—	AIK	黒褐色	B	頸~胴上片	内面やや磨耗。貯蔵穴出土。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	口~頸部片	
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	褐灰色	B	口~頸部片	内外面やや磨耗。
34	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。

内外面ともにヘラナデ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。

24~30は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。24~27は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。24のみ櫛歯が細く、25以外は密に描かれている。24・25は口縁部から胴上部にかけて、26・27は胴部中段の破片である。24・25は口縁端部に24がL R、25はR L単節縄文が施文され、頸部に簾状文が巡る。口縁部外面の無文部は、いずれも横位のヘラミガキ調整が施されている。28は横位の羽状文が描かれた胴部中段の破片。櫛歯の単位が3本と少なく、間隔を空けて描かれている。29は胴部に斜格子文が描かれた頸部から胴上部にかけての破片。頸部に簾状文が巡り、斜格子文はやや乱雑に描かれている。30は分かりづらいが、振りの大きい波状文が巡る胴上部片。乱雑に描かれている。24~30の内面調整は、24・25・28~30が横位のヘラミガキ、26・27は横位のヘラナデである。

31~34は縄文が施文された破片。31~33は口縁部から頸部にかけて、34は胴部中段の破片である。縄文は31・34がR L、32・33がL R単節縄文である。31は端部を含む口縁部に縄文が施文され、山形文が巡る。頸部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。32はやや肥厚した口縁部以下全面に縄文が施文されている。33は頸部以下に縄文が施文されており、口縁端部は指頭圧痕が施され、口縁部は中央が窪んだボタン状貼付文が付く。31~34の内面調整は、31・32が横位のヘラミガキ、33・34は横位のヘラナデである。

9は甌の底部。内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。底面に焼成前穿孔がみられた。

10・11は高坏。10は坏部下位から脚部までの部位、11は接合部である。10の脚部はハの字に開く。いずれも外面及び坏部内面はヘラミガキと赤彩、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

第11号住居跡（第38・39図）

64・65-137・138グリッドに位置する。東側から南側にかけて12号住居跡を切っている。北東隅及び西壁中央付近は調査区外にあり、南壁中央付近を後世の攪乱により一部欠く。

正確な規模は不明であるが、長軸がおよそ6.1m、短軸は5.3mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-27°-Wを指す。確認面からの深さは0.55m前後を測り、床面はほぼ平坦であった。覆土は11層（1～11層）確認された。焼土や炭化物等混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央よりやや北側に位置する。長軸0.65m、短軸0.52mのいびつな楕円形を呈し、床面からの深さは0.12mを測る。覆土は2層（12・13層）確認された。

ピットは9基確認された。P1～4は支柱穴に相当するが、P1・4周囲に位置するP5～9は、浅いことから補佐するための柱穴であろうか。いずれも覆土は図示できなかったが、柱痕跡は確認されなかった。

壁溝は調査区外や攪乱により一部確認できない箇所があるが、おそらく全周すると思われ、南東隅はやや壁から離れて走り、貯蔵穴に接続している。幅は0.3m前後、床面からの深さは0.1m程である。

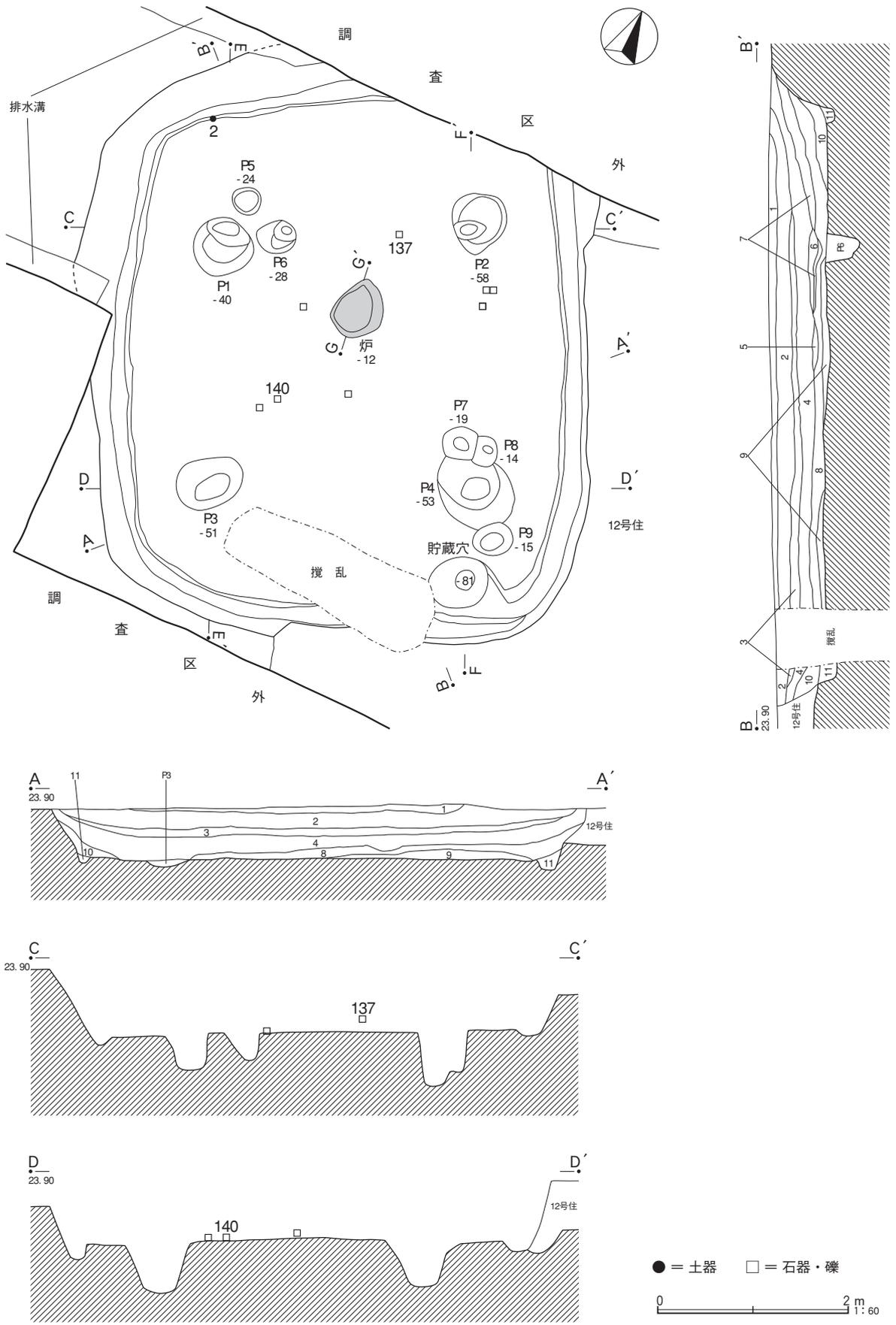
貯蔵穴は南東隅に位置する。径0.55m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.81mと深い。覆土は図示できなかったが、炭化物を含む灰色系の土が数層レンズ状に堆積していた。

出土遺物（第40～44図）は、弥生土器壺（1～4・14～21・49～66）、広口壺（5・22）、甕（6～13・23～38・67～132）、甌（39）、高坏（40～44・133・134）、鉢（45～47）、ミニチュア土器（48）、打製石斧（135）、搔器（136・137）、打製石器（138）、磨石（139～143）、打製石鏃（144）、石製有孔円盤（145）、石製勾玉（146）がある。遺物量が多いが、残存状態の良好なものは少ない。そのほとんどが覆土から検出された。

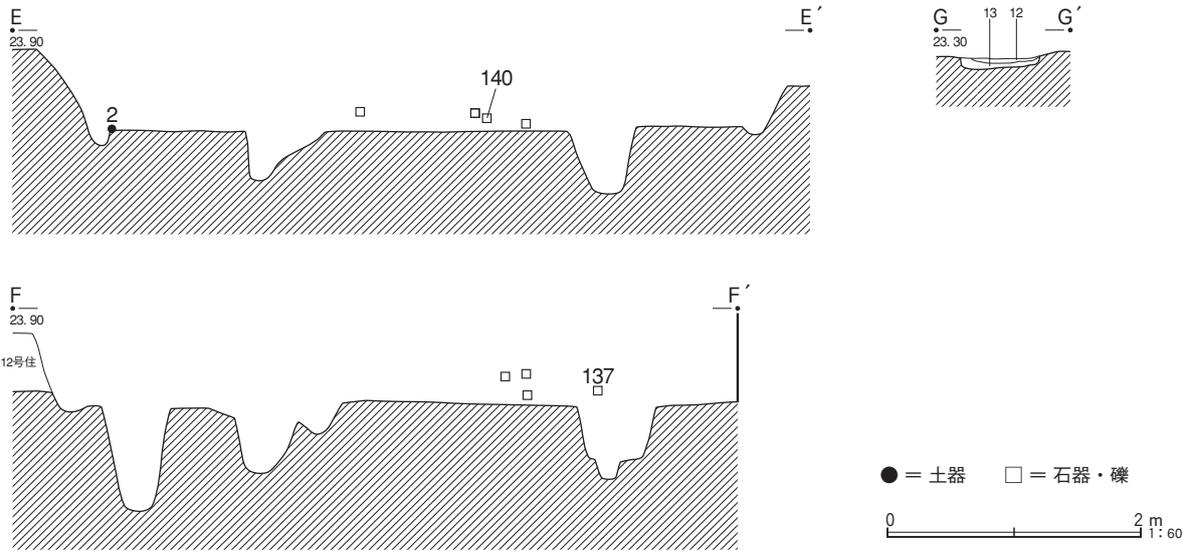
1～4・14～21・49～66は壺。1は小型壺の口縁部から頸部にかけての部位。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、頸部はほぼ直立する。無文で内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。2は口縁部を欠くが、残存状態が良好である。頸部が太く、肩部から胴部が詰まった算盤玉状を呈する。無文で内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。胴下部外面に輪積痕が残る。胎土が粗い。3は胴上部から下部にかけての部位。胴部中段が膨らみ、やや算盤玉状を呈する。文様は胴部中段に平行沈線4条と連弧文4条が巡る。胴上部及び下部は無文でヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。4は胴部中段から下部にかけての部位。胴部中段から下部に向かって直線的に下る。無文で外面はヘラミガキ調整が施されているが、ヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。内面調整は、ハケメ及びヘラナデである。

14～21は胴下部から底部までの部位。壺としたが、甕の可能性もある。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が主体となるが、16のみ内外面ともにヘラミガキ調整が施され、底部付近はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。14・19は胎土が粗い。17は底面にヘラによる刻みがみられた。

49・50は口縁部から頸部までに収まる破片。49はLR単節縄文下に2本一単位の刺突列が巡る。以下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。50は分かりづらいが、頸部に平行沈線が巡る。口縁



第 38 図 第 11 号住居跡 (1)



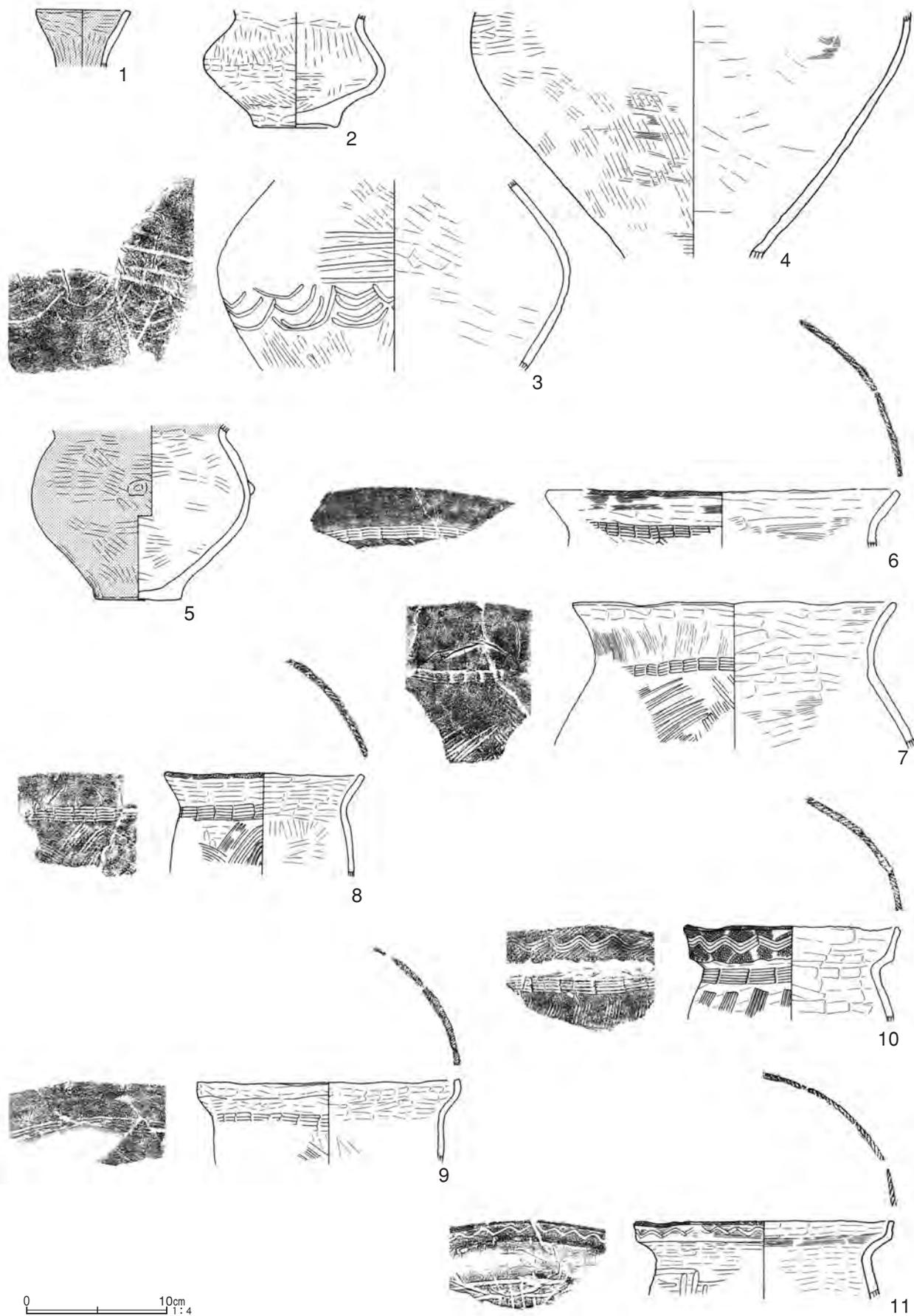
第11号住居跡

土層説明 (A A' B B' G G')

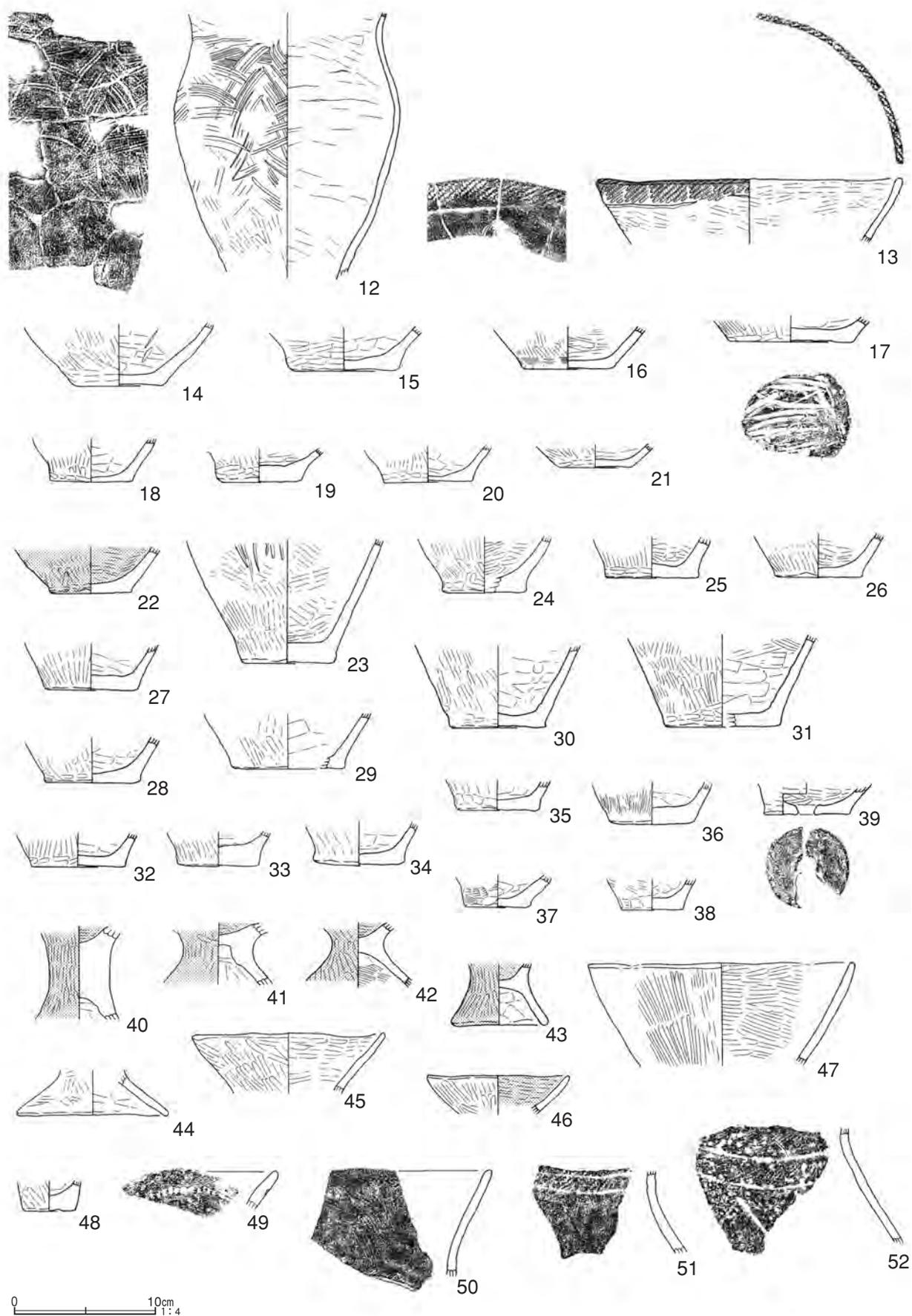
- | | |
|---|--|
| <p>1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。</p> <p>2 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒、灰白色粒少量含む。</p> <p>3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒少量含む。</p> <p>4 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒・ブロック、炭化物少量含む。</p> <p>5 炭化物層：焼土、灰多量含む。</p> <p>6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。</p> <p>7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> | <p>8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>9 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色土少量含む。下層に炭化物が帯状に薄く堆積。</p> <p>10 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>11 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> <p>12 焼土層</p> <p>13 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒少量含む。</p> |
|---|--|

第 39 図 第 11 号住居跡 (2)

部は無文で斜位のハケメ調整後、部分的に横位のヘラミガキが施されている。49・50の内面調整は、横位のヘラミガキである。51～56は頸部から肩部までに収まる破片。51～54はLR単節縄文が施文され、51～53は平行沈線が巡る。51は肩部が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されているが、所々にヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。52は平行沈線下に鋸歯文が描かれている。磨耗が著しいため定かではないが、鋸歯文区画下にLR単節縄文が充填されている。53は平行沈線下の肩部まで縄文が施文されている。下位は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。54は縄文帯以下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。55は無文で全面斜位のハケメ調整が施されている。56は等間隔に巡る4条の平行沈線間に縦長の楕円形状を呈する刺突列が刻まれている。上下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。51～56の内面調整は、51・54が横・斜位、55は横位のヘラミガキ、52・53・56は上位が横位のヘラミガキ、下位が斜位のヘラミガキである。57～60は刺突列が施された胴上部片。57～59は2本一単位の刺突列が巡る。57は刺突列上が無文で横位のヘラミガキ調整が施されており、下はLR単節縄文が施文されている。58は刺突列上に細い平行沈線が巡り、間にLR単節縄文が施文されている。平行沈線上と刺突列下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。59は平行沈線が3条巡り、最下の沈線間に刺突列が刻まれている。平行沈線上下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。60は段上に円形の刺突列が2列巡り、地文にLR単節縄文が施文されている。段下は無文で横位のヘラミガキ調整が施



第40图 第11号住居跡出土遺物(1)



第41图 第11号住居跡出土遺物(2)

されている。57～60の内面調整は、すべて横位のヘラナデであり、59は輪積痕が残る。61～64は沈線で様々な文様が描かれた胴上部片。61は上位に懸垂文と思われる文様が描かれ、下に平行沈線2条が巡る。懸垂文内及び平行沈線間はL R単節縄文が充填されている。無文部の調整は、横位のヘラミガキである。62は無節R地に王子状の文様が描かれている。63は連弧文が描かれており、幅広沈線間にL R単節縄文が充填されている。64は重四角文が描かれている。61～64の内面調整は、61が横・斜位、62は斜位、63・64は横位のヘラナデである。65は胴部中段にL R単節縄文が施文された破片。縄文帯上下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、上位が横位のヘラミガキ、中段は横位、下位は斜位のヘラナデである。66は胴部中段から下部にかけての破片。胴部中段にL R単節縄文と平行沈線が施文され、以下は無文で内面とともに斜位のハケメ調整が施されている。

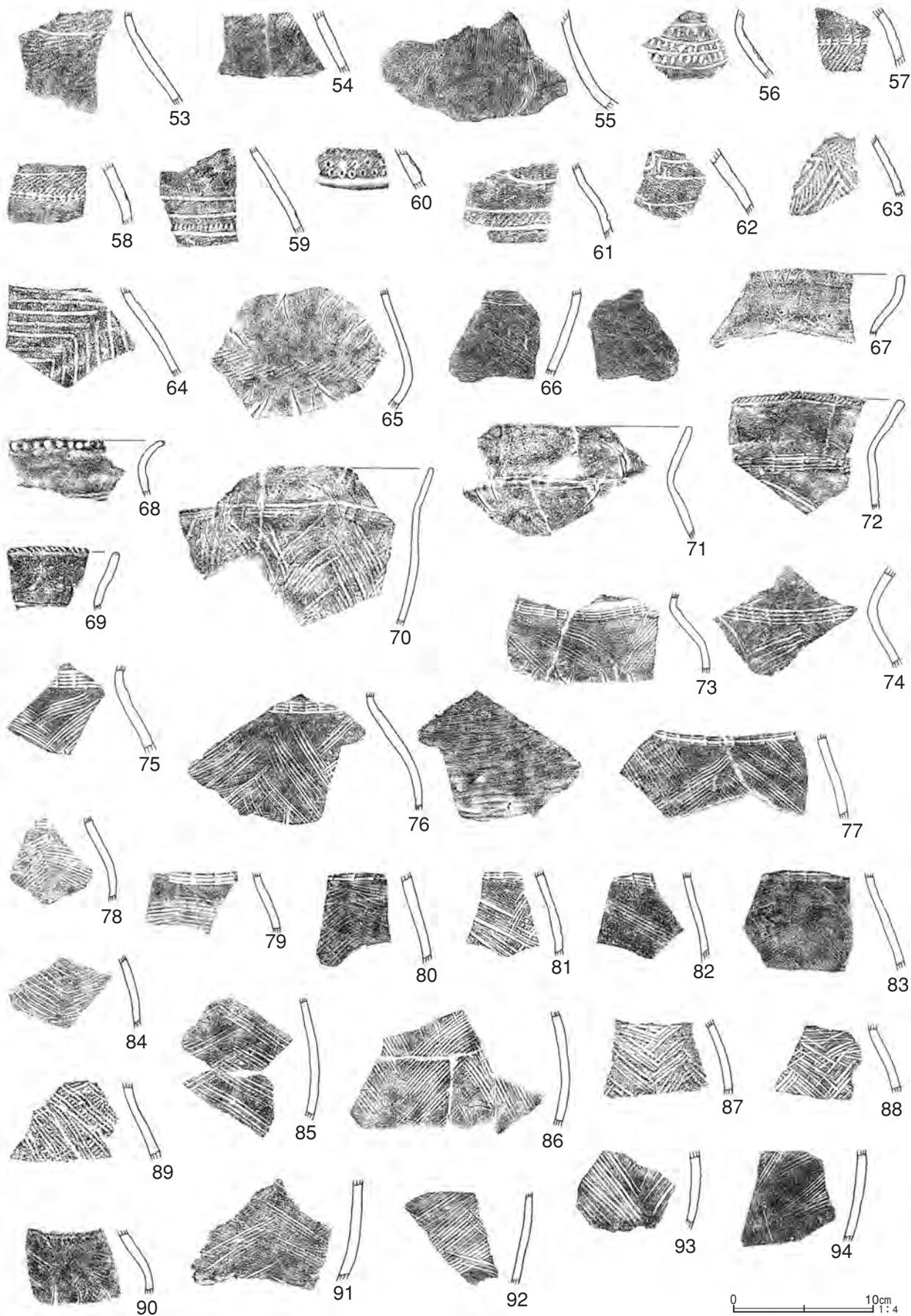
5・22は広口壺。5は口縁部を欠く。頸部以下は詰まった球形を呈する。胴部中段にボタン状貼付文が付く。内外面ともにヘラミガキ調整が施され、赤彩は外面全面、内面は頸部まで施されている。22は底部。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。広口壺としたが、鉢の可能性もある。

6～13・23～38・67～132は甕。6～10・12は櫛歯状工具で文様が描かれている。櫛歯の単位は4～5本である。6～10は頸部に簾状文が巡り、6～10・12は胴上部に羽状文が描かれている。6～10は口縁部から胴上部までに収まる部位。6は短い口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。頸部以外の文様は、口縁端部にL R単節縄文が施文され、胴上部に縦位の羽状文と思われる文様が描かれている。口縁部外面の無文部及び内面は、ハケメとヘラナデ調整が施されている。7は口縁部がやや外反しながら開き、頸部はすぼまり、胴上部が大きく膨らむ。胴上部の羽状文は縦方向に密に描かれている。口縁部外面の無文部は、上位が横位のヘラナデ、下位は縦位のハケメ調整が施されている。内面調整は、ハケメとヘラナデである。8は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。頸部はすぼまり、胴部の膨らみが小さい。頸部以外の文様は、口縁端部にL R単節縄文が施文され、胴上部の羽状文は縦方向に乱雑に描かれている。外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。9は口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまり、以下ほぼ直線的に下る。頸部以外の文様は、口縁端部にカナムグラによる擬縄文が施文され、胴上部の羽状文は縦位に描かれている。外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。10は口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまり、胴上部が膨らむ。頸部以外の文様は、端部を含む口縁部にL R単節縄文が施文され、3本一単位の比較的丁寧な波状文が巡る。胴上部の羽状文は横方向にやや間隔を空けて描かれている。文様施文前の外面及び内面の調整は、ヘラナデである。11は口縁部から胴上部までの部位。口縁部は受け口状を呈し、頸部がすぼまり、胴上部はやや膨らむ。文様は口縁端部にR L単節縄文が施文され、口縁部に山形文に近い波状沈線が巡る。胴上部は太い沈線でコの字重ね文が描かれている。口縁部は波状沈線施文前に施されたハケメが残り、頸部はヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、頸部のみハケメ、その他はヘラミガキである。12は頸部から胴下部までの部位。頸部がすぼまり、胴部は上位が膨らみ、下位に向かってやや内湾しながら下る。文様は乱雑に描かれている。頸部は2本一単位の波状を呈する直線文が巡り、胴部は縦位の羽状文が乱雑に描かれている。胴上部外面は羽状文施文前に施されたハケメが残り、胴下部はヘラミガキ調整が施されている。内面調整はヘラナデであり、所々に輪積痕が残る。13は口縁部から頸部までの部位。やや内湾しながら立ち上がる。文様は端部を含む口縁部に無節Lが施文されており、輪積痕を挟んで無文となる。頸部

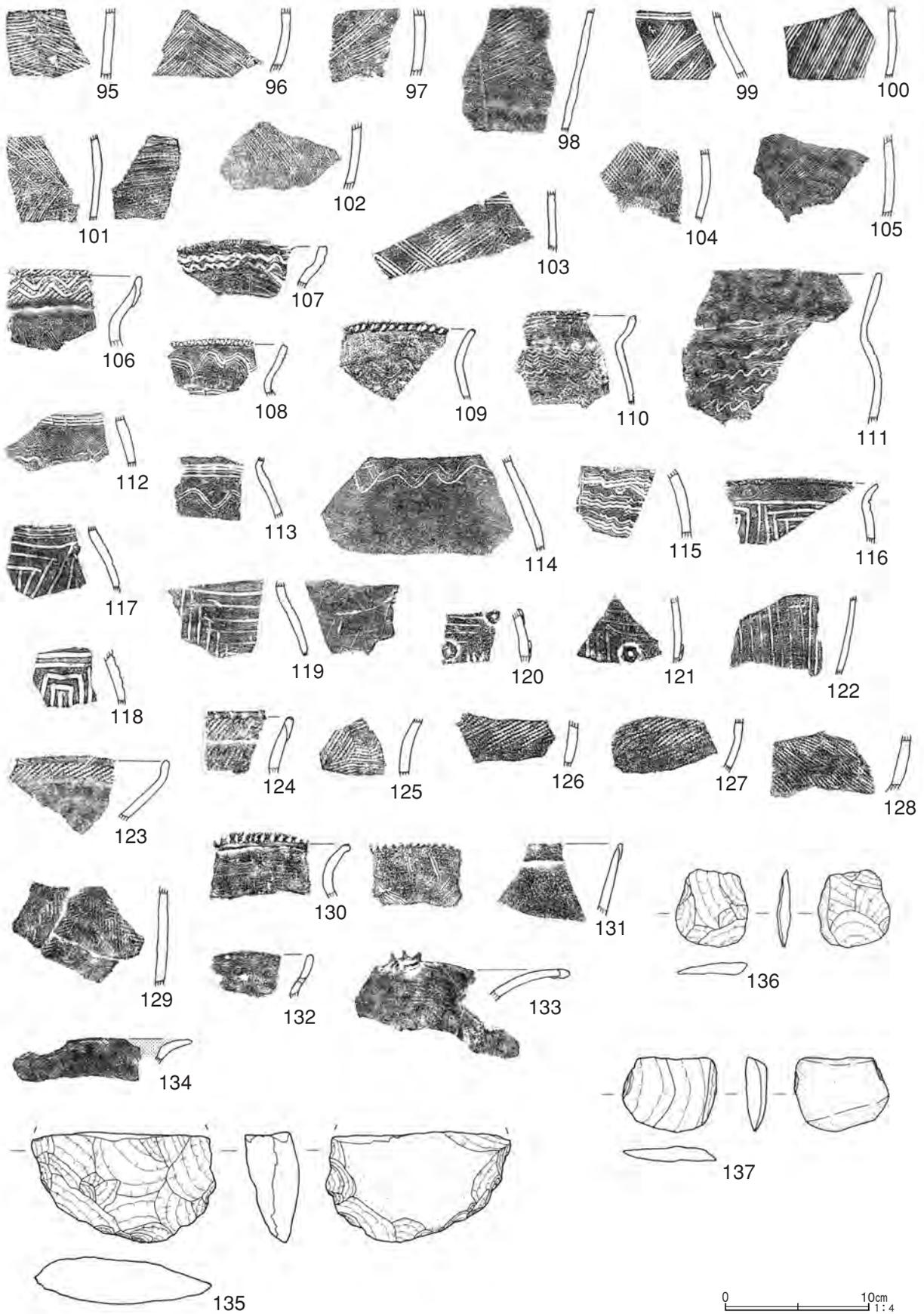
外面の無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。

23～38は胴下部から底部までの部位。23～26は内外面ともにヘラミガキ、27～33は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、34・35は内外面ともにヘラナデ、36～38は外面がハケメ、内面はヘラナデ調整が施されている。23は上位にコの字重ね文と思われる文様が描かれている。31は内面にハケメ調整が一部みられた。33～35は胎土が粗い。23以外は壺の可能性もある。

67～115は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4本前後で、乱雑に描かれたものが多い。また、櫛歯は細いものと太いものがある。67～69は頸部に簾状文が巡る口縁部から頸部にかけての破片。68・69は口縁端部に刻みが施されている。口縁部外面はすべて無文で67・69は上位が横位、下位が斜位、68は横位のヘラミガキ調整が施されている。70～98は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。櫛歯の太いものも多く、羽状文はやや間隔を空けるものと密に描かれるものがあるが、後者が目立つ。70～72は口縁部から胴部中段にかけて、73～83・90は頸部から胴上部にかけて、84～89は胴上部から中段まで91～97は胴部中段、98は胴部中段から下部にかけての破片である。70～83は頸部に簾状文、90は振りの小さい波状文が巡る。70～72の口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。72は口縁端部にL R単節縄文が施文されている。75・79～81・88・89・91・92・94は羽状文施文前に施されたハケメ調整が残る。分かりづらいものもあるが、75・80・81・89・91・92・94は斜位、79は縦・斜位、88は横位に施されている。87～89は櫛歯の単位が3本と少ない。98は羽状文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。70～98の内面調整は、70～75・77～80・83・86・91・92・94～98が横位、81・84・88～90は横・斜位、82・85は斜位のヘラミガキ、76は横・斜位のハケメ、87・93は磨耗顕著により不明である。70は頸部内面、72は口縁部外面、75は胴上部内面に輪積痕が残る。99～102は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。密に描かれたものも多く、櫛歯は細いものと太いものがある。99は頸部から胴上部にかけて、100～102は胴部中段の破片である。99は頸部に簾状文が巡る。99～102の内面調整は、101のみ横位のハケメ、その他は横位のヘラミガキである。103～105は胴部に斜格子文が描かれた破片。104は斜格子文が比較的丁寧な描かれているが、その他は乱雑である。櫛歯は105のみ細く、その他はやや太い。103は頸部から胴上部にかけて、104・105は胴部中段の破片である。103は頸部に簾状文が巡る。103～105の内面調整は、103・105が横位のヘラミガキ、104は横・斜位のヘラナデである。106～115は波状文が描かれた破片。乱雑で振りが小さく、櫛歯の細いものが多い。106～111は口縁部から胴部中段まで、112～115は頸部から胴上部までに収まる。106～108は口縁部に波状文が巡る。106・107は櫛歯がやや太く、2本と少ない。端部にL R単節縄文が施文されており、106は口縁部にも施文されている。いずれも頸部は無文で106は上位が横位、下位が斜位、107は横位のハケメ調整が施されている。108は波状文の振りが大きい、非常に乱雑である。口縁端部にオオバコによる擬縄文が施文されており、頸部は簾状文が巡る。109・110は頸部以下に波状文が複数巡る。109は振りがやや大きい。口縁端部に刻みが施され、口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。110は分かりづらいが、口縁部上位に3本一単位の簾状文が巡り、以下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。111～115は胴上部に波状文が巡る。111～113は頸部に簾状文が巡る。111は分かりづらいが、振りの一定しない乱雑な波状文が複数巡る。口縁部は無文で上位が横位、下位は斜位のハケメが施されている。112は波状文の振りが小さく、113は大きい。112は地文に細かいR L単節縄文が施文されている。114は波



第 42 图 第 11 号住居跡出土遺物 (3)



第 43 图 第 11 号住居跡出土遺物 (4)

状文の振りがやや大きく、乱雑である。波状文下は無文で斜位のハケメ調整が施されている。115は櫛歯が比較的太く、振りの小さい波状文が乱雑に複数巡る。波状文脇は直線文が垂下する。106～115の内面調整は、106・108～113・115が横位、114は横・斜位のヘラミガキ、107は図示しなかったが、口縁部が横位のヘラミガキ、頸部が横位のハケメである。

116～122は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。118のみ沈線が太い。116は口縁部から胴上部にかけて、117～121は頸部から胴上部まで、122は胴部中段の破片である。116は分かりづらいが、口縁端部にRL単節縄文と思われる縄文が施文されており、口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。117は頸部に簾状文が巡る。120・121は中心に円形刺突の施されたボタン状貼付文が付く。いずれもコの字中央に付くが、120は文様間頂点にも付く。116～122の内面調整は、119のみ頸部が横位のヘラミガキ、以下は斜位のハケメであるが、その他は横位のヘラミガキである。119は内面に輪積痕が残る。

123～129は縄文が施文された破片。123～125は口縁部から頸部まで、126～129は胴部中段から下部までに収まる破片である。縄文は、123・124・126・127がLR、128のみRL単節縄文、125・129は無節Lである。123は口縁部に縄文が施文され、頸部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。124は口縁端部に刻みが施され、縄文は複合口縁部を含む外面全面に施文されている。126・127は縄文下が無文で126は斜位のハケメ、127は斜位のヘラミガキ調整が施されている。123～129の内面調整は、127・129が磨耗顕著により不明であるが、その他は横位のヘラミガキである。

130～132は、ほぼ無文の口縁部から頸部にかけての破片。130は口縁部内面の端部に刻みが施されている。調整は外面上位が横位、下位が斜位のハケメ、内面は横位のヘラミガキである。131・132は全面無文である。131は複合口縁部外面及び内面は横位、頸部外面は斜位のヘラミガキが施されている。132は内外面ともに横位のヘラミガキが施されている。頸部に焼成前穿孔が1つみられた。

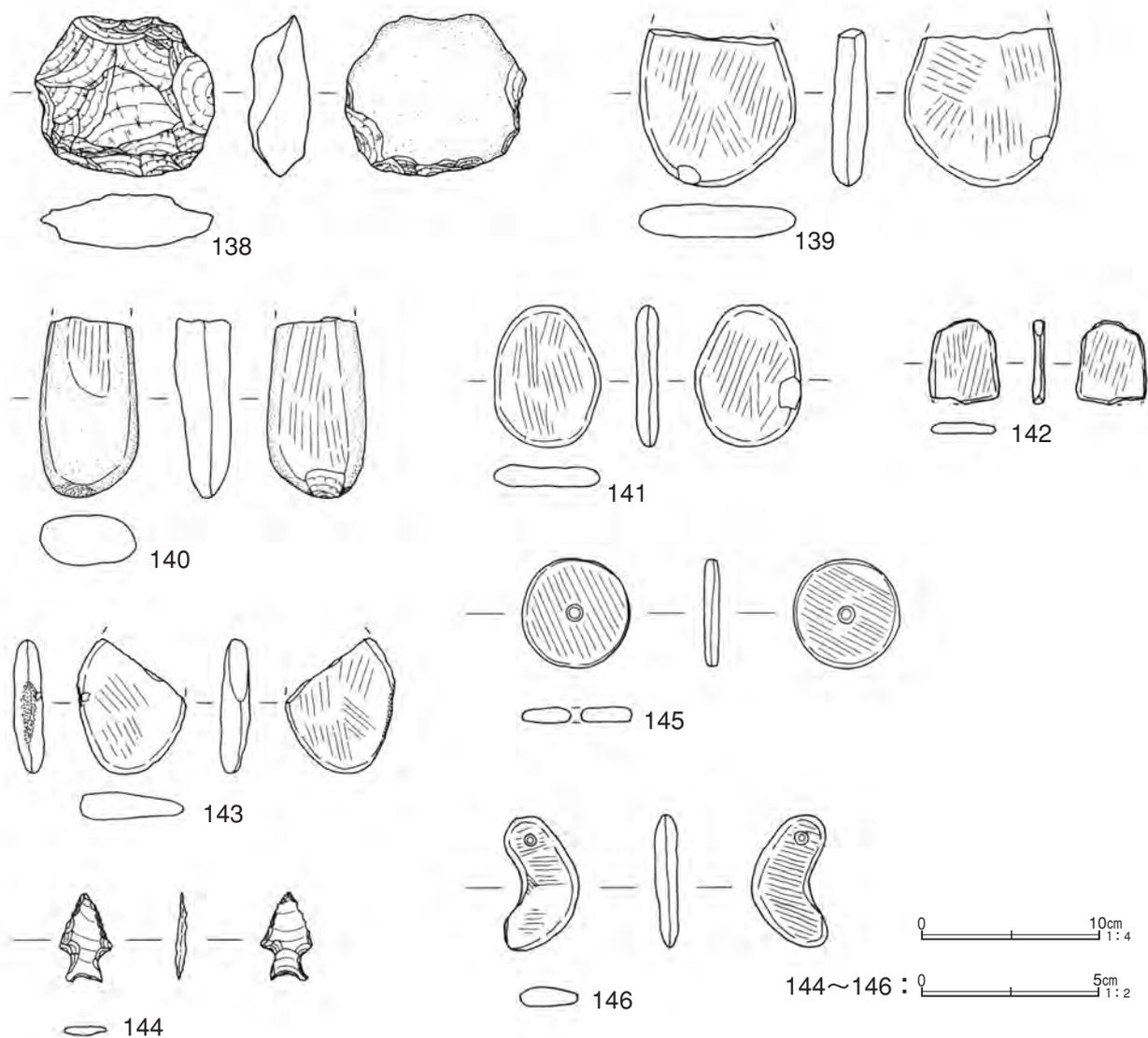
39は甑の底部。内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。底面に焼成前穿孔がみられた。

40～44・133・134は高坏。40～42は接合部、43は接合部から脚部までの部位、44は脚部である。40の接合部のみ細長く、柱状を呈する。43・44は脚部が短い、43に比べて44は大きく開く。いずれも外面及び坏部内面はヘラミガキ調整が施され、脚部内面は42のみハケメ、その他はヘラナデ調整が施されている。44以外赤彩が施されている。133・134は口縁部片。133は口縁端部に三個一対の突起が付く。外面調整は、上位が横位のハケメ、下位は斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキである。134は内外面ともに横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

45～47は鉢。すべて口縁部から体部までの部位である。47のみ大型である。45はやや受け口状を呈し、46・47はやや内湾する。いずれも内外面ともにヘラミガキ調整が施され、46のみ内面に赤彩がみられた。

48はミニチュア土器の底部。厚底で外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。

135は打製石斧の刃部。基部を欠くが、分胴形を呈すると思われる。片面に自然面を残す。ホルンフェルス製。136・137は搔器。ともに完形で粘板岩製。136はほぼ両面加工されており、137は片面に自然面を残す。138は用途不明の甲羅状を呈する打製石器。完形。片面に自然面を残す。粘板岩製。139～143は磨石。いずれも欠損箇所があるが、扁平で円盤状を呈するものが多い。すべて砂岩製で、二面使用されている。140・143は敲打器を兼ねる。140は片端、143は片側側面に敲打痕が認められた。143は被熱



第44図 第11号住居跡出土遺物(5)

第12表 第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	6.6	(4.1)	—	ABH	にぶい橙色	B	口~頸100%	内外面赤彩、大半剥落。
2	弥生土器 壺	—	(8.3)	6.0	ABHIKN	にぶい橙色	B	頸~底60%	胴下部外面輪積痕有。内外面磨耗顯著。
3	弥生土器 壺	—	(13.55)	—	ABCIKN	橙色	B	胴部20%	内外面磨耗顯著。
4	弥生土器 壺	—	(17.6)	—	ABDHIN	暗灰色 淡黄色	B	胴部70%	内面剥離、外面磨耗顯著。
5	弥生土器 広口壺	—	(12.4)	6.1	ABGIKN	黒褐色	B	頸~底50%	内外面赤彩。所々磨耗。
6	弥生土器 甕	(25.0)	(4.05)	—	ABEIKN	黒褐色	B	口~頸15%	
7	弥生土器 甕	(22.8)	(10.4)	—	ABEHI	灰褐色	B	口~胴30%	内外面磨耗顯著。
8	弥生土器 甕	(14.2)	(7.3)	—	ABHI	黄灰色	B	口~胴25%	
9	弥生土器 甕	(18.7)	(5.8)	—	ABIK	暗灰黄色	B	口~胴20%	内外面磨耗顯著。
10	弥生土器 甕	(15.2)	(6.7)	—	ABIKN	黒褐色	B	口~胴25%	
11	弥生土器 甕	(18.2)	(5.6)	—	AHK	黒色	B	口~胴20%	
12	弥生土器 甕	—	(19.15)	—	BDHIN	黒褐色	B	頸~胴40%	胴部内面輪積痕有。内外面磨耗顯著。
13	弥生土器 甕	(22.0)	(4.7)	—	ABCDHIN	浅黄橙色	B	口~頸25%	口縁部外面輪積痕有。内外面磨耗顯著。
14	弥生土器 壺	—	(4.5)	6.4	AHIKN	黒色	B	胴~底80%	外面磨耗顯著。
15	弥生土器 壺	—	(3.2)	7.7	ABCHIK	黄灰色	B	底部90%	内面磨耗顯著。
16	弥生土器 壺	—	(3.1)	6.4	ABHK	灰黄色	B	底部80%	
17	弥生土器 壺	—	(1.9)	(8.9)	ABDIK	黒色	B	底部30%	
18	弥生土器 壺	—	(3.2)	5.9	ABDI	淡黄色	B	底部90%	内面やや磨耗。P6出土。
19	弥生土器 壺	—	(2.55)	6.0	ABCIN	浅黄橙色	B	底部100%	内外面磨耗顯著。
20	弥生土器 壺	—	(2.6)	(6.4)	ABGHIK	黄灰色	B	底部50%	内外面やや磨耗。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
21	弥生土器 壺	—	(1.7)	5.3	ABDGHN	淡黄色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 口壺	—	(3.4)	5.8	ABHIK	黒褐色	B	底部 70%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
23	弥生土器 甕	—	(8.9)	6.7	BEHI	黒褐色	B	胴～底 80%	内外面やや磨耗。
24	弥生土器 甕	—	(4.05)	6.2	ABHIK	褐灰色	B	胴～底 50%	内面やや磨耗。
25	弥生土器 甕	—	(3.0)	6.7	ABDIK	褐灰色	B	底部 55%	
26	弥生土器 甕	—	(3.2)	6.3	ABIK	淡黄色	B	底部 45%	内外面やや磨耗。
27	弥生土器 甕	—	(3.45)	(6.6)	ABEI	にぶい黄橙色	B	底部 50%	内外面磨耗顕著。
28	弥生土器 甕	—	(3.3)	6.9	ABHIKN	黄灰色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
29	弥生土器 甕	—	(4.0)	8.1	ABDIK	にぶい橙色	B	底部 50%	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 甕	—	(5.95)	6.8	BDIN	にぶい橙色	B	胴～底 40%	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 甕	—	(6.6)	8.2	ABDI	灰黄褐色	B	胴～底 50%	
32	弥生土器 甕	—	(2.4)	6.7	ABCHIK	黒褐色	B	底部 100%	内面磨耗顕著。
33	弥生土器 甕	—	(2.5)	(5.8)	ABCHIKN	灰褐色	B	底部 50%	内外面磨耗顕著。
34	弥生土器 甕	—	(3.1)	6.4	ABDEHIKN	暗褐色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 甕	—	(2.2)	5.8	ADIKM	暗褐色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
36	弥生土器 甕	—	(3.1)	6.1	ABIK	黒褐色	B	底部 90%	内外面やや磨耗。
37	弥生土器 甕	—	(2.35)	4.7	BCJK	橙色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
38	弥生土器 甕	—	(2.2)	4.4	ABIKN	にぶい橙色	B	底部 100%	外面磨耗顕著。
39	弥生土器 甗	—	(2.2)	6.1	ABHIK	灰黄色	B	底部 90%	底面焼成前穿孔。
40	弥生土器 高坏	—	(6.7)	—	BIN	浅黄橙色	B	接合部 100%	内外面赤彩、ほぼ剥落。やや磨耗。
41	弥生土器 高坏	—	(4.45)	—	ABDIK	にぶい褐色	B	接合部 80%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
42	弥生土器 高坏	—	(4.65)	—	ACGHI	褐灰色	B	接合部 70%	内外面赤彩大半剥落。P3 出土。
43	弥生土器 高坏	—	(4.5)	(7.0)	ABIK	暗灰色	B	接～脚 50%	内外面赤彩、ほぼ剥落。やや磨耗。
44	弥生土器 高坏	—	(3.3)	(10.8)	ABEHK	橙色	B	脚部 45%	内外面磨耗顕著。
45	弥生土器 鉢	(13.8)	(4.4)	—	BDN	浅黄橙色	B	口～体 90%	内面磨耗顕著。
46	弥生土器 鉢	(10.2)	(2.8)	—	ABHK	黄灰色	B	口～体 20%	内面赤彩。内外面磨耗顕著。
47	弥生土器 鉢	(19.2)	(7.4)	—	ABHIK	黒色・灰黄色	A	口～体 15%	外面所々磨耗。
48	弥生土器 ミニチュア	—	(2.2)	(3.8)	ABEIKN	にぶい橙色	B	底部 40%	内外面磨耗顕著。
49	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
50	弥生土器 壺	—	—	—	ABDE	浅黄橙色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
51	弥生土器 壺	—	—	—	BEKN	浅黄橙色	B	頸～肩部片	外面やや磨耗。
52	弥生土器 壺	—	—	—	ABEN	浅黄橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
53	弥生土器 壺	—	—	—	ABDH	浅黄橙色	B	頸～肩部片	内外面やや磨耗。
54	弥生土器 壺	—	—	—	ABH	灰黄色	B	肩部片	
55	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	浅黄橙色	B	頸～肩部片	外面やや磨耗。
56	弥生土器 壺	—	—	—	ABDN	にぶい橙色	B	頸～肩部片	
57	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHN	にぶい橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著
58	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	浅黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
59	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面輪積痕有。内外面やや磨耗。
60	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著
61	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
62	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIN	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
63	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
64	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
65	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴上～中片	内外面所々磨耗。
66	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIN	浅黄色	B	胴中～下片	
67	弥生土器 甕	—	—	—	ABCEHIKN	にぶい橙色	A	口～頸部片	内外面やや磨耗。
68	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	灰白色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
69	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
70	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～胴中片	頸部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
71	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
72	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIMN	灰黄褐色	B	口～胴上片	口縁部外面輪積痕有。内外面やや磨耗。
73	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
74	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIJN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
75	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	胴上部内面輪積痕有。内面やや磨耗。
76	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIJKN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
77	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
78	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著
79	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒色	B	頸～胴上片	内面やや磨耗。
80	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGIK	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
81	弥生土器 甕	—	—	—	ADHIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	P4 出土。
82	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	外面やや磨耗。
83	弥生土器 甕	—	—	—	ABEGIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
84	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
85	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	灰黄色	B	胴上～中片	
86	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHK	にぶい黄褐色	B	胴上～中片	内外面やや磨耗。
87	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著
88	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
89	弥生土器 甕	—	—	—	ACKN	にぶい赤褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIK	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著
91	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒色	B	胴中段片	
92	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	黄灰色	B	胴中段片	
93	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	黒褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
94	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHI	にぶい黄褐色	B	胴中段片	
95	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	胴中段片	
96	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKM	暗オリーブ褐色	B	胴中段片	
97	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	黒褐色	B	胴中段片	
98	弥生土器 甕	—	—	—	ABCGHIN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	外面やや磨耗。
99	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	
100	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴中段片	
101	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	胴中段片	
102	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
103	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	頸～胴上片	
104	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
105	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒色	B	胴中段片	
106	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	口～頸部片	
107	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
108	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	橙色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著
109	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKMN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
110	弥生土器 甕	—	—	—	ABHI	にぶい赤褐色	B	口～胴上片	
111	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	にぶい赤褐色	B	口～胴中片	
112	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	外面下位磨耗顕著。
113	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内面やや磨耗。
114	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	浅黄色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
115	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
116	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	橙色	B	口～胴上片	内外面やや磨耗。P4 出土。
117	弥生土器 甕	—	—	—	ABIN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
118	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。P4 出土。
119	弥生土器 甕	—	—	—	ABEH	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	胴上部内面輪積痕有。外面やや磨耗。
120	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
121	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIK	黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著
122	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIK	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
123	弥生土器 甕	—	—	—	BDEHK	淡橙色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
124	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
125	弥生土器 甕	—	—	—	AIKMN	褐灰色	B	頸部片	
126	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	にぶい褐色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著
127	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著
128	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴中段片	内面磨耗顕著
129	弥生土器 甕	—	—	—	ABIN	にぶい橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
130	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKM	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
131	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
132	弥生土器 甕	—	—	—	ABHN	黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。焼成前穿孔有。
133	弥生土器高坏	—	—	—	ABEHN	にぶい黄褐色	B	口縁部片	三個一対突起有。
134	弥生土器高坏	—	—	—	ABHIK	にぶい赤褐色	B	口縁部片	内外面赤彩。
135	打製石斧	最大長(7.85)cm、最大幅(13.05)cm、最大厚(3.8)cm。重量(406)g。刃部のみ。ホルンフェルス製。							
136	搔器	最大長5.5cm、最大幅5.0cm、最大厚0.9cm。重量25g。完形。粘板岩製。							
137	搔器	最大長5.3cm、最大幅8.6cm、最大厚1.1cm。重量64g。完形。粘板岩製。							
138	打製石器	最大長9.0cm、最大幅9.9cm、最大厚3.4cm。重量362g。完形。粘板岩製。							
139	磨石	最大長(8.75)cm、最大幅8.6cm、最大厚1.95cm。重量(196)g。1/3欠。砂岩製。二面使用。							
140	磨石	最大長(10.0)cm、最大幅(5.25)cm、最大厚(3.1)cm。重量(202)g。半分欠?。砂岩製。二面使用。敲打器兼。							
141	磨石	最大長8.85cm、最大幅5.8cm、最大厚1.25cm。重量(77)g。一部欠。砂岩製。二面使用。							
142	磨石	最大長(4.6)cm、最大幅(3.5)cm、最大厚(0.6)cm。重量(18)g。両端欠。砂岩製。二面使用。							
143	磨石	最大長(7.4)cm、最大幅(5.7)cm、最大厚(1.6)cm。重量(81)g。片端欠。砂岩製。二面使用。被熱。敲打器兼。							
144	打製石鏃	最大長2.45cm、最大幅1.45cm、最大厚0.25cm。重量1g。完形。頁岩製。有茎。							
145	石製有孔円盤	最大径3.0cm、最大厚0.4cm、孔径0.3cm。重量7g。完形。頁岩製。垂飾?							
146	石製勾玉	最大長3.7cm、最大幅2.05cm、最大厚0.6cm、孔径0.15cm。重量7g。完形。粘板岩製。擦痕有。							

している。144は有茎の打製石鏃。完形。小型で薄い。頁岩製。145は石製有孔円盤。径3cm、厚さ0.4cmの円盤状を呈する。小型であり、中央に穿孔がみられたことから垂飾であろうか。両面に整形のための擦痕が残る。頁岩製。146は石製勾玉。完形。厚さ0.6cmで全面平たい造りである。孔が0.15cmと小さい。両面に整形のための擦痕が残る。粘板岩製。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第12号住居跡（第45・46図）

63・64-137・138グリッドに位置する。北西隅から西壁沿いを11号住居跡に切られており、東壁中央よりやや北側で時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。北東隅及び南側約1/4は調査区外にある。

本住居跡は全面に拡張が行われている。正確な規模は不明であるが、拡張前は長軸6.3m、短軸5.8m程、拡張後は長軸7.7m、短軸7.3mを測り、大型の部類に入る。平面プランは拡張前が隅丸長方形、拡張後は隅丸方形に近い。主軸方向はN-13°-Wを指す。確認面からの深さは0.4m前後であり、床面はほぼ平坦であった。覆土は19層（1～19層）確認された。中層から下層にかけて数層が薄く堆積していたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は拡張に伴い、2つ重複して確認された。東側に位置する炉跡1が西側の炉跡2を切っていることから、拡張前が2、拡張後が1に伴うと思われる。炉跡1は径0.6m前後の円形を呈し、床面からの深さは0.07mを測る。炉跡2は東側を切られているため定かではないが、長軸0.75m、短軸0.6m程の楕円形を呈すると思われる。床面からの深さは0.12mを測る。覆土は炉跡1が4層（21～24層）、2が3層（25～27層）確認され、焼土や炭化物等を含んでいた。

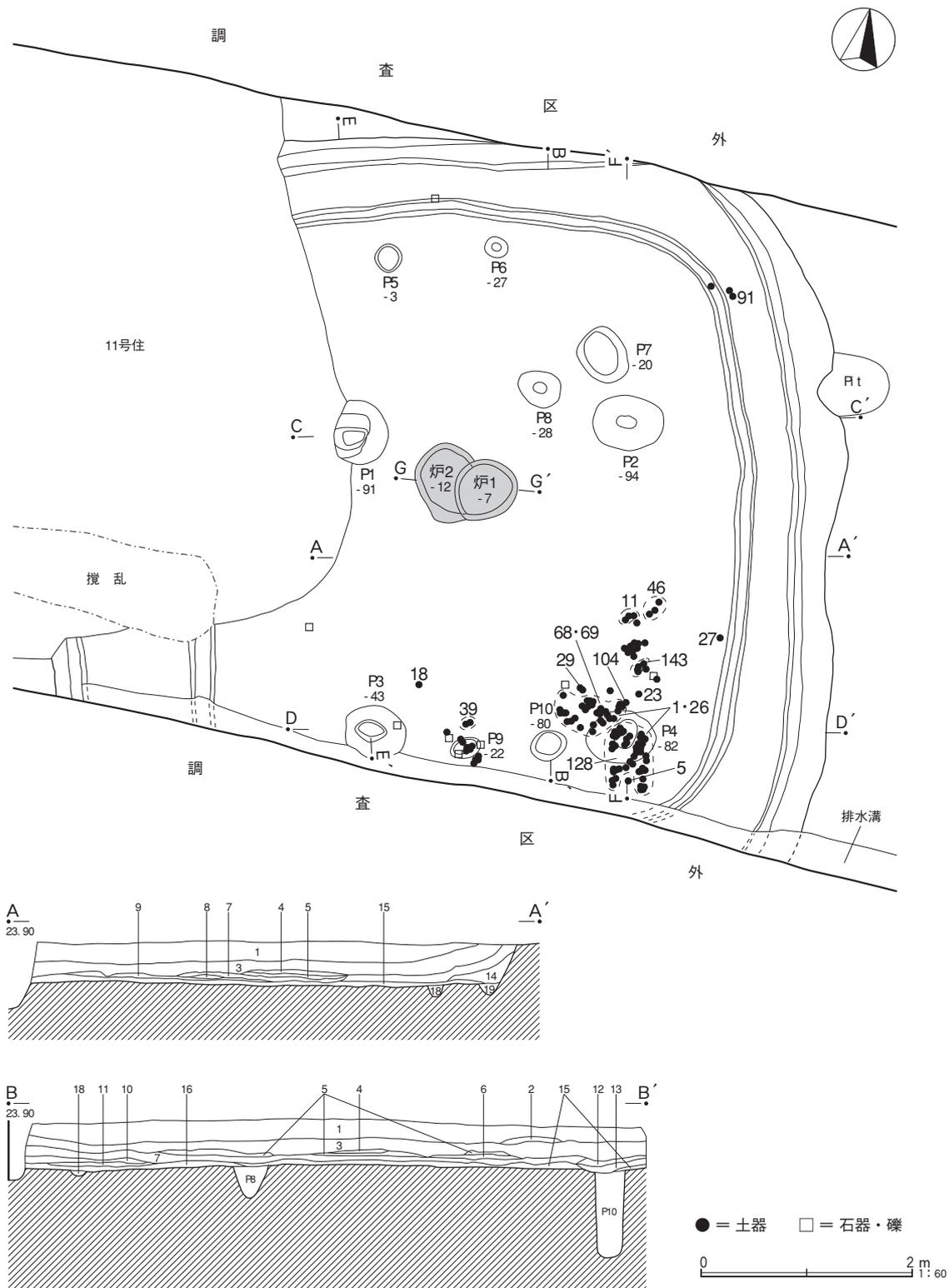
ピットは10基確認された。P1～4は支柱穴であるが、その他は支柱穴や屋根等を支える柱穴であろうか。いずれも覆土は図示できなかったが、柱痕跡は確認されなかった。

壁溝は調査区外にあるため、または11号住居跡に切られているため確認できない箇所があるが、拡張前後に拘わらず全周すると思われる。幅は拡張前が0.2m、拡張後は0.3m前後が主体となり、床面からの深さは、いずれも0.1m程を測る。

貯蔵穴は確認されなかった。

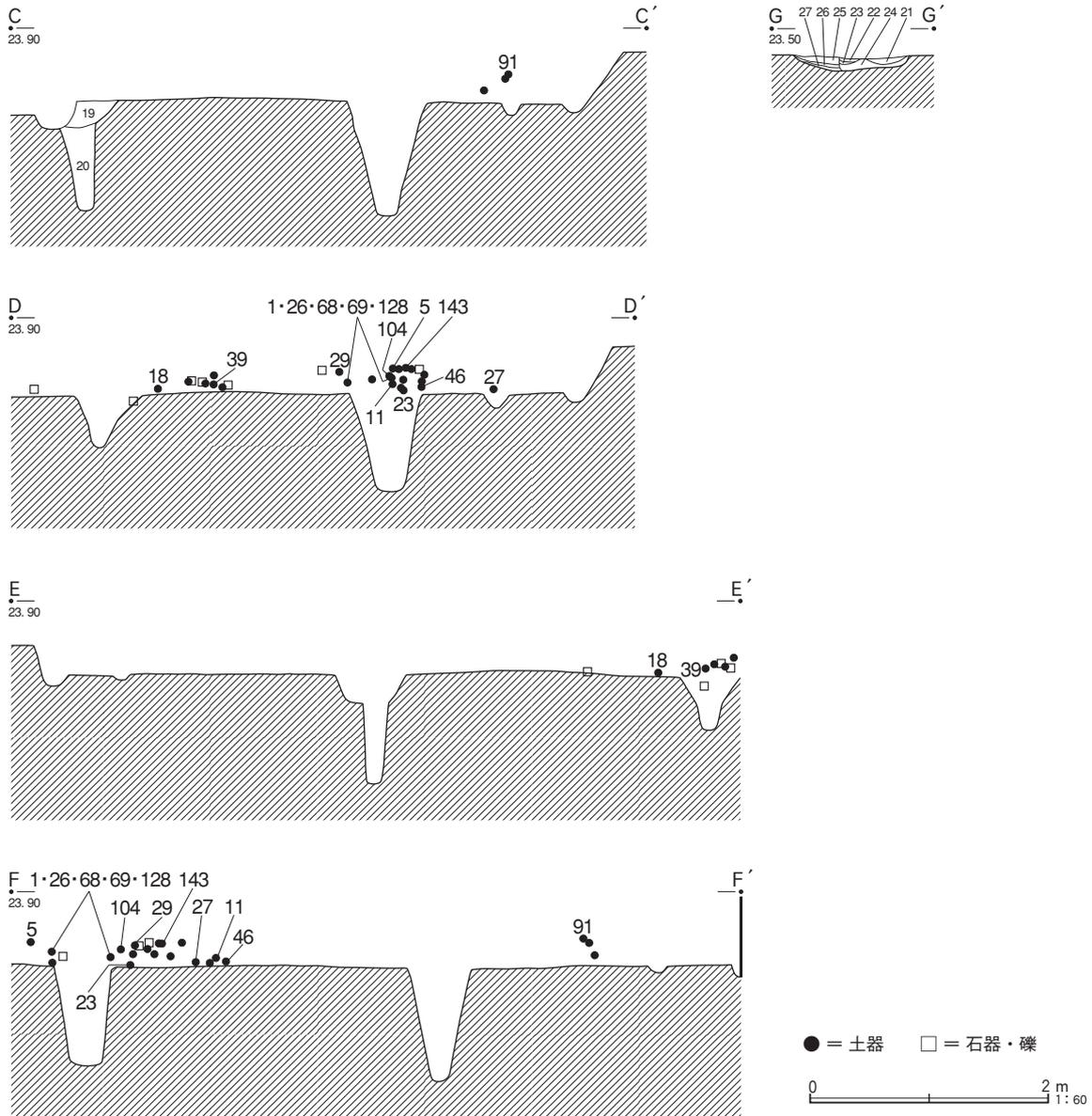
出土遺物（第47～51図）は、弥生土器壺（1～11・17～23・46～86）、広口壺（24）、甕（12～16・25～38・87～139）、甌（39）、高坏（40～42・140～142）、ミニチュア土器（43）、鉢（44・45・143・144）、砥石（145・146）、石製有孔円盤（147）がある。遺物量が非常に多いが、残存状態の良好なものは少ない。床面直上の遺物は、南東部に集中するが、遺物の大半は覆土からの検出である。

1～11・17～23・46～86は壺。1は底部を欠くが、比較的残存状態が良好である。口縁部は外反しながら大きく開く。頸部はすぼまるが、やや太く、肩が張らずに胴部に向かって緩やかに膨らむ。胴部は縦長の楕円形状を呈し、最大径を中段に持つ。文様は頸部にのみ施文されている。3条の平行沈線間にLR単節縄文が施文されているが、沈線上下にはみ出ている。外面無文部の調整は、ヘラミガキが主体となるが、胴部中段はハケメが残る。内面は磨耗や剥離が顕著であるため、ほとんど図示できなかったが、口縁部から頸部まではヘラミガキ、以下はハケメ調整が施されている。2～4は口縁部から頸部までに収まる部位。すべて口縁部が外反する。4の頸部はすぼまり、ほぼ直立する。文様は口縁端部にLR単節縄文が施文さ



第45図 第12号住居跡(1)

れているのみである。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。2は内面に輪積痕が残る。5~7は頸部から肩部までに収まる部位。5は頸部の中段付近がすままる。文様は平行沈線が3条巡り、下にRL単節縄文が施文されている。6は太い頸部に突帯が複数巡り、LR単節縄文が施文されている。5・6の外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。7は頸部がほぼ直立し、肩が張らず、緩やか



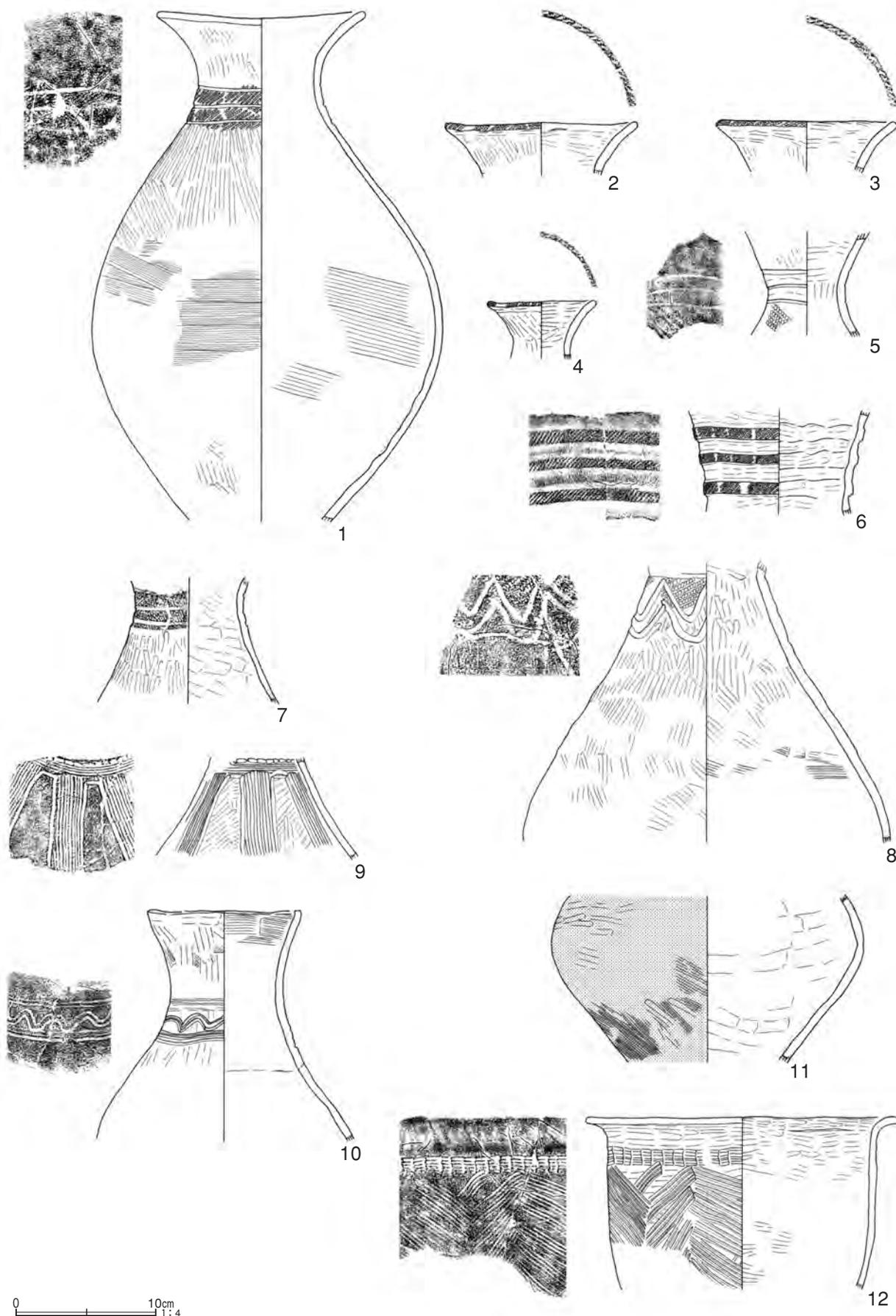
第12号住居跡

土層説明 (AA' BB' CC' GG')

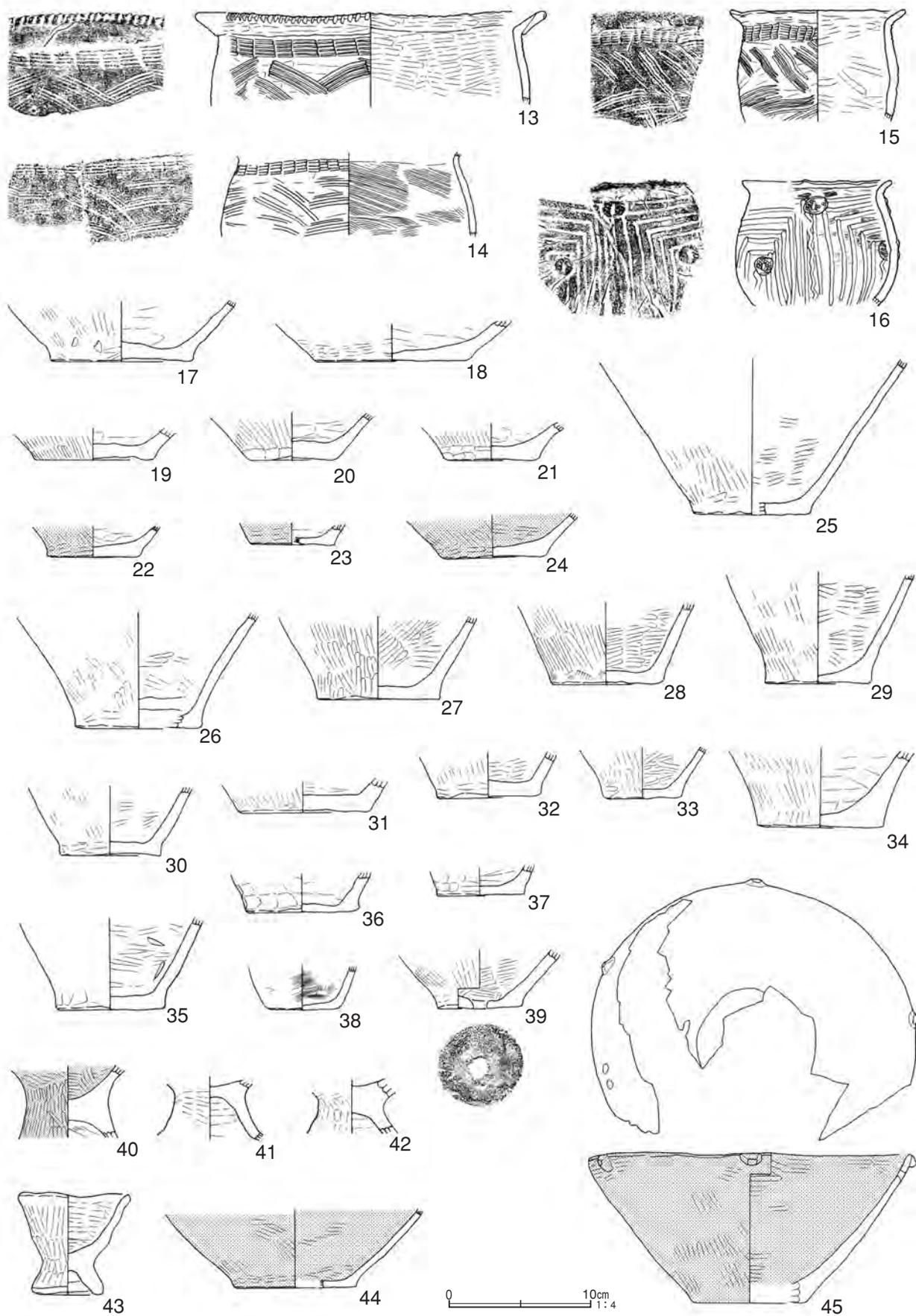
- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 2 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 4 炭化物層
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 7 黒色土：粘土質。炭化物多量、酸化鉄、焼土粒、灰白色粒少量含む。
- 8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 9 黒色土：粘土質。酸化鉄、炭化物多量、灰白色粒少量含む。
- 10 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土少量含む。
- 11 灰色土：粘土質。酸化鉄、焼土粒、炭化物多量含む。
- 12 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。
- 13 黒色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒少量含む。

- 14 灰色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 15 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量含む。
- 16 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土多量含む。
- 17 灰白色土：シルト質。酸化鉄多量、灰色土少量含む。
- 18 灰色土：シルト質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。埋め戻し土。
- 19 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。
- 20 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。
- 21 焼土層
- 22 灰色土：粘土質。焼土、灰多量含む。
- 23 炭化物層
- 24 灰白色土：粘土質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒多量含む。
- 25 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒少量含む。埋め戻し土。
- 26 焼土層：上層に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 27 灰白色土：粘土質。酸化鉄、焼土粒、マンガン粒少量含む。

第46図 第12号住居跡(2)



第 47 图 第 12 号住居跡出土遺物 (1)

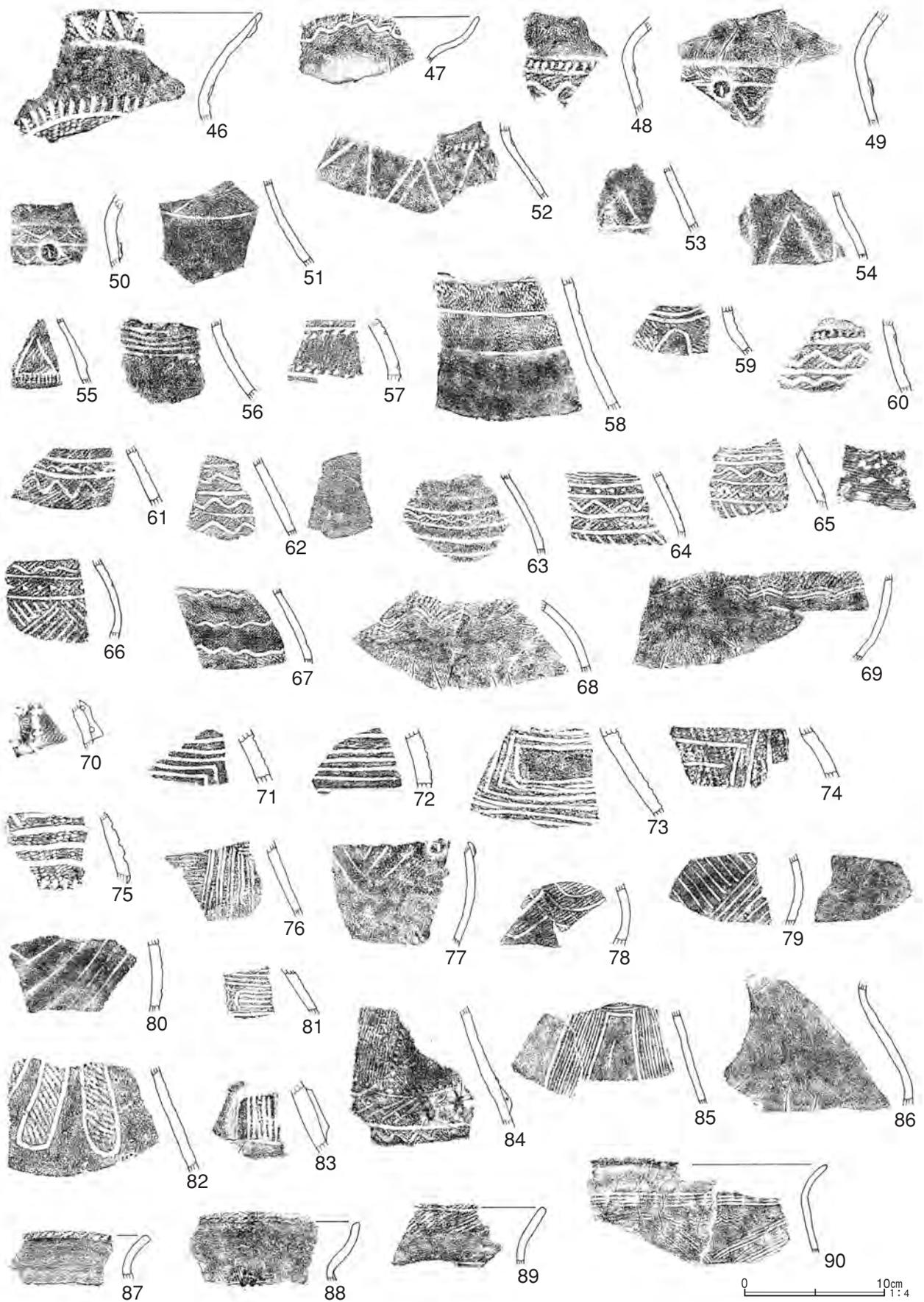


第 48 图 第 12 号住居跡出土遺物 (2)

に下る。頸部に平行沈線が複数巡り、間にカナムグラによる擬縄文が施文されているが、一部下にはみ出ている。肩部外面は無文でヘラミガキ、内面は頸部上位がヘラミガキ、以下はヘラナデ調整が施されている。8は頸部から胴部中段までの部位。肩が張らず、頸部から胴部中段まで緩やかに下る。文様は頸部にのみ施文されており、平行沈線下にL R単節縄文が施文され、2条の太い連弧文が巡る。外面無文部及び頸部から肩部までの内面はヘラミガキ、胴上部内面は磨耗顕著によりほとんど図示できなかったが、ハケメ調整が施されている。9は肩部から胴上部までの部位。肩が張らず、ハの字に下る。文様は砲弾状を呈する刺突列下に5本一単位の細い直線文が巡り、下は懸垂文が描かれ、無文部と直線文2段を交互に配置している。無文部の調整は、ヘラミガキである。内面は図示できなかったが、上位が横・斜位のヘラミガキ、下位は横位のヘラナデ調整が施されている。No85と同一個体。10は口縁部から胴上部までの部位。口縁部が内湾気味に立ち上がり、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肩がやや張り、胴上部は膨らむ。文様は頸部にのみ施文されている。2本一単位の波状文上下に上は同一工具、下は3本一単位の直線文が巡る。外面無文部の調整はヘラミガキ、内面は口縁部がハケメであるが、以下は磨耗顕著により不明である。肩部内面に輪積痕が残る。11は胴上部から下部までの部位。胴部中段が膨らみ、下部はほぼ直線的に下る。無文で外面はヘラミガキ調整と赤彩が施されているが、胴部中段から下部にかけてヘラミガキ前に施されたハケメ調整が残る。内面調整は、ヘラナデである。

17～23は胴下部から底部までの部位。外面調整はすべてヘラミガキであるが、17は所々、20・21は底部付近にヘラナデも認められた。内面調整は、すべてヘラナデである。22・23は外面に赤彩が施されている。22・23以外は甕の可能性もある。

46・47は口縁部から頸部にかけての破片。46は複合口縁部にL R単節縄文が施文され、太い沈線で山形文が描かれている。以下は斜位のヘラミガキ調整が施された無文部を挟んで爪形状を呈する刺突列と平行沈線、縄目が縦位のR L単節縄文が施文されている。胎土が粗い。47は口縁部にL R単節縄文が施文され、波状沈線が巡る。以下は無文で縦位のヘラミガキ調整が施されている。46・47の内面調整は、上位はともに横位、下位は46が斜位、47は縦位のヘラミガキである。48～50は頸部片。48は横・斜位のヘラミガキが施された無文部下に爪形状の刺突列が間に刻まれた平行沈線が2条巡る。以下はL R単節縄文地に太く、振りの大きい波状沈線が巡る。49・50は同一個体。横位のヘラミガキが施された無文部下に平行沈線と波状沈線が交互に巡る。下位の波状沈線は振りが大きく、複数巡る。下位の平行沈線には短沈線が刻まれたボタン状貼付文が付く。48～50の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。51～55は鋸歯文が描かれた肩部から胴上部までに収まる破片。51は鋸歯文下に平行沈線が巡る。以下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。52は段下に巡る2本一単位の刺突列下に鋸歯文が描かれ、区画下にR L単節縄文が充填されている。段上は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。53は鋸歯文区画下にL R単節縄文が充填されており、下に平行沈線が巡る。無文部は斜位のヘラミガキ調整が施されている。54は鋸歯文のみ描かれている。55は段上に鋸歯文が描かれ、区画下にL R単節縄文が充填されている。段下は4本一単位の細かい簾状文が巡る。51～55の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。56～58は平行沈線が巡る頸部から胴上部までに収まる破片。56は複数の平行沈線下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。57は間隔を空けて巡る平行沈線間内上下に半円形の刺突列が刻まれている。間は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。58は間隔を空けて巡る複数の平行沈線間



第 49 图 第 12 号住居跡出土遺物 (3)

にカナムグラによる擬縄文が施文されている。以下は無文で縦位のヘラミガキ調整が施されているが、所々にヘラミガキ前に施された斜位のハケメ調整が残る。56～58の内面調整は、56が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。59～66は平行沈線と波状沈線が巡る破片。肩部から胴部中段までに収まる。59はR L単節縄文地に複数の平行沈線と振りの大きい波状沈線が巡る。60は上位2条の狭い平行沈線間に半円形の刺突列、以下は平行沈線を挟んで2条の波状沈線が巡るが、上位の波状沈線は振りが大きく、下位は小さい。波状沈線が巡る平行沈線間にL R単節縄文が施文されている。61はL R単節縄文地に2条の平行沈線が巡り、間と下に波状沈線が巡る。上の波状沈線は振りが小さいが、下は大きい。62はL R単節縄文地に平行沈線と波状沈線が交互に巡る。63は縦位のヘラミガキ調整が施された無文部下に平行沈線が複数巡り、最上位の沈線間にL R単節縄文と波状沈線が施文されている。64～66は同一個体。櫛歯による細い直線文下に平行沈線が4条巡り、上下の沈線間は半円形の刺突列、真中の沈線間は波状沈線が巡る。波状沈線と刺突列が巡る下位の沈線間にL R単節縄文が施文され、以下は複合鋸歯文が描かれている。59～66の内面調整は、62・65が横位のハケメ、その他は横位のヘラナデである。67～69は波状文が巡る破片。67・68は胴上部片、69は胴部中段から下部にかけての破片である。67は波状沈線が複数巡り、カナムグラによる擬縄文施文部と無文部を交互に配置している。無文部は横・斜位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。68・69は同一個体。L R単節縄文下に3本一単位の波状文が巡る。いずれも下位は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。67～69の内面調整は、67が横・斜位のヘラナデ、68・69は横位のヘラナデである。70は縦長の短い突帯が付く胴上部片。突帯は中央が窪み、上下脇に孔を持つ。突帯脇及び突帯上にL R単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラナデである。71～76は重四角文が描かれた破片。肩部から胴上部までに収まる。71・72は同一個体。器壁が厚い。73は胎土が粗い。74・75も同一個体。地文にR L単節縄文が施文され、重四角文下に半円形の刺突列が巡る。胎土が粗い。76は2本一単位で描かれており、区画外に横位のハケメ調整が残る。71～76の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。77は重三角文が描かれた胴部中段の破片。区画内頂点に短沈線が刻まれたボタン状貼付文が付く。下は無文であるが、磨耗顕著により調整不明である。内面調整は、横位のヘラナデである。胎土が粗い。78は連弧文が描かれた胴部中段の破片。地文にL R単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラミガキである。79・80は複合鋸歯文が描かれた胴部中段の破片。79は沈線間が狭く、80は広い。79・80の内面調整は、79が横位のハケメ、80は横位のヘラナデである。81は流水文が描かれた肩部片。横位に巡る4本一単位の直線文に弧状の沈線が付け加えられている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。82は舌状文が描かれた肩部から胴上部にかけての破片。区画内にR L単節縄文が充填されている。無文部は横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。胎土が粗い。内面調整は、横位のヘラナデである。83は短冊状の突起が付いた胴上部片。突起に複数の沈線が垂下する。内面調整は、横位のヘラナデである。84・85は懸垂文が描かれた肩部から胴上部にかけての破片。84は分かりづらいが、3本一単位の細い直線文が複数垂下し、脇に半円形の刺突列が刻まれている。無文部は斜位のヘラミガキ調整が施されている。以下は2条の平行沈線間に二個一対で中央脇に孔を持つ突起が付き、脇に短い斜位の沈線が描かれており、下に3本一単位の波状文が巡る。内面調整は、横位のヘラナデである。85はNo.9と同一個体。86は無文の頸部から胴部中段にかけての破片。外面調整は、頸部から胴上部までが斜位のハケメ、胴部中段のみ横位のヘラミガキで

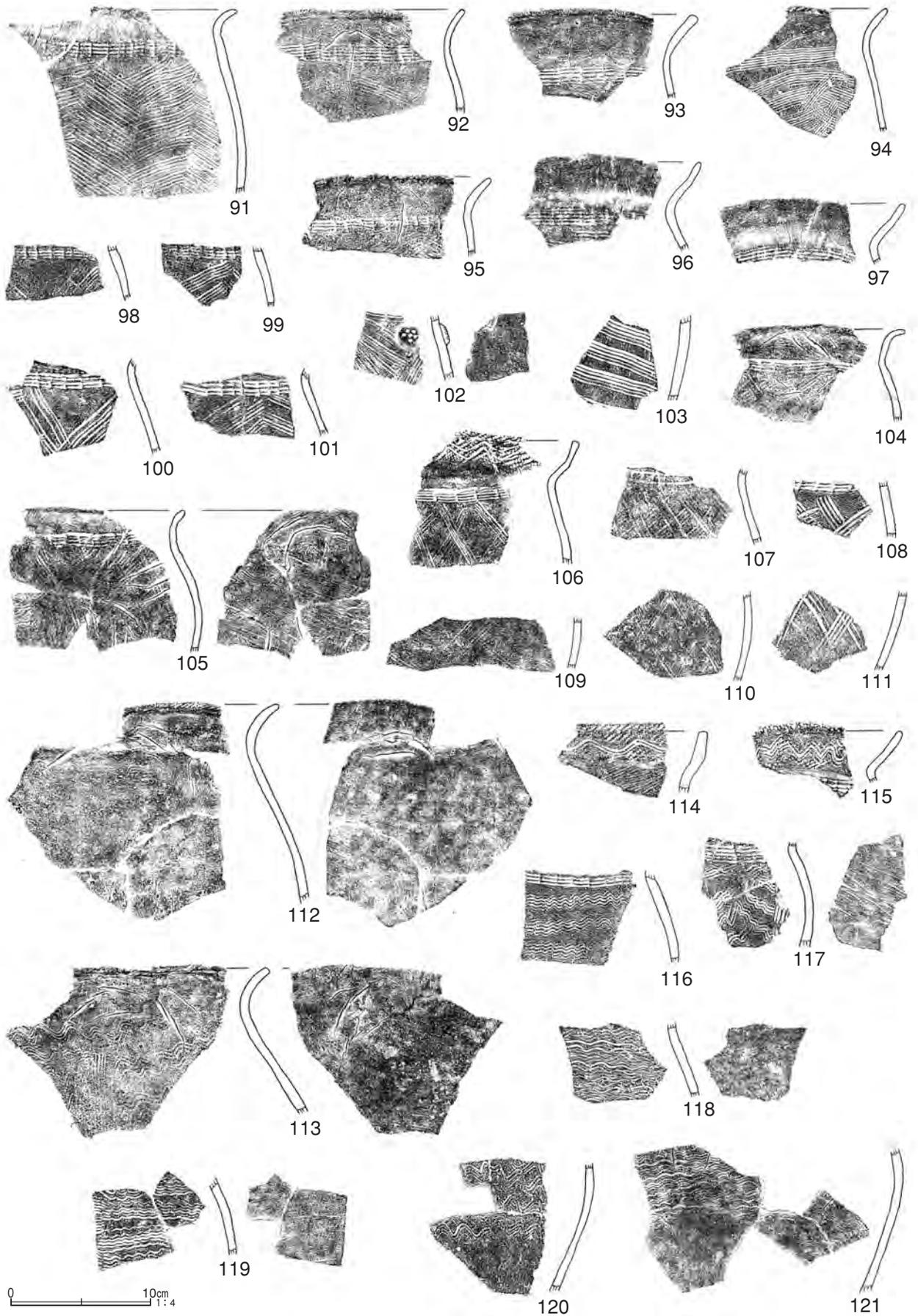
ある。内面は全面ヘラミガキであるが、頸部から胴上部までは横位、以下は斜位に施されている。

24は広口壺の底部。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。鉢の可能性もある。

12～16・25～38・87～139は甕。12～15は櫛歯状工具で文様が描かれている。櫛歯の単位は5本前後である。すべて頸部に簾状文が巡り、胴部は羽状文が描かれている。12は口縁部から胴部中段までの部位。口縁部は大きく外反し、頸部以下はほぼ垂直に下る。最大径を口径に持つ。胴部の羽状文は縦方向に密に描かれている。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。口縁部内面に輪積痕が残る。13は口縁部から胴上部までの部位。短い複合口縁部がくの字に大きく開く。頸部はすぼまり、胴上部はやや膨らむ。頸部以外の文様は口縁端部に刻みが施され、胴部の羽状文は縦方向にやや間隔を空けて描かれている。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。14は頸部から胴上部までの部位。すぼまった頸部から胴上部が緩やかに膨らむ。胴部の羽状文は縦方向にやや間隔を空けて描かれているが、乱雑である。内面調整は、ハケメである。15・16は小型の甕。いずれも器壁が厚い。15は口縁部から胴部中段までの部位。短い口縁部がやや受け口状を呈する。頸部はすぼまり、ほぼ直立し、胴部は中段付近がやや膨らむ。最大径を口径に持つ。胴部の羽状文は横位に描かれているが、非常に乱雑である。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。16は口縁部から胴下部までの部位。短い口縁部がやや外反し、頸部はすぼまる。胴部は中段が膨らみ、球形を呈する。最大径を胴部中段に持つ。口縁端部に突起が付き、胴部はコの字重ね文が描かれている。コの字中央と文様間頂点に短沈線とLR単節縄文が施文されたボタン状貼付文が付き、波状沈線が垂下する。外面はコの字重ね文施文前にヘラミガキが施されているが、所々にヘラミガキ前のハケメ調整が残る。

25～38は胴下部から底部までの部位。甕としたが、壺の可能性もある。25～33は内外面ともにヘラミガキ、34は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、35は外面がヘラナデ、内面がヘラミガキ、36・37は内外面ともにヘラナデ、38は内外面ともにハケメ調整が施されている。26は胴下部内面に輪積痕が残る。35は内面所々にヘラナデも施されている。36は胎土が粗い。

87～121は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4～5本が多い。87～89は分かりづらいが、頸部に簾状文が巡る口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部にLR単節縄文が施文され、89は口縁部にも施文されている。口縁部外面の無文部は、87が横位のハケメ、88は上位が横位、下位が斜位のヘラミガキ、89は横位のヘラミガキ調整が施されている。88は簾状文上に円形刺突の施されたボタン状貼付文が付く。87～89の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。90～102は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。密に描かれたものとやや間隔を空けて描かれたものがある。櫛歯は細いものが多い。90～97は口縁部から胴部中段まで、98～102は頸部から胴上部までに収まる破片である。すべて頸部に簾状文が巡る。96と97、98と99は同一個体である。90・92・94・95は口縁端部にLR、93はRL単節縄文が施文されている。94は櫛歯の単位が7本と多く、羽状文は乱雑に描かれている。90～97の口縁部外面無文部は、90～92・94～97が横位のヘラミガキ、93は横位のハケメ調整が施されている。95は胎土が粗い。100は櫛歯が太い。102は簾状文下に円形刺突が6つ施されたボタン状貼付文が付く。90～102の内面調整は、102のみ横・斜位のハケメ、その他は横位のヘラミガキである。103は胴部に横位の羽状文が描かれた胴部中段の破片。太い櫛歯でやや間隔を空けて丁寧に描かれている。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。104～111は胴部に斜格子文が描かれた破片。乱雑なものが多い。櫛歯は細い



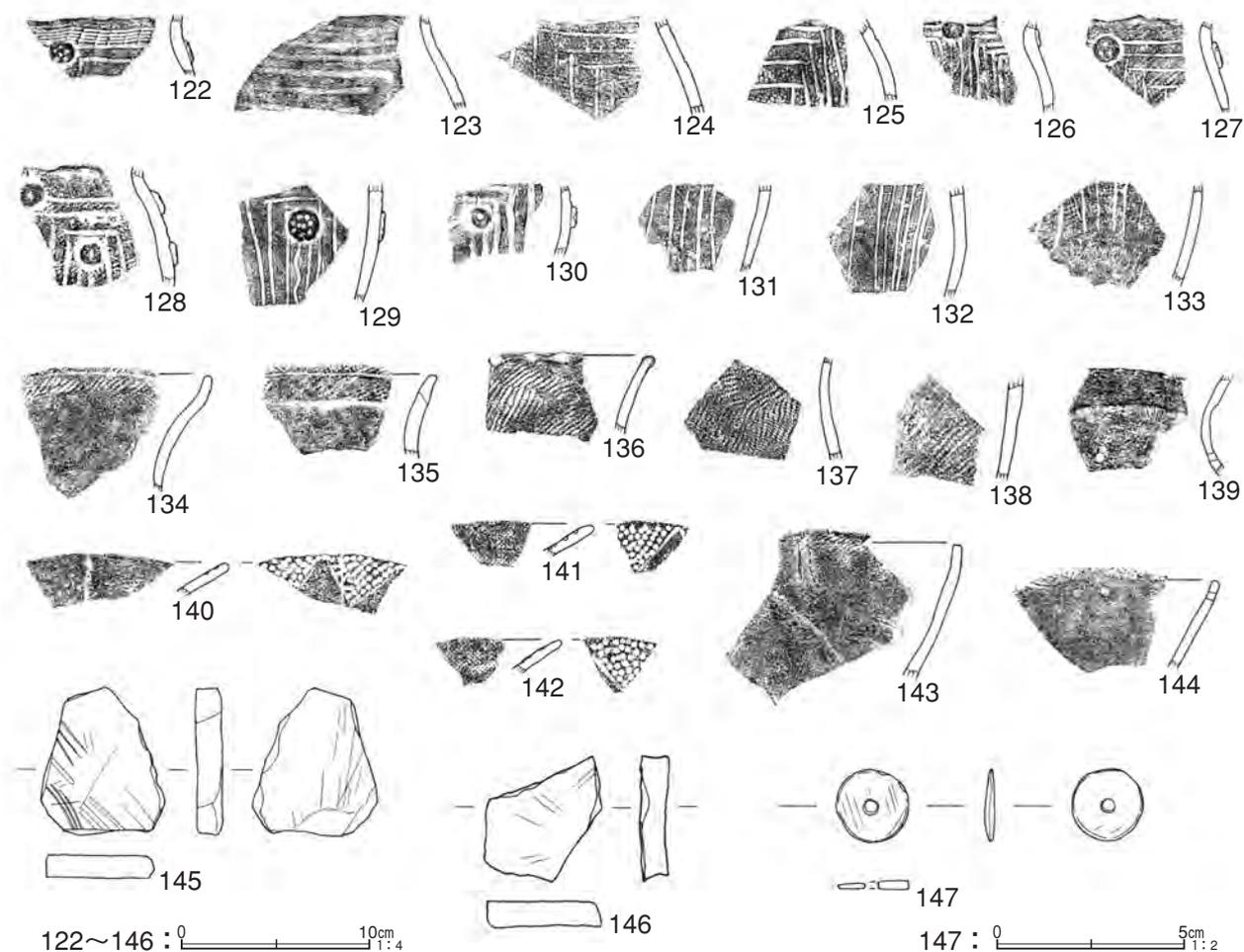
第 50 图 第 12 号住居跡出土遺物 (4)

ものと太いものがあるが、前者が目立つ。104～106は口縁部から胴部中段まで、107・108は頸部から胴上部にかけて、109・110は胴部中段、111のみ胴部中段から下部にかけての破片である。104～108は頸部に簾状文が巡る。106は端部を含む口縁部にL R単節縄文が施文され、細い波状沈線が2条巡る。104～106の外面无文部は、すべて横位のヘラミガキ調整が施されている。111は斜格子文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。104～111の内面調整は、104・106は口縁部から頸部までが横位、以下は斜位のヘラミガキ、105は口縁部から頸部までが横位のヘラミガキ、以下は斜位のハケメ、107は磨耗顕著により不明、108・109は横位、110は斜位、111は横・斜位のヘラミガキである。112～121は波状文が描かれた破片。振りの大きいものと小さいものがあるが、後者が多い。胴部に描かれたものは、複数で間隔を空けて巡るものと密に巡るものがあるが、後者が目立つ。いずれも櫛歯が細く、乱雑なものが多い。112～115は口縁部から胴上部まで、116～119は頸部から胴部中段までに収まる破片、120・121は胴部中段から下部にかけての破片である。同一個体の112・113は分かりづらいが、口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部以下に垂下する直線文脇に波状文が複数巡る。口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。114は端部を含む口縁部にL R単節縄文が施文され、2本一単位で振りが緩い波状文が巡る。頸部は無文で斜位のハケメ調整が施されている。115～117は頸部に簾状文が巡る。115は口縁部に4本一単位の振りの大きい波状文がやや乱雑に巡り、口縁端部と波状文下にオオバコによる擬縄文が施文されている。116は振りの小さい波状文が間隔を空けて比較的丁寧に描かれている。117は垂下する直線文脇に非常に乱雑な波状文が複数描かれている。118～121は密に複数巡り、120のみ振りが大きく、その他は小さい。120・121は波状文下が無文で120は斜位、121は縦位のヘラミガキ調整が施されている。112～121の内面調整は、112・113は口縁部から頸部までが横位のヘラミガキ、以下は斜位のハケメ、114は横位のヘラナデ、115～117は横位、120・121は横・斜位のヘラミガキ、118は上位が横位のヘラミガキ、下位が斜位のハケメ、119は横位のハケメである。121は胴部中段内面に輪積痕が残る。

122～133は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。123・130は沈線が太い。122～128は頸部から胴上部までに収まる破片、129～132は胴部中段、133のみ胴部中段から下部にかけての破片である。122・126～130はコの字中央ないし文様間頂点にボタン状貼付文が付く。122は頸部に簾状文が巡る。125は地文にR L、126～128・133はL R単節縄文が施文されている。129はボタン状貼付文下に波状沈線が垂下する。同一個体の131・132は、所々にコの字重ね文施文前に施された横・斜位のハケメ調整が残る。133は下位が無文で斜位のヘラミガキが施されている。122～133の内面調整は、122・125～127・130が横位、124・131・132は横・斜位のヘラミガキ、123・128・129・133は磨耗顕著により不明である。

134～138は縄文が施文された破片。134～136は口縁部から頸部にかけて、137は頸部から胴上部にかけて、138は胴部中段の破片である。縄文はすべてL R単節縄文である。134・135は端部を含む口縁部に縄文が施文され、以下は無文で134は横・斜位、135は斜位のヘラミガキ調整が施されている。136は口縁端部に指頭圧痕が施され、外面全面に縄文が施文されている。137・138は全面に縄文が施文されている。134～138の内面調整は、134・136は横位のヘラミガキ、135は磨耗顕著により不明、137・138は横位のヘラナデである。

139は無文の頸部片。上位に段を持つ。磨耗が著しいため、調整は不明である。下位に焼成前穿孔が



第 51 図 第 12 号住居跡出土遺物 (5)

1つみられた。

39は甑。胴下部から底部までの部位。内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。底面に焼成前穿孔がみられた。

40~42・140~142は高坏。40~42は接合部。いずれも外面及び坏部内面の調整はヘラミガキであり、40のみ赤彩が施されている。脚部内面は40のみハケメ、その他はヘラナデ調整が施されている。140~142は口縁部片。外面及び内面無文部は横位のヘラミガキ調整が施され、141・142は赤彩が施されている。いずれも内面は鋸歯文が描かれ、区画上に円形の刺突がランダムに刻まれている。

43は高坏を模倣したミニチュア土器。ほぼ完形。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。坏部内面に輪積痕が残る。

44・45・143・144は鉢。44は体部から底部までの部位、45は全形の分かる鉢。いずれも内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。45は口縁部から体部がやや内湾しながら立ち上がる。口縁端部に突起が等間隔に付くが、1箇所のみ二個一対の穿孔がみられた。143・144は口縁部から体部にかけての破片。143は端部を含む口縁部にLR単節縄文、144は口縁端部に無節Rが施文されている。143は体部が無文で上位が横位、下位は斜位のヘラミガキ調整が施されている。144は口縁部が横位、体部は斜位のヘラミガキ調整が施されており、口縁部に二個一対の焼成前穿孔がみられた。143・144の内面調整は、いず

第13表 第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	(15.0)	(36.7)	—	ABIK	黒色	B	口~胴 70%	内面剥離、外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	(13.8)	(3.85)	—	ABCIK	黒色	B	口縁部 40%	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	(13.0)	(3.75)	—	ABCDK	浅黄橙色	B	口縁部 30%	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	7.8	(4.25)	—	ABDEI	淡黄色	B	口~頸 80%	内外面やや磨耗。
5	弥生土器 壺	—	(7.55)	—	ABDIJK	灰黄色	B	頸部 70%	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 壺	—	(7.5)	—	ABCKN	淡黄色	B	頸部 40%	内面輪積痕有。
7	弥生土器 壺	—	(9.05)	—	ABIKN	浅黄橙色	B	頸~肩 30%	内面やや磨耗。
8	弥生土器 壺	—	(20.3)	—	ABDEIK	にぶい黄橙色	B	頸~胴 25%	内外面所々磨耗。
9	弥生土器 壺	—	(7.3)	—	AIK	黒色	B	肩~胴 25%	No.85 と同一個体。
10	弥生土器 壺	(11.0)	(16.5)	—	ABDEN	灰白色	B	口~胴 60%	肩部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	(12.0)	—	ABCIK	浅黄橙色	B	胴部 35%	外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	(22.4)	(12.45)	—	ABHIK	黒色	B	口~胴 30%	口縁部内面輪積痕有。胴部内面磨耗顕著。
13	弥生土器 甕	(24.8)	(6.6)	—	ABHIK	黒色	B	口~胴 15%	
14	弥生土器 甕	—	(5.9)	—	AHI	黒褐色	B	頸~胴 40%	内外面一部磨耗顕著
15	弥生土器 甕	(12.4)	(8.0)	—	ABHIK	黒色	B	口~胴 30%	内外面所々磨耗。
16	弥生土器 甕	(10.6)	(9.0)	—	ABHIK	黒色	B	口~胴 25%	内外面磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	(4.25)	(10.0)	ABCIK	淡黄色	B	胴~底 40%	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	(2.8)	11.1	ABDHKMN	にぶい橙色	B	底部 80%	内外面磨耗顕著。
19	弥生土器 壺	—	(2.25)	8.4	ABC	浅黄橙色	B	底部 70%	内面磨耗顕著。
20	弥生土器 壺	—	(3.3)	6.1	ABIKN	にぶい黄橙色	B	底部 50%	内面やや磨耗。
21	弥生土器 壺	—	(2.7)	6.6	ABIKN	褐灰色	B	底部 100%	内面磨耗顕著。
22	弥生土器 壺	—	(2.2)	6.7	ABIK	にぶい黄橙色	B	底部 100%	外面赤彩、ほぼ剥落。内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	(1.55)	(6.0)	ABCDN	灰白色	B	底部 50%	外面赤彩、ほぼ剥落。内外面磨耗顕著。
24	弥生土器 広口壺	—	(3.1)	7.4	ABDIKN	灰白色	B	底部 100%	内外面赤彩、ほぼ剥落。内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 甕	—	(11.1)	(8.2)	ABDHIK	黄灰色	B	胴~底 40%	内外面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	—	(8.15)	9.0	ABDHI	褐灰色	B	胴~底 70%	胴下部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 甕	—	(5.9)	(8.6)	ABDK	淡黄色	B	胴~底 40%	内外面所々磨耗。
28	弥生土器 甕	—	(5.7)	8.0	ABIN	黒褐色	B	胴~底 70%	
29	弥生土器 甕	—	(7.8)	7.5	ABEIK	浅黄色	B	胴~底 50%	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 甕	—	(4.85)	(7.0)	ABDIKN	灰褐色	B	胴~底 40%	内外面磨耗顕著。
31	弥生土器 甕	—	(2.3)	9.2	ABCHI	淡黄色	B	底部 60%	内面剥離、外面磨耗顕著。
32	弥生土器 甕	—	(3.2)	7.2	AIK	黒色	B	底部 100%	内面磨耗顕著。
33	弥生土器 甕	—	(3.6)	5.5	ABHIK	灰白色	B	胴~底 80%	外面磨耗顕著。
34	弥生土器 甕	—	(5.55)	(8.9)	ABDIKN	灰褐色	B	胴~底 40%	内外面磨耗顕著。
35	弥生土器 甕	—	(6.55)	7.6	ABIK	黄灰色	B	胴~底 50%	外面磨耗顕著。
36	弥生土器 甕	—	(2.8)	8.0	ABIKN	黒色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
37	弥生土器 甕	—	(2.05)	6.2	ABCIKN	灰色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
38	弥生土器 甕	—	(3.1)	(5.2)	ABIK	淡黄色	B	胴~底 40%	外面磨耗顕著。
39	弥生土器 甗	—	(4.2)	6.0	ABEIKN	灰白色	B	胴~底 80%	外面磨耗顕著。
40	弥生土器 高坏	—	(5.1)	—	ABIK	暗赤褐色	B	接合部 60%	内外面赤彩。
41	弥生土器 高坏	—	(4.2)	—	ABDK	にぶい橙色	B	接合部 80%	内外面磨耗顕著。
42	弥生土器 高坏	—	(3.85)	—	ABIK	灰白色	B	接合部 90%	内外面磨耗顕著。
43	弥生土器 ミニチュア	(7.9)	7.2	5.0	ABIK	黒色	B	ほぼ完形	坏部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
44	弥生土器 鉢	—	(5.5)	(8.6)	ABIK	褐灰色	B	体~底 20%	内外面赤彩。磨耗顕著。
45	弥生土器 鉢	22.8	10.7	(8.0)	ABDI	淡黄色	B	40%	内外面赤彩。口縁部突起・焼成前穿孔有。
46	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
47	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	浅黄橙色	B	口~頸部片	
48	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEN	浅黄橙色	B	頸部片	内外面やや磨耗。
49	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。No.50 と同一個体
50	弥生土器 壺	—	—	—	ABEI	にぶい黄橙色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。No.49 と同一個体
51	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
52	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄色	B	肩部片	内面輪積痕有。
53	弥生土器 壺	—	—	—	ABDI	黄灰色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
54	弥生土器 壺	—	—	—	ABDKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
55	弥生土器 壺	—	—	—	AHIJK	黒褐色	B	肩~胴上片	外面やや磨耗。
56	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIKMN	浅黄橙色	B	頸~肩部片	内外面磨耗顕著。
57	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
58	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸~肩部片	内面やや磨耗。
59	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHK	黒褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
60	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKMN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
61	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEN	浅黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
62	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	黄灰色	B	胴上部片	外面やや磨耗。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
63	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
64	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。No65・66 と同一個体。
65	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい褐色	B	胴上部片	No64・66 と同一個体。
66	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	橙色	B	胴上～中片	内面磨耗顕著。No64・65 と同一個体。
67	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	外面無文部赤彩、ほぼ剥落。やや磨耗。
68	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。No69 と同一個体。
69	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。No68 と同一個体。
70	弥生土器 壺	—	—	—	ABIJK	灰黄褐色	B	胴上部片	外面突帯上下脇穿孔有。
71	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	黄灰色	B	肩部片	内外面やや磨耗。No72 と同一個体。
72	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	暗灰黄色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。No71 と同一個体。
73	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	灰黄色	B	肩～胴上片	外面磨耗顕著。
74	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。No75 と同一個体。
75	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIN	にぶい褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。No74 と同一個体。
76	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	暗灰黄色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
77	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIKN	灰黄色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
78	弥生土器 壺	—	—	—	ABHI	褐灰色	B	胴中段片	
79	弥生土器 壺	—	—	—	AHIK	灰黄褐色	B	胴中段片	P4 出土。
80	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
81	弥生土器 壺	—	—	—	ABDJKN	灰黄色	B	肩部片	
82	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	肩～胴上片	内外面磨耗顕著。P1 出土。
83	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKM	灰黄色	B	胴上部片	外面短冊状突起有。内面輪積痕有。
84	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIKN	灰褐色	B	肩～胴上片	内外面やや磨耗。
85	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIJKN	灰褐色	B	肩～胴上片	内外面所々磨耗。No9 と同一個体。
86	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	頸～胴中片	内外面やや磨耗。
87	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIN	灰褐色	B	口～頸部片	
88	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIKN	橙色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
89	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
90	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
91	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	口～胴中片	
92	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKMN	灰褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
93	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
94	弥生土器 甕	—	—	—	ABIN	黒褐色	B	口～胴上片	
95	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIKN	橙色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
96	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKMN	浅黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。No97 と同一個体。
97	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIKMN	灰白色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。No96 と同一個体。
98	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKM	浅黄色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。No99 と同一個体。
99	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKM	橙色	B	頸～胴上片	内外面所々磨耗。No98 と同一個体。
100	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	褐灰色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
101	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	灰黄色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
102	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	褐灰色	B	頸～胴上片	
103	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHK	浅黄色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
104	弥生土器 甕	—	—	—	AIKMN	黒褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
105	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKMN	黒褐色	B	口～胴中片	内外面所々磨耗。
106	弥生土器 甕	—	—	—	AIJKN	褐灰色	B	口～頸上片	
107	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
108	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
109	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	黄灰色	B	胴中段片	外面やや磨耗。
110	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	黄灰色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
111	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	外面やや磨耗。
112	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIJKN	灰黄色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。No113 と同一個体。
113	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIJKN	にぶい黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。No112 と同一個体。
114	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIMN	黒色	B	口～頸部片	
115	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
116	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKMN	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
117	弥生土器 甕	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	頸～胴中片	外面上位やや磨耗。
118	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	胴上部片	
119	弥生土器 甕	—	—	—	AHI	黒褐色	B	胴上部片	
120	弥生土器 甕	—	—	—	AHIN	黒褐色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著。
121	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中～下片	胴部中段内面輪積痕有。P3 出土。
122	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKM	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
123	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
124	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIJK	黒褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
125	弥生土器 甕	—	—	—	AIKMN	褐灰色	B	胴上部片	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
126	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
127	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
128	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
129	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	黒色	B	胴中段片	内面磨耗顕著
130	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIMN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
131	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	No.132 と同一個体。
132	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	No.131 と同一個体。
133	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
134	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIM	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
135	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
136	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	灰黄色	B	口～頸部片	
137	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著
138	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	褐灰色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
139	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHK	橙色	B	頸部片	焼成前穿孔有。内外面磨耗顕著。
140	弥生土器高坏	—	—	—	ABDHKN	浅黄橙色	A	口縁部片	内外面磨耗顕著。
141	弥生土器高坏	—	—	—	ABK	浅黄橙色	A	口縁部片	内外面赤彩。
142	弥生土器高坏	—	—	—	BCN	浅黄橙色	A	口縁部片	内外面赤彩。内外面磨耗顕著。
143	弥生土器 鉢	—	—	—	ABHIKN	灰黄色	B	口～体部片	内外面磨耗顕著。
144	弥生土器 鉢	—	—	—	ABDIK	灰黄褐色	B	口～体部片	口縁部二個一対焼成前穿孔有。
145	砥石	最大長(7.8)cm、最大幅(6.5)cm、最大厚(1.4)cm。重量(82)g。大半欠。砂岩製。二面使用。被熱。							
146	砥石	最大長(6.7)cm、最大幅(6.2)cm、最大厚(1.5)cm。重量(86)g。大半欠。花崗岩製。一面のみ使用。							
147	石製有孔円盤	最大径1.9cm、最大厚0.25cm、孔径0.3cm。重量1g。完形。頁岩製。垂飾？							

れも横位のヘラミガキである。

145・146は砥石。いずれも大半を欠く。145は二面、146は一面のみ使用されており、145は被熱している。145は砂岩製、146は花崗岩製。147は石製有孔円盤。11号住居跡に類例があるが、本例の方が小さい。径1.9cm、厚さ0.25cmの円盤状を呈する。中央に穿孔があり、両面に整形のための擦痕が若干残る。垂飾か。頁岩製。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階と思われる。

第13号住居跡（第52図）

66～68-137・138グリッドに位置する。西側で15号住居跡を切っている。南西隅及び北東部大半は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、南北は6.6m以上、短軸となる東西は6.8m程を測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-38°-Wを指す。確認面からの深さは0.3m前後であり、床面はほぼ平坦であった。覆土は9層（1～9層）確認された。混入物が比較的多く見られたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

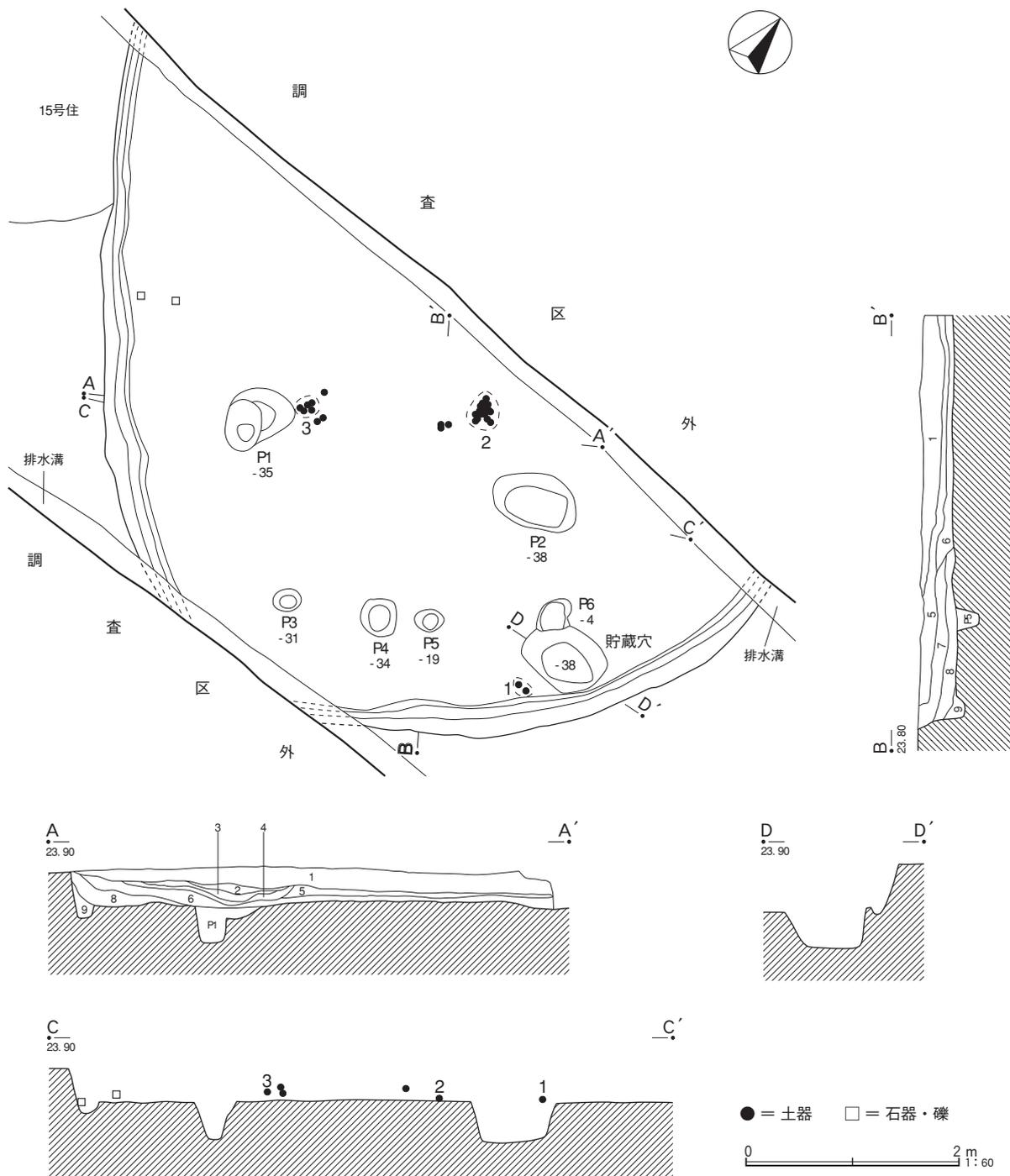
ピットは6基確認された。P1は支柱穴、P2は屋根等を支える柱穴であろうか。P3～6は、6が貯蔵穴に接続するが、出入口に関連するものであろうか。いずれも覆土は図示できなかったが、柱痕跡は確認されなかった。

壁溝は検出された範囲内を全周する。幅0.25はm前後、床面からの深さは0.1m程を測る。

貯蔵穴は南壁中央より東側に位置する。長軸0.76m、短軸0.57mの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは0.38mを測る。前述のとおり、北側でP6と接続している。

炉跡は確認されなかった。

出土遺物（第53・54図）は、弥生土器壺（1・2・5・17～24）、甕（3・4・6～11・25～44）、高坏（12～15）、鉢（16）、打製石斧（46・47）、磨石（48・49）がある。この他に流れ込みで縄文土器深鉢の破片（45）も検出された。



第13号住居跡

土層説明 (A A' B B')

- | | |
|--|--|
| <p>1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。</p> <p>2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> <p>3 炭化物層：酸化鉄、焼土粒、灰白色粒、マンガン粒多量含む。</p> <p>4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。</p> <p>5 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。4層より明るい。</p> | <p>6 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。5層より暗い。</p> <p>7 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。6層より明るい。</p> <p>8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。</p> <p>9 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。</p> |
|--|--|

第52図 第13号住居跡

遺物量は多くないが、比較的残存状態の良好な1~3は、床面直上から検出された。破片も含む遺物の大半は、覆土からの検出である。

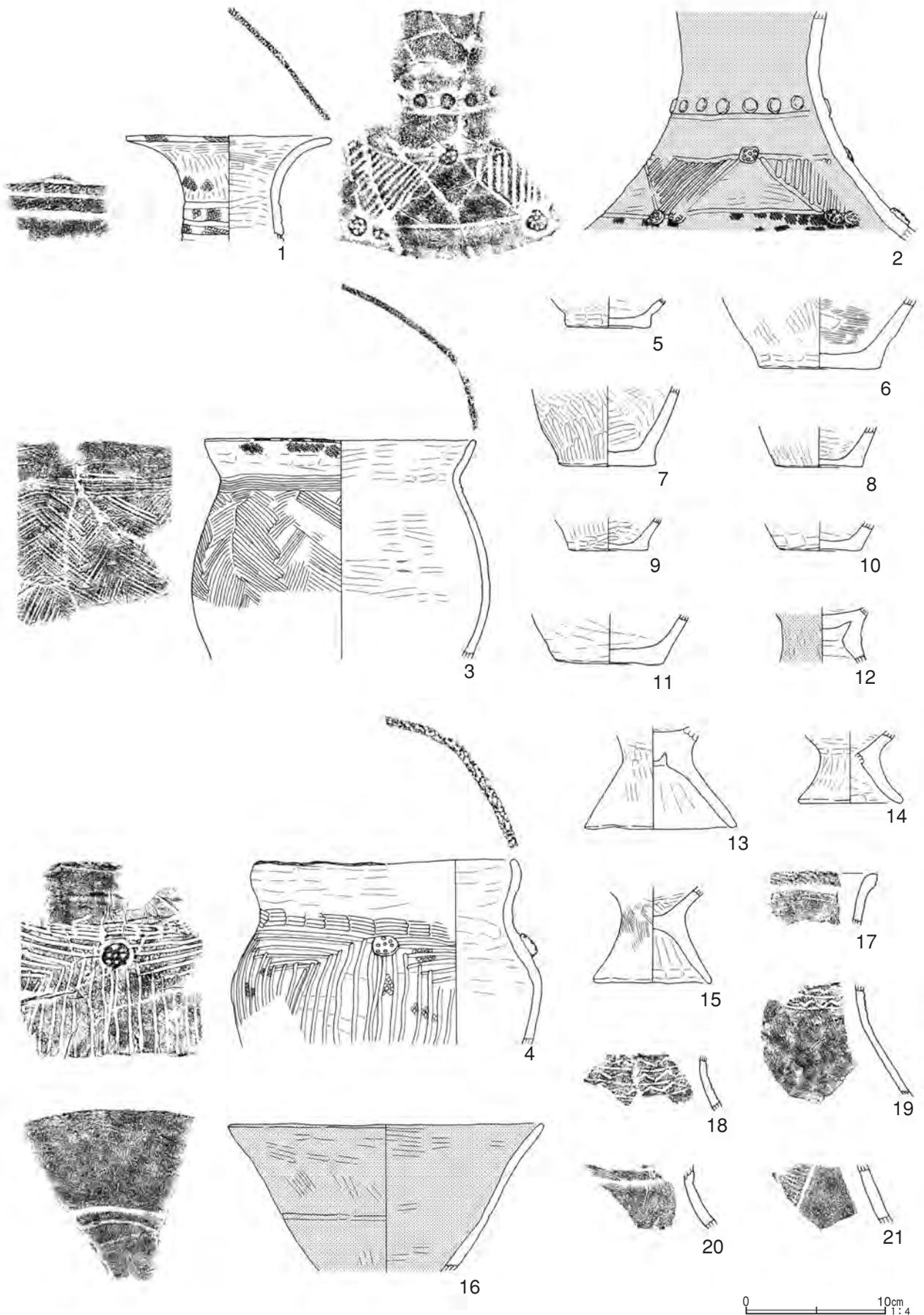
1・2・5・17~24は壺。1は口縁部から頸部までの部位。口縁部は大きく外反し、頸部はほぼ直立する。文様は頸部にやや太い平行沈線が3条巡り、口縁端部及び口縁部直下、沈線間にL R単節縄文が粗雑に施文されている。外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されているが、口縁部内面はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。2は頸部から胴上部までの部位。頸部はほぼ直立し、肩部以下緩やかに広がる。文様は頸部下位にボタン状貼付文が列状に複数巡り、下に3条の平行沈線が等間隔に巡る。上の平行沈線間は無文、下の沈線間は鋸歯文が描かれ、区画上に斜位の沈線が充填されている。鋸歯文上下の頂点には複数の円形刺突が施されたボタン状貼付文が付くが、上は1つ、下は2つ付く。最下の平行沈線下は細かいL R単節縄文が縦位に施文されている。無文部は、磨耗が著しいためほとんど図示できなかったが、外面はヘラミガキ調整と赤彩が施されており、内面は不明である。5は底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。壺としたが、甕の可能性もある。

17は口縁部から頸部にかけての破片。肥厚した口縁部にR L単節縄文が施文されている。以下は無文で内面とともに横位のヘラミガキ調整が施されている。18~20は頸部から肩部にかけての破片。いずれも頸部に平行沈線が複数巡り、18・19は間に波状沈線が巡る。20は平行沈線間にR L単節縄文と思われる細かい縄文が施文されている。すべて肩部は無文で18・20は斜位、19は縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。21は大振りの鋸歯文が描かれた肩部片。区画上にL R単節縄文が充填されている。無文部は斜位のヘラミガキ調整が施されている。22・23は直線文ないし沈線区画内に縄文が充填された破片。22は肩部片、23は胴部中段の破片である。22は横位のヘラミガキ調整が施された無文部下に3本一単位の直線文が2段巡り、間にR L単節縄文が施文されている。23は3条の波状沈線上下にR L単節縄文と赤彩が施されている。上位の縄文上は平行沈線が巡る。18~23の内面調整は、18・20が横位のヘラミガキ、19は磨耗顕著により不明、21~23は横位のヘラナデである。24は弥生時代中期中頃池上式に相当する胴上部片。流れ込み。重四角文内に円形の刺突列が充填されている。内面調整は、横位のヘラナデである。胎土が粗い。

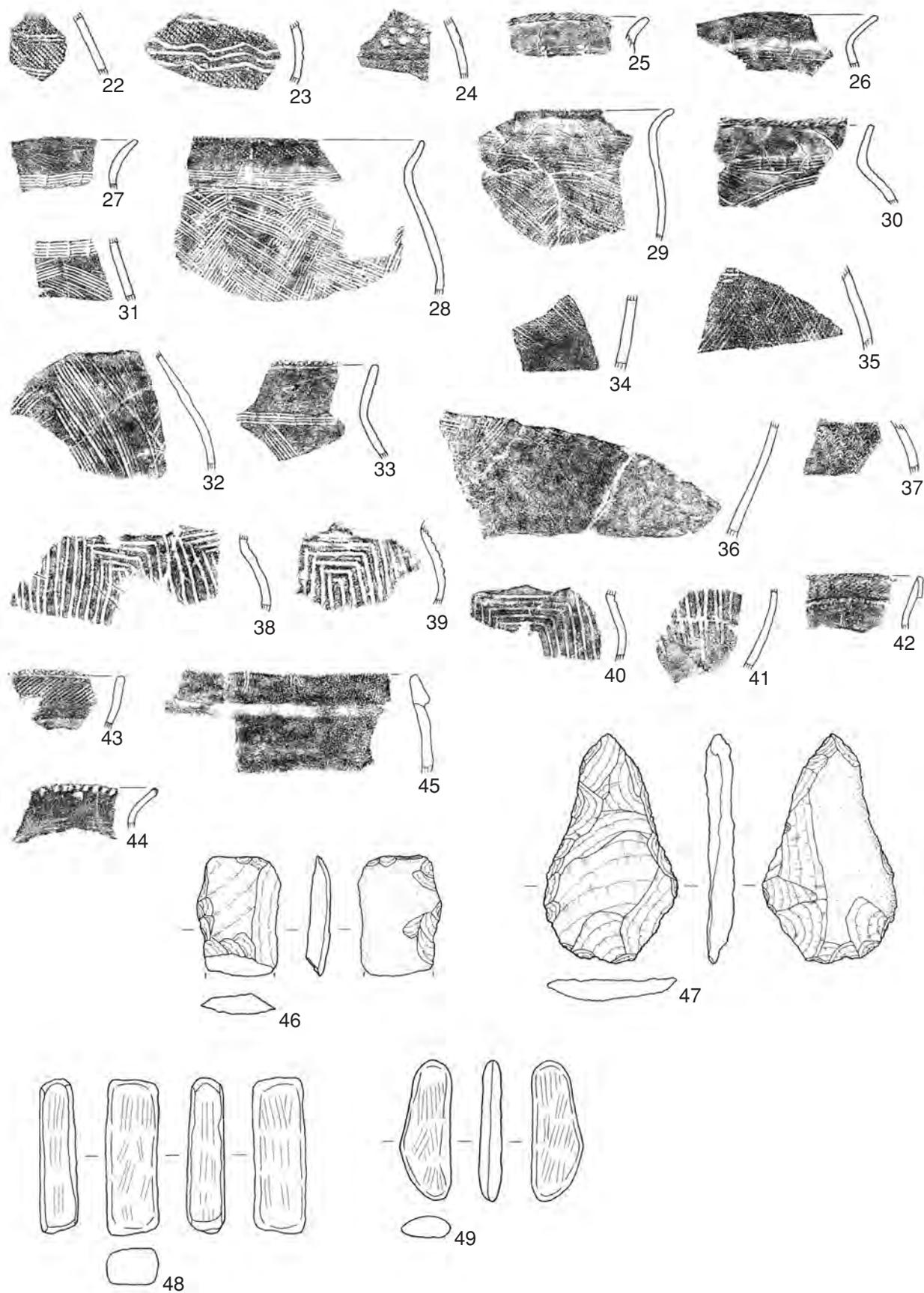
3・4・6~11・25~44は甕。3・4は口縁部から胴下部までの部位。3は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。頸部はすぼまり、胴部は中段付近が膨らみ、球形を呈する。最大径を胴部中段に持つが、口径とあまり変わらない。文様は端部を含む口縁部にR L単節縄文が施文され、頸部は6本一単位の直線文が巡る。胴部は縦位の羽状文が密に描かれているが、乱雑である。外面無文部の調整はヘラナデ、内面はヘラミガキである。4は口縁部が内湾し、頸部はすぼまる。胴上部が膨らみ、最大径を持つ。文様は口縁端部にR L単節縄文が施文され、頸部に4本一単位の簾状文が巡る。胴部はコの字重ね文が描かれており、地文にR L単節縄文が所々施文されている。コの字重ね文間頂点に複数の円形刺突が施されたボタン状貼付文が付く。口縁部外面の無文部及び内面は、ヘラナデ調整が施されている。

6~11は胴下部から底部までの部位。6は外面がヘラミガキ、内面はハケメ、7~9は内外面ともにヘラミガキ、10・11はヘラナデ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。

25~37は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は5本前後が多い。25~27は口縁部から頸部にかけての破片。頸部に簾状文が巡る。25・27は口縁端部にL R単節縄文が施文されている。口縁部



第 53 图 第 13 号住居跡出土遺物 (1)



0 10cm 1:4

第 54 图 第 13 号住居跡出土遺物 (2)

外面の無文部は、25・26が横位のヘラミガキ、27は斜位のハケメ、内面はすべて横位のヘラミガキ調整が施されている。28～32は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。口縁部から胴部中段までに収まる。すべて乱雑で密に描かれている。櫛歯は太いものと細いものがある。28は端部を含む口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部は4本一単位の直線文が2段巡る。口縁部外面の縄文帯以下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。29～31は頸部に簾状文が巡る。29は胎土が粗い。30は口縁端部にLR単節縄文が施文されている。29・30の口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。28～32の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。31は胴上部内面に輪積痕が残る。33・34は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。33は口縁部から胴上部にかけて、34は胴部中段から下部にかけての破片である。33は間隔を空けて比較的丁寧に描かれている。口縁端部はLR単節縄文が施文され、口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。34は細い櫛歯で密に描かれており、羽状文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。胴下部は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。35・36は胴部に斜格子文が描かれた破片。いずれも櫛歯が細い。35は頸部から胴上部にかけて、36は胴部中段から下部にかけての破片である。35は頸部に簾状文が巡る。36は乱雑に描かれている。斜格子文下は無文で斜位のハケメ調整が施されている。35・36の内面調整は、いずれも横位のヘラミガキである。37は振りの小さい波状文が複数巡る胴上部片。やや乱雑に描かれている。内面調整は、磨耗顕著により不明である。

38～41は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。38～40は頸部から胴上部にかけて、41は胴部中段から下部にかけての破片である。38～40は同一個体。41はコの字重ね文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。38～41の内面調整は、38は横・斜位、39・40は横位のヘラミガキ、41は磨耗顕著により不明である。

42・43はLR単節縄文が施文された口縁部から頸部にかけての破片。42は複合口縁部に縄文が施文されている。頸部は無文で上位が横位、下位は斜位のヘラミガキ調整が施されている。43は端部を含む口縁部に縄文が施文されている。頸部は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。

44は端部に刻みを持つ口縁部から頸部にかけての破片。内外面の調整は、横位のヘラミガキである。

12～15は高坏。12は接合部、13～15は接合部から脚部までの部位。13は脚部がハの字に開き、14・15は緩やかに開く。12～14は外面及び坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整が施されており、12のみ外面に赤彩が施されている。15は外面がハケメ、内面は坏部がヘラミガキ、脚部はヘラナデ調整が施されている。

16は鉢。底部を欠く。口縁部はやや外反しながら開き、体部はやや内湾する。文様はほぼ中段に太い平行沈線が1条巡るのみである。内外面ともにヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

46・47は打製石斧。ともにホルンフェルス製。46は基部。短冊状を呈すると思われる。片面に自然面を残す。47は基部が尖るが、変形の撥型か。完形。片面に半分自然面を残す。48・49は磨石。いずれも完形。48は角錐状を呈し、四面使用されている。砂岩製。49は扁平で楕円形状を呈する。二面使用されている。粘板岩製。

45は縄文時代晩期の深鉢の口縁部片。流れ込み。口縁部が肥厚している。無文で内外面ともに横位のヘラナデ調整が施されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

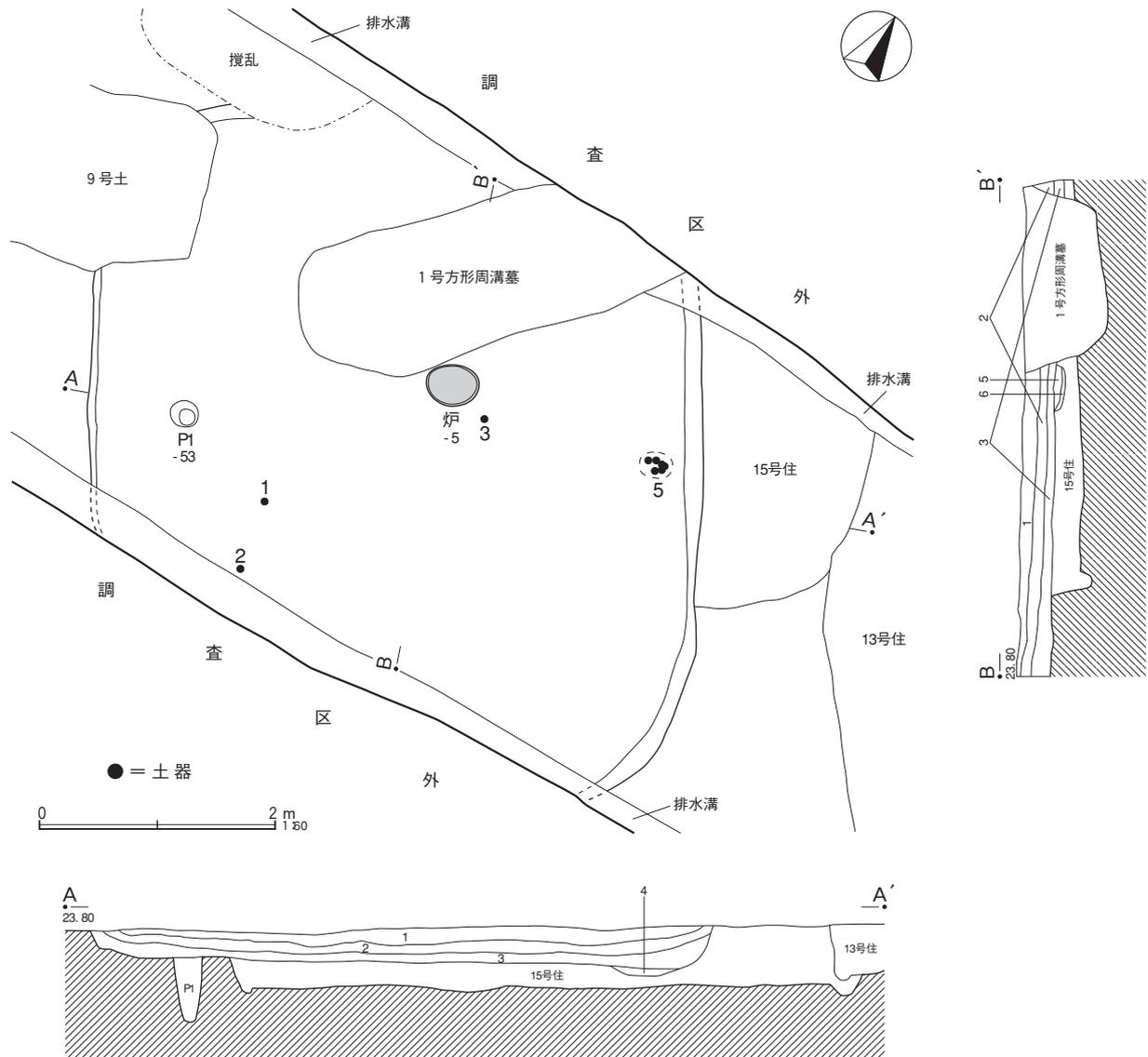
第14表 第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	14.6	(7.7)	—	ABCIKN	淡黄色	B	口～頸 90%	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	(16.35)	—	ABDIKN	橙色	B	頸～胴 50%	外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
3	弥生土器 甕	19.3	(15.9)	—	ABIK	灰褐色	B	口～胴 40%	内面磨耗顕著。
4	弥生土器 甕	18.4	(13.25)	—	ABCHIK	黒褐色	B	口～胴 40%	内外面所々磨耗。
5	弥生土器 壺	—	(2.2)	6.0	ABEHIN	にぶい赤褐色	B	底部 90%	内面磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	—	(5.1)	8.6	ABHIKMN	灰褐色	B	胴～底 70%	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 甕	—	(5.75)	6.9	ACIKN	黒色	B	胴～底 80%	
8	弥生土器 甕	—	(2.95)	6.2	ABEGHIKN	にぶい赤褐色	B	底部 70%	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甕	—	(2.35)	5.6	ABHIKN	にぶい橙色	B	底部 70%	内外面やや磨耗。
10	弥生土器 甕	—	(2.1)	6.0	ABEIKN	黒褐色	B	底部 50%	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 甕	—	(3.6)	7.7	ABDIKMN	灰黄色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器高坏	—	(3.95)	—	AHKN	灰褐色	B	接合部 90%	外面赤彩、ほぼ剥落。内外面磨耗顕著。
13	弥生土器高坏	—	(7.3)	10.9	ABCEHIKN	にぶい赤褐色	B	接～脚 90%	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器高坏	—	(5.15)	(7.5)	ABIKN	黒褐色	B	接～脚 45%	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器高坏	—	(6.95)	8.2	ABIKN	にぶい橙色	B	接～脚 80%	外面大半磨耗顕著。
16	弥生土器 鉢	22.6	(10.7)	—	ABHKN	橙色	B	口～体 40%	内外面赤彩、ほぼ剥落。磨耗顕著。
17	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIMN	浅黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHN	浅黄橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
19	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	頸～肩部片	内面磨耗顕著。
20	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKM	浅黄橙色	B	頸～肩部片	外面磨耗顕著。
21	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKMN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
22	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHKM	褐灰色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
23	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	縄文施文部赤彩。内面磨耗顕著。
24	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
25	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
26	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	暗灰黄色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
27	弥生土器 甕	—	—	—	ACIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	
28	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIJKN	黒褐色	B	口～胴中片	内面磨耗顕著。
29	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDHIKN	にぶい橙色	B	口～胴中片	内外面磨耗顕著。
30	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	灰褐色	B	口～胴上片	内外面やや磨耗。
31	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	B	頸～胴上片	胴上部内面輪積痕有。
32	弥生土器 甕	—	—	—	ABCIKMN	にぶい橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
33	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄褐色	A	口～胴上片	
34	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	黒褐色	B	胴中～下片	内面磨耗顕著。
35	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
36	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
37	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIJKN	にぶい赤褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
38	弥生土器 甕	—	—	—	AEHIK	黒褐色	B	頸～胴上片	No.39・40 と同一個体。
39	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。No.38・40 と同一個体。
40	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIN	褐色	B	頸～胴上片	内面大半、外面一部磨耗。No.38・39 と同一個体。
41	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	橙色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
42	弥生土器 甕	—	—	—	ABCDIKMN	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
43	弥生土器 甕	—	—	—	ABCM	黒褐色	B	口～頸部片	内面磨耗顕著。
44	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIJKM	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
45	縄文土器深鉢	—	—	—	ABCDIMN	橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
46	打製石斧	最大長 (8.5) cm、最大幅 (5.6) cm、最大厚 (1.6) cm。重量 (100)g。基部のみ。ホルンフェルス製。							
47	打製石斧	最大長 16.2 cm、最大幅 9.3 cm、最大厚 2.0 cm。重量 253g。完形。ホルンフェルス製。							
48	磨石	最大長 11.0 cm、最大幅 3.7 cm、最大厚 2.65 cm。重量 198g。完形。砂岩製。四面使用。							
49	磨石	最大長 9.9 cm、最大幅 3.6 cm、最大厚 1.5 cm。重量 81g。完形。粘板岩製。二面使用。							

第 14 号住居跡 (第 55 図)

68・69-137・138 グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係にあり、15号住居跡の南西部上位を切つて構築され、北西隅は9号土坑、北壁中央より北側は1号方形周溝墓に切られている。北壁中央付近は攪乱により欠き、北東隅及び南西隅付近は調査区外にある。なお、直接的な切り合い関係にないが、東側には13号住居跡がほぼ軸を揃えて近接している。

正確な規模は不明であるが、長軸 6.2m 程、短軸 5.2m の隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は



第14号住居跡

土層説明 (A A' B B')

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。 | 4 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。 |
| 2 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粘土少量含む。 | 5 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、焼土粒少量含む。 |
| 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒少量含む。 | 6 焼土層 |

第55図 第14号住居跡

N-32°-Wを指す。確認面からの深さは0.25m前後と比較的浅く、床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は4層(1~4層)確認された。混入物がやや見られたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

炉跡は床面中央からやや北東寄りに位置する。長軸0.44m、短軸0.35mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.05mと浅い。覆土は2層(5・6層)確認され、下層に焼土層が認められた。

ピットは西壁沿いから1基のみ確認された。その径及び位置から主柱穴とは考えにくい。覆土は図示できなかったが、柱痕跡は確認されなかった。

壁溝、貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第56図）は、弥生土器壺（1～4・6～10）、甕（5・11・12）、高坏（13・14）、鉢（15・16）、磨石（17）がある。遺物量は少ないが、比較的残存状態の良好なものが床面直上から検出された。4は残存状態が良好であるが、覆土からの検出である。

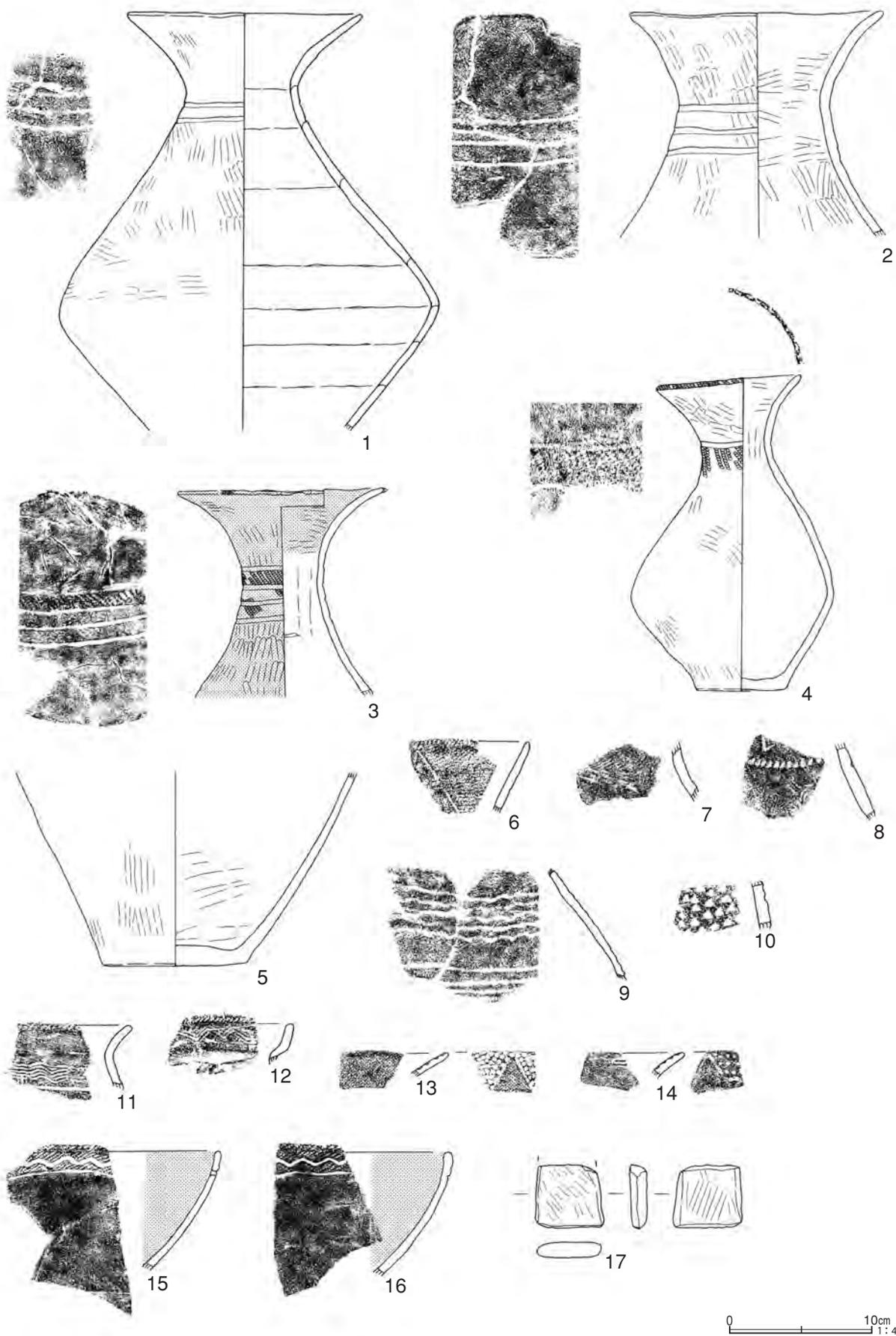
1～4・6～10は壺。1は底部付近を欠くが、残存状態が比較的良好である。口縁部は外反しながら大きく開く。頸部は短く、すぼまるが、肩部以下は算盤玉状を呈する。最大径を胴部中段に持つ。文様は頸部に太い平行沈線が2条巡るのみである。調整は磨耗顕著によりほとんど図示できなかったが、外面はヘラミガキ、内面は口縁部から頸部までがヘラミガキ、以下はヘラナデである。内面ほぼ全面に輪積痕が残る。2・3は口縁部から肩部までの部位。2は器形・文様・調整が1に似ているが、頸部が太く、平行沈線が3条巡る。調整は内外面ともにヘラミガキである。3は口縁部が大きく外反し、細く、長い頸部がほぼ直立する。肩が張らずに緩やかに下る。口縁部に二個一対の突起が付き、頸部に巡る4条の平行沈線間にL R単節縄文が縦位に施文されている。外面及び口縁部内面は、ヘラミガキと赤彩、頸部以下の内面はヘラナデ調整が施されている。頸部下位内面に輪積痕が一部残る。4は全形の分かる小型壺。口縁部はやや外反しながら大きく開く。頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肩部以下はやや縦長の算盤玉状を呈する。最大径を胴部中段に持つ。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部は上位にのみやや太い平行沈線が1条巡り、下にL R単節縄文が縦位に施文されている。調整は磨耗顕著ないし計測不可能によりほとんど図示できなかったが、外面及び口縁部から頸部までの内面がヘラミガキ、頸部以下の内面はヘラナデが施されている。

6は口縁部片。大振りな鋸歯文が描かれ、区画上にL R単節縄文が充填されている。区画下の無文部及び内面は、磨耗顕著により不明である。胎土が粗い。7・8は肩部片。7は上位にL R単節縄文が施文され、下は無文で斜位のヘラミガキが施されている。8は鋸歯文下に2本一単位の櫛歯による刺突列が巡る。以下は磨耗が著しいため定かではないが、波状文と思われる文様が描かれている。7・8の内面調整は、横位のヘラナデである。9は胴上部片。上下の無文部間に振りの小さい波状沈線5条が巡り、下に複数の平行沈線が巡る。磨耗顕著により、無文部の調整は不明である。内面調整は、横位のヘラナデである。10は弥生時代中期中頃池上式に相当する胴部中段の破片。流れ込み。半円形の刺突がランダムに刻まれている。内面調整は、横位のヘラナデである。

5・11・12は甕。5は胴下部から底部までの部位。磨耗顕著によりほとんど図示できなかったが、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。11・12は口縁部から胴上部までに収まる破片。11は頸部、12は口縁部に波状文が巡る。櫛歯の単位は11が5本、12は3本であり、波状文の振りは11が小さく、12はやや大きい。11は口縁端部、12は端部を含む口縁部にL R単節縄文が施文されており、11は胴上部に平行沈線が巡る。11は口縁部、12は頸部が無文とともに横位のヘラミガキ調整が施されている。11・12の内面調整は、いずれも横位のヘラミガキである。

13・14は高坏の口縁部片。外面及び内面無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されており、内面は鋸歯文区画上に円形の刺突がランダムに刻まれている。13は外面及び内面無文部に赤彩が施されている。

15・16は鉢の口縁部から体部にかけての破片。同一個体。端部を含む口縁部にL R単節縄文が施文され、波状沈線が巡る。縄文下に残る輪積痕以下と内面は、横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。15は口縁部に焼成前穿孔が1つみられた。



第 56 图 第 14 号住居跡出土遺物

第15表 第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	16.4	(29.7)	—	ABEIN	にぶい橙色	B	口~胴 70%	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	(17.8)	(15.9)	—	ABDGHN	にぶい橙色	B	口~肩 70%	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	(14.4)	(14.65)	—	ABEHIKN	淡黄色・赤褐色	B	口~肩 70%	頸部内面輪積痕有。内外面赤彩、大半剥落。
4	弥生土器 壺	(10.2)	22.4	6.3	ABCIKN	にぶい赤褐色	B	60%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 甕	—	(13.7)	10.1	ABIKMN	灰褐色	B	胴~底 70%	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	灰黄褐色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	—	—	—	AIKN	黒色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	褐灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABEH	浅黄橙色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口~胴上片	
12	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	口~頸部片	内外面磨耗顕著。
13	弥生土器高坏	—	—	—	ABDEN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内外面赤彩。磨耗顕著。
14	弥生土器高坏	—	—	—	ABDIM	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 鉢	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	口~体部片	内面赤彩。No.16と同一個体。焼成前穿孔有。
16	弥生土器 鉢	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	口~体部片	内面赤彩。No.15と同一個体。
17	磨石	最大長(4.6)cm、最大幅(4.8)cm、最大厚(1.15)cm。重量(34)g。片端欠?安山岩製。二面使用。							

17は磨石。片端を欠くが、扁平で方形状を呈する。二面使用されている。安山岩製。

本住居跡の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第15号住居跡（第57図）

68・69-137・138グリッドに位置する。14号住居跡同様、多くの遺構と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。南西部上位は14号住居跡、東壁上位は13号住居跡、中央は1号方形周溝墓に切られている。また北西部の調査区との境では西壁の一部を攪乱により欠き、北側半分は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は5.52mを測り、平面プランはおそらく隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-27°-Wを指す。確認面からの深さは0.5m前後であり、床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は4層（1~4層）確認された。混入物がやや見られ、ほぼ水平に堆積していたことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

ピットは1基のみ確認された。床面からの深さは0.17mと浅いが、その位置から見て主柱穴と思われる。覆土は図示できなかつたが、柱痕跡は確認されなかつた。

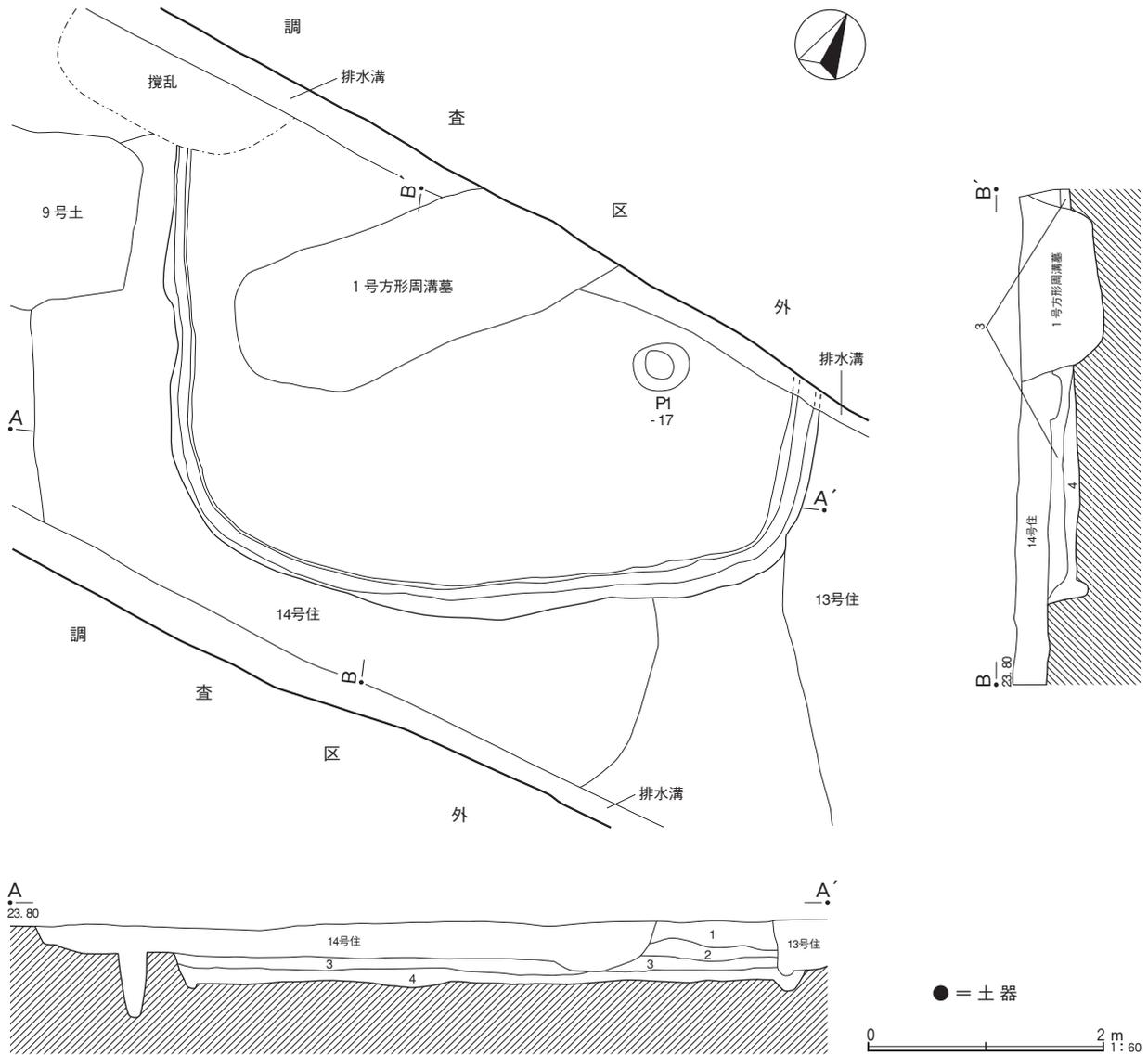
壁溝は検出された範囲内を全周する。幅は0.25m前後、床面からの深さは0.07m程を測る。

炉跡や貯蔵穴は確認されなかつた。

出土遺物（第58図）は、弥生土器壺（2・3）、甕（1・4~9）、刃器（11）があり、この他に流れ込みで縄文土器深鉢の破片（10）も検出された。遺物量が少なく、すべて覆土からの検出である。

2・3は壺の胴上部片。2は分かりづらいが、細い平行沈線下にLR単節縄文が施文されている。3はLR単節縄文地に太い波状沈線が複数巡る。2・3の内面調整は、2が横位のヘラナデ、3は磨耗顕著により不明である。

1・4~9は甕。1は胴下部から底部までの部位。内外面ともにヘラミガキ調整が施されているが、外面はヘラミガキ前に施されたハケメ調整が一部残る。4・5は頸部に波状文が描かれた破片。櫛歯の単位は4が5本、5は4本であり、細い。4は口縁部から胴上部にかけての破片。口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部以下に振りのやや大きい波状文が複数巡る。口縁部外面の無文部は、横位のヘラミガキ調整が施されている。5は頸部から胴上部にかけての破片。頸部に振りの大きい波状文が巡り、胴上部は縦位



第15号住居跡

土層説明 (A A' B B')

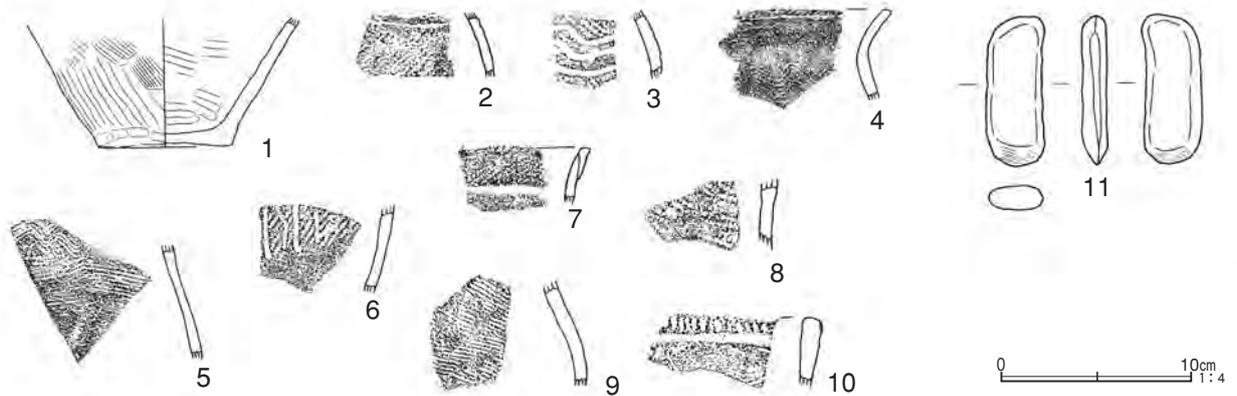
1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。

3 青灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。

2 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第57図 第15号住居跡



第58図 第15号住居跡出土遺物

第16表 第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	—	(6.6)	7.0	AHIKN	黒色	B	胴～底 60%	内面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHN	黄灰色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	—	—	—	ABDKN	褐灰色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
4	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKM	灰黄褐色	B	頸～胴上片	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	黄灰色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
7	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	淡橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	黄灰色	B	頸部片	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
10	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDHIKN	浅黄橙色	B	口縁部片	
11	刃器	最大長7.8cm、最大幅2.9cm、最大厚1.2cm。重量45g。完形。砂岩製。							

の羽状文が密に描かれている。4・5の内面調整は、いずれも横位のヘラミガキである。6はコの字重ね文が描かれた胴部中段から下部にかけての破片。地文にLR単節縄文が施文されている。下部は無文で斜位のヘラミガキが施されている。7～9は縄文が施文された破片。7は口縁部から頸部にかけて、8は頸部、9は胴上部の破片である。縄文は7がLR、8はRL単節縄文、9は無節Rである。7は端部を含む複合口縁部に縄文が施文されている。頸部は無文であるが、内面も含め磨耗顕著により調整不明である。8・9は全面に施文されている。7～9の内面調整は、7・8が横位、9のみ斜位のヘラミガキである。

11は刃器。やや扁平な川原石の片端を加工し、刃部が造り出されている。磨製石斧の刃部のような形状を呈する。刃部は若干刃こぼれが認められ、両面に整形のための擦痕が認められた。砂岩製。

10は縄文時代晩期の深鉢の口縁部片。流れ込み。爪形状を呈する刻み列下に太い平行沈線が巡る。外面無文部は、横・斜位、内面は横位のヘラミガキ調整が施されている。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

2 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第59図）

60・61-137・138グリッドに位置する。北側を10号住居跡、南東隅付近を9号住居跡に切られている。

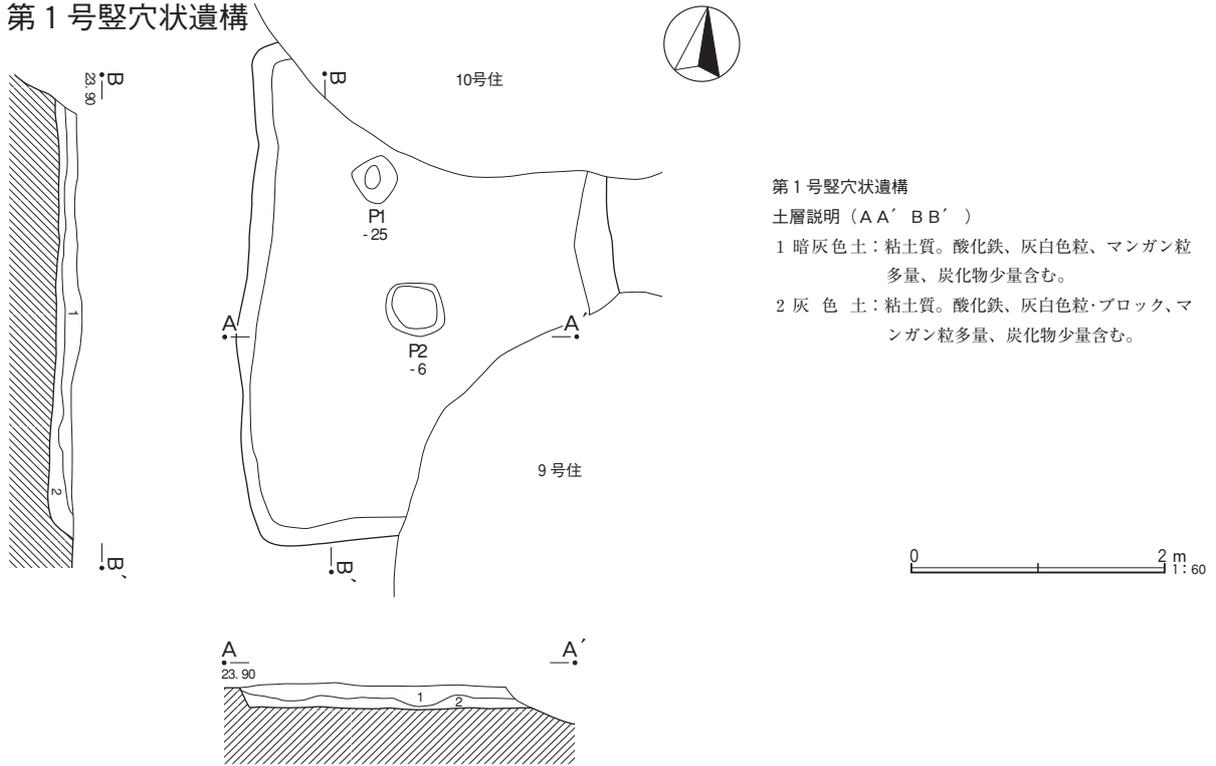
正確な規模は不明であるが、長軸は4m程、短軸は2.82mを測り、平面プランは長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-10°-Wを指し、ほぼ東西南北に軸が合う。確認面からの深さは0.2m前後と浅く、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層(1・2層)確認された。混入物が多く見られたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

底面からはピットが2基確認された。P1は底面中央からやや北西寄り、P2はほぼ中央に位置するが、いずれも本遺構に伴うものか不明である。

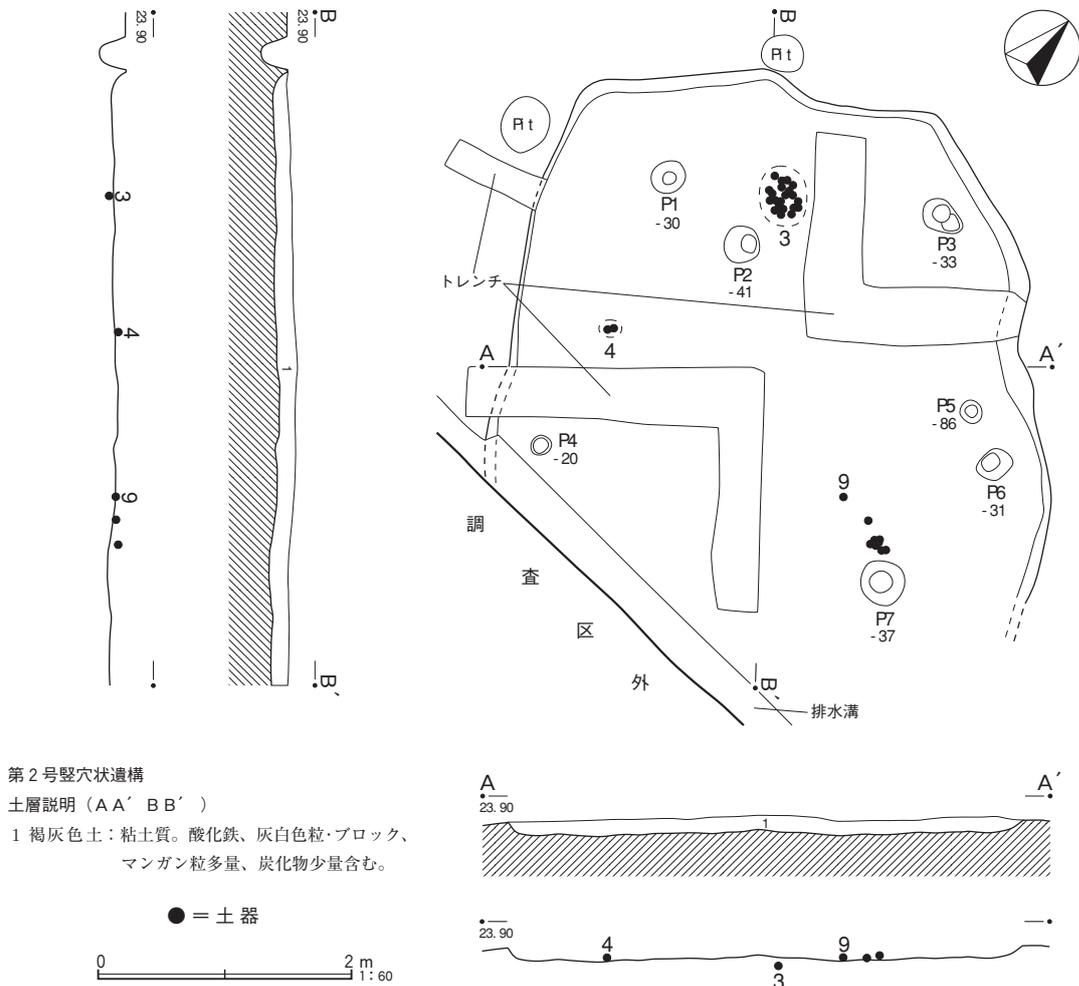
出土遺物(第60図)は、弥生土器壺(1~14)、甕(15~20)がある。残存状態の良好なものはなく、破片が多い。底面直上からの検出はなく、すべて覆土上層からの検出である。

1~14は壺。1は底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。底面に木葉痕がみられた。2は肩部片。分かりづらいが、2条の乱雑な波状沈線上下にRL単節縄文と思われる縄文が施文されている。3~5は平行沈線ないし櫛歯による直線文が巡る破片。胴上部から中段までに収まる。3は平行沈線4条上に連弧文が描かれており、間にLR単節縄文と赤彩が施されている。平行沈線下はLR単節縄文地に波状沈線が巡る。沈線が細い。4はLR単節縄文地に2本一単位の直線文が2段巡る。5

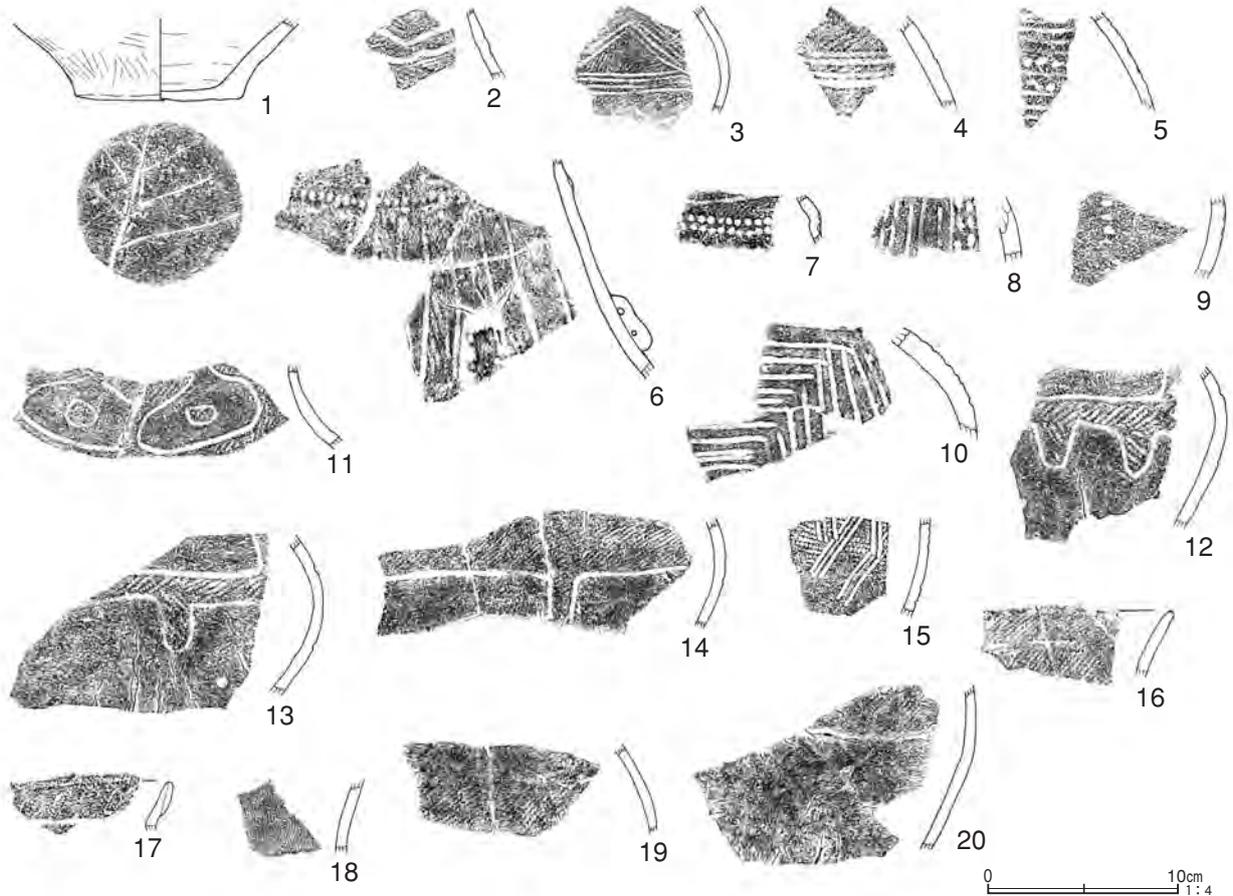
第1号竖穴状遺構



第2号竖穴状遺構



第59図 第1・2号竖穴状遺構



第60図 第1号豎穴状遺構出土遺物

第17表 第1号豎穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(4.35)	8.7	ABIKN	灰黄褐色	B	底部 90%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHKN	浅黄色	B	肩部片	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
3	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴上~中片	外面縄文施文部赤彩。内外面磨耗顕著。
4	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	肩~胴上片	胴上部外面突帯有。内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 壺	—	—	—	ABIJK	浅黄色	B	肩~胴上片	内面輪積痕有。外面やや磨耗。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
11	弥生土器 壺	—	—	—	AIKMN	黒褐色	B	肩部片	
12	弥生土器 壺	—	—	—	AHIMN	灰褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。No.13 と同一個体。
13	弥生土器 壺	—	—	—	AHIMN	灰褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。No.12 と同一個体。
14	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	にぶい褐色	B	胴中~下片	
16	弥生土器 甕	—	—	—	ABGIK	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内面磨耗顕著。
17	弥生土器 甕	—	—	—	ADHN	黒褐色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
18	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	頸部片	内面磨耗顕著。
19	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。No.20 と同一個体。
20	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	胴中~下片	内外面磨耗顕著。No.19 と同一個体。

は複数巡る平行沈線のうち、中段の沈線3条間に円形の刺突列が刻まれている。6~9は刺突列が刻まれた破片。肩部から胴部中段までに収まる。6は段上に半円形の刺突列が巡り、下に複数の沈線が等間隔に垂下する。沈線間はRL単節縄文施文部と無文部が交互に配置されており、無文部下位の一部に中

央がやや窪んだ短い突帯が付く。突帯の上下脇は穿孔がみられた。7は段下に円形の刺突列が2列巡る。段上は平行沈線が巡る。8は垂下する複数の沈線のうち、幅広の沈線間に縦長の楕円形状を呈する刺突列が刻まれている。9は半円形の刺突列が縦位に刻まれており、両脇は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。10は重四角文が描かれた胴上部片。沈線が太い。11～14は沈線で描かれた文様区画内外に縄文が施文された破片。11は肩部片、12～14は胴部中段の破片である。11は1条の沈線でフラスコ状の文様が描かれ、文様中央に描かれた円形文内及びフラスコ状文様外にLR単節縄文が施文されている。12・13は同一個体。胴部中段に巡る平行沈線2条に上が懸垂文、下は短い舌状文が接続する。沈線間はLR単節縄文が充填されている。無文部の調整は、斜位のヘラミガキである。14は12・13と文様が似ているが、平行沈線上に施文されたLR単節縄文帯が幅広く、舌状文は幅が狭い。無文部の調整は、横位のヘラミガキである。2～14の内面調整は、12・13のみ横・斜位、その他は横位のヘラナデである。2・7は内面に輪積痕が残る。

15～20は甕。15は胴部中段から下部にかけての破片。RL単節縄文地の横位の羽状文が乱雑に描かれている。櫛歯が3本でやや太い。16～20は縄文が施文された破片。縄文は、18のみカナムグラによる擬縄文、その他はLR単節縄文である。16・17は口縁部片。16は口縁端部に刻みが施され、口縁部全面に縄文が施文されている。17は複合口縁部に縄文が施文されている。18は頸部片。全面に縄文が施文されている。19は胴上部片、20は胴部中段から下部にかけての破片。同一個体。分かりづらいが、縄文は19が全面、20は胴部中段に施文され、下部は無文であるが、磨耗顕著により調整不明である。15～20の内面調整は、15～17が横位のヘラミガキ、18は磨耗顕著により不明、19・20は横位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期中頃から後半にかけての段階と思われる。

第2号竪穴状遺構（第59図）

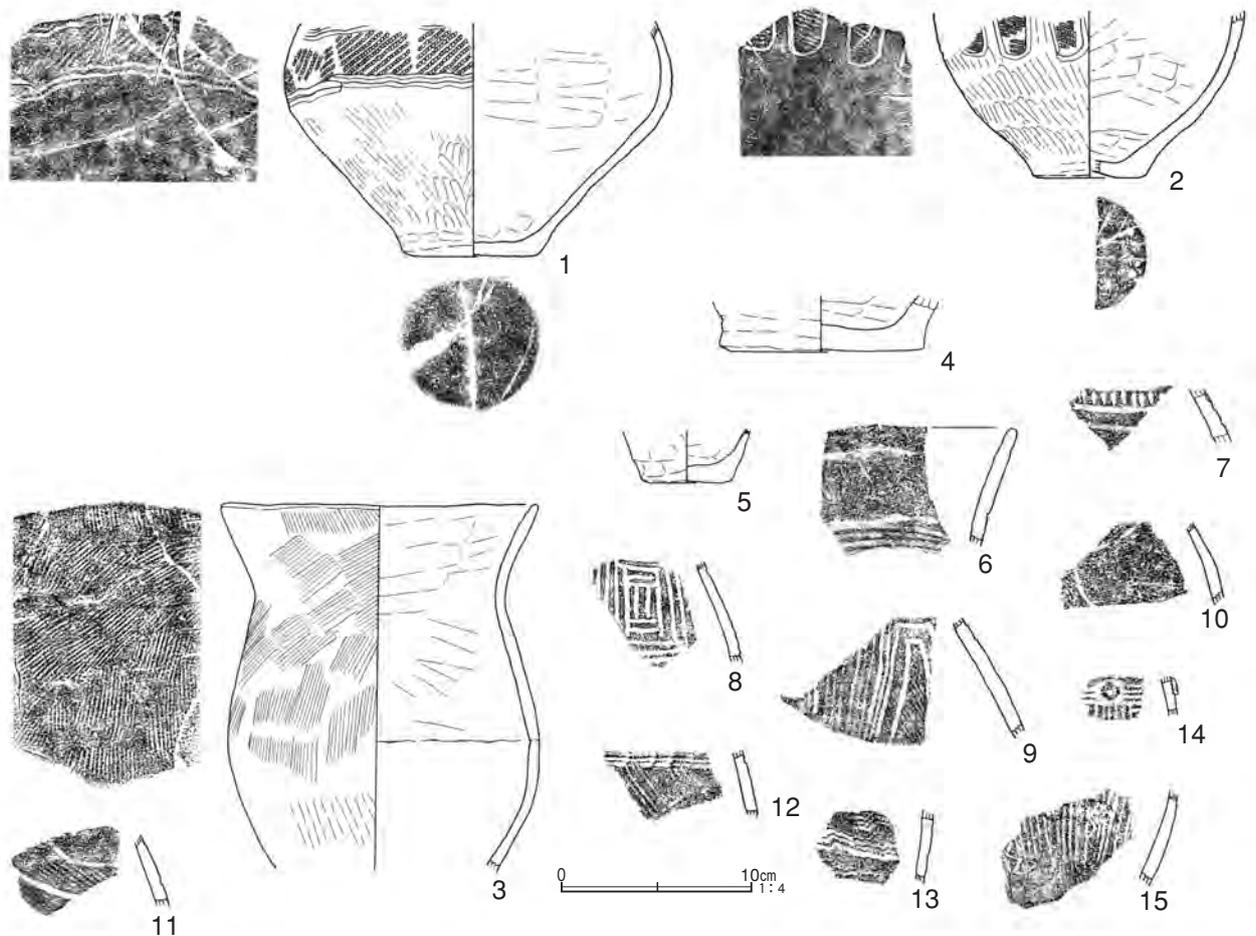
61・62-137・138グリッドに位置する。東側に7号溝跡が南北に走り、重複関係にあると思われるが、本遺構は南東隅付近で途切れているため、新旧関係を直接確認することはできなかった。しかし、他の周辺遺構も含め新旧関係を考慮すると、本遺構が古いと思われる。南西部は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、南北は4m以上、東西4.36mを測り、平面プランはいびつな隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-39°-Wを指す。確認面からの深さは0.12m前後と浅く、底面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は褐灰色土（1層）のみ確認された。混入物が多く見られ、ブロックを含んでいたことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

底面からはピットが7基確認されたが、いずれもランダムな位置にあり、本遺構の北側に単独ピットが多数存在することから伴わない可能性が高い。

出土遺物（第61図）は、弥生土器壺（1・2・6～11）、甕（3～5・12～15）がある。比較的残存状態の良い3をはじめ、数点が底面直上から検出されたが、大半は覆土上層からの検出である。

1・2・6～11は壺。1・2は胴部中段から底部までの部位。1は球形を呈するが、中段から底部まではほぼ直線的に下る。文様は胴部中段に2本一単位の振りの小さい波状文が間隔を空けて上下に巡り、間にLR単節縄文が充填されている。胴下部は無文でヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。底面に木葉痕がみられた。2も球形を呈するが、胴部中段から底部まで内湾しながら下る。文様は胴部中段に舌状文が複数描かれており、RL単節縄文が充填されている。外面無文部はヘラミガキ、内面はヘラ



第 61 図 第 2 号 豎穴状遺構出土遺物

第18表 第2号豎穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(12.2)	7.4	ABIKN	褐灰色	B	胴～底 80%	底面木葉痕有。内外面所々磨耗。
2	弥生土器 壺	—	(8.65)	(6.0)	ABCDIKN	灰黄褐色	B	胴～底 30%	底面木葉痕有。胴下部内面輪積痕有。磨耗顕著。
3	弥生土器 甕	16.4	(19.2)	—	AHIKN	黒褐色	B	口～胴 70%	胴部内面輪積痕有。内面大半、外面所々磨耗。
4	弥生土器 甕	—	(2.9)	10.6	ABCDIM	灰褐色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
5	弥生土器 甕	—	(2.75)	4.6	ABCDIKMN	灰黄褐色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
6	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHN	灰白色	B	口～頸部片	口縁部外面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
7	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIK	にぶい黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
8	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴上部片	
9	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面縄文施文部赤彩。内面磨耗顕著。
10	弥生土器 壺	—	—	—	ABHN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
11	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
12	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	黒褐色	B	頸～胴上片	外面やや磨耗。
13	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
14	弥生土器 甕	—	—	—	ABDI	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
15	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。

ナデ調整が施されている。胴下部内面に輪積痕が残り、底面は木葉痕がみられた。6は口縁部から頸部にかけての破片。分かりづらいが、口縁部に残る輪積痕上にL R単節縄文と思われる縄文が施文され、以下は鋸歯文が描かれている。頸部は平行沈線が複数巡る。内面調整は、横位のヘラミガキである。7～11は胴上部片。7は平行沈線が複数巡り、最上位の沈線間に爪形状の刺突列が刻まれている。8・9は重四角文が描かれ、9は重四角文内にR L単節縄文と赤彩が施されている。10・11は渦巻文と思われる

文様が描かれている。11は太い沈線2条でやや間隔を空けて描かれ、間にRL単節縄文が充填されている。6~11の内面調整は、6・8が横位のヘラミガキ、7は横・斜位、9~11は横位のヘラナデである。

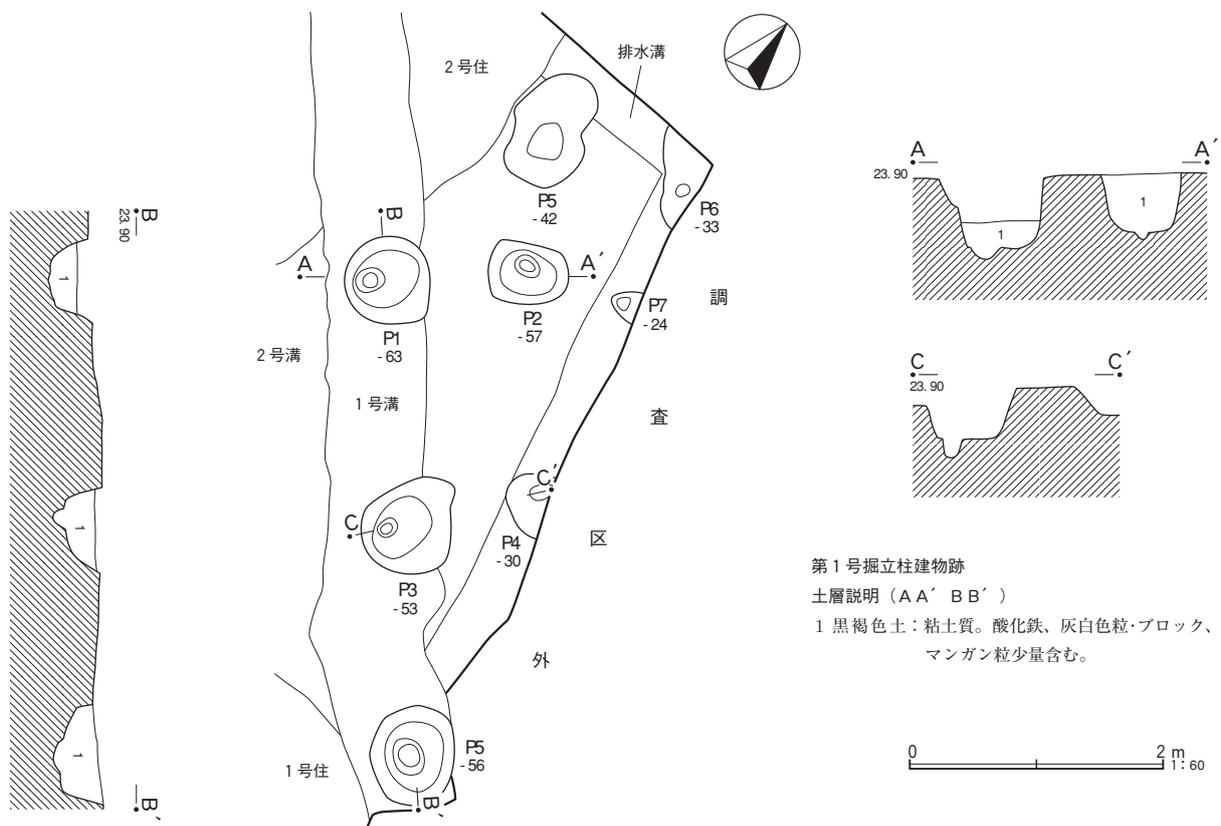
3~5・12~15は甕。3は底部付近を欠くが、残存状態が比較的良好である。口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。やや縦長の胴部は中段付近が膨らむ。最大径を口径に持つが、胴部中段の径とあまり変わらない。無文で口縁部から胴部中段までがハケメ、以下はヘラミガキ調整が施されている。内面調整は、胴下部が磨耗顕著により図示できなかったが、全面ヘラナデである。胴部中段内面に輪積痕が残る。4・5は底部。いずれも内外面ともにヘラナデ調整が施されている。4は胎土が粗い。甕としたが、壺の可能性もある。12・13は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。12は頸部から胴上部にかけての破片である。頸部に簾状文、胴上部にやや乱雑な斜格子文が描かれている。櫛歯の単位は4本であり、細い。13は胴部中段の破片。3本一単位の振りの小さい波状文が複数巡る。14・15は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。14は胴上部片、15は胴部中段から下部にかけての破片である。14は中央に円形刺突が施されたボタン状貼付文が付く。15は垂下する複数の沈線間に波状沈線が1条混じる。12~15の内面調整は、すべて横位のヘラミガキ調整である。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

3 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第62図）

53・54-137・138グリッドに位置する。多くの遺構と重複関係にあるが、本建物跡が最も新しい。ピット1・3・5が1号住居跡及び1・2号溝跡を切っている。南東部は調査区外にある。北側に並行してピット



第62図 第1号掘立柱建物跡

5・6、建物内にピット4・7があるが、本建物跡に伴うものか不明である。

正確な規模は不明である。検出された状況は2×2間であるが、柱間は南北が長く、東西が短いことから南北棟であろうか。主軸方向はN-42°-Wを指す。柱間は南北が1.8m、東西は1.2mを測る。柱穴は長軸0.8m、短軸0.7m前後の楕円形を呈するものが多い。ピット1~3・5は底面に柱の位置に合わせたピット状の掘り込みがみられた。確認面からの深さは0.35~0.6mと幅がみられた。覆土は黒褐色土（1層）のみ確認され、柱痕跡は認められなかった。

遺物は無いが、重複する遺構との新旧関係や後述する1号溝跡出土の須恵器が本建物跡に伴うものと思われることから、時期は9世紀代と思われる。

4 溝 跡

第1号溝跡（第63図）

53~55-137・138グリッドに位置する。1・2号住居跡及び2号溝跡東側の立ち上がりを切っており、1号掘立柱建物跡に切られている。

南東から北西方向に走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは7.8m、幅は0.8m前後を測る。確認面からの深さは0.2m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は3層（1~3層）確認された。ブロックを含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第65図）は、須恵器坏（1-1）、甕（1-2・3）、弥生土器壺（1-4~8）、甕（1-9・10）があるが、すべて流れ込みであり、須恵器は1号掘立柱建物跡に伴うものと思われる。

1は須恵器坏の底部。内外面ともに回転ナデ調整が施されている。底面は回転糸切痕が残る。2・3は甕の胴上部片。いずれも外面に自然釉が付着している。2の外面はタタキ、内面は回転ナデ調整が施されている。3の外面はタタキ後に回転ナデ調整が施されており、内面はあて具痕が残る。

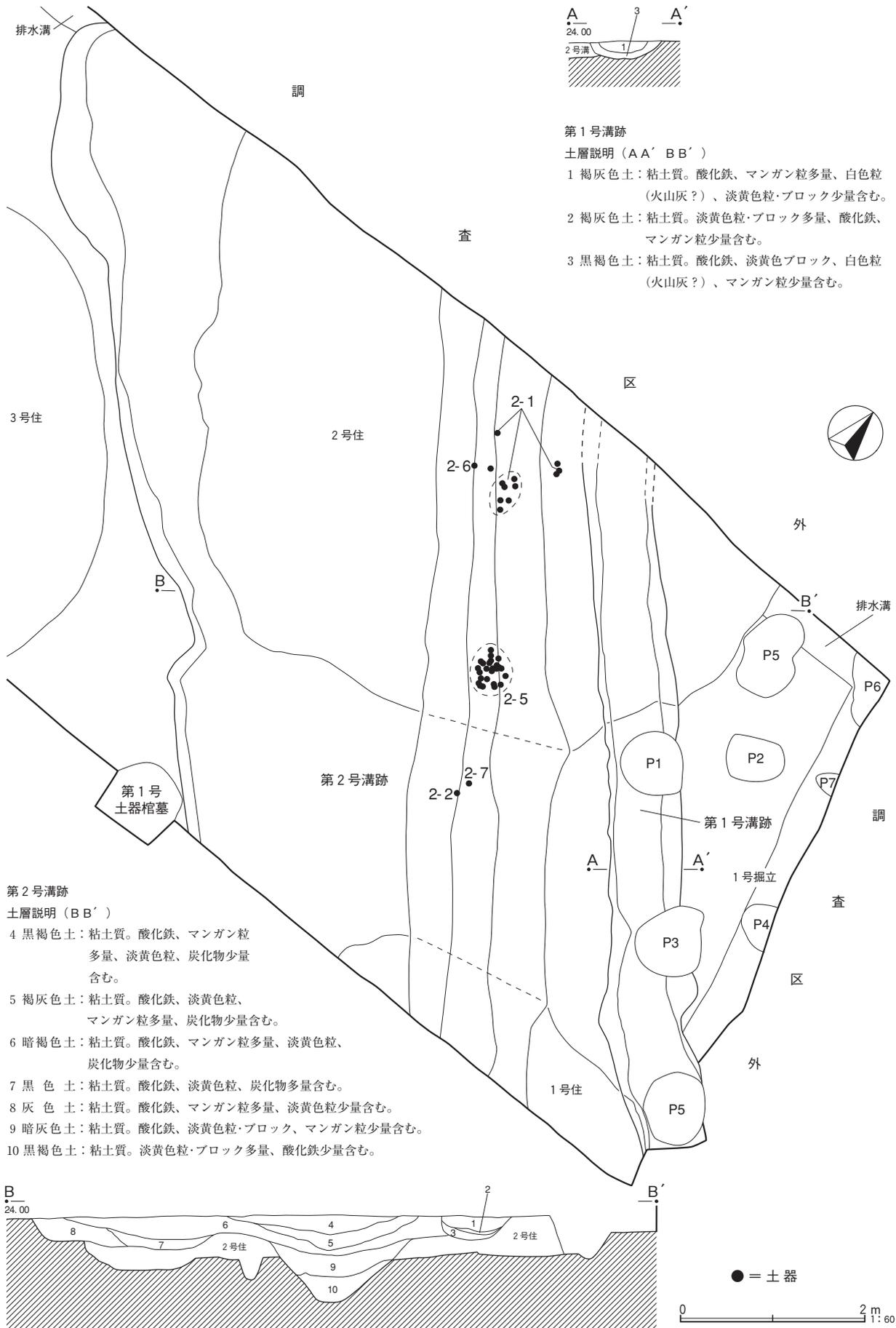
4~10は弥生土器。4~8は壺。4は口縁部から頸部までの部位。口縁部が受け口状を呈し、頸部はすぼまり、肩部に向かってやや広がる。文様は口縁部に振りの小さい波状沈線が2条巡り、二個一對の突起が付く。以下は無文でヘラミガキ調整が施され、頸部はカーブの緩い連弧文が描かれている。連弧文間頂点に横位の短沈線が施文されたボタン状貼付文が付く。内面調整は、ヘラミガキである。5~7は胴上部片。5は細かいLR単節縄文下に太い平行沈線が複数巡る。6は平行沈線下に半円形の刺突列が2列巡り、下に細かいLR単節縄文と振りの小さい波状沈線が複数施文されている。7は重四角文下にLR単節縄文が施文されている。8は胴部中段から下部にかけての破片。3条の沈線で重菱形文が描かれている。5~8の内面調整は、5・7が横位、6・8が横・斜位のヘラナデである。9・10はLR単節縄文が施文された甕。9は口縁部から頸部にかけての破片、10は頸部片である。9は口縁端部まで縄文が施文されている。9・10の内面調整は、いずれも横位のヘラミガキである。

遺物に伴うものはなく、重複する遺構との新旧関係等から本溝跡の時期は古墳時代後期と思われる。

第2号溝跡（第63図）

53~56-137・138グリッドに位置する。1・2号住居跡を切っており、東側立ち上がりを1号溝跡に切られている。

南東から北西方向に走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは7.95m、幅は5m以上と



第1号溝跡

土層説明 (A A' B B')

- 1 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、白色粒(火山灰?)、淡黄色粒・ブロック少量含む。
- 2 褐灰色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック多量、酸化鉄、マンガン粒少量含む。
- 3 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色ブロック、白色粒(火山灰?)、マンガン粒少量含む。

第2号溝跡

土層説明 (B B')

- 4 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、淡黄色粒、炭化物少量含む。
- 5 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 6 暗褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、淡黄色粒、炭化物少量含む。
- 7 黒色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色粒、炭化物多量含む。
- 8 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、淡黄色粒少量含む。
- 9 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。
- 10 黒褐色土：粘土質。淡黄色粒・ブロック多量、酸化鉄少量含む。

第63図 第1・2号溝跡

広い。両側にテラス状の段を持ち、東側は1号溝跡に切られているため定かではないが、西側に比べて幅が狭い。中央より東側が最も深く掘り込まれており、確認面からの深さは最深部で0.95m程を測る。覆土は7層（4～10層）確認された。最下層の10層はブロックを多量含むことから人為的に埋め戻されたと思われるが、4～9層はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第65図）は、土師器壺（2-1～4・11）、台付甕（2-5・6）、高坏（2-7・8）、ミニチュア土器（2-9・10）、土製有孔円盤（2-12）、土製勾玉（2-13）がある。溝跡最深部より残存状態の良い土器がまとまって検出された。

1～4・11は壺。1は口縁部から胴下部までの部位。口縁部はくの字に大きく開き、短い頸部がすぼまる。肩が張り、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。肩部外面と口縁部内面に無節Rが施文されている。無文部の調整は、口縁部外面が横ナデ、以下は頸部までヘラナデとハケメ、胴部はハケメである。口縁部外面は赤彩が施されている。内面は口縁部の縄文下がハケメ、以下はヘラナデが主体となるが、一部ハケメもみられた。2は、ほぼ完形の小型壺。短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。肩の張りが弱く、胴部は球形を呈するが、中段より下が膨らみ、最大径を持つ。胴部外面は磨耗顕著により図示できなかった部分が多く、内面は頸部以下が計測不可能であったが、内外面ともにハケメ調整が施されている。器壁が厚い。3は口縁部から胴上部までの部位。口縁部は外反しながら立ち上がる。頸部はすぼまり、肩部以下半球形を呈する。口縁部外面及び口縁部から頸部までの内面が横ナデ、口縁部以下の外面はヘラミガキ、胴部内面はヘラナデ調整が施されている。4は丸底壺。底部を欠く。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、頸部はすぼまる。肩が張り、胴部はやや詰まった球形を呈する。最大径を胴部中段に持つ。外面及び口縁部内面がヘラミガキ、頸部以下はヘラナデ調整が施されている。口縁部内面はヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。11は肩部片。内外面ともにハケメ調整が施されている。

5・6は台付甕。5は胴上部を一部欠くが、ほぼ全形の分かるS字甕。口縁部がS字状、頸部以下はやや詰まった倒卵形を呈し、台部はハの字に開く。最大径を胴上部に持つ。台部の裾部内面は輪積痕が残る。胴部は器壁が薄い。口縁部から頸部までが内外面ともに横ナデ、胴部は外面がハケメ、胴部内面及び台部の内外面はヘラナデ調整が施されている。6は接合部から台部にかけての部位。台部は内湾しながら下る。外面がハケメ、内面はヘラナデ調整が施されており、胴下部内面に輪積痕が残る。

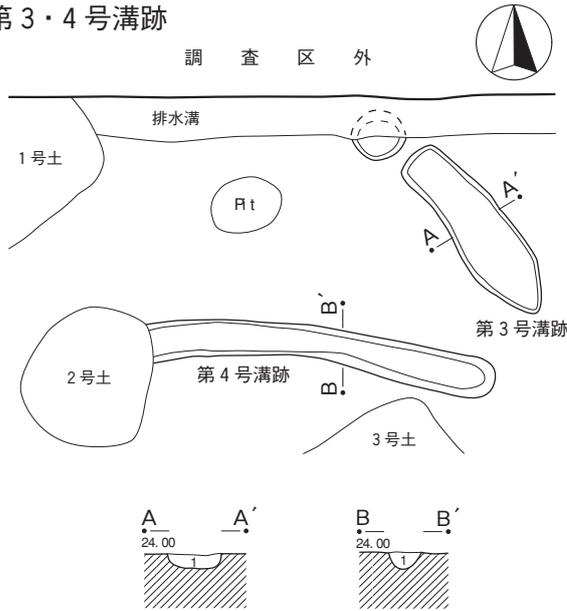
7・8は高坏。7はほぼ完形。口縁部から坏部は内湾しながら立ち上がり、坏部下位に不明確な稜を持つ。脚部は内湾しながら下る。最大径を口径に持つ。脚部上位に円形の透かし孔が4つみられた。外面及び口縁部から坏部にかけての内面がヘラミガキ、脚部内面はハケメ調整が施されている。口縁部から坏部にかけては、ヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。8は口縁部から坏部にかけての部位。ほぼ直線的に大きく開く。内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。

9・10はミニチュア土器。9は口縁部から頸部まで、10は胴上部から底部までの部位。9は丸底壺の模倣か。短い口縁部が内湾し、頸部がすぼまる。器壁が厚い。外面及び口縁部内面はヘラミガキ、胴部内面はヘラナデ調整が施されている。10は筒状を呈する。内外面ともにヘラナデ調整が施されている。

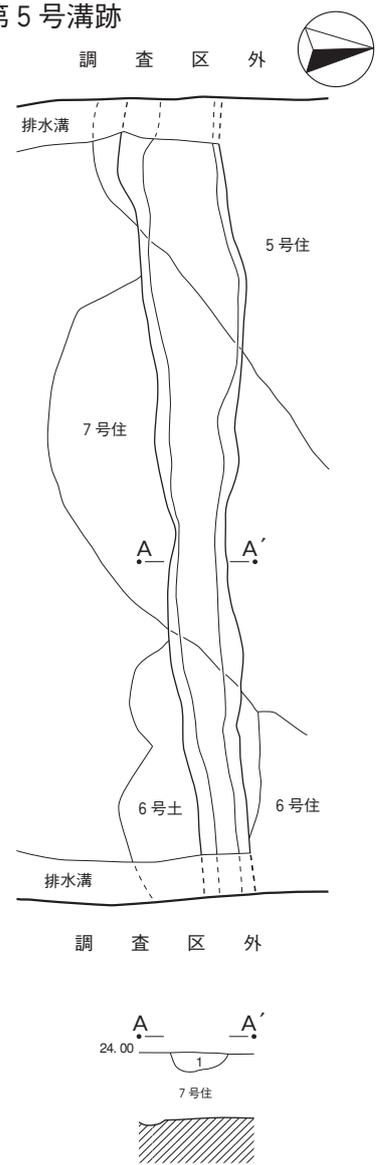
12は土製有孔円盤。完形。中央に径0.3cmの孔がみられた。縁は面取りされている。大きさ及び重さから紡錘車とは考えにくい。垂飾か。13は土製勾玉。完形。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

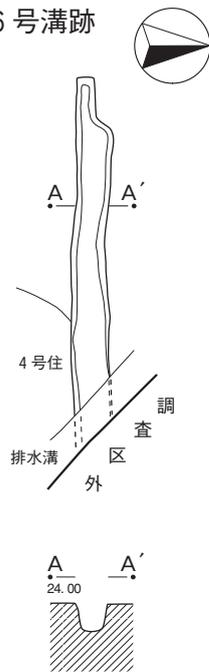
第3・4号溝跡



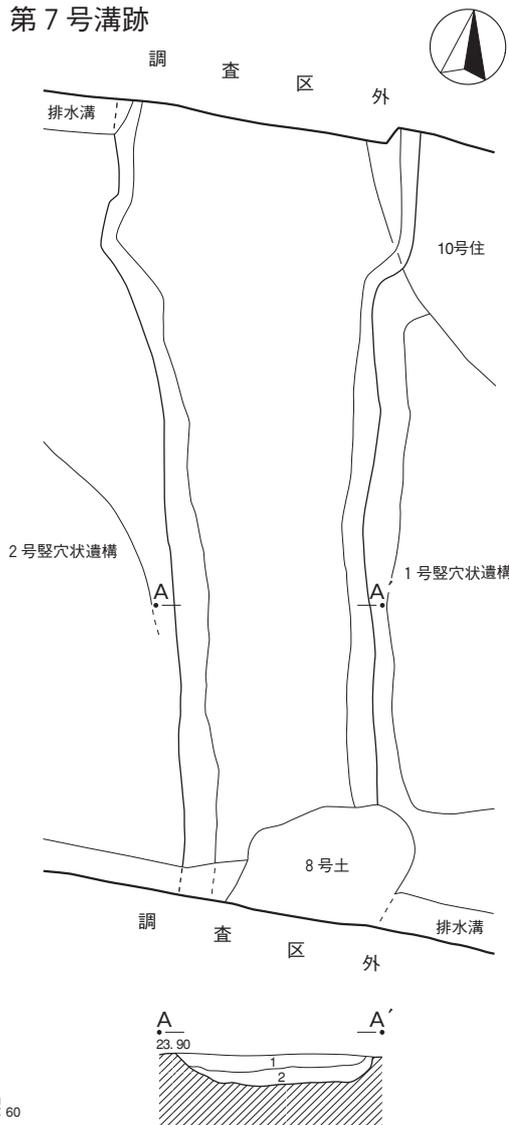
第5号溝跡



第6号溝跡



第7号溝跡



第3号溝跡

土層説明 (A A')

1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガング粒多量含む。

第4号溝跡

土層説明 (B B')

1 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガング粒多量、灰白色粒微量含む。

第5号溝跡

土層説明 (A A')

1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガング粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。

第7号溝跡

土層説明 (A A')

1 黒色土：粘土質。酸化鉄、マンガング粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。

2 灰白色土：シルト質。酸化鉄、灰色土、マンガング粒多量、炭化物少量含む。

0 2 m 1:60

第64図 第3～7号溝跡

第3号溝跡（第64図）

56-137グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

南東から北西方向に走るが、調査区境付近で途切れており、北西端はピット状を呈する。ピット状の部分を含め検出された長さは2.08mと短い、調査区外に延びると思われる。幅は0.45m前後を測る。確認面からの深さは0.1m程であり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は暗灰色土（1層）のみである。人為的な埋め戻しか自然堆積かは不明である。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺の肩部片（第66図3-1・2）のみである。1は弥生時代中期中頃池上式に相当する。重三角文内に円形刺突がランダムに刻まれている。胎土が粗い。2は横位のヘラミガキ調整が施された無文部下にやや太い平行沈線が巡り、下にLR単節縄文が施文されている。1・2の内面調整は、1が磨耗顕著により不明、2は横位のヘラナデである。

遺物は本溝跡に伴わない。本溝跡の時期は、軸や他の遺構との関係等から古墳時代後期と思われる。

第4号溝跡（第64図）

56・57-137・138グリッドに位置する。西端で2号土坑に切られている。

ほぼ東西方向にやや蛇行しながら走る。検出された長さは2.75mと短く、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.12m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は暗青灰色土（1層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は図示不可能な弥生土器壺の小片が検出されているが、本溝跡に伴わない。本溝跡の時期は、軸や他の遺構との関係等から古墳時代後期と思われる。

第5号溝跡（第64図）

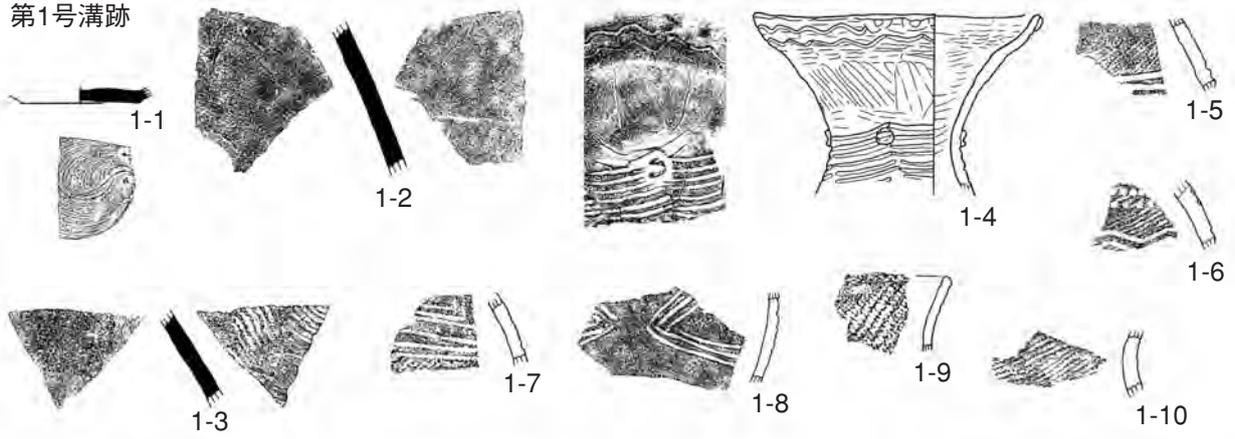
58・59-136グリッドに位置する。5～7号住居跡や7号土坑等、重複する遺構すべてを切っている。

ほぼ東西方向に走り、両端以降は調査区外に延びる。検出された長さは6.34m、幅は東側が0.4m、西側が0.85m前後を測り、東から西へ幅広となる。確認面からの深さは0.14m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は灰色土（1層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

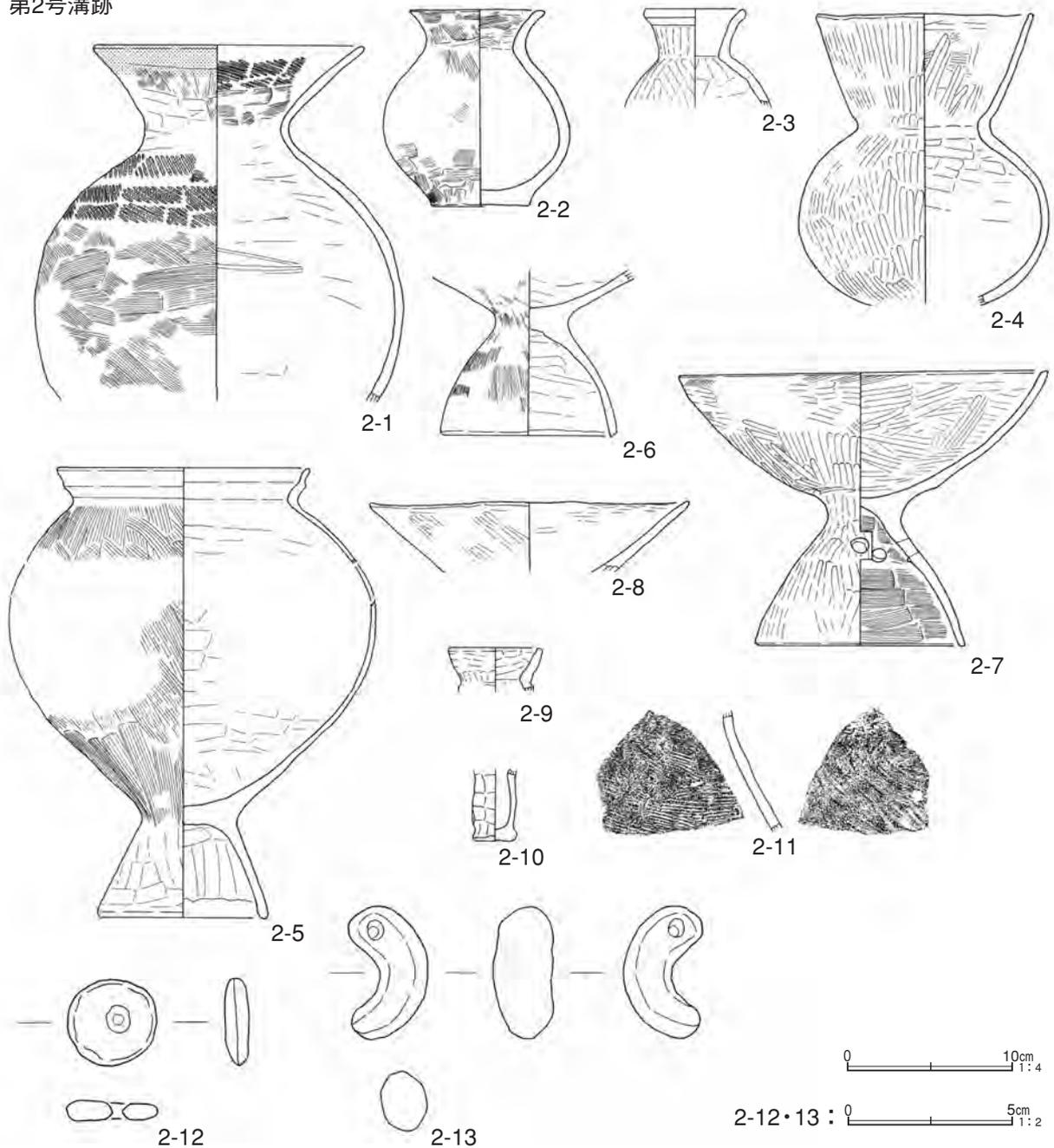
出土遺物（第66図）は、弥生土器壺（5-1~4）、甕（5-5~8）があるが、すべて重複する住居跡からの流れ込みと思われる。

1~3は胴上部片、4は胴部中段の破片。1はLR単節縄文地に細かい波状沈線が巡る。2は沈線2条で描かれた鋸歯文が下に巡る平行沈線に接続している。沈線間はLR単節縄文が充填されている。3は弧状に巡る沈線下に円形刺突列が巡る。4は垂下する細い直線文脇に斜位の太い沈線が複数描かれている。1~4の内面調整は、1が磨耗顕著により不明、2は横・斜位、3・4は横位のヘラナデである。5・6は胴部に細かい波状文が巡る破片。5は頸部から胴上部にかけて、6は胴部中段から下部にかけての破片である。5は頸部の直線文下に振りの小さい4本一単位の波状文が巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。6はやや乱雑な3本一単位の波状文が巡る。以下は無文で斜位のハケメが施されている。7・8は縄文が施された破片。7は胴部中段の破片、8は胴部中段から下部にかけての破片である。縄文は7がLR単節縄文、8は無節Rである。8は縄文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。5~8の内面調整は、5が横位、6が横・斜位のヘラナデ、7は横位、8は斜位のヘラミガキである。6は内面に輪積痕が残る。

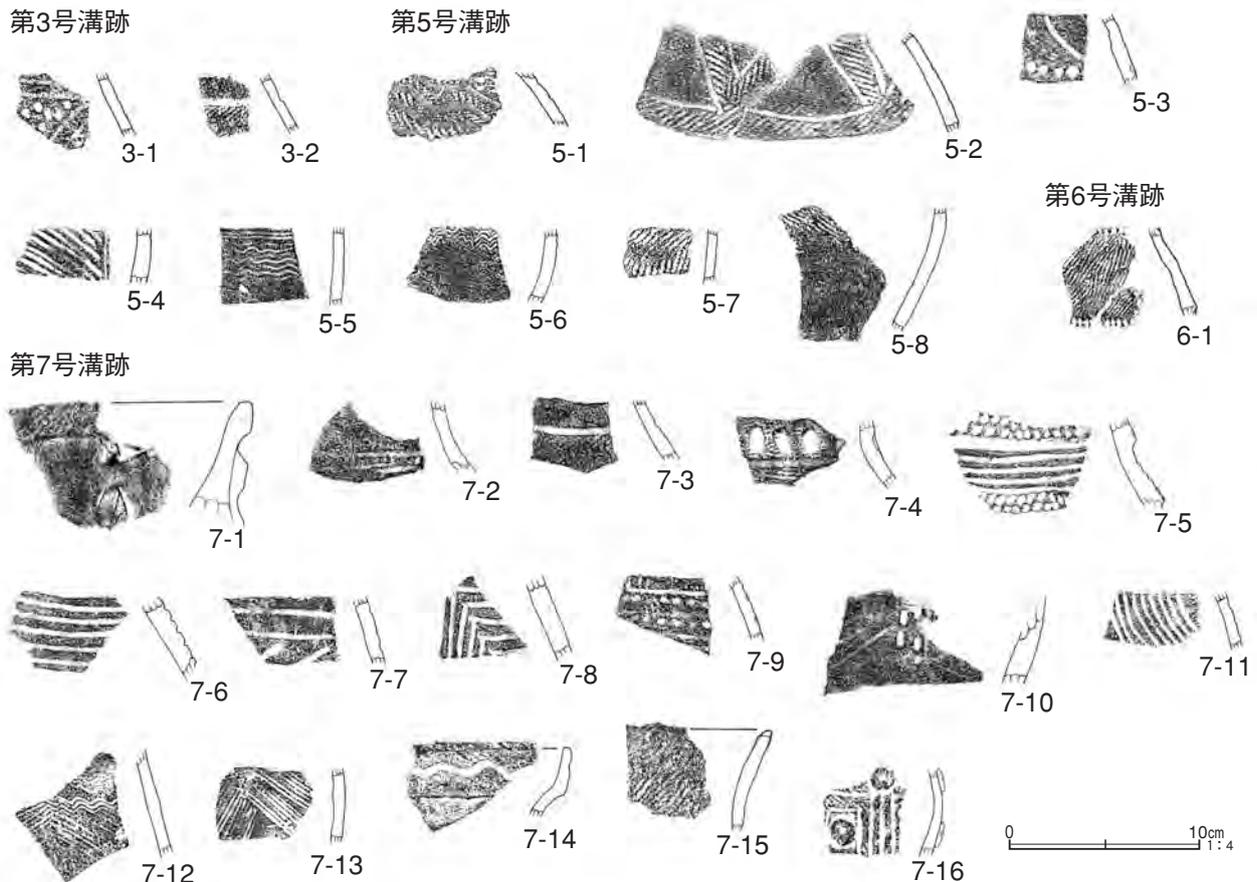
第1号溝跡



第2号溝跡



第65图 溝跡出土遺物(1)



第 66 図 溝跡出土遺物 (2)

遺物は本溝跡に伴わない。本溝跡の時期は、軸や他の遺構との関係等から古墳時代後期と思われる。

第 6 号溝跡 (第 64 図)

58-137 グリッドに位置する。東側の調査区との境で 4 号住居跡の壁上位を切っている。

ほぼ東西方向に走り、東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは 2.83m、幅は西端が 0.15m 程と狭いが、概ね 0.3m 前後が主体となる。確認面からの深さは 0.2m 前後を測る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は図示できなかつたが灰色土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺の胴上部片 (第 66 図 6-1) のみである。無節 L の上下に爪形状を呈する刺突列が巡る。内面は横位のヘラナデ調整が施されている。

遺物は本溝跡に伴わない。本溝跡の時期は、軸や他の遺構との関係等から古墳時代後期と思われる。

第 7 号溝跡 (第 64 図)

61-137・138 グリッドに位置する。北東部の調査区境で 10 号住居跡、南側の調査区境では 8 号土坑を切っている。南西部では、重複すると思われる 2 号竪穴状遺構と切り合い関係を直接確認することができなかつたが、他の周辺遺構も含めた新旧関係を考慮すると、本溝跡が新しいと思われる。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは 6.3m、幅は南側が 1.55m、北側は 2.4m 程を測り、南から北へ幅広となる。確認面からの深さは 0.23m 程であり、断面形は船底状を呈する。覆土は 2 層 (1・2 層) 確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物 (第 66 図) は、弥生土器壺 (7-1~11)、甕 (7-12~16) があるが、すべて流れ込みである。

第19表 溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1-1	1号溝跡	須恵器 坏	—	(0.8)	(6.3)	ABFN	赤灰色	B	底部 30%	南比企産。
1-2	1号溝跡	須恵器 甕	—	—	—	ABLN	灰色	A	胴上部片	外面自然釉付着。末野産。
1-3	1号溝跡	須恵器 甕	—	—	—	AB	灰色	A	胴上部片	外面自然釉付着。
1-4	1号溝跡	弥生土器 壺	(15.1)	(9.6)	—	ABEHIKN	黒褐色	B	口～頸 45%	内外面所々磨耗。
1-5	1号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
1-6	1号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	褐灰色	B	胴上部片	
1-7	1号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKMN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
1-8	1号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABCHIKN	黒褐色	B	胴中～下片	
1-9	1号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	内面やや磨耗。
1-10	1号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	頸部片	内外面やや磨耗。
2-1	2号溝跡	土師器 壺	(16.4)	(21.8)	—	ABGHIN	浅黄橙色	B	口～胴 50%	口縁部外面赤彩。内面大半、外面所々磨耗。
2-2	2号溝跡	土師器 壺	8.2	12.0	6.0	ABDIN	浅黄橙色	B	ほぼ完形	外面大半磨耗。
2-3	2号溝跡	土師器 壺	6.2	(6.0)	—	ABHN	灰褐色	B	口～胴 90%	外面磨耗顕著。
2-4	2号溝跡	土師器 壺	(13.2)	(17.8)	—	ABEIN	浅黄橙色 黒色	B	口～胴 50%	内外面所々磨耗。
2-5	2号溝跡	土師器台付甕	(15.4)	(27.5)	10.4	ABGIN	橙色	B	70%	内外面磨耗顕著。
2-6	2号溝跡	土師器台付甕	—	(10.15)	10.7	ABGHIN	淡黄色	B	接～台 90%	胴部内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
2-7	2号溝跡	土師器 高坏	22.4	16.85	12.8	ABCHIN	浅黄橙色	B	ほぼ完形	脚部透孔4つ有。内外面所々磨耗。
2-8	2号溝跡	土師器 高坏	(9.4)	(4.3)	—	ABDIJN	橙色	B	口～坏 40%	内外面磨耗顕著。
2-9	2号溝跡	土師器ミチア	5.7	(2.75)	—	ABDI	灰褐色	B	口～頸 60%	内外面磨耗顕著。
2-10	2号溝跡	土師器ミチア	—	(4.4)	2.7	ABEIK	にぶい黄橙色	B	胴～底 100%	
2-11	2号溝跡	土師器 壺	—	—	—	ABEK	灰黄褐色	B	肩部片	
2-12	2号溝跡	土製有孔円盤	最大径2.7cm、最大厚0.7cm、孔径0.3cm。重量5g。完形。							
2-13	2号溝跡	土製勾玉	最大長4.0cm、最大幅2.4cm、最大厚1.8cm、孔径0.3cm。重量14g。完形。							
3-1	3号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHKN	灰黄色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
3-2	3号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
5-1	5号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKMN	灰黄褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
5-2	5号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	褐灰色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
5-3	5号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	外面磨耗顕著。
5-4	5号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKMN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	
5-5	5号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
5-6	5号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABKN	褐色	B	胴中～下片	内面輪積痕有。
5-7	5号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABIN	にぶい橙色	B	胴中段片	内面やや磨耗。
5-8	5号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKM	黒褐色	B	胴中～下片	
6-1	6号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	赤褐色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
7-1	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABCIKMN	浅黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
7-2	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
7-3	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
7-4	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABGIKN	赤褐色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
7-5	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHJKN	暗灰黄色	B	肩部片	
7-6	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	褐灰色	B	肩部片	内面磨耗顕著。
7-7	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
7-8	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面磨耗顕著。
7-9	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	灰褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
7-10	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
7-11	7号溝跡	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
7-12	7号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
7-13	7号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIN	黒色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
7-14	7号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABDE	にぶい橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
7-15	7号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	AHKMN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
7-16	7号溝跡	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	黒褐色	B	胴中段片	

1～11は壺。1は口縁部から頸部にかけての破片。複合口縁部にL R単節縄文が施文され、以下に凹凸のある突帯が垂下する。突帯脇は無文で縦・斜位のヘラミガキ調整が施されている。器壁が厚い。2～6は肩部片。2・3は分かりづらいが、2は無文部下に複数の平行沈線が巡る。3は無文部下に巡る太い平行沈線下にL R単節縄文が施文されている。無文部の調整は、横位のヘラミガキである。4は楕円形状を呈する大きい刺突列下に平行沈線が巡り、下にR L単節縄文が施文されている。5は上下に半円形の刺突列が2列、間に平行沈線が3条巡る。上の刺突列は突帯上に刻まれている。6はやや太い平行沈線

が複数巡る。7～9・11は胴上部片。7は複数の平行沈線下に斜位の沈線が描かれている。8・9は重四角文が描かれており、9は分かりづらいが、重四角文下に半円形の刺突列と平行沈線が交互に巡る。11は複数の沈線でフラスコ文が描かれており、区画内にR L単節縄文が充填されている。10は胴部中段から下部にかけての破片。縦長の長方形を呈する刺突列が2列垂下し、分かりづらいが、脇にいびつな重四角文状の文様が描かれている。1～11の内面調整は、1の上位が横位、下位は斜位のヘラミガキ、2は磨耗顕著により不明、その他は横位のヘラナデである。

12～16は甕。12・13は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。いずれも羽状文がやや乱雑に描かれている。12は胴上部片。羽状文上に3本一単位の振りの小さい波状文が2段巡る。13は胴部中段の破片。櫛歯は6本である。14・15は縄文が施文された破片。いずれも口縁部から頸部にかけての破片である。縄文は、14がR L単節縄文、15は無節Lである。14は端部も含む口縁部に縄文が施文され、太い波状沈線が巡る。頸部は無文であるが、磨耗顕著により調整不明である。胎土が粗い。15は口縁端部に上から指頭圧痕が施されている。縄文は全面に施文されている。16はコの字重ね文が描かれた胴部中段の破片。コの字中央及び文様間頂点に円形刺突が施されたボタン状貼付文が付く。地文に無節Rが施文されている。12～16の内面調整は、12・16が横位のヘラミガキ、13は横位のヘラナデ、14・15は磨耗顕著により不明である。

遺物は本溝跡に伴わない。本溝跡の時期は、軸や他の遺構との関係等から古墳時代後期と思われる。

5 土 坑

第1号土坑（第67図）

57-137グリッドに位置する。西側で4号住居跡の壁上位を切っている。北側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は1.95m、東西は1.59mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.3m前後を測る。立ち上がりは西側がやや緩やか、その他は鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層（6・7層）確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物に図示可能なものはないが、土師器坏蓋模倣坏の小片が検出されている。よって、本土坑の時期は古墳時代後期と思われる。

第2号土坑（第67図）

57-137・138グリッドに位置する。東側で4号溝跡を切っている。

長軸1.03m、短軸0.98mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.18mと浅い。断面形はやや擂鉢状を呈する。覆土は3層（1～3層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

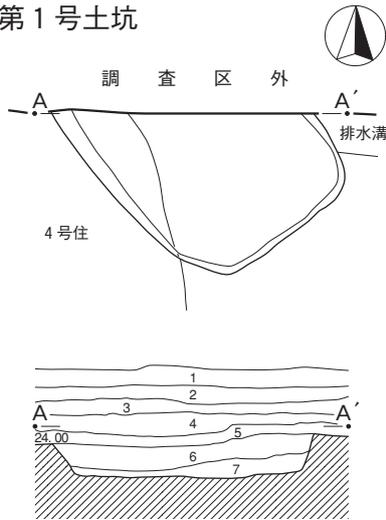
出土遺物で図示可能ものは、弥生土器壺の胴上部片（第69図2-1）のみである。複数巡る波状沈線間にL R単節縄文が施文されている。内面調整は、横位のヘラナデである。

遺物は本土坑に伴わない。よって、本溝跡の時期は、4号溝跡との新旧関係から古墳時代後期以降としか言えない。

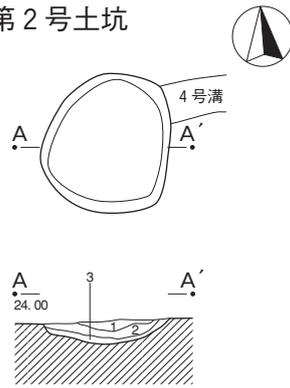
第3号土坑（第67図）

56-138グリッドに位置する。南側で3号住居跡の壁上位を切っている。

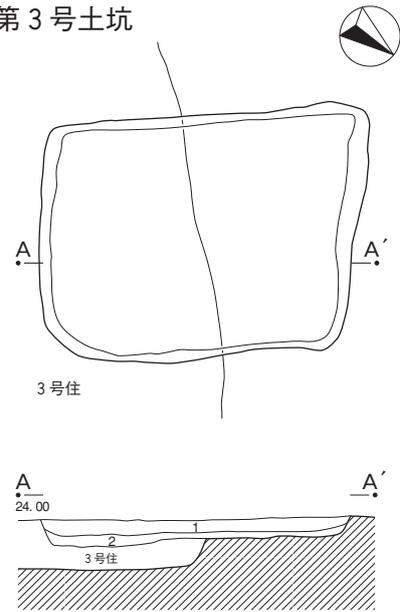
第1号土坑



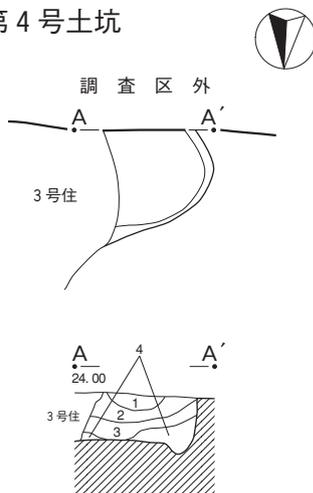
第2号土坑



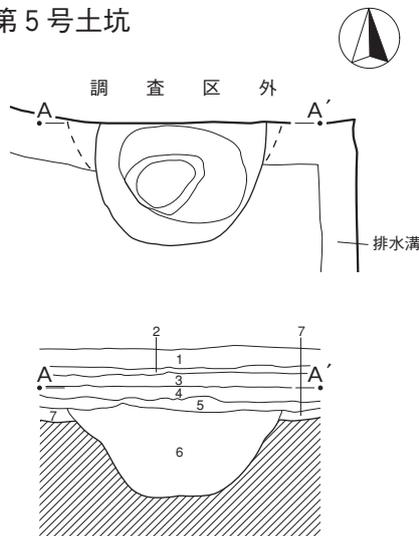
第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第1号土坑

土層説明 (AA')

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、白色粒少量含む。
- 3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 黒褐色土：粘土質。灰白色粒、マンガン粒少量含む。
- 7 灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒少量含む。

第2号土坑

土層説明 (AA')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。
- 3 灰白色土：シルト質。酸化鉄、灰色土、マンガン粒少量含む。

第3号土坑

土層説明 (AA')

- 1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量、火山灰 (Hr-FA) 少量含む。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック少量含む。

第4号土坑

土層説明 (AA')

- 1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 4 灰色土：シルト質。酸化鉄少量含む。

第5号土坑

土層説明 (AA')

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、白色粒少量含む。
- 3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 4 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 5 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。4層より暗い。
- 6 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、淡黄色粒・ブロック、マンガン粒多量、炭化物少量含む。埋め戻し土。
- 7 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色土、マンガン粒多量含む。



第67図 第1~5号土坑

長軸 2.56m、短軸 1.94mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.2m前後を測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は3号住居跡と重複する南側がやや窪むが、その他は概ね平坦であった。覆土は2層(1・2層)確認された。1層は火山灰を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物(第69図)は、須恵器高坏(3-1)、土師器坏(3-2)、高坏(3-3)があり、残存状態が比較的良いである。この他にも流れ込み遺物として弥生土器壺(3-5~10)、甕(3-4・11)、高坏(3-12)が検出された。

1は須恵器高坏の接合部。脚部がほぼ直立する。内外面ともに回転ナデ調整が施されている。2は土師器の坏蓋模倣坏。完形。口縁部から体部がやや内湾する。体部と底部の境に稜を持ち、底部は平底に近い。口縁部から体部まで内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整が施されている。3は高坏の長い脚部。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラナデが施されており、内面上位に輪積痕が残る。

4~12は弥生土器。5~10は壺。5・6は刺突列が巡る肩部片。5は分かりづらいが、上位に3本一単位の簾状文風の刺突列が巡る。上下は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。6はやや大きい円形刺突列下に斜位の沈線が描かれている。地文にLR単節縄文が施文されている。7は鋸歯文が描かれた肩部片。鋸歯文区画下にLR単節縄文が充填されている。無文部は斜位のヘラミガキ調整が施されている。8は胴上部片。RL単節縄文地に4本一単位の直線文が複数巡る。9は重三角文が描かれた肩部片。区画内にRL単節縄文が充填されている。10はフラスコ文が描かれた胴上部片。文様外に無節Rが施文されている。5~10の内面調整は、10のみ斜位、その他は横位のヘラナデである。4・11は甕。4は底部。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。底面に木葉痕がみられた。甕としたが、壺の可能性もある。11は胴部中段の破片。LR単節縄文が施文されている。12は高坏の口縁部片。内面に鋸歯文が描かれ、区画下に円形の刺突がランダムに刻まれている。外面及び内面無文部は、横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。

本土坑の時期は、古墳時代後期と思われる。

第4号土坑(第67図)

56・57-138グリッドに位置する。東側を3号住居跡に切られている。南側は立ち上がり付近が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西・南北ともに0.8m程であり、平面プランは円形ないし楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.35m程を測り、重複する3号住居跡とあまり変わらない。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面は西側がやや窪んでいたが、その他は概ね平坦であった。覆土は4層(1~4層)確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺の底部(第69図4-1)、甕の胴上部片(4-2)があるのみである。1は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。内面に輪積痕が残る。2は外面にLR単節縄文が施文されている。内面調整は、斜位のヘラミガキである。

遺物は伴うものか不明である。よって、本土坑の時期は、3号住居跡以前としか言えない。

第5号土坑(第67図)

58-135グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北側立ち上がりは調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は1.7m、南北は0.95mを測り、平面プランは円形ない

し楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.67mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は黒褐色土（6層）のみであった。ブロック等を多量含んでいたことから、人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物に図示可能なものはないが、弥生土器甕や土師器坏蓋模倣坏の小片が検出されており、本土坑に伴うのは後者と思われる。よって、本土坑の時期は、古墳時代後期と思われる。

第6号土坑（第68図）

58-136グリッドに位置する。北側を6号住居跡、北西部を7号住居跡に切られており、覆土上位を東西に走る5号溝跡に切られている。東側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は2.08m、南北は1.12mを測る。平面プランは瓢箪状を呈することから2つ土坑が重複する可能性もあるが、覆土断面で確認することはできなかった。確認面からの深さは0.27m程を測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は2層（1・2層）確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器高坏（第69図6-1）のみである。接合部から脚部までの部位。脚部が短く、裾部に向かって緩やかに開く。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整が施されている。器壁が厚い。

遺物は伴うものか不明である。よって、本土坑の時期は、6・7号住居跡以前としか言えない。

第7号土坑（第68図）

58・59-138グリッドに位置する。8号住居跡の南壁上位を切っており、南側は調査区外となるが、本土坑は平成23年度報告『前中西遺跡Ⅶ』の1号土坑と同一遺構であり、ほぼ全形が検出されている。

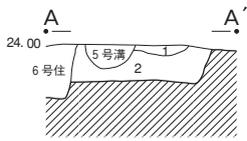
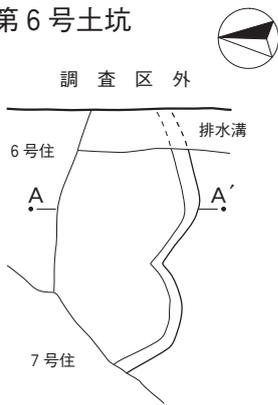
長軸4.52m、短軸2.62mのいびつな楕円形ないし長方形を呈する。確認面からの深さは0.34m程を測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は3層（1～3層）確認された。いずれも炭化物を含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第69図）は、弥生土器壺（7-1・2・4・5）甕（7-3・6）がある。比較的残存状態の良好なものが検出された。2のみ底面から、その他は覆土からの検出である。

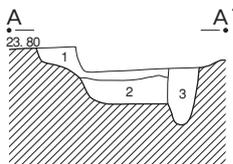
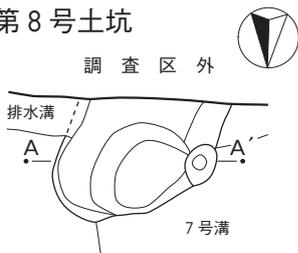
1・2・4・5は壺。1は胴上部から底部までの部位。胴部中段が膨らみ、球形を呈する。文様は胴上部に巡る平行沈線上下に重山形文が乱雑に描かれており、平行沈線付近のみ地文にLR単節縄文が施文されている。胴下部外面及び内面はハケメ調整が施されており、重山形文施文部分にも残る。2は口縁部から胴下部までの部位。口縁部はやや外反しながら開く。長い頸部がすぼまり、ほぼ直立する。肩がやや張り、胴部は最大径を持つ中段が膨らみ、球形を呈する。文様は頸部上位に突帯、下位及び肩部にS字状結節文が等間隔に4条巡る。外面無文部は、口縁部及び頸部、肩部がヘラミガキ、胴部はハケメ調整が施されている。内面調整は、磨耗顕著により不明である。頸部下位及び胴上部内面に輪積痕が残る。器壁が厚い。4は胴下部から底部までの部位。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。5は胴上部片。細い沈線で連弧文が描かれているが、全面に文様施文前に施された横・斜位のハケメ調整が残る。内面調整は、横・斜位のヘラナデである。

3・6は甕。3は小型甕の口縁部から胴下部までの部位。短い口縁部がやや受け口状を呈し、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。胴部は中段がやや膨らむ。最大径を口径に持つが、胴部中段の径とほとんど変

第6号土坑



第8号土坑



第6号土坑

土層説明 (AA')

- 1 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 2 灰白色土：シルト質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰色土少量含む。

第7号土坑

土層説明 (AA')

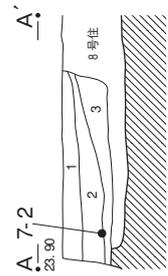
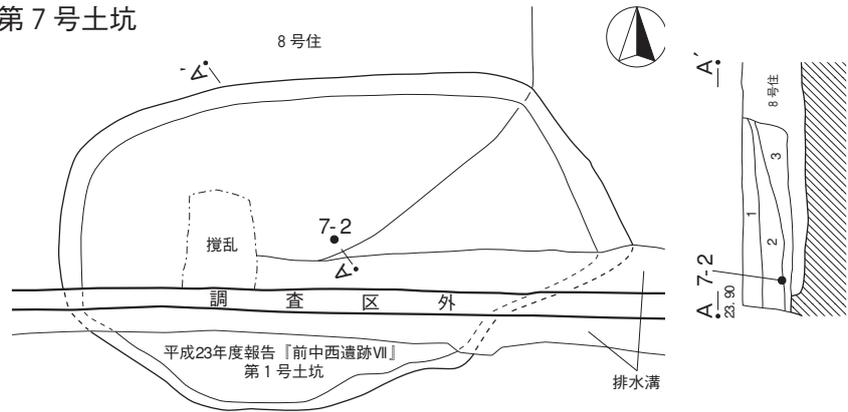
- 1 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 2 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。
- 3 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第8号土坑

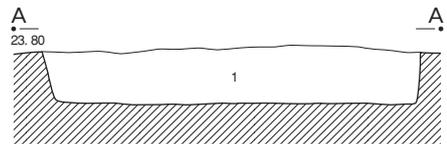
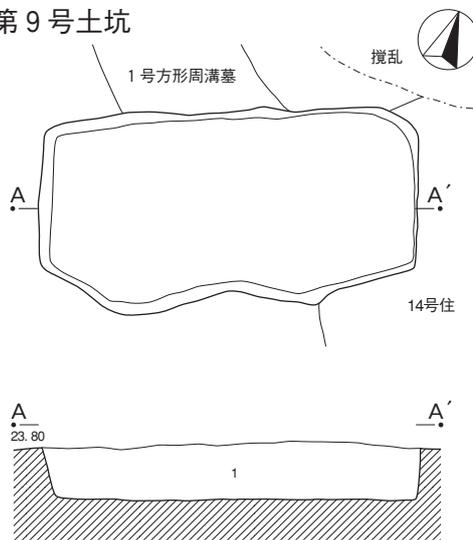
土層説明 (AA')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒少量含む。
- 2 灰オレンジ色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。
- 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。

第7号土坑



第9号土坑

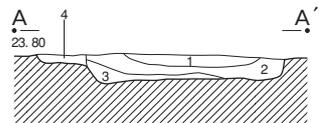
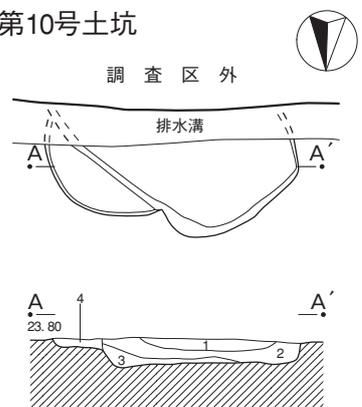


第9号土坑

土層説明 (AA')

- 1 褐灰色粘土・淡黄色粘土・灰白色粘土混合層：酸化鉄、マンガン粒多量含む。埋め戻し土。

第10号土坑

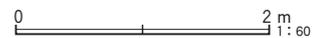


第10号土坑

土層説明 (AA')

- 1 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒・ブロック少量含む。下層一部に炭化物が帯状に薄く堆積。
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
- 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、炭化物、マンガン粒多量含む。
- 4 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。

● = 土器



第68図 第6~10号土坑

わらない。文様は口縁端部に刻みが施され、頸部に4本一単位の簾状文が巡る。胴部は縦位の羽状文が乱雑に描かれている。口縁部外面の無文部は、横位のヘラナデ調整が施されているが、胴下部外面及び内面はヘラミガキである。頸部内面に輪積痕が残る。6は口縁部から胴上部にかけての破片。口縁端部にLR単節縄文が施文され、頸部は7本一単位の簾状文、胴上部は振りの小さい波状文が巡る。口縁部外面の無文部及び内面は、横位のヘラミガキ調整が施されている。

本土坑の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第8号土坑（第68図）

61-138グリッドに位置する。西側大半の上位を7号溝跡、端部をピットに切られている。南側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は1.03m、東西は1.14mを測る。平面プランはいびつな楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、北西部のピット状を呈する最深部で0.43mを測る。立ち上がりは西側のみ緩やか、その他は鋭角であり、底面は概ね平坦であった。覆土は2層（1・2層）確認された。ほぼ水平に堆積しており、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺（第70図8-1~3）のみである。1は肩部片。無節L下に太い平行沈線が巡る。2・3は胴上部片。2は波状沈線下に分かりづらいが、LR単節縄文が施文され、下に平行沈線が複数巡る。3は太い平行沈線が複数巡る。1~3の内面調整はすべて横位のヘラナデである。

本土坑の時期は、弥生時代中期後半から末にかけての段階としておきたい。

第9号土坑（第68図）

69・70-137・138グリッドに位置する。東側で14号住居跡、北側中央で1号方形周溝墓の南西周溝を切っている。

長軸2.97m、短軸1.61mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.44mを測る。立ち上がりはほぼ垂直で、底面はほぼ平坦であった。覆土は人為的に埋め戻された粘土による混合層（1層）であった。

出土遺物で本土坑に伴うのは、陶器挿鉢（第70図9-1）のみである。この他に周辺遺構からの流れ込みとして弥生土器壺（9-2）、甕（9-3・4）が検出された。

1は体部片。内面に播り面があり、外面は回転ナデ調整が施されている。2は胴上部片。弧状に巡る2条の沈線間にLR単節縄文が充填されている。内面調整は、斜位のヘラナデである。3・4は口縁部から頸部にかけての破片。3は端部を含む口縁部にLR単節縄文が施文され、頸部は無文で内面とともに横位のヘラミガキ調整が施されている。4は口縁端部に指頭圧痕が施されている。以下は無文で内面とともに横位のヘラミガキ調整が施されている。

本土坑の時期は、近世と思われる。

第10号土坑（第68図）

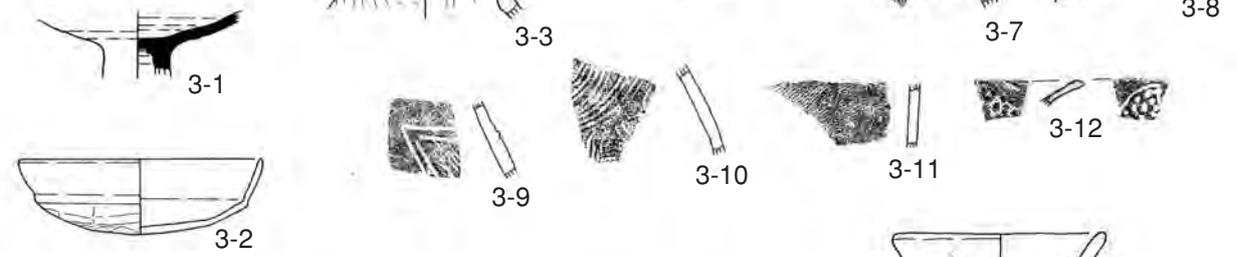
69・70-138グリッドに位置する。東側で浅いピットを切っている。南側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された長軸は1.7m以上、短軸は1.4m程を測る。平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.2m前後を測る。立ち上がりは、ほぼ垂直に近く、底面はやや中央が盛り上がる。覆土は3層（1~3層）確認された。1層にブロックを含むが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

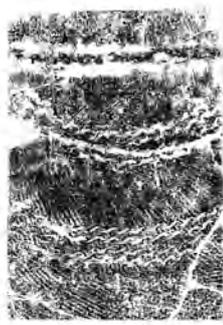
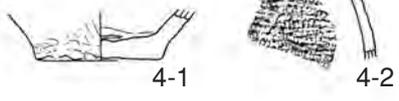
第2号土坑



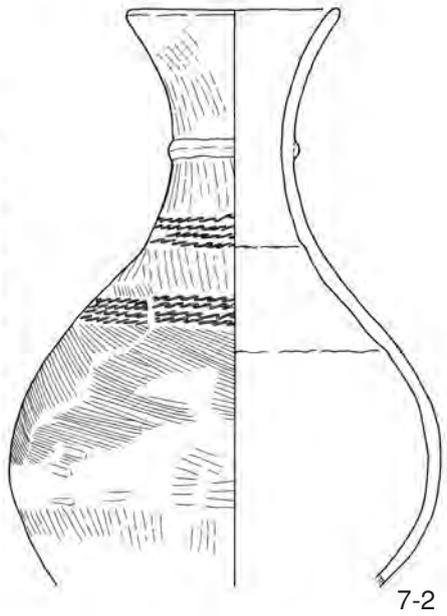
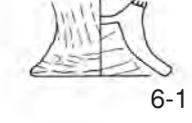
第3号土坑



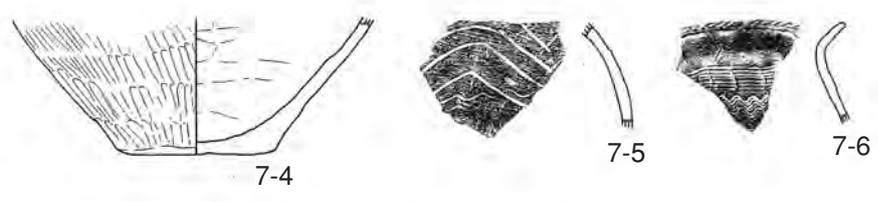
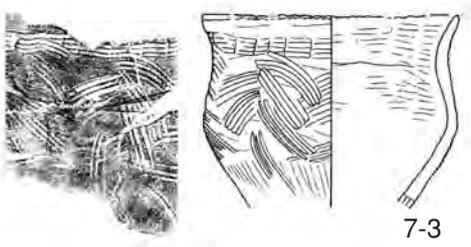
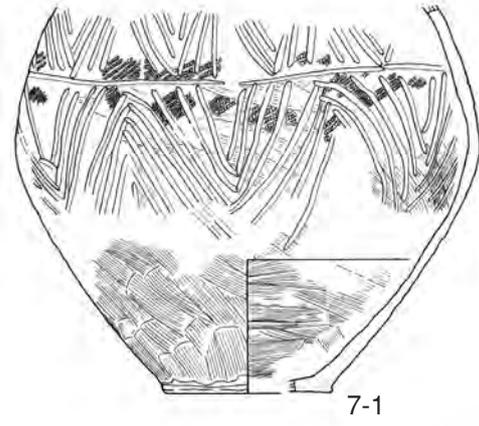
第4号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第 69 图 土坑出土遺物 (1)

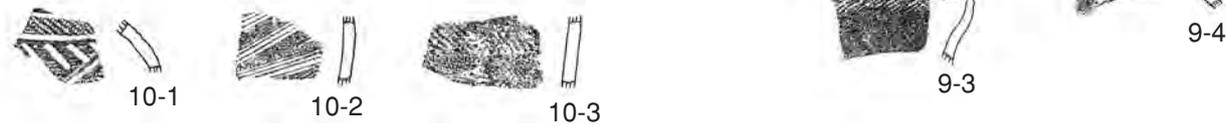
第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第70図 土坑出土遺物(2)

第20表 土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
2-1	2号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEGHJK	にぶい赤褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
3-1	3号土坑	須恵器 高坏	—	(3.55)	—	ABHN	にぶい褐色	A	接合部 70%	外面自然釉付着。
3-2	3号土坑	土師器 坏	12.8	3.95	—	ABCKN	橙色	B	完形	
3-3	3号土坑	土師器 高坏	—	(15.4)	—	ABEHJM	橙色	B	脚部 90%	内面上位輪積痕有。外面やや磨耗。
3-4	3号土坑	弥生土器 甕	—	(3.75)	8.7	ABGHJKMN	浅黄橙色	B	底部 50%	底面木葉痕有。内外面磨耗顕著。
3-5	3号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
3-6	3号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABCEIKMN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
3-7	3号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIKMN	浅黄褐色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
3-8	3号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
3-9	3号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKMN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
3-10	3号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	灰白色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
3-11	3号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIK	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面やや磨耗。
3-12	3号土坑	弥生土器 高坏	—	—	—	ADN	赤色	B	口縁部片	内外面赤彩、ほぼ剥落。
4-1	4号土坑	弥生土器 壺	—	(2.6)	6.6	ABCN	にぶい褐色	B	底部 90%	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
4-2	4号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHIKN	明赤褐色	B	胴上部片	
6-1	6号土坑	弥生土器 高坏	—	(4.1)	7.4	ABDEIK	灰白色	B	接~脚 100%	内外面磨耗顕著。
7-1	7号土坑	弥生土器 壺	—	(20.9)	(8.8)	ABEIKN	にぶい黄橙色	B	胴~底 70%	内外面磨耗顕著。
7-2	7号土坑	弥生土器 壺	(11.1)	(30.5)	—	ABI	黒色 浅黄褐色	B	口~胴 80%	内面輪積痕有。内面大半、外面所々磨耗。
7-3	7号土坑	弥生土器 甕	(13.4)	(10.15)	—	ABGHKN	灰褐色	B	口~胴 40%	頸部内面輪積痕有。内面下位磨耗顕著。
7-4	7号土坑	弥生土器 壺	—	(7.2)	8.3	ABIK	黒色	B	胴~底 70%	内面磨耗顕著。
7-5	7号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
7-6	7号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKM	灰黄褐色	B	口~胴上片	
8-1	8号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIJKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	内外面磨耗顕著。
8-2	8号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABEHIKN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
8-3	8号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
9-1	9号土坑	陶器 播鉢	—	—	—	—	—	—	体部片	
9-2	9号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	AIKN	黒褐色	B	胴上部片	
9-3	9号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKM	黒褐色	B	口~頸部片	
9-4	9号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	口~頸部片	外面磨耗顕著。
10-1	10号土坑	弥生土器 壺	—	—	—	AHI	黒色	A	胴上部片	
10-2	10号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
10-3	10号土坑	弥生土器 甕	—	—	—	ACGIMN	にぶい橙色	B	胴中~下片	内外面磨耗顕著。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺(第70図10-1)、甕(10-2・3)のみである。1は胴上部片。間に細かいRL単節縄文が充填された2条の平行沈線下に太い沈線で複合鋸歯文が描かれている。2は胴部中段の破片。4本一単位で縦位の羽状文がやや間隔を空けて描かれている。3は胴部中段から下部にかけての破片。上位にRL単節縄文が施文され、下位は無文であるが、磨耗顕著により調整不明である。1~3の内面調整は、すべて横位のヘラナデである。

遺物は伴うものか不明である。よって、本土坑の時期は、不明と言わざるを得ない。

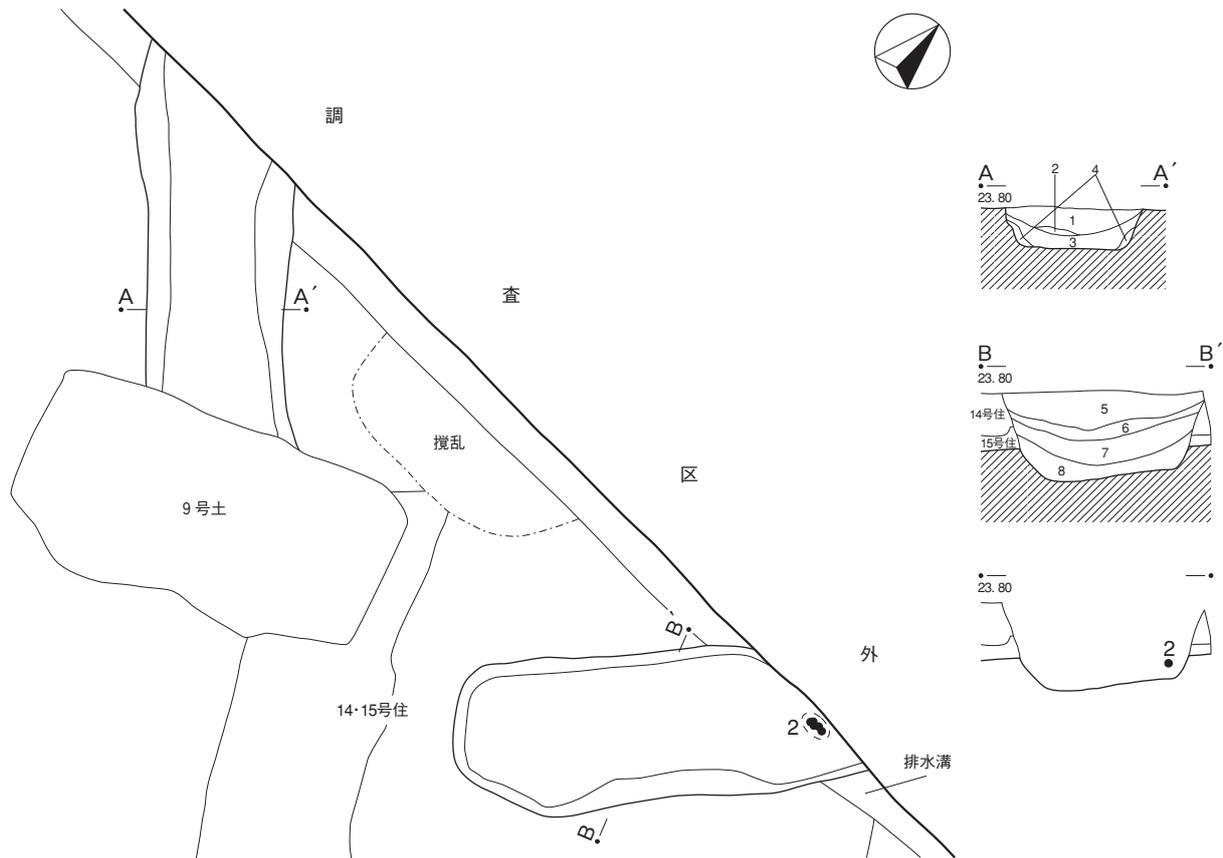
6 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第71図）

68～70-137・138 グリッドに位置する。検出されたのは南西部と南東部の周溝約半分のみである。多くの遺構と重複関係にあり、南西周溝は南端で9号土坑に切られており、南東周溝は14・15号住居跡を切っている。また方台部は後世の攪乱を受けている。北東半分は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された長さは南西周溝が2.46m、南東周溝は2.85mを測る。復元すると外縁の規模は7.7m、方台部は5.5m程となろうか。平面プランは四隅の切れるタイプと思われる。確認面からの深さは、南西周溝が0.3m、南東周溝は0.7m前後を測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は南西周溝がほぼ平坦、南東周溝はやや方台部側に傾く。覆土はともに4層（1～8層）確認され、やや内容が異なるが、いずれもレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第72図）は、弥生土器壺（1）、甕（2～4）、磨石（5）がある。残存状態の良好な2は、南東周溝の底面近くから検出された。その他は、覆土からの検出である。



第1号方形周溝墓

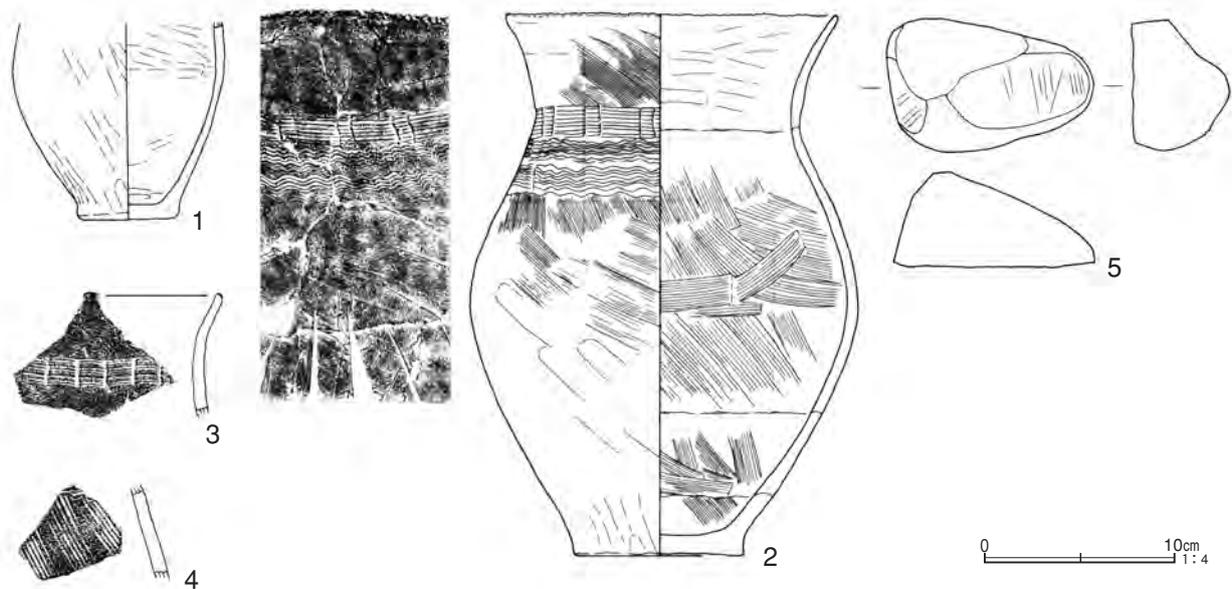
土層説明（A A' B B'）

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。 | 6 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック、マンガン粒多量含む。 | 7 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒少量含む。 |
| 3 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、灰白色粒少量含む。 | 8 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量、炭化物少量含む。 |
| 4 灰白色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒少量含む。 | |
| 5 黒 色 土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。 | |

● = 土器

0 2 m 1:60

第71図 第1号方形周溝墓



第72図 第1号方形周溝墓出土遺物

第21表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(10.4)	5.3	ABCIN	にぶい橙色	B	胴～底 80%	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 甕	17.5	28.75	9.0	ABIKN	暗褐色	B	ほぼ完形	内面輪積痕有。内外面所々磨耗。
3	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	
4	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKMN	黒褐色	B	頸～胴上片	内面磨耗顕著。
5	磨石	最大長(7.1)cm、最大幅(10.85)cm、最大厚(5.1)cm。重量(445)g。半分欠?。閃緑岩製。二面使用。光沢帯びる。							

1は胴上部から底部までの部位。長胴で中段付近が膨らむ。無文で内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。2はほぼ完形。口縁部はやや外反しながら開く。頸部はすぼまり、胴部は中段よりやや上が膨らみ、最大径を持つ。文様は口縁端部に細かい刻みが施され、頸部は8本一単位の簾状文が巡る。胴上部は簾状文直下に振りの小さい波状文が2条巡る。外面無文部の調整は、口縁部及び胴上部から中段までがハケメ、以下はヘラナデである。内面調整は、口縁部がヘラナデ、以下はハケメである。内面に輪積痕が残る。3は口縁部から胴上部にかけての破片。口縁端部に刻みが施され、頸部は9本一単位の細かい簾状文、胴上部は分かりづらいが、振りの小さい波状文が巡る。口縁部外面の無文部及び内面は、斜位のヘラナデ調整が施されている。4は頸部から胴上部にかけての破片。頸部の波状文下に横位の羽状文がやや間隔を空けて比較的丁寧に描かれている。内面調整は、横位のヘラミガキである。

5は磨石。二面使用しており、光沢が著しい。閃緑岩製。

本遺構の時期は、弥生時代後期初頭と思われる。

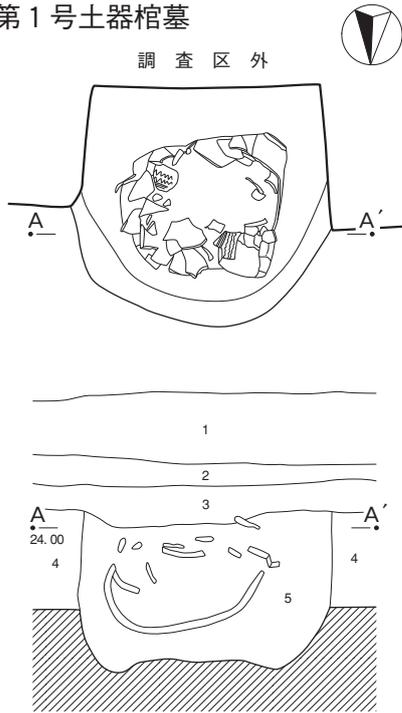
7 土器棺墓

第1号土器棺墓(第73図)

55-138グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北側以外、立ち上がりが調査区外にある。

墓壙の正確な規模は不明であるが、径0.7m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.15m前後であったが、調査区壁での土層断面観察から0.4m程の掘り込みであったことが確認された。

第1号土器棺墓

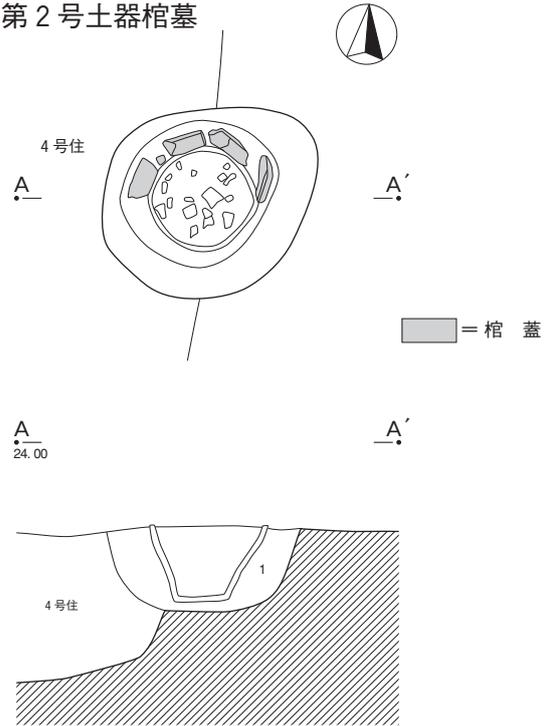


第1号土器棺墓

土層説明 (A A')

- 1 耕作土
- 2 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
- 3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、白色粒少量含む。
- 4 暗灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。
- 5 灰色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、炭化物、灰白色

第2号土器棺墓



第2号土器棺墓

土層説明 (A A')

- 1 灰色土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒、マンガン粒多量含む。
埋め戻し土。

0 1 m 1:20

第73図 第1・2号土器棺墓

立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はやや凹凸がみられた。

土器棺は墓壙のほぼ中央に埋設されたと思われる。上位が非常に崩れた状態で検出されたことから発掘調査段階では棺身の大型壺1個体のみと思われたが、整理調査の結果、棺蓋となる壺も存在することが確認された。棺身の大型壺は頸部以上を意図的に欠くが、棺蓋の壺は口縁部と底部を欠いており、どのような状態で蓋として利用されたのか不明と言わざるを得ない。大型壺は底面から0.07mの高さに横位で埋設され、周囲にはブロック等を含む灰色土が埋められていた。大型壺の内部に土が入り込んでいたことから精査を行った結果、骨片が若干検出された。

出土遺物(第74図)は、弥生土器壺(1・2)がある。1が棺蓋、2が棺身に使用されていた。

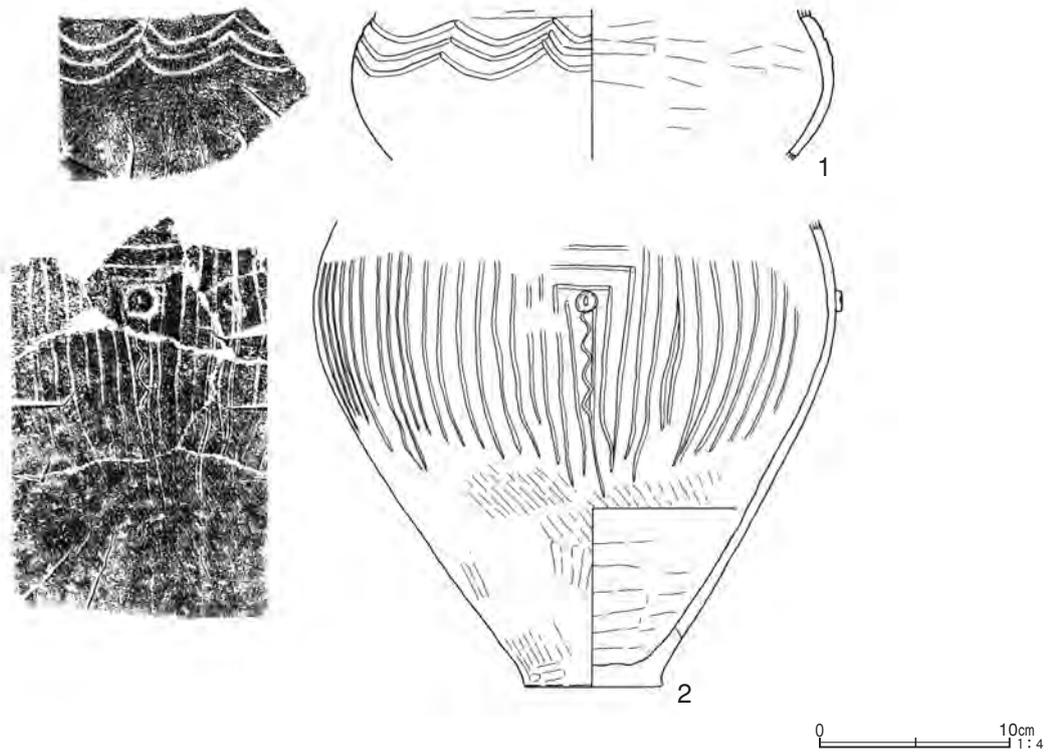
1は頸部から胴下部までの部位であり、口縁部と底部を意図的に欠く。頸部はほぼ直立する。肩が張らず、やや縦長の胴部中段が膨らみ、やや内湾しながら下る。文様は頸部から肩部にかけて6本一単位の乱雑な波状文2段と簾状文が巡る。以下は磨耗顕著によりほとんど図示できなかったが、無文でヘラミガキ調整が施されている。また所々にヘラミガキ前に施されたハケメ調整が残る。内面調整は、磨耗顕著により不明である。2は大型の壺。頸部以上を意図的に欠き、胴部中段と底部も一部欠くが、本来は残存していたと思われる。肩部以下緩やかに下り、最大径を持つ胴上部が膨らむ。胴上部以下は底部に向かってほぼ直線的に下る。磨耗が著しいためほとんど図示できなかったが、全面無文で胴上部まで

第1号土器棺墓



第74图 第1号土器棺墓出土遺物

第2号土器棺墓



第75图 第2号土器棺墓出土遺物

第22表 第1号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(28.0)	—	ABIN	淡黄色 暗灰黄色	B	頸～胴 70%	内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 壺	—	(41.6)	12.1	AEIN	橙色	B	肩～底 80%	内面輪積痕有。肩～胴部外面赤彩、ほぼ剥落。

第23表 第2号土器棺墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 壺	—	(7.95)	—	ABCDIMN	浅黄橙色	B	胴部 60%	棺蓋。内外面磨耗顕著。
2	弥生土器 甕	—	(24.7)	7.2	ACIN	浅黄橙色 黒色	B	胴～底 100%	棺身。内外面磨耗顕著。

がヘラミガキ、以下はハケメ調整が施されている。肩部から胴上部にかけて赤彩が施されている。内面も磨耗顕著により胴上部は図示できなかつたが、下部はヘラナデ調整が施されている。肩部から胴部中段にかけて輪積痕が残る。

本土器棺墓の時期は、弥生時代後期初頭と思われる。

第2号土器棺墓（第73図）

57-138グリッドに位置する。西側で4号住居跡の東壁上位を切っている。

墓壙の規模は長軸0.61m、短軸0.51mを測り、平面プランは楕円形を呈する。確認面からの深さは0.23mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。

土器棺は墓壙中央に埋設されていた。棺身は甕の胴部以下が使用され、正位の状態で埋設されていた。甕の周囲には灰色土が埋められており、上位から蓋に使用されたと思われる壺の胴部が検出された。壺は胴上部以上及び下部以下を欠くが、胴上部以上は意図的に打ち欠き、胴下部以下は本来残存し、逆位の状態で蓋として使用されたと思われる。棺身の甕内部には土が入り込んでいたため、精査を行ったが、骨片等は検出されなかつた。

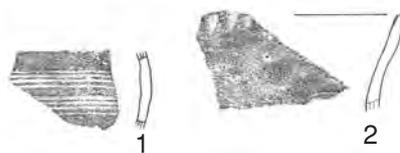
出土遺物（第75図）は、棺蓋に使用された弥生土器壺（1）、棺身に使用された甕（2）がある。

1は胴部中段の部位。中段付近が膨らむ。文様は平行沈線下に3条の連弧文が巡り、磨耗が著しいため定かではないが、地文にLR単節縄文が施文されていた可能性がある。下位は無文でヘラミガキ調整が施されていたと思われる。内面調整はヘラナデである。2は胴上部から底部までの部位。胴部は倒卵形を呈する。文様は胴部にやや細い沈線でコの字重ね文が描かれており、コの字中央に縦位の短沈線が施文されたボタン状貼付文が付く。ボタン状貼付文下は波状沈線が垂下する。胴下部は無文でヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。

土器棺に使用された土器は、重複する4号住居跡出土土器と比較すると古い様相を呈するが、切り合い関係を重視すると、本土器棺墓が4号住居跡よりも新しい。よって、本土器棺墓の時期は、4号住居跡よりも新しい弥生時代中期末としておきたい。

8 ピット

ピットは、調査区ほぼ全面に点在するが、概ね以下の5つのブロックに分けられる。①54-137・138グリッド、②56・57-137・138グリッド、③58-135グリッド、④62・63-137・138グリッド、⑤は70～72-137・138グリッドである。このうち、①は1号掘立柱建物跡に伴うものか否か不明のものである。単独で規則的に並ばないものが多く、



第76図 ピット出土遺物

第24表 ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	62-137GP1	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDIJN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内面磨耗顕著。
2	62-137GP2	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。

出土遺物は弥生土器に限られるが、ごく少数で流れ込みの可能性もあることから時期の特定は困難である。なお、図示可能なものは、62-137グリッド出土の弥生土器（第76図1・2）のみである。以下、遺物について述べるが、これらの遺物が出土したピット2基のみ全測図にピット名を記載してある。

1・2は弥生土器の破片。1は壺の胴部中段の破片。5本一単位の直線文が2段巡る。上下は無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。2は甕の口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部に指頭圧痕が施され、以下は無文である。外面上位及び内面は横位、外面下位は斜位のヘラミガキ調整が施されている。

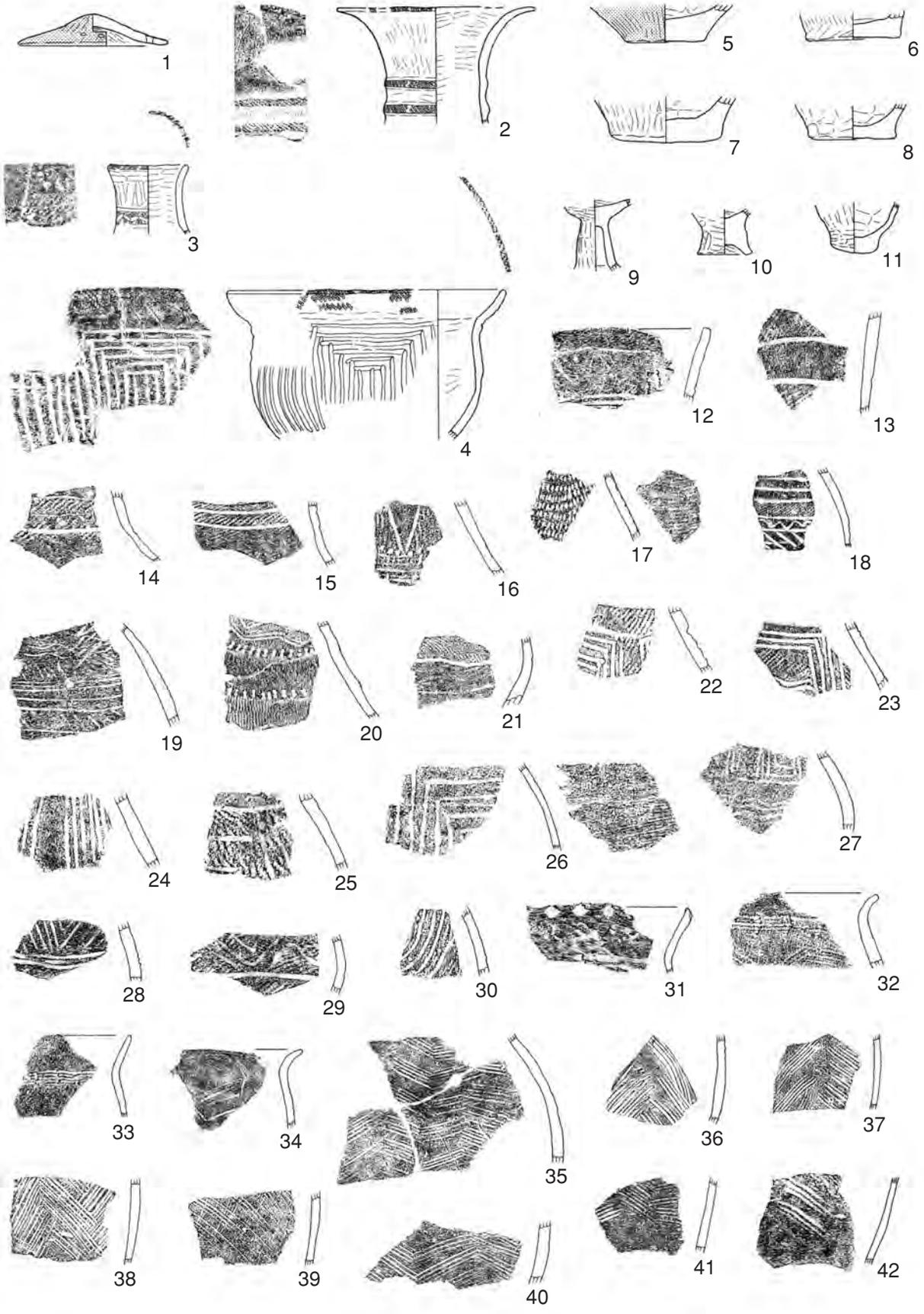
9 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、弥生時代の土器、石器、古墳時代後期の須恵器、土師器、土錘、近世の陶器がある（第77・78図）。遺構が密集する調査区東側からの検出が多い。図示不可能なものも含め、そのほとんどが弥生時代中期後半～末に相当する。以下、時代・時期及び遺物ごとに順を追って述べる。

1～63は弥生時代の遺物。1～61は土器。1は蓋。器高が低く、天井部から口縁部まで緩やかに下る。内外面ともにヘラミガキ調整で、外面に赤彩が施されている。二個一対の焼成前穿孔がみられた。

2・3・5・12～30は壺。2・3は口縁部から頸部までの部位。2は口縁部が大きく外反し、頸部はほぼ直立する。文様は口縁端部と頸部に巡る2条の突帯にR L単節縄文が施文されている。外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。3は小型壺。口縁部及び頸部が短く、口縁部は小さく開き、頸部はほぼ直立する。文様は口縁端部にL R単節縄文が施文され、頸部は2条の平行沈線が巡り、間にL R単節縄文と山形文が施文されている。外面無文部及び内面は、ヘラミガキ調整が施されている。5は底部。外面はヘラミガキと赤彩、内面はヘラナデ調整が施されている。

12は口縁部から頸部にかけての破片。磨耗顕著により分かりづらいが、L R単節縄文下に細い平行沈線が巡り、下に鋸歯文が描かれている。鋸歯文下は複数の平行沈線が巡る。13は頸部片。2条の太い平行沈線上下にL R単節縄文が施文され、間は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。14・15は頸部から肩部にかけての破片。いずれも頸部に複数の平行沈線が等間隔に巡り、沈線間にL R単節縄文が施文されているが、一部下にはみ出ている。16・17は肩部片。16は鋸歯文区画下にL R単節縄文が施文され、下に半円形の刺突列と細い平行沈線が複数巡る。17は爪形状の刺突列が複数巡る。18～21は平行沈線や波状沈線が巡る破片。18・19は胴上部片、20は肩部から胴上部にかけて、21は胴部中段から下部にかけての破片である。18は複数の平行沈線が巡り、中段の沈線間にL R単節縄文、下の沈線間に波状沈線が施文されており、以下は斜位の沈線が描かれている。19は複数の細い波状沈線と平行沈線間及び平行沈線下にR L単節縄文か無節Rと思われる縄文が施文されている。20は2本一単位の波状文が複数巡り、下の斜位のヘラミガキ調整が施された無文部を挟んで上下に2本一単位の刺突列が2列刻まれている。以下は細かいR L単節縄文が縦位に施文されている。21は細かいR L単節縄文下に振りの緩い波状沈線が巡る。以下は無文で横・斜位のヘラミガキ調整が施されている。22～27は重四角文が描かれた破片。22～24は肩部片、25～27は胴上部片である。24・25は胎土が粗い。22は重四角文外にL R単節縄文

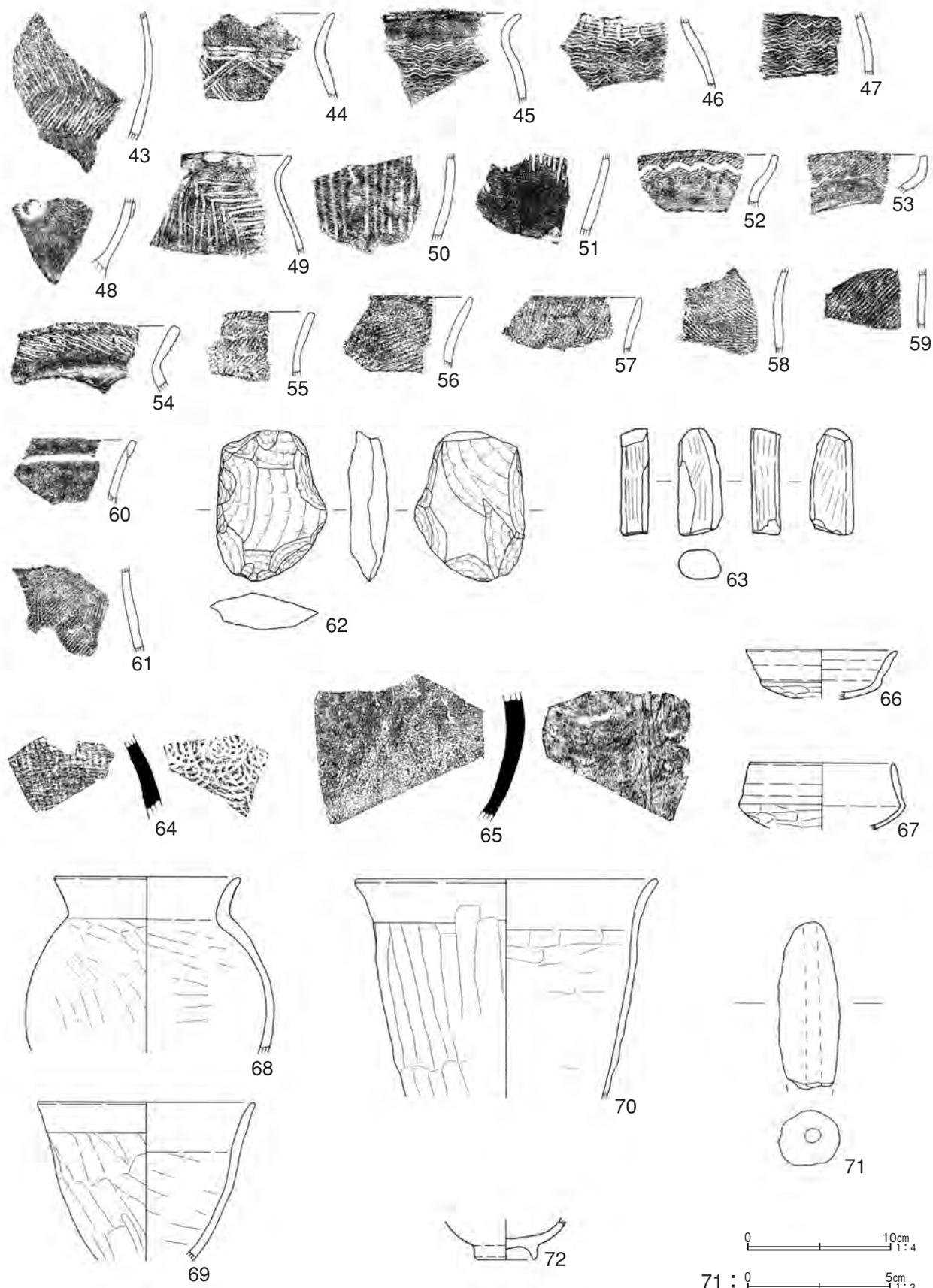


第 77 図 遺構外出土遺物 (1)

が施文されている。23は重四角文内に細かいRL単節縄文と2本一単位の波状文が充填されている。24は分かりづらいが、重四角文間にRL単節縄文が施文されている。25は無文部下に重四角文が描かれており、地文にRL単節縄文が施文されている。27は重四角文下に波状沈線が3条巡る。28・29は重山形文が描かれた破片。28は胴上部片、29は胴部中段の破片である。28は重山形文下に3条の平行沈線が巡る。29はLR単節縄文地に重山形文が描かれており、下に平行沈線が巡る。30はフラスコ文が描かれた胴上部片。地文にRL単節縄文が施文されている。12～30の内面調整は、12が横位のヘラミガキ、13・15は上位が横位のヘラミガキ、下位が横位のヘラナデ、14・16・18・19・21～24・27～29は横位、20・30は横・斜位のヘラナデ、17・26は横位のハケメ、25は磨耗顕著により不明である。27は内面に輪積痕が残る。

4・6～8・31～61は甕。4は底部付近を欠く。口縁部が内湾し、頸部はすぼまる。胴部中段以下は内湾しながら下る。文様は端部を含む口縁部にRL単節縄文が施文され、頸部以下にコの字重ね文が描かれている。外面無文部及び内面の調整は、ヘラミガキである。6～8は底部。6・7は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデ、8は内外面ともにヘラナデ調整が施されている。甕としたが、壺の可能性もある。

31～48は櫛歯状工具で文様が描かれた破片。櫛歯の単位は4本が多い。31は口縁部から頸部にかけての破片。口縁端部に指頭圧痕が施され、頸部に簾状文が巡る。口縁部外面の無文部及び内面は、横位のヘラナデ調整が施されている。32～41は胴部に縦位の羽状文が描かれた破片。櫛歯が細く、密で乱雑なものが多い。32～34は口縁部から胴上部にかけて、35は胴上部、36～40は胴部中段、41は胴部中段から下部にかけての破片である。32～34は、口縁部外面の無文部に横位のヘラミガキ調整が施されている。32・33は頸部に簾状文が巡る。39は羽状文施文前に施された斜位のハケメ調整が残る。41は羽状文下が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。32～41の内面調整は、40のみ横位のヘラナデ、その他は横位のヘラミガキである。37・39は内面に輪積痕が残る。42・43は胴部に横位の羽状文が描かれた破片。42は胴部中段から下部にかけて、43は胴上部から下部にかけての破片である。42はやや間隔を空けて、43は密に描かれている。42は櫛歯が太く、3本と少ない。43はやや乱雑に描かれている。いずれも胴下部が無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。42・43の内面調整は、ともに横位のヘラミガキである。44は胴部に斜格子文が描かれた口縁部から胴上部にかけての破片。頸部に3本一単位の簾状文が巡る。口縁部外面の無文部は斜位、内面は横位のヘラミガキ調整が施されている。45～48は複数の波状文が描かれた破片。いずれも振りが小さく、乱雑に描かれたものが多い。45は口縁部から胴上部にかけて、46は頸部から胴上部にかけて、47は胴上部、48は胴部中段から下部にかけての破片である。45は口縁端部にRL単節縄文が施文されている。口縁部外面の無文部は、横位のハケメ調整が施されている。波状文は頸部以下に複数巡る。46は頸部に簾状文が巡る。48は分かりづらいが、円形刺突の施されたボタン状貼付文脇に波状文が巡る。胴下部は無文で斜位のヘラミガキ調整が施されている。45～48の内面調整は、47のみ横・斜位のヘラナデ、その他は横位のヘラミガキである。49～51は胴部にコの字重ね文が描かれた破片。49は口縁部から胴上部にかけて、50は胴部中段、51は胴部中段から下部にかけての破片である。49は頸部以下にコの字重ね文が描かれている。口縁部外面は、無文で横位のヘラミガキ調整が施されている。50は垂下する複数の沈線間に1条波状沈線が混じる。51は胴下部が無文で、分かりづらいが、横・斜位のハケメ調整が施されている。沈線が太い。49～51の内面調整は、すべて横位のヘラミガキである。52～59は縄文が施文された破片。52～57は口縁部から頸部にかけて、58は頸部から胴上部にかけて、



第 78 図 遺構外出土遺物 (2)

59は胴部中段の破片である。縄文は、52・53・55～57・59がLR単節縄文、54・58は無節Rである。52～54は端部を含む口縁部に縄文が施文され、52は太く振りの小さい波状沈線が巡る。頸部は無文で52・54は横位のヘラミガキ、53は横位のハケメ調整が施されているが、54はヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。55～59は全面に縄文が施文され、55は口縁端部まで施文されている。52～59の内面調整は、57が磨耗顕著により不明、58は横・斜位、その他は横位のヘラミガキである。60・61は無文の破片。60は口縁部から頸部にかけての破片。口縁部外面及び内面の調整は横位、頸部外面は斜位のヘラミガキ調整である。61は胴上部片。外面がハケメ、内面は磨耗顕著により不明である。

9・10は小型高坏の接合部から脚部までの部位。9は脚部が長く、10は短い。外面及び坏部内面はヘラミガキ、脚部内面は9が図示できなかつたがヘラナデ、10は内面もヘラミガキ調整が施されている。

11はミニチュア土器。口縁部を欠く。体部が内湾し、厚底の底部が柱状を呈する。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が施されている。

62は打製石斧の刃部。基部を欠くが、短冊状を呈すると思われる。片面一部に自然面を残す。ホルンフェルス製。63は磨石。両端を欠く。ややいびつな角錐状を呈する。四面使用している。砂岩製。

64～71は古墳時代後期の遺物。64～70は土器。64・65は須恵器。64は甕の胴上部片。外面はタタキ後に回転ナデ調整が施されている。内面はあて具痕が残る。末野産。65は瓶の胴部中段の破片。外面は回転ナデ、内面は横・斜位のヘラナデ調整が施されている。外面上位に自然釉が付着している。産地不明。66～70は土師器。66・67は土師器坏。66は坏蓋模倣坏、67は坏身模倣坏。ともに口縁部に段を持つ。口縁部から体部までは内外面ともに横ナデ、底部はヘラ削り調整が施されている。68は丸胴甕の口縁部から胴部中段までの部位。短い口縁部がやや外反し、頸部はすぼまる。胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整が施されている。69・70は甗。いずれも底部付近を欠く。69は小型。口縁部が逆ハの字に開き、胴部は緩やかに内湾する。70は口縁部がやや外反し、胴部以下ほぼ直線的に下る。いずれも口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整が施されている。71は大型の土鍾。片端を欠く。中段付近が膨らむ。

72は近世の陶器碗。体部から底部までの部位。体部は内湾し、底部は高台が付く。内外面ともに灰釉が施されており、貫入がみられた。

第25表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	一括	弥生土器 蓋	10.4	2.3	—	ABEIK	にぶい橙色	B	50%	外面赤彩、大半剥落。磨耗顕著。焼成前穿孔有。
2	西側一括	弥生土器 壺	(13.8)	(8.05)	—	ABIN	灰色	B	口～頸 30%	内外面磨耗顕著。
3	58-59-135-136G	弥生土器 壺	5.6	(4.8)	—	ABIJKN	灰褐色	B	口～頸 75%	内面やや磨耗。
4	一括	弥生土器 甕	(19.5)	(10.4)	—	ABEHIKN	にぶい赤褐色	B	口～胴 20%	内外面磨耗顕著。
5	58-59-135-136G	弥生土器 壺	—	(2.6)	5.5	ABIKN	赤色 浅黄橙色	B	底部 90%	外面赤彩、大半剥落。内外面やや磨耗。
6	58-137-138G	弥生土器 甕	—	(1.9)	(6.5)	ABDGHIK	灰褐色	B	底部 100%	内外面やや磨耗。
7	一括	弥生土器 甕	—	(3.2)	7.7	ABCHIKMN	褐灰色	B	底部 90%	内外面磨耗顕著。
8	58-137-138G	弥生土器 甕	—	(2.45)	6.0	ABKN	暗灰色	B	底部 100%	内外面磨耗顕著。
9	58-137-138G	弥生土器高坏	—	(5.0)	—	ABIN	にぶい橙色	B	接～脚 100%	内外面磨耗顕著。
10	54-55-138G	弥生土器高坏	—	(3.2)	3.8	ABCHIK	浅黄橙色	B	接～脚 100%	
11	一括	弥生土器ミニチュア	—	(3.6)	3.3	ABEIK	にぶい黄橙色	B	体～底 70%	内外面磨耗顕著。
12	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
13	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	橙色	B	頸部片	外面磨耗顕著。
14	54～56-137G	弥生土器 壺	—	—	—	ABEIKN	橙色	B	頸～肩部片	内外面磨耗顕著。
15	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHKN	浅黄橙色	B	頸～肩部片	外面やや磨耗。
16	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
17	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	褐色	B	肩部片	内外面やや磨耗。

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
18	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
19	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIK	黒色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
20	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEIKN	浅黄色	B	肩～胴上片	外面所々磨耗。
21	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIK	褐色	B	胴中～下片	内外面やや磨耗。
22	58-137-138G	弥生土器 壺	—	—	—	ABDIKN	灰黄色	B	肩部片	
23	55-56-137G	弥生土器 壺	—	—	—	ABCDHIK	灰色	B	肩部片	内外面やや磨耗。
24	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	褐灰色	B	肩部片	外面磨耗顕著。
25	68-138G	弥生土器 壺	—	—	—	ABDEHIKN	灰黄色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
26	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ADEI	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
27	60～65-138G	弥生土器 壺	—	—	—	ADIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内面輪積痕有。内外面磨耗顕著。
28	60～65-138G	弥生土器 壺	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
29	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABIKMN	灰黄褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
30	一括	弥生土器 壺	—	—	—	ABDHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	
31	60～65-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKMN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面やや磨耗。
32	58-59-135-136G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIMN	灰褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
33	60～65-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKM	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
34	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIKN	灰褐色	B	口～胴上片	内面磨耗顕著。
35	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEHIN	灰黄褐色	B	胴上部片	内外面やや磨耗。
36	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHKM	褐灰色	A	胴中段片	
37	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDEIKN	暗灰黄色	B	胴中段片	内面輪積痕有。
38	68-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	胴中段片	
39	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内面輪積痕有。
40	58-59-135-136G	弥生土器 甕	—	—	—	AHIK	黒褐色	B	胴中段片	
41	東側一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	にぶい褐色	B	胴中～下片	
42	58-59-135-136G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKMN	灰黄褐色	B	胴中～下片	内外面磨耗顕著。
43	60～62-137-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	黒褐色	B	胴上～下片	内外面やや磨耗。
44	58-59-135-136G	弥生土器 甕	—	—	—	ABEIN	にぶい褐色	B	口～胴上片	内外面やや磨耗。
45	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKM	黒褐色	B	口～胴上片	内面やや磨耗。
46	58-59-135-136G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDIK	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	内外面やや磨耗。
47	60～65-138G	弥生土器 甕	—	—	—	AHIN	黒褐色	B	胴上部片	
48	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABIKN	にぶい黄褐色	B	胴中～下片	
49	61～63-137-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABCHKM	灰黄褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
50	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABEHIKN	黒褐色	B	胴中段片	内外面磨耗顕著。
51	68-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIK	暗褐色	B	胴中～下片	
52	一括	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKM	黒褐色	B	口～頸部片	外面やや磨耗。
53	一括	弥生土器 甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
54	54-55-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIM	黒褐色	B	口～頸部片	内面やや磨耗。
55	58-137-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIK	黒褐色	B	口～頸部片	外面所々輪積痕有。
56	60～65-138G	弥生土器 甕	—	—	—	AIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
57	58-137-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDN	黒褐色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
58	58-137-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
59	54-55-138G	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴中段片	
60	58-59-135-136G	弥生土器 甕	—	—	—	ABKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
61	一括	弥生土器 甕	—	—	—	ABDHIKMN	黒褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
62	一括	打製石斧	最大長(10.55)cm、最大幅(7.55)cm、最大厚(2.6)cm。重量(248)g。刃部のみ。ホルンフェルス製。							
63	59-136G	磨石	最大長(7.5)cm、最大幅(3.05)cm、最大厚(2.1)cm。重量(79)g。両端欠。砂岩製。四面使用。							
64	58-137-138G	須恵器 甕	—	—	—	AL	黄灰色	A	胴上部片	未野産。
65	59-136G	須恵器 瓶	—	—	—	AB	灰色	A	胴中段片	外面上位自然釉付着。
66	一括	土師器 坏	(10.5)	(3.4)	—	ABHK	褐灰色	B	25%	
67	58-137-138G	土師器 坏	(10.2)	(4.6)	—	ABEK	橙色	B	30%	
68	58-59-135-136G	土師器 甕	13.1	(12.35)	—	ABCIN	浅黄色	B	口～胴 40%	内外面磨耗顕著。
69	58-59-135-136G	土師器 甕	(15.2)	(11.15)	—	ABCEHIJKN	にぶい赤褐色	B	口～胴 20%	外面やや磨耗。
70	58-59-135-136G	土師器 甕	(21.2)	(15.4)	—	ABDEHN	にぶい赤褐色	B	口～胴 20%	内面磨耗顕著。
71	58-137-138G	土 錘	最大長(5.85)cm、最大幅(2.1)cm、孔径0.3cm。重量(27)g。片端欠。							
72	一括	陶器 碗	—	(2.9)	(4.4)	—	—	—	体～底 35%	内外面灰釉。

V 調査のまとめ

前中西遺跡の調査報告は、今回で8回目となる。今回も前回刊行した報告書『前中西遺跡Ⅶ』（熊谷市教委2012）に続き、遺跡の主体となる弥生時代の集落が主な内容となる。本報告地点は、前回の報告地点北側に隣接するが、前回同様、弥生時代の遺構・遺物が突出しており、調査区ほぼ全面に住居跡が密に分布する状況が確認された。本報告地点の住居跡は、重複ないし近接するものが多いが、これ程重複する例は今まで無かったことであり、こうした状況は本報告地点一帯が集落の立地に最も適した場所であり、弥生時代集落の中心部であったことを物語る。

本遺跡における弥生時代の集落と墓域については、前回の報告で現時点における様相をまとめてみた。従って、今回は本報告地点をこれまでの様相に照らし合わせて述べてみたい。また、本報告の住居跡15軒は、弥生時代中期後半から末までに収まるが、出土土器にほとんど時期差が見られない。ただ、前述のとおり、住居跡は重複ないし近接するものが多いことから、当然前後関係を持つ。従って、住居跡15軒についてもその変遷について可能な限り辿ってみたい。

本報告地点の集落と墓について

本遺跡における弥生時代の集落と墓域については、これまでの報告でも述べたとおり、現在も流れる衣川を主な境界線として北側に集落、南側に方形周溝墓による墓域が広がっている（第79図）。

集落は中期中頃、中期後半、中期末から後期初頭までの3つの時期に大別される。集落は中期中頃に少数ながら出現し、やや空白期間を置いて中期後半の新しい段階に規模が増大する。そして、中期末から後期初頭には縮小傾向となる。分布状況は、中期中頃が遺跡範囲東側の衣川を挟んだ南北、中期後半は遺跡範囲の東西に分かれ、東側は衣川北、西側は衣川南北の3つ、中期末から後期初頭にかけても遺跡範囲の東西に分かれるが、東側は衣川南、西側は同じく衣川南北の3つに分かれる。

本報告地点は、遺跡範囲東側の衣川北に位置する。検出された住居跡15軒の時期は、中期後半から末にかけての段階が9軒、中期末が6軒であり、前回報告の集落でも新しい段階に相当するものが多い。前者の9軒は、過渡的な様相を呈することから時期の区別が難しいが、第79図には中期後半段階に含めてある。従って、中期末は検出数が少なくなっているが、逆に若干の上乗せが可能とも言える。

本報告地点の住居跡は、時期別に分布の違いが見られず、調査区ほぼ全面に分布する。過去の調査も含め、周辺一帯を見ると、その密な分布状況から改めて本遺跡における弥生時代集落の中心部であったことが伺える。また、未整理のため図示できないが、近年実施している本報告地点周辺での各種開発に伴う緊急調査においても弥生時代の住居跡が多数検出されており、周辺一帯に住居跡が多数分布することが明らかとなってきている。逆に本報告地点西端は住居跡が存在しないが、これは調査区中央付近から地形的に若干下るためと思われる。第79図には掲載していないが、本報告地点西端には現在用水路が流れており、過去の調査結果から現況河川等が昔の小河川であったことを勘案すると、本報告地点の集落は西端手前で途切れる可能性が高く、本遺跡の弥生時代集落は、いくつかのグループに分かれることがより明確になった。

なお、竪穴状遺構についても若干触れておきたい。第Ⅲ章2でも述べたが、竪穴状遺構は小型で住居跡よりも掘り込みが浅く、炉跡や壁溝等を伴わないことから「竪穴状遺構」とした。本報告の1号竪穴

状遺構は、中期中頃から後半にかけて、2号竪穴状遺構は後続する段階に相当するが、いずれも本遺跡では希薄となる段階である。本遺構が住居跡か否かについての判断は難しいが、空白期間に相当する遺構が確認されたことは、集落の継続性を考える上で貴重な成果と言える。

次に墓域について。墓は方形周溝墓と乳幼児葬である土器棺墓があるが、土器棺墓は集落内外で確認されており、本稿で述べる墓域とは方形周溝墓の分布域を意味する。時期は中期後半と中期末から後期初頭までの2つに大別されるが、時期の判別が困難なものもある。また、調査区の都合から単独の溝跡として報告したものに方形周溝墓の可能性が高いものがあるため、数がさらに増える可能性もある。分布状況は、中期後半が遺跡範囲西側の衣川南、中央付近は南側を流れる河川南、東側は両河川に挟まれた箇所3つに分けられる。中期末から後期初頭にかけての段階は、遺跡範囲東側に限定され、VI1号方形周溝墓のみ衣川のすぐ北側にあるが、大半は衣川と南側河川の間分布する。墓域は主に衣川南に広がり、平面プランはすべて四隅の切れるタイプであるが、規模は中期後半が中期末から後期初頭に比べて大きい。なお、土器棺墓は前述のとおり、集落内外で確認されているが、これまでの様相では中期後半が集落、中期末から後期初頭が墓域から検出される傾向にある。

本報告地点では、方形周溝墓1基と土器棺墓2基が検出されている。時期は、方形周溝墓が後期初頭、土器棺墓は中期末と後期初頭に相当するものが各1基である。

本報告地点は、遺跡範囲北東部に位置することから、これまでの様相と異なる結果を得ることとなった。前述のとおり、方形周溝墓は衣川北に分布することは皆無に等しかったが、衣川北の集落が密集する箇所から検出されたことは、新知見となる。ただ本報告の方形周溝墓は、後期初頭に相当することから集落とは前後関係を持つ。本報告地点は、後期初頭になると墓域として利用されていたことが新たに確認された。

以上、本報告地点の集落と墓について述べた。今回の成果としては、本報告地点は中期後半から中期末までは集落として利用され、後期初頭には方形周溝墓が築造され、墓域に変わることが挙げられる。
本報告地点の集落の変遷について

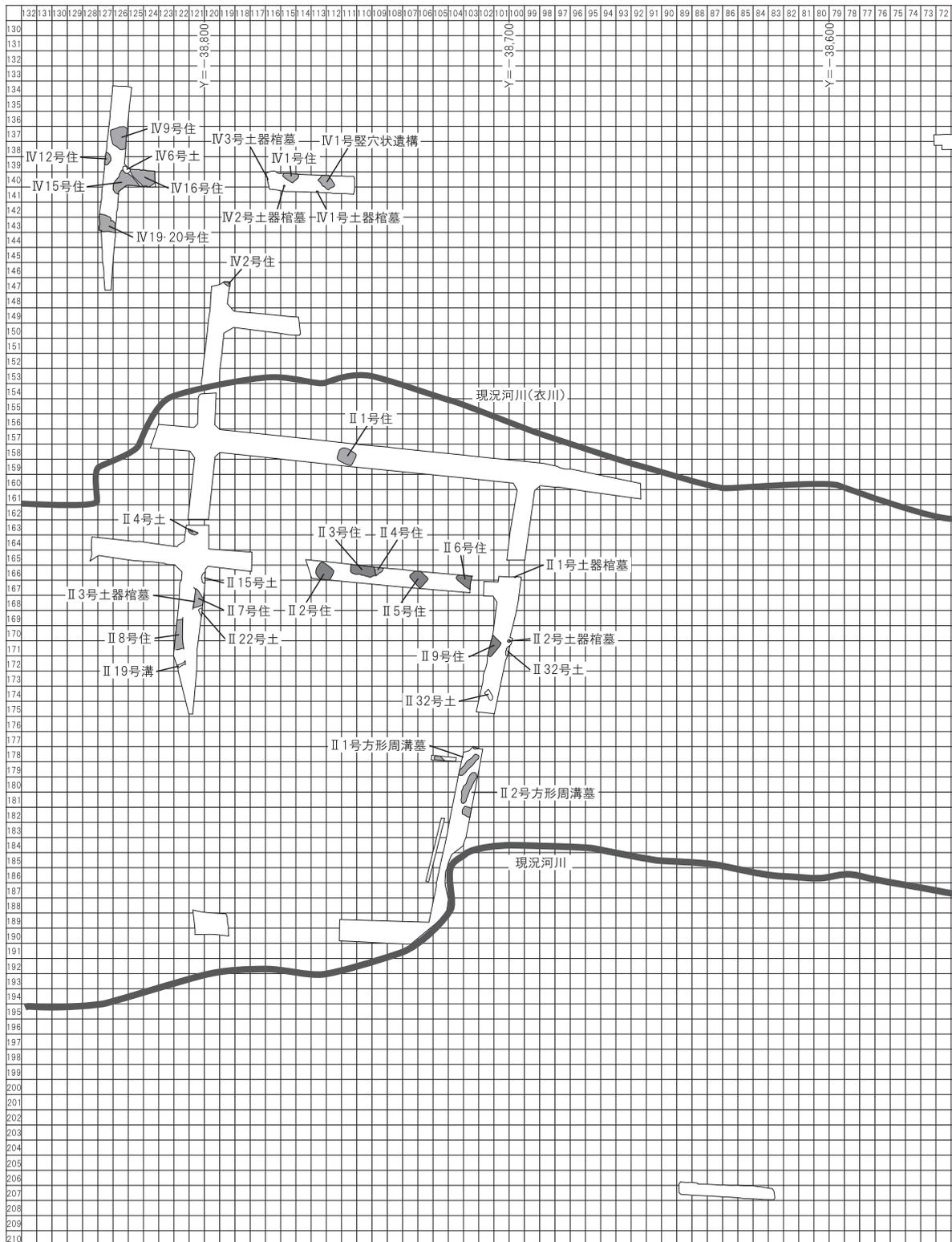
本報告地点で検出された住居跡は、15軒である。出土土器を見ると、各住居跡の時期は弥生時代中期後半から末にかけて過渡的な様相を呈するものが大半を占め、ほとんど差が見られない。しかし、住居跡は重複ないし近接することから時期差を持つことは明らかである。

前回の報告でも述べたが、弥生時代中期後半から後期初頭までの土器は、文様の主体が縄文から櫛歯状工具へと移行する傾向にある。壺は胴部中段まで施文されていた文様が、時期が下るにつれて頸部にほぼ集約され、無文化が進む。甕は縄文を施文するものの有無が1つの指標となり、時期が下るにつれて消失する。また、櫛歯状工具で文様の描かれた甕は、文様が粗雑化していく。以上の流れと住居跡の切り合い関係を基に変遷を辿ると、本報告地点の集落は、以下のとおりとなる。

弥生時代中期後半～末：1～3・7～10・12・15号住居跡

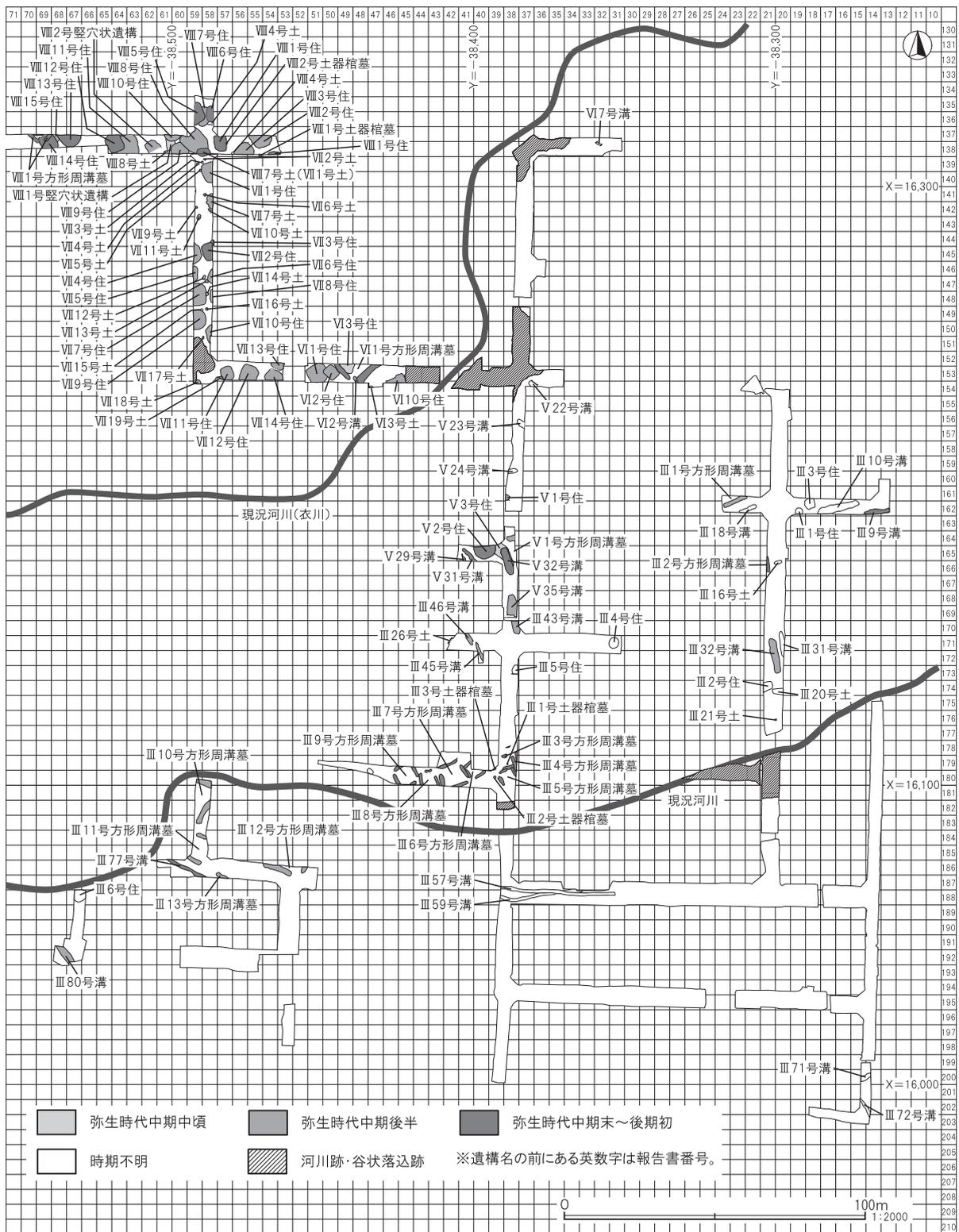
中期末：4～6・11・13・14号住居跡

中期後半から末にかけての土器は、北島式の特徴を持ちつつも新しい要素が見られるようになる。北島式の特徴としては、壺は肩部と胴上部の境付近に段を持ち、文様は刺突列や鋸歯文、「平行線+波状文系列」(埼玉考古学会2003)、重四角文等が施文される。甕は櫛歯状工具による文様の割合が多いが、



第 79 図 弥生時代遺構分布図

在地系の縄文施文の甕も存在する。一方、新しい要素としては、壺は頸部にのみ文様が施文されるものや無文化が進んだものが出現する。代表的なものとしては、2号住居跡第8図2、3号住居跡第13図4、8号住居跡第29図2、9号住居跡第33図2～4、12号住居跡第47図1・5・7・8・10等がある。そして、前回の報告でも述べたが、当段階にポスト北島式とした「平行線+波状文系列」(埼玉考古学会2003)



が簡略化したもの(3号住居跡第14図51、7号住居跡第25図16、12号住居跡第49図67)等も出現する。甕は、櫛歯状工具による文様が比較的丁寧に施文されたものもあるが、大半は細い櫛歯で乱雑に描かれたものが多くなる。

各住居跡について見ると、1・15号住居跡は遺物が少ないため、詳細は定かではないが、1号住居跡は

南側隣接箇所を緊急調査した際に本報告と同一の住居跡が検出されており、まとまった資料が得られている。しかし、未整理のため、現時点では含みを持たせて当段階に含めたが、時期が前後する可能性もある。15号住居跡は、重複する13・14号住居跡との新旧関係から当段階としたが、さらに遡る可能性もある。2・3号住居跡は近接、8～10号住居跡は重複及び近接することから新旧関係を持つ。2・3号住居跡は、櫛歯状工具による文様が比較的丁寧に施文された甕の割合等から2号住居跡が若干古いと思われる。8～10号住居跡については、切り合い関係にある8・9号住居跡は、発掘調査段階では8号住居跡が新しいと判断したが、出土土器を比較すると9号住居跡の方が若干新しい様相を呈する。比較対象となる遺物は少ないが、壺はともに北島式の特徴と新しい要素が見られるものの、甕は8号住居跡に櫛歯状工具で比較的丁寧にしっかりと施文されたものが多くみられ、9号住居跡は乱雑なものが多い。また、縄文施文の甕が8号住居跡に多くみられることから8号住居跡の方が古い様相を呈する。近接する10号住居跡は、遺物が少ないが、貯蔵穴から出土した複合鋸歯文が比較的丁寧に描かれた壺（第37図1）を重視すると、8・9号住居跡よりも古いと思われる。11号住居跡と重複する12号住居跡は、出土土器を比較すると、それ程時期差があるように見えないが、切り合い関係を明確に確認できたことから12号住居跡が古い。

以上の様相に主軸方向等を加味すると、当段階の変遷は、2・10号住居跡→8号住居跡→3・7号住居跡→9・12号住居跡となり、およそ4期に分けられる。遺物の少ない1・15号住居跡は、判別が難しいため、省略せざるを得ない。なお、住居跡の平面プランは、すべて隅丸長方形であるが、古段階に相当する2・10号住居跡は、楕円形に近い形状を呈する。前回報告でも中期後半段階の住居跡は、楕円形に近いものが多かったことから、本遺跡における中期後半段階の住居跡は、楕円形状を呈する傾向にある。

中期末は、文様の簡略化がさらに進む。壺は頸部に文様が集約されるものが多くなり、縄文が消失していき、無文化も進む。また、口縁部が大きく外反するようになる。甕は櫛歯状工具による文様が圧倒的に多くなり、前段階に比べてさらに乱雑になる。

各住居跡について見ると、4号住居跡は小型ながら良好な資料がまとまって出土している。壺は無文化が進み、櫛歯状工具による文様もみられる。甕は櫛歯状工具によるものでほぼ占められ、当段階でも新しい様相を呈する。なお、4号住居跡では、ほぼ完形の榎田型太形蛤刃石斧が検出されている。刃こぼれがほとんど見られないことから実用的とは考えにくく、祭祀儀礼等に使用されたものであろうか。全長21.3cmを測り、県内では朝霞市新屋敷遺跡出土例と並ぶ最大級のものである。5・6号住居跡は重複、13・14号住居跡は近接することから新旧関係を持つ。5・6号住居跡は直接切り合い関係にないが、前段階の7号住居跡を挟んで近接する。出土土器を比較すると、それ程差があるように見えないが、比較対象となる壺は、縄文施文の割合や文様の乱雑さ等からみると、6号住居跡が新しいと思われる。なお、6号住居跡には、鋸歯文が描かれた北島式の壺（第23図1）もあるが、鋸歯文が大振りであること等から見ると後出的とも見える。本例は流れ込みの可能性もあるが、いずれにしても6号住居跡は、他の良好な土器のまとまりから見ると、5号住居跡より新しいと思われる。11号住居跡は、12号住居跡との新旧関係から当段階としたが、前述のとおり、あまり出土土器に違いがみられない。ただ壺は無文化が進み、甕は櫛歯状工具による文様でほぼ占められ、乱雑なもの（第41図12）がみられることから当段階とした。13・14号住居跡は、いずれも壺の口縁部が大きく外反するが、縄文の有無や乱雑さから見ると、13号住居跡がやや古い様相を呈する。なお、13号住居跡では、前回報告でも検出された秩父方面に分

布する下ツ原式の系列で捉えられる壺（第53図2）もみられた。

以上の様相に主軸方向等を加味すると、当段階の住居跡の変遷は、5・11号住居跡→13号住居跡→4・6・14号住居跡となり、およそ3期に分けられる。ただし、4・6・14号住居跡は同一グループに括ったが、4・6号住居跡と14号住居跡は軸が異なることから両者間に若干時期差が存在する可能性がある。

なお、良好な資料が得られた7号土坑についても触れておきたい。7号土坑は僅かではあるが、比較的良好的土器が検出されている。このうち、第69図2の壺は、無文化が進み、頸部に1条の突帯、以下にS字状結節文4条を等間隔に2段施文している。S字状結節文が施文された土器が本遺跡で検出されたのは初めてであり、本例は器形も含め、南関東地方・宮ノ台式の系列で捉えられる。文様が乱雑に描かれた他の出土土器とともに中期末段階に位置付けられる良好な資料と言え、時期は13号住居跡の前後あたりに位置付けられようか。

以上、本報告地点の集落の変遷について述べた。出土土器は住居跡に重複関係がなければ、時期差を見出すのが困難な様相を呈する。壺は明確に北島式と呼べるものは少なく、ポスト北島式としたものも含め、やはり本遺跡では「平行線+波状文系列」の文様が多い。また、頸部に文様が集約し、無文化が進むものが目立つ。甕は櫛歯状工具による文様が大半を占め、特に縦位の羽状文の割合が圧倒的に多い。

本報告地点の集落は、本遺跡の弥生時代集落で最も盛行する段階に相当し、北島遺跡の集落よりも新しい様相を呈する。また、住居跡の重複関係等からみると、本遺跡の中期後半から末までの段階は非常に細かく分けることが可能と言える。

最後に他の遺物についても若干述べておきたい。今回も前回報告に続き、甕が検出されている。いずれも底面の孔が比較的小さく、甕を転用した例もみられた。全形を検出したものはないが、底部を欠く甕などに接合する可能性がある。本遺跡では水田跡等の生産域は確認されていないが、地形的に下る遺跡東側ないし南側に広がっているのかもしれない。また、本報告では石器の検出が少ない。前回までの報告では、中期後半段階に相当する遺構から大型の打製石斧等が検出されているが、本報告ではほとんどみられない。こうした状況は、石器以外の材質が道具として使用されていたことを想像させるが、それが鉄かどうかについては検出例が無いため、現状では何とも言えない。いずれにしても時期が下るにつれて石器の使用頻度が低くなる傾向にあると言える。

以上、簡単に述べた。紙数に限りがあるため説明不足であることは否めないが、本報告地点の弥生時代集落は、前中西遺跡で最も盛行する時期に相当し、その規模等からみて北島遺跡とともに関東地方北西部における拠点集落としての様相を呈してきた。出土土器は中部地方・栗林式の影響が色濃く、その影響力は北島遺跡よりも強いと言える。従って、まず栗林式との比較検討が本遺跡の様相を解明する上で最重要課題となろう。発掘調査及び報告は、今後も実施される予定であることから資料の増加とともに検討を行っていききたい。

引用・参考文献

- 熊谷市遺跡調査会 2001 『諏訪木遺跡』
熊谷市教育委員会 1979 『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
1983 『めづか』
1999 『横間栗遺跡』

- 熊谷市教育委員会 2001 『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群 14・15・16号墳』
 2002 『前中西遺跡Ⅱ』
 2003 『前中西遺跡Ⅲ』
 2004 『籠原裏遺跡』
 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第2号墳』
 2008 『藤之宮遺跡』
 2009 『前中西遺跡Ⅳ』
 2010 『前中西遺跡Ⅴ』
 2011 『前中西遺跡Ⅵ』
 2012 『前中西遺跡Ⅶ』
- 熊谷市前中西遺跡調査会 1999 『前中西遺跡』
- 埼玉県遺跡調査会 1971 『横塚山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
 1988 『埼玉の中世城館跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
 2002 『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
 2002 『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
 2003 『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
 2004 『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集
 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
 2008 『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集
- 埼玉考古学会 2003 『埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』
 埼玉考古別冊7

写 真 图 版



調査区53～60-137・138グリッド全景(東から)



調査区53～60-137・138グリッド全景(西から)

図版2



調査区60～72-137・138グリッド全景(東から)



調査区60～72-137・138グリッド全景(西から)



第1号住居跡



第3号住居跡土器出土状況(2)



第2号住居跡



第4号住居跡



第3号住居跡



第4号住居跡土器出土状況(1)



第3号住居跡土器出土状況(1)



第4号住居跡土器出土状況(2)

図版 4



第4号住居跡土器出土状況(3)



第6号住居跡土器出土状況(2)



第4号住居跡石器出土状況



第8号住居跡



第5~7号住居跡



第9号住居跡



第6号住居跡土器出土状況(1)



第10号住居跡



第11号住居跡



第12号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡炉跡



第12号住居跡炉跡



第11号住居跡土器出土状況



第13号住居跡



第12号住居跡



第13号住居跡土器出土状況



第14・15号住居跡



第2号竪穴状遺構



第14号住居跡土器出土状況(1)



第2号竪穴状遺構土器出土状況



第14号住居跡土器出土状況(2)



第1号掘立柱建物跡



第1号竪穴状遺構



第1号沟迹



第2号沟迹土器出土状况(2)



第2号沟迹土器出土状况(3)



第2号沟迹



第2号沟迹土器出土状况(1)



第5号沟迹

图版 8



第7号沟迹



第3号土坑



第5号土坑



第1号土坑



第8号土坑



第2号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第2号土器棺墓



第1号方形周溝墓



小学生遺跡見学会風景



第1号土器棺墓(横から)



親子発掘体験風景



第1号土器棺墓(上から)



中学生職場体験発掘風景

图版 10



第2号住居跡 第8图1



第2号住居跡 第8图6



第2号住居跡 第8图2



第2号住居跡 第8图7



第2号住居跡 第8图4



第2号住居跡 第8图8



第2号住居跡 第8图5



第2号住居跡 第8图16



第2号住居跡 第9图26



第3号住居跡 第13图3



第3号住居跡 第13图1



第3号住居跡 第13图5



第3号住居跡 第13图7



第3号住居跡 第13图2



第3号住居跡 第13图8

图版 12



第3号住居跡 第13图9



第4号住居跡 第17图1



第3号住居跡 第14图12



第4号住居跡 第17图2



第3号住居跡 第14图13



第4号住居跡 第17图3



第4号住居跡 第17图4



第4号住居跡 第17图7



第4号住居跡 第17图5



第4号住居跡 第17图8



第4号住居跡 第17图6



第4号住居跡 第18图13

图版 14



第4号住居跡 第18图14



第5号住居跡 第21图4



第5号住居跡 第21图1



第5号住居跡 第21图5



第5号住居跡 第21图3



第6号住居跡 第23图1



第6号住居跡 第23图2



第6号住居跡 第23图5



第6号住居跡 第23图3



第6号住居跡 第23图10



第6号住居跡 第23图4



第7号住居跡 第25图1



第7号住居跡 第25图3



第7号住居跡 第25图9



第7号住居跡 第25图9底面



第8号住居跡 第29图2



第8号住居跡 第29图6



第9号住居跡 第33图1



第9号住居跡 第33图2



第9号住居跡 第33図3



第9号住居跡 第33図7文様



第9号住居跡 第33図4



第9号住居跡 第33図10



第9号住居跡 第33図5



第9号住居跡 第33図7



第9号住居跡 第34図13

图版 18



第9号住居跡 第34图14



第9号住居跡 第34图23



第10号住居跡 第37图1



第10号住居跡 第37图2



第10号住居跡 第37图9



第10号住居跡 第37图9底面



第11号住居跡 第40图1



第11号住居跡 第40图2



第11号住居跡 第40图10



第11号住居跡 第40图5



第11号住居跡 第40图11



第11号住居跡 第40图7



第11号住居跡 第41图12



第11号住居跡 第40图9

图版 20



第 11 号住居跡 第 41 图 13



第 11 号住居跡 第 41 图 45



第 11 号住居跡 第 41 图 23



第 11 号住居跡 第 41 图 39



第 12 号住居跡 第 47 图 1



第 11 号住居跡 第 41 图 39 底面



第 12 号住居跡 第 47 图 5



第 12 号住居跡 第 47 图 8



第 12 号住居跡 第 47 图 12



第 12 号住居跡 第 47 图 9



第 12 号住居跡 第 48 图 14



第 12 号住居跡 第 48 图 15



第 12 号住居跡 第 47 图 10



第 12 号住居跡 第 48 图 16

图版 22



第12号住居跡 第48图39



第13号住居跡 第53图1



第12号住居跡 第48图39底面



第13号住居跡 第53图2



第12号住居跡 第48图43



第13号住居跡 第53图3



第12号住居跡 第48图45



第13号住居跡 第53图4



第 13 号住居跡 第 53 图 16



第 14 号住居跡 第 56 图 3



第 14 号住居跡 第 56 图 1



第 14 号住居跡 第 56 图 4



第 14 号住居跡 第 56 图 2



第 2 号竖穴状遺構 第 61 图 1



第2号豎穴状遺構 第61图2



第7号土坑 第69图7-1



第2号豎穴状遺構 第61图3



第7号土坑 第69图7-2



第1号溝跡 第65图1-4



第7号土坑 第69图7-1



第1号方形周溝墓 第72图1



第1号土器棺墓 第74图1



第1号方形周溝墓 第72图2



第1号土器棺墓 第74图2

图版 26



第2号土器棺墓 第75图1



第6号住居跡 第24图39



第2号土器棺墓 第75图2



第2号溝跡 第65图2-1



遺構外 第77图1



第2号溝跡 第65图2-2



遺構外 第77图11



第2号沟迹 第65图2-3



第2号沟迹 第65图2-6



第2号沟迹 第65图2-4



第2号沟迹 第65图2-7



第2号沟迹 第65图2-5



第2号沟迹 第65图2-9



第2号沟迹 第65图2-10



第3号土坑 第69图3-2



第5号住居迹 第22图62



第3号土坑 第69图3-3



第3号土坑 第69图3-1



遺構外 第78图68



第1号住居跡 第6图2~5 第2号住居跡 第9图28~42



第2号住居跡 第9图43~62



第2号住居跡 第9图63~68・第10图69~77



第2号住居跡 第10图78~96



第2号住居跡 第10图97~107 第11图108~112



第2号住居跡 第11图113~129



第3号住居跡 第14图 23~42



第3号住居跡 第14图 43~53 第15图 54~61



第3号住居跡 第15图62~82



第3号住居跡 第15图83~93



第4号住居跡 第18图 15~29



第4号住居跡 第18图 30~42



第5号住居跡 第21图 22~28・第22图 29~42



第5号住居跡 第22图 43~61



第6号住居跡 第23図 11~19・第24図 20~36



第7号住居跡 第25図 10~29



第7号住居跡 第25图30・31・第26图32~46



第8号住居跡 第29图20~26・第30图27~40



第8号住居跡 第30图 41~60



第8号住居跡 第30图 61~80



第8号住居跡 第31图81~101



第9号住居跡 第34图29~45・第35图46~48



第9号住居跡 第35图 49~68



第10号住居跡 第37图 12~34



第11号住居跡 第41图 49~52・第42图 53~66



第11号住居跡 第42图 67~81



第11号住居跡 第42图82~94・第43图95~101



第11号住居跡 第43图102~116



第11号住居跡 第43图 117~134



第12号住居跡 第49图 46~66



第12号住居跡 第49图67~85



第12号住居跡 第49图86~90・第50图91~104



第12号住居跡 第50図 105~120



第12号住居跡 第50図 121・第51図 122~144



第13号住居跡 第53图 17~21・第54图 22~29



第13号住居跡 第54图 30~44



第14号住居跡 第56図6~16 第15号住居跡 第58図2~9



第1号竪穴状遺構 第60図2~20



第2号竖穴状遺構 第61図6~15 第1号溝跡 第65図1-5~1-10 第3号溝跡 第65図3-1・3-2



第5号溝跡 第66図5-1~5-8 第6号溝跡 第66図6-1 第7号溝跡 第66図7-1~7-16



第2号土坑 第69図2-1 第3号土坑 第69図3-5~3-12 第4号土坑 第69図4-2
第7号土坑 第69図7-5・7-6 第8号土坑 第70図8-1~8-3



第9号土坑 第70図9-2~9-4 第10号土坑 第70図10-1~10-3 第1号方形周溝墓 第72図3・4
ピット 第76図1・2 遺構外 第77図12~21



遺構外 第77図 22~41



遺構外 第77図 42・第78図 43~61



第3号住居跡 第15图94 第6号住居跡 第24图37 第8号住居跡 第31图102・103
第9号住居跡 第35图69・70 第11号住居跡 第43图135~137・第44图138~143



第4号住居跡 第18图43

图版 52



第12号住居跡 第51图145・146 第13号住居跡 第54图46~49 第14号住居跡 第56图17
 第15号住居跡 第58图11 第1号方形周溝墓 第72图5 遺構外 第78图62・63



第11号住居跡 第44图144



第11号住居跡 第44图145



第12号住居跡 第51图147



第11号住居跡 第44图146



第2号溝跡 第65图2-12



第2号溝跡 第65图2-13



遺構外 第78图71

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえなかにしいせきはち							
書名	前中西遺跡VIII							
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書IX							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編集者名	松田 哲							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 (° ' ")	東緯 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしかみの 熊谷市上之2570番地1 ちさきほか 地先他	11202	092	36° 8' 46"	139° 24' 20"	20090622 ~ 20091016	800.7	区画整理 街路築造 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前中西遺跡	集落跡 祭祀 墓	弥生中期後半~末	住居跡 15軒 堅穴状遺構 2基 土坑 2基 土器棺墓 1基	弥生土器・石器 石製品・玉類		弥生時代中期後半から末までの住居跡が多数検出され、遺物が大量に出土した。 今回の報告地点一帯は、過去に実施した周辺の調査結果を踏まえると、本遺跡弥生時代集落の中心部と思われる。		
		弥生後期初頭	方形周溝墓 1基 土器棺墓 1基	弥生土器・石器				
		古墳時代前期	溝跡 1条	土師器・土製品 玉類				
		古墳時代後期	溝跡 6基 土坑 3基	須恵器・土師器				
		平安時代	堀立柱建物跡 1棟					
		近世	土坑 1基	陶器・弥生土器				
		時期不明	土坑 4基 ピット群	弥生土器				

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第16集

前中西遺跡 VII

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書 IX—

平成25年3月19日

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／有限会社 英知